

神の気まぐれ（ヒカルの碁逆行コメディ）

さびる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作とは全く異なる筋立てのばか話です。

創作キャラ続出で、もともとのキャラも性格が異なっています。

佐為の執念が、逆行の引き金になるという、一見シリアス風ですが、コメディを目指しております。

「ヒカルのバカバカしいほどの快進撃」と、管理人好みの「ヒカルが皆に愛されるのがみたい」というのが目的の話です。

ご都合主義と予定調和に満ちた、行き当たりばつたりのそれこそ絵空事の絵空事になっております。

ご覧になる方は、何卒、何事も忍耐を持って、寛容な心を持って、目くじらを立てることなく笑い飛ばして下さることを願っております。

掲載中のヤフーブログの閉鎖（12月）が迫っていますので、こちらへ手直ししつつ転載しております。

4ヶ月ほど重複掲載になります。

目次

0.	プロローグ	1
1.	パンダのぬいぐるみ	7
2.	あの子、お習字の教室なのよね。	12
3.	家に碁盤が来た	16
4.	もう こうするしかない	21
5.	なんでこうなるのか	26
6.	私には関わりのないことです	29
7.	新しい朝が来る	34
8.	それって楽しいものなのでしょうか	38
9.	お茶しませんか	41
10.	運命の巡り会い	46
11.	心強い同志です	50
12.	当然の帰結でした	55
13.	親、おや、張り切り過ぎかな	59
14.	逆行のスキルじゃないですが	62
15.	新たな段階へ	66
16.	僕の願いが叶う時	71
17.	ハッピーライフ	75
18.	師匠で支障ありません	79
19.	布石を敷かねば	85
20.	四者四様	90
21.	きらきら星も悪くない	96
22.	ネツ、トントン拍子	102
23.	まっすぐ、ルグル	108

24.	君に聞きたいことがある	113
25.	信じる者は、救われる	119
26.	広がる輪	123
27.	電光石火で石化する	130
28.	あの妻にしてこの夫	135
29.	師もしなら弟子もでし・よ	144
30.	出会い系ね、つと	151
31.	艱難辛苦、thinkしてsinkする	157
32.	交流会は直流かい？	162
33.	夢見る午後	171
34.	叶うかもしれない	182
35.	思惑、わくわく、想い湧く	187
36.	肅々と合宿	195
37.	オチ、付かないのが落ち着かない	201
38.	最愛のsai、AI	209
39.	願いが叶って	213
40.	やっと出会えた君	217
41.	母子ほのぼの	223
42.	六つ巴大乱戦	228
43.	師匠慈愛・悲哀・地合	236
44.	時のオカリナで戻りたい	243
45.	盤外戦、前哨戦	253
46.	私はお化けが苦手なの	259
47.	始まりの時	265
48.	やっちまったなあ！	272

49.	4冠、汗(かん)、勘、第六感	279
50.	あんなこと、こんなこと、あつたでしょ♪	287
51.	子哀・子愛・地合・時合	296
52.	幻のワイルド塔矢が蘇る	303
53.	僕だけが判る	310
54.	なつかしい笑顔	316
55.	行洋、新初段戦に名乗り出る	323
56.	棋譜・IF・疑問符	331
57.	逆コミ、突っ込み、引っ込みません	338

0. プロローグ

〈佐為の見守り霊〉

佐為よ。

あなたは私を知っていますか？

知る筈はありませんね。私は誰にも見えないものだから。

平安の御世には、私のような見守り霊と呼ばれるものは、少なからずいたものでした。

霊が見守る人間は一人だけ、偶然か定めかは存じません。

その者とともに一生を過ごし、ともに神のもとに召される、ただそれだけのもの。

もちろん、神がいたとしてですが。

平安の頃には私は疑いを持ちませんでした。

でも佐為とともに千年を過ごした今となっては、私は何をも信じられない、何をも疑うこともできない、そんな気持です。

… … …

〈佐為〉

神様、なぜ私ではないのですか。私では、だめなのですか。

あの者と至高の対局を果たせたと思ったのに。

それが私のためのものではないなどは。

ヒカルにその一局を見せるために、あなたは私に千年の時を承らえさせたというのですか。

ヒカルが輝かしい道を歩む。なぜ、私ではないのか。

ヒカルなんか私に勝てないくせに。

もつと碁が打ちたい。永遠の時間が欲しい。

そう思っている時に、お蔵に泥棒が入ったという話が耳に飛び込んだ。

もしや、私の寄る辺となる碁盤すら消えてしまうのか。

私は、ヒカルをせっついて、急いで碁盤を見に行った。

幸いに碁盤は盗まれては、いなかった。

ただ、碁盤のシミは、儚く薄くなっていた。

私は運命を呪いましたとも。

最強だと思っていたこの私が、ネット碁のおかげで、まだまだ強くなれることを知ったのに。

私はまだまだ成長できるのだ。

もし、私が、もう一度碁盤に戻れば、私は神の一手に届くのだ。ヒカルみたいな子じゃなくて、そう、例えば塔矢アキラに憑けたら。私の未来はバラ色になれるのに違いない。

ああ、神様、お願いです。もう一度私のわがままを聞いて下さい。

そう願う私の耳にヒカルの能天気な声が聞こえた。

「お前が消えるわけないだろ。さあ、行くぞ。何だよ。怖い顔しちゃって。」

私の苦悩など知りもしない、腹立たしいヒカル。

ヒカルは先に立ってお蔵の階段を下りていく。

私はその背をじっと見つめた。

今しかない。私は決めた。

私は自分のために碁を打つ！

「な、な。何するんだよ。佐為。よせよ。危ねえじゃねかよ。わあつ。まさか嘘だろっ！佐為く…」

ヒカルの驚愕の声が階段の下へ消えていった。

私は押してなどいない、絶対に。

ヒカルが勝手に階段を落ちたのだ…。

だって私は何にも触れることは叶わない身。

そんなことが、できるわけがない。

ヒカルも私も神の定めに従うだけ。従っただけ。

でもただ一つ。私には分かっている。

私はこれで碁盤に戻れる。戻れるのだ。それだけは確かだ。

ああ、もう一度、私の願いを聞いて下さい。

私は、ただ碁を極めたいのです。

… … …

… … …

それは夢。

千年の時の流れからしたら、ほんのひと時の。

もう名前も定かではない…。

あるのはただ黒と白の碁石の響きだけ…。

… … …

… … …

〈佐為の見守り霊〉

見守り霊は何もできない、ただ一緒に人生を歩むのみ、ただ見守るだけ。

辛い思いをする者にはそつと共に涙を流し、喜ばしいことが起きれば、微笑みながらそつと祝福し、毎日をしつと過ごす、ただそれだけのもの。

私は何の力も持たない。力を及ぼさせることはない。無力なもの。

それでも、思うことはあるのです。

私はあの時、あなたに付いて、あなたを見守る霊になれて、本当に嬉しく思いましたとも。

官位は決して高くはないけれど、帝の囲碁の指南役に推奨され、雅なあなたが、しなやかな指先で碁石をすつと盤の上に置くのを誇らしく見守ったものでした。

普段は役所で、そつなく仕事をして、同僚の皆さんと和気あいあいと過ごし、時に帝の前に召され囲碁のお相手をする、平和なひと時でした。見守り霊としても、この上もなく幸せなひと時でしたよ。

あなたを陥れた男の名を覚えていますか。

菅原顕忠。

他の見守り霊の噂からですが、彼の謀は、ほどなく露見、あなたの名誉は回復されました。

都落ちした彼は、とある片田舎で、その辺りの郷土の子弟に囲碁を教えながら、静かに一生を終えたようです。

あなたが入水した時、私はそれを止めるすべは持ちませんでした。

私はあの時、あなたと水の中で、その役目を終えるのだと信じておりました。

見守り霊としてただ悔し涙にくれながら、ともに水の中でもがき、あなたの執念が碁盤に取りつくのを見守るしかありませんでした。

結局、あなたの執念は生きながらえた。ですから、その後の千年を共に過ごしてきました。

あなたも霊になったのですから、もしかしたら私を見れるのではないかと、親しく話ができるのではないかと、そんな儂い夢も見たものでした。

私は見守り霊ですから、そのようなことは起こり得ようはずはないのに。私は姿も形もないものののに。

あなたが虎次郎と巡り会えた時、私はとても嬉しく思いましたとも。

あの時のあなたは、とても謙虚でした。

あの子どもに、心の片隅に住まわせてほしいと、そつとお願いしていました。

あの子とともに、あなたの囲碁の力は花開きましたね。

元々才能豊かなあなたでしたが、時宜を得たのです。

虎次郎にあなたがどう認識されたのかは、分かりませんが、あの時の対局は、あなたひとりがいかに思い通りに打ったわけではなかったのですよ。

虎次郎もまた同じ考えを持って打っていたということをおあなたは分かってはいなかったでしょうね。

虎次郎も野心溢れる碁打ちでしたよ。それがそのまま、あなたに重なったのです。

でも私は虎次郎の見守り霊ではありません。あくまでもあなたの

見守り霊ですから。

あなたが夢中になり碁に身を委ねているのをそつと祈りながら見守っていました。

虎次郎が病に倒れ、あの時、私は2度目の覚悟を持ちました。

その時にはもう私の周りには、見守り霊など、どこを探してもいませんでした。

だからやつとこれで、私は役目を終えて、他の者たちのところに戻れるのだと。

でもあなたは虎次郎と運命を共にすることなく、すつと碁盤に戻ってしまつた。

私は慌てましたよ。あの時。私はまだあなたを見守らなくてはならない？

やつとあのヒカルという子に見つけてもらえた時は私はほつとしたものです。

あなたはあの時、なぜあんなに尊大だったのですか？

もしあの時、虎次郎にお願いしたように、心の片隅に置いて欲しいと言っていたら、どうなっていたのだろうかと私は思うこともありました。

でもあの子は強い子です。丸ごとのあなたをそのまま受け入れたのですから。

見守り霊でもなかなかできないことです。

あの子の潜在力があなたを惹きつけたのは確かでしょうが、それがなくても、あなたとヒカルのコンビはなかなか楽しく幸せなものでした。

あなたはそうは思わないのですか？

それはあの子は、あの年代のあの時代の子ども特有の傍若無人ぶりで、ハラハラさせはしましたが。

でも頑張つて、あなたのためにネット碁を打ってくれたではないですか。

何よりもあなたが願つたあの者との対局を、ただ一人、捨て身で画策し、実現させたではないですか。

あなたは、あの子との時間が楽しくは、なかったのですか？
私は千年の時を伸ばすことはできない。まして永遠の時など。
元々なんの力も持たない、役立たずの見守り霊ですから。
でも私の残りの時間をすべて捧げます。

仲間のところに戻してくれなどという望みも捨て去ります。

神様。どうぞ、一度だけ私の願いを聞いて下さい。

私が見守り続けた佐為の願いを何卒、聞き届けてやって下さい。

もし願いが届けば、二人にだけ違う時が流れることになりますけれど。

でも佐為とヒカルは出会ったのです。確かに。

誰にも認められない私が、まもなく消える私が、その私だけが唯一の証人なのです。

何の役にも立たない私が、それでも存在し続けたのは、このことのためであると、せめて思いたいのです。

1. パンダのぬいぐるみ

…
佐為く。

ヒカルには、何が起きたのか、理解できませんでした。

一番初めに、視界から消えたのは、佐為でした。

それから走馬灯のように、三段との対局やら何やらが、逆回りするように過ぎて行きました。

白石と黒石が舞い散り、佐為との日々が薄れていく。

えっ、何。どうなってるんだ。

佐為も碁も何もかも消えていく。
でも存在の証はある。

消えた証に、そこには何もない空洞が残っているだろ。
いや、それも縮んでいつている？

もしかして、その証も消えてしまうのか。

声が響く… … すべてなかったことに…

ああ、俺、もう何もわからないよ。

俺も、もしかして縮んでいる？

… … もっと、前に。赤子の時まで。そうすれば穏やかな時が始まる…

その声に抗うようにヒカルは必至で空をつかみました。

ふわふわしてる？ 白い？ 黒い？

声が響く …… もっと、もっと前に。だめだ。そこで止まってはいけない。それでは消せない ……

ヒカルは抗いました。

渦巻くような流れの中で、花びらのような、白い光と黒い影のよう
な、その色だけが、ヒカルの中に妙にからみつくように残りました。
そこには、戻りきれなかった時の証が、細い道のように、微かに続
いていました。

……………

なんだ？

白くて黒くて、もしかしてふわふわしてた？

ヒカルにそんな感想が浮かんだ時、声が聞こえました。

あかりか？

「ヒカル。目を開けたよっ。」

救急車に乗せられる時でした。

「体のあちこちに打ち身があるので、しばらくは痛みが残ります。

でも奇跡ですよ。この程度の怪我ですんだというのは。

運動神経が優れているのでしょねえ。

厚手のジャケットを着ていたことも幸運でした。

確かに、頭を打っているので、多少意識の混濁があるようですが、一
過性のものと思います。」

ヒカルがその歩道橋の転落事故に出会ったのは、2月の初旬のこと
でした。

階段を登ろうとしたヒカルの上に、降りてきた子どもが足を滑らせ
て落ちてきたのです。

一緒にいたあかりの母親が詳しい状況を美津子に話して聞かせま

した。

「ヒカル君は、ぶつかつたというより、受け止めようとしたのよ。

ヒカル君がクツションになって、その子も大した怪我はしていないって。」

3歳だとか言っていたけれど、小柄だったから良かったのね。」

ヒカルは、入院することなく家に戻りました。

2、3日は、家で安静にということで、ヒカルはベッドに転がってぼんやり考えていました。

今がしっくりこない。その感覚を誰にどう話せばいいのだろう。

でもどう違うのかも言えない。

部屋に見覚えのないものは何一つない。本も漫画もゲームも、服も。

ランドセルに、ペンケースも、中の消しゴムのちびり具合まで、記憶通り。

これですべてなのだろうけれど、それでも、何か足りないものがある。

それが何かは分からないけれど、何かが違う気がする。

俺、どうしちやったのかな。

ヒカルは、土日を挟んだ月曜日から登校しました。本当はすごく不安でした。

俺、学校のことよく覚えてない気がするんだ。

本当はここじゃないはずだといういうそれが、ヒカルの気持を重くしていました。

美津子はランドセルを背負うヒカルに心配そうに言いました。

「ヒカル、食欲なかったけれど？ 無理しなくてもいいのよ。」

「うん。少し痛いけど、大丈夫だよ。行ける。」

教室が分かるだろうか。少し不安だ。

でもどうせなら早く知りたい。

ここが俺の居場所なのか、合っているのか、いないのか。

「おばさん。おはよー。」

迎えに来たあかりの元気に誘われて、ヒカルも勇気を奮って登校したのです。

学校に着くと、体が反応して、自然と、間違いなく自分の下駄箱に行き、教室に向かえました。

ヒカルが教室に入ると、「ヒカル」と、クラスメートが駆け寄ってきます。

知ってる。分かる。みんなの顔も名前も。

そんでもって、俺の机の場所もぼつちり分かる。

ヒカルの顔にほっとした笑いが浮かびました。

俺は間違いなく小学2年生だ。大丈夫。正しいんだ。

学校での一日は、そうして何も問題なく終わりました。

「ヒカル。一緒に帰ろう。」

道々、あかりは話しをしていました。

「今朝は元気なくて、心配したんだよ。」

でも学校に着いたら元気になって良かった。」

あかりはいろいろ話かけてきます。ヒカルは頷くだけです。

元々ヒカルは、口達者じゃないので、あかりは、ヒカルが無口でも、いつものことと気にしません。

別れ際に、それでも、あかりはぽつつと言ったものです。

「ヒカル。あの時、気絶しちゃったし。みんな、大変だったんだよ。」

うわ言つていうんだって。

消えたとか、黒いとか、白いとか、なんか分かんないこと言ってたから。」

「ただいま。」

ヒカルは、おやつパンをかじりながら、自分の部屋に行きました。

俺、大丈夫だったけれど、でも、しつくりこない。やつぱり。

ヒカルは、ベッドの脇のぬいぐるみをつかみました。

お前みたいだよ。白くて黒くてふわふわ。

お前があの時、出てきたのかな。

ヒカルには、あかりの言っていた言葉が引つ掛かっていました。

“消えた”

忘れてたけど、俺そんなこと言ったんだ。

そうだ。そうなんだ。

心のどこかに何か霧のようなものが、かかっている。

これがすべてですかと問いかけてくるんだ。

ヒカルはパンダのぬいぐるみをつかりと抱きしめました。

それにつかまっていれば、消えない…。

2. あの子、お習字の教室なのよね。

インタホンの音に、美津子が出てみると、あかりが立っていました。

「あら、あかりちゃん。」

「ヒカル君、いますか?」

美津子は、やや苦笑気味に言いました。

「うん。それがね、あの子、お習字に行っているのよ。次の角の柴田さんのおばあちゃんのところ。」

「お習字??? 柴田さんのおばあちゃんに? ヒカルが?」

「そうなのよね。いつまで続くのか分からないけれど。突然行くつて。あの子、ちゃんとやってるかしら。あかりちゃん、ちよつと覗いてみてくれる?」

「えっ。あの一。うん。」

あかりは、首をかしげながら、柴田家に向かいました。

インタホンを押すかどうか迷っていたのですが、とうとう思い切つて押してみました。

だって、ヒカルのお母さんが言ったんだもの。

柴田さんのおばあちゃんが顔を覗かせました。

「あら、藤崎さんのところのあかりちゃん。もしかしてヒカル君?」

「はい。ヒカルのお母さんが、ちゃんとやってるかって。」

「ふふふ。そう。良かったらあがつてらっしゃい。ちよつどお茶しようと思つてたのよ。」

ヒカルは居間で、習字道具をしまっているところでした。

「ヒカル君。お母さんが心配されて、あかりちゃんをよこしたみたいね。」

ヒカルは、ぶすつとして言いました。

「だからって、あかりが来るかよ。」

「お習字って、ヒカル一人だけなの?」

あかりは物珍しそうにあたりを見回して聞きます。

「ええ。教室を開くとかじゃなくてね。ヒカル君が、お習字をやりた
いっていうのを聞いてね、近くだし、教えてあげるって言っただけな
のよ。昔、お習字も教えてたことがあるから。あかりちゃんも来る
？」

ヒカルは嫌な顔をしたのですが、あかりは目を輝かせて言いまし
た。

「うん。やりたい。」

ここっつてなんだかすごく面白そうなもの。絶対やるよ、私。

夕食の時、ヒカルはぶすつとして言いました。

「あかりの奴も習うんだって。」

「あら、別にいいじゃないの。あかりちゃんなら。」

ヒカルが二階へ向かうのを見ながら、美津子は思いました。
いつまで続くかしら。

柴田さんのおばあちゃんなら、ヒカルもなついているから、続いて
欲しいわ。せめて三か月、いえ、半年。

でも、ヒカル。何でお習字をやりたいたいなんて思ったのかしら。

美津子は首をかしげながら、台所へ戻りました。

ヒカルは自分の部屋でベッドに寝転んでいました。

自分の不確かな気持ちをぶつけられるものを探す。

それしかないじゃないか。

微かな記憶が教えてくれるもの。

それは白と黒の世界なんだ。

たまたま出会った筆と墨。

それは、不思議とヒカルの心を落ち着かせてくれたのです。

お前より、ピッタリなんだよな。

何か自分でやっていられるものがないんだよ。俺には。

ヒカルはパンダのぬいぐるみを抱きながら思っていました。今は、やっと落ち着いているこの状態を大切にしたいんだ。

嬉しいことに、美津子の心配は杞憂となりました。

ヒカルは、ずっと習字を続けたのです。

部屋に一人いる時にも、書いていたものでした。

柴田さんのおばあちゃんも、驚いたものでした。

ヒカルが飽きやすく、落ち着きのない子どもだと母親が心配しているのを知っていましたから。

いつのまにか、長時間の正座も平気になりました。お習字のついでに、お茶も習ったものです。

というより、お菓子を食べて、お茶を飲むだけでしたけれど。まあ、一応作法に則っています。

5年生になる頃には、お習字は、もう一種の習慣になっていました。

柴田さんのおばあちゃんは、一度ヒカルの母親に言ったものです。

「本当に驚いてるのよ。ヒカル君。言い方は悪いんですけどね。元々あんまり字を書いてなかったでしょ。だから変な癖もついてなくてね。素直な字を書くし、結構面白い個性があるわ。」

何より熱心だしね。正直びっくりよ。賞を取るとかいうものとは別物だけれど。私は好きよ。ヒカル君の書いたもの。味があるし。」

「本当に柴田さんのおかげですわ。なぜか字を書くのだけは熱心だから、学校でも、ノートとかは、丁寧にとるようになって。成績はイマ

イチですけど。でも落ち着きが出てきて、ほっとしてますわ。」

ヒカルは時々思っていました。

いつまでかかるか分からないけれど、それでも、微かな記憶を辿りたい。

消えたものがきつとあるんだ。いつかそれに辿り着く。

どうやったらいいかは分からないけれど。思っていればいつかはきつと。

それを忘れなければいつかはきつと。

3. 家に碁盤が来た

…

「お義姉さんからよ。」

受話器を渡されて、電話口で短いやり取りを終えた平八に、妻が尋ねました。

「お義姉さん、何ですって。」

「ほら、兄貴が亡くなった時、どうするか、もめた碁盤があつただろう。」

「ああ、あの烏帽子を被った幽霊が出るとかいう。」

「結局売った道具屋がまた引き取ってくれたんだがね。それが売れたんだと。道具屋が親切に知らせてくれたんだそうだ。」

「そんなものを買う人がいるんですねえ。」

「まあ、兄貴みたいな物好きはいるもんだよ。だが、本当に幽霊はついたりつかねえ。兄貴は一度も見たことがなかったようだが。」

… … … … …

古道具屋に並べられた碁盤はある日、好事家の手に渡りました。

それから、一年、二年…。

碁を打たれることもなく、部屋の一角に、ただずつと置かれていました。

好事家は、がっかりしていました。

幽霊など影も形も見えない。つまらない買い物をしてしまった。しかも場所をとるし。

その日の指導碁の後、若い棋士は、隅に置かれていた碁盤に偶然、目がいききました。

「なかなか由緒ありげな碁盤ですね。」

口の軽い若い棋士は、適当なことを言ったものです。

好事家の目が光りました。

「先生、よろしければ差し上げますよ。是非に。」

「あ、でも、碁盤は家にありますし…。」

もごもご断るのを押し切られて、碁盤は若いプロ棋士のもとへ渡ることとなりました。

押しつけられた後、幽霊の話を聞いた棋士は眩きました。

「僕は別に幽霊が怖いわけじゃないけれど、この狭い部屋には足つき碁盤は二つもいららないよね。」

その日の塔矢名人の研究会の席の片隅に、大きな風呂敷包みが置いてありました。

「芦原、それは何だ？」

皆の目が芦原の持ってきた包みに行きました。

師匠の名人も、ちらとそれに目を留めました。

「あつ、これ。碁盤なのですが。先日、指導碁先で、無理やり持たされて。でもうちは狭くて置けないので、先生のところの物置に置いて頂こうと。」

先生、よろしいでしょうか。僕が広い家に引っ越したら、引き取りに行きますから、それまでお願いします。」

行洋は構わないというように頷きました。

「では、早速検討を始めます。」

名人は無駄な口は叩かないものなのです。

研究会の終わった後、芦原は緒方を呼び止めました。

「あのー、緒方さん。これを先生の家に運ぶのお願いできませんか。」

緒方はじろつと芦原を見ました。

「見返りは何だ？」

「良かったらこの碁盤、差し上げます。」

「俺の趣味ではない。だが、随分な年代物だな。」

「何でも、二百年ぐらいは経っているのじゃないかと。実は、この碁盤、幽霊が出るという噂なんですよ。」

緒方は眼鏡をきらりとさせて、にやりとしました。

「ははーん。なるほどな。芦原はそれでおじけづいて、先生の家を持ち込もうとしたのか。」

「いえ、そんな、でも噂があるだけで、古道具屋もこれをくれた人もだれも幽霊を見てないんですよ。」

「どんな幽霊が出るんだ。先生の家で出て、アキラ君が怖がったら困るだろう。」

「はあ。何でも烏帽子を被った幽霊だそうです。」

「ん？公家の幽霊か。これは公家のものだったのか。」

幽霊話など、サラサラ信じていない緒方の車に乗って、碁盤は、塔矢家に向かいました。

それでも一言、釘をさしました。

「いいか、芦原。幽霊のことは伏せておけ。さもないと断られるかもしれないぞ。」

先生はよくても、先生の奥さんは、幽霊が嫌いかもしれんからな。」

口の軽い芦原が、その後、幽霊のことを絶対に言わなかったのは、その言葉が効いたからです。

幽霊と暮らすことじゃなくて、部屋が狭くなるのは、とにかく困るからね。

それに幽霊が出たら、もっと狭くなるものな。

その日は学校の行事があつて、研究会に行かなかつたアキラが家に戻つた時、碁盤は、もう部屋に置かれていました。

芦原は、断られないうちにと、緒方と一緒にさつさと帰つていったのです。

アキラは、目ざとく包みを見つけました。

「お母さん、あれは？」

明子は、のんびりこたえました。

「今日ね。研究会で…。」

ふーん。芦原さんて、断るの、苦手な人なんだ。

「どんな碁盤なのかな。」

少し関心を示して、アキラは言いました。

「何でもそのくれた人は、古道具屋さんを回るのが趣味なんですつて。で、この碁盤もそこで買ったらしいのだけれど、置き場に困つて、芦原さんに押し付けられたらしいの。」

かなり年代物だつて言つていたわね。」

明子はくすつと笑いました。

「それでも、うちの物置に入れるわけにはいかないわ。一応碁盤ですものね。庭仕事の道具と一緒に、できないでしょ。」

芦原さんが大きい家に引っ越ししたら、引き取りに来るそうだけれど、その頃にはきつと忘れてるわね。」

それから少し考えて言いました。

「ねえ、アキラさん。取りあえず、隣の部屋に移しておいてくれるかしら。置き場所はゆつくり考えるから。ここで、碁盤を見ながらお食事というのもねえ。」

そういうことで、碁盤は、塔矢家の居間の隣の座敷にちんまりと置かれたのです。

幽霊の由来は、封印されたまま、風呂敷に包まれたまま。

4. もう こうするしかない

… … …

私は幸せです。何と、今、私はあの者の家にいるのですよ。
夢ではないでしょうか。

私はわくわくで期待に胸が膨らんでいます。

… … …

なぜでしょう。誰も私を見に来ないのは。

確かに私は待ちましたよ。虎次郎の時まで、八百年。

その後も古道具屋やら、お蔵やらにひとり耐えて二百年余り。

でも今はそういう時ではありませんよ。

このまま時が過ぎてあの者が死んでしまつたらどうするのです。

いくら平均寿命が延びているとはいえ、これ以上年を取れば、あの者は、惚けてしまうかもしれません。

いえ、絶対惚けますね。

せつかくのチャンスなのですよ。

… … …

ああ、もう、あんぽんたん。おたんこなす。

何ということでしょう。

この家では研究会などは開かれないのですか。

この家にはいつも三人だけ。

来客は、時々ありますが。

でも、あの者が一人で、隣の隣の部屋で、碁石を置く音。

朝、あのアキラという子どもと一局打つ音。

アキラが一人で自分の部屋で碁を打っている音。

碁に関して言えば、それしかありませんよ。

私は耐えられません。

私のようなすばらしい打ち手がすぐ目の前にいるというのに、なぜ、碁盤に注意を払わないのでしょうか。

ゆ、許せません。まったく。

… … …

というわけで、佐為はとうとう決心いたしました。

かくなるうえは、自分から名乗り出るしかないじゃありませんか。とは言えですが。

千年で、佐為が惚けてしまったわけではありませんが、悲しいことに、佐為にできるのは、幽霊姿で「徘徊する」ことだけでした。

それも一日中などは無論、長時間は無理です。

しかも碁盤からそう遠くはなれることすらできないのです。

それでも佐為は、ひたすらに頑張り続けたものです。

雅な私が、なんと物哀しいことでしょうか。

ああ、これも神の一手の試練でしょうか。

でも、そのために私は幽霊時間を逆行して、やり直しているのですから。

ん？ 逆行？ んんん？

とにかく佐為は、あの者と、アキラが近くを通るたびに、せつせとさまよい出では、二人の視界の前にどうだと言わんばかりに現れてみせました。

しかし、塔矢行洋にもアキラにも幽霊を見る力は全く備わっていません。か

恨めしやく。ほくんとに全く。
なぜです。目の前にいるのに、私をよけもせず、なぜシカトするのです。

これはでは、いじめではないですか。パワハラ？じやなくて、うぐん、碁ハラ、えっとイゴハラ？

それでも、その静かなる異変に気づいていた者がいました。
もちろん、この家の三番目の住人、一番の実力者、明子夫人です。
彼女は、この異変について、つらつら考えたものでした。

よくよく観察すると、私一人の時は絶対に現れないけれど、夫とアキラさんがいると必ず出てくる。

夫とアキラさんにだけちよっかいを出すのよね。
もつとも二人とも全然気が付かないのだけれど。私にだけ見えてるのね。

要するにこの幽霊さん、私のことは、無視しているのよ。
何となく、気に入らないわ。

まあ、無視されついでに、私も無視することにしましょ。
なんたって関わりたくはないわ。気付かないふりをしてましょ。

彼女はそう決心をしました。

しかし、間が悪いということはあるものです。

ある日、夫は四角い箱を持ち帰ってきました。

「これを後援会の方から頂いたのだが。」

「あら、そうですか。」

箱を開きながら、明子は思いました。

私の趣味ではないわ。ってというか、悪趣味、成金趣味じゃないこと、これって。

「金色の蛙だそうだが、風水では、玄関に置いておくといいのだそうだ。」

「そうですね。今は玄関、いろいろ置いてありますし、そのうち整理して、飾らせていただくことにしますわ。」

実は玄関には、すっきり広い棚があり、花が活けてあるだけです。

名人は妻の言葉に一言返事を返しました。

「そうか。」

話は簡単につきました。

名人にとっても、カエルの置物など、どうでもいいことなのです。

そこで、明子がカエルの置物を、箱に戻そうとした時、佐為が出てきたのです。

佐為は、カエルを見て、ぎよっとして、思わず尻餅をついたのです。

まあ、幽霊なのでしょ。なのに足があるわ。しかも足袋を履いてるじゃないの。

それに、幽霊がカエルを見て、驚くかしら？

そこで、明子は思わず、クスツと笑ってしまいました。

佐為と明子の目が合ってしまいました。

佐為は気付きました。

何と、奥方は私を見ることができるとですね。

わたしの目の前に世界が開けましたよ。

佐為は、ルンルンで、歌いだしたい気分でした。

明子の方は、舌打ちしたい気分でした。

「まずいわ。幽霊さんに知られてしまったわ。」

「まあ、でもだからって何も変わらないわよね。きつと。」

明子は敢えて深く考えることはやめて、軽くスルーしようと思いましたが、
しました。

5. なんでもこうなるのか

佐為のアタックの対象は、一転、明子に向けられ始めました。

幽霊の一念は恐ろしいものです。

佐為は千年の執念の塊ですから、なおさらのことです。

明子は悔みました。

あの時、さっさと碁盤を物置にでも突っ込んでおくべきだったわ。

憂鬱。できるだけ外出しようかしら。

落ち着いてテレビも見れやしないじゃない。お食事の支度だって、おちおち出来やしないわ。

不幸なことに、夫は対局と会合などで外出が多いし、アキラは学校へ行き、その後碁会所で過ごし、家に戻るのは夕飯ギリギリでした。

明子は一人で家にいることが、圧倒的に多いのです。

思い余って明子は、夫に告げてみました。

アキラが学校へ出かけて、夫と二人、いや隣の隣に、もう一人いる時にです。

ただし佐為は、この部屋までは来れません。

「ねえ、あなた。実は私、幽霊が見えるみたいなの。」

夫は悠然とお茶を飲み、答えました。

「そうか。」

「あの碁盤に取りついてるのじゃないかと思うのよ。いつもあの包みから出てあの包みに戻るの。」

「そうか。」

「どうしたらいいかしら。」

今度は「そうか」は、ありませんでした。夫も話を全く聞いていないわけではないようです。

ただし次の言葉はこれでした。

「アキラには言わないように。」

「そうね。」

そりや、あの子はまだ小学生ですし、怖がるかもしれませんがものね。言わないわよ。もちろん。

だからあなたに言ってるんじゃないやありませんの。

それにしても、明子は思います。

結婚して15年余り、『そうか』という言葉は何百回。いえ、何千回聞いたことかしら。

いつものことだけれど、夫は家庭内のことに、解決能力はないのよね。

幽霊が家庭内のことなのかはものすごく疑問だけれど。

一方、佐為は、明子に話しかけましたが、一度も答えてもらったこととはありません。

どうやら、姿は見えても、声は聞こえないらしいと分かり、いったんは落ち込んだ佐為でしたが、めげることなくすぐに、パントマイムで、碁を打つ真似を始めました。

くだんの碁盤は、風呂敷包みに覆われたままでしたから、別の碁盤で、碁を打つ真似をして見せたのです。

毎日毎日、それが続きました。

要するに幽霊さんは、碁が打ちたいってわけかしらん？

そこで、明子はまた夫に言いました。

「ねえ、あなた。例の幽霊なのですけどね。」

夫は意外そうに妻を見ました。

「まだ見えるのか。」

それだけです。

明子はその一言ですっぱり決心しました。

幽霊さんと碁を打ってやってなんて、言えないわよね。

夫は当てにできない。

これは碁盤を持ってきた人間に、まず問いただす必要があるわ。

それでも「アキラには言わないように」という夫のもっともな言葉があります。

とすると、持ち主の芦原君は口が軽いし、アキラさんとも仲良しだし、却下。

となれば、手段は一つ。

明子は電話を手にしました。

「もしもし、ああ、緒方さん。」

ええ。実はね、折り入って、ご相談したいことがあるのよ。ご都合のいい時に駅前の「クラクラ」でお会いしたいの。」

6. 私には関わりのないことです

明子夫人からの電話に、緒方は考え込みました。

何の相談だろうか。普通に家において下さいなら、まだしも。

緒方は、明子夫人というのは塔矢行洋のような男にとつては実に得難い女性だと思っていました。

碁に関するワガママは許す、*“いつも一緒”*を求めない、女の心理の理解を求めない、一ヶ月半、いや十年以上会話なしでも我慢する、それができる女性だ。

もちろん、塔矢行洋は妻の条件として、そういうことを言ったことはないでしょう。

そもそも、そういう条件すら思い浮かべたことはないでしょう。

あの明子夫人なら言いそうだな。

「あら、塔矢行洋だからできるのよ、他の男にはそんなことできるわけではないでしょ」と。

そう、確か見合い相手の明子夫人が先生に惚れて結婚したと聞いている。先生がではなく。

もしかして何かその生活に亀裂が入るようなことが起きたのか？

俺は知らんぞ。先生の大人な私生活など。

俺には関係ない。なんで俺を呼ぶんだ？

疑心暗鬼で、約束の時間に、駅前の喫茶*“クラクラ”*に行くと、すでに明子夫人は来ていました。

「遅くなりました。」

「いえ、いいのよ。まだお約束の時間より*“三分”*早いわ。」

緒方が椅子に座る間もなく、明子は単刀直入に尋ねたのです。

「緒方さん、あの碁盤、どういう謂れのあるものですか？」

緒方は「煙草を吸っていいですか」と、聞こうとしていた時に、ずばりと言われて、ポケットに入れた手を止めました。

明子夫人は、一見おっとりとした女性だ。だが、決してボーっとしている人間ではない。

むしろ逆だ。後援会のこと、碁会所のこと、門下生のこと、どれをとっても、すべて面倒はうまくやり過ぎ、そつなくおっとりふるまえる女性なのだ。

そういう女性がズバツと、尋ねてくるというのは、極めて危険だ。俺は関係ない、運んだだけだ。芦原のせいなのだから。

そこで緒方は碁盤の由来を話しました。

「…というわけで、烏帽子を被った幽霊が出るっていうのですが、でもあくまでそういう風聞がついてるだけで、誰も見たものなどいないですよ。」

「そう、分かりました。緒方さんこれからお時間あるかしら。ちよつと、家へ来てくださいます？」

緒方はそれを聞いて頷きました。

「ええ、今日は空いてますから。車できてますから。」

引き取れますよ。緒方はその最後の台詞は言いませんでした。

自分から言うことはあるまい。

明子を乗せて、運転しながら緒方は思っていました。

まあ、信じなくても、気味悪がるということはある。芦原に引き取らせるつもりかな。

それもしかたない。芦原も邪魔なら売っちゃえばいいじゃないか。

明子の方は全然別のことを考えていました。

この調子じゃあ、緒方君も幽霊を信じやしないわね。幽霊が見えるなんて言ってもろくなことにならないわ。あの幽霊、碁盤に執着してるのだし、うん、取りあえず試す価値はあるわね。

家に着き、座敷に通すと、明子は、緒方に言いました。

本当は幽霊に聞こえるようにです。

「緒方さん、私に碁を教えて下さらないかしら。私、ちよつと碁を打つてみたいのよね。」

緒方は思いがけない言葉に仰天しました。

「はあ、構いませんが。」

何とも間の抜けた声を出してしまいました。

確か明子夫人は碁を打たなかったはず。

もちろん結婚してから今まで暇はあつただろうし、アキラ君が碁を打ち始めるのを見てるだろうし、少しは打てるかもしれないが。

でも碁を教えてもらうなら、夫に頼めばいいじゃないか。

夫じゃ敷居が高いのか？なら、アキラ君に頼んだらどうなのだ。

息子が母親に教える、なんだか微笑ましい風景ではないか…。

何で俺なのだ。俺は何にも関係ないのに。

その間に明子は隣の部屋に行き、碁盤の包みを軽くたたき、囁きました。

「碁を打たせてあげるわ。」

幽霊さんが碁を打てなかつたら。まあ、それはそれでいいわ。

佐為はといえ、明子夫人の言葉に、欣喜雀躍いたしました。

遂にその時がやって来たのです。

「はい、対局致しますとも。確か、この男とはいつぞや、どこかで打ちたいと思つた気がしますよ。」

虎次郎の頃の強豪と同じような気が漂っています。」

幽霊がついてくるのを確かめ、明子は碁盤の前に座りました。

「この碁盤でお願いしますね。」

「ええと、何から始めましょうか。」

「とりあえず、私の棋力を見ていただけ？置石なしで。私が黒で。」

塔矢明子、一世一代の賭でした。

明子は碁は一度も打つたことはありませんが、打たなくても、その程度の知識はありました。

俺は八段なんですけど。いや、まあいいか。

緒方はそう思いながら言いました。

「では、「よろしくお願ひします。」

明子は、碁石や碁盤と無縁で15年を生きてきたわけではないですが。

「私、ちよつと打つの遅いけど、ごめんなさいね。」

明子は、とにかく親指と人差し指で黒石をつまむと、佐為が扇子の先で示した箇所は何とか、コトリと石を置きました。

わああ、思い切り初心者の手つきだな。

緒方は、しかし、打ち合い始めているうちに感じました。

手つきは拙いが石の筋はしっかりしているな…。

いや、それどころか、俺の打ち込みにも動じない、っていうか…軽やかにかわしていく。

しばらくして緒方は投了しました。

愕然としながら、緒方は言いました。

「塔矢先生に習われているのですか。いやいや、習うといえは俺の方が長い…。このままプロでリーグ戦に出れますよ…。」

そこで、明子は、おもむろに言いました。

「こうでもしなければ信じないと思つたからよ。当然ですけど、私、対局なんて一度もしたことありませんのよ。実はこれは幽霊さんとの対局なんですよ。ここにいるのよね。今。烏帽子を被って。」

烏帽子を被った幽霊が実在していて、碁打ちだったというのか？

目の前で、この対局という事実を突きつけられても、俺はまだ信じきれない。

緒方は明子が指さす方向に目を凝らしました。

佐為は澄まして、誇らしげにしておりますが、でも緒方には、やはり見えません。

「もう一局よろしいでしょうか。」

というわけで、もう一局打ってみました。間違いなく、名人級の打ち手です。

緒方は、とにもかくにも事実を受け入れないわけにはいきませんでした。

「あのー、これから私の時間が空いている時に、対局をお願いできないでしょうか。」

緒方のお願いに佐為は力を込めて首を縦に振りました。

「そうね。ちよつとこちらへ。」

明子は緒方を名人の書齋に呼びました。ここなら佐為はやって来れないし、話声も漏れませんか。

幽霊さんには、聞かれたくないですものね。

そこで、明子は訳を話しました。

夫が、幽霊のことは気にも留めないこと。アキラに話すなど言われたこと。芦原に話すと、アキラに筒抜けになるだろうから、言わないでほしいこと。

それと、幽霊は碁盤からあまり離れられないこと。

「幽霊さんはここまで来れないのよ。何か喋ってるみたいだけれど、私は見えるだけで聞こえないの。」

だけど幽霊さんは人の話をぼつちり聞いているのよね。」

それから明子は尋ねました。

「それで、あの幽霊さんは、一体どれくらい強いのですの？」

「先生と、どっこいなのではと。」

それから、時間があると、緒方は塔矢邸に、足繁く通うようになったのです。

佐為も少し落ち着いて、明子にちよつかいを出すことは、あまりしなくなりました。

ですが、これでやれやれうまくいった、万々歳というわけにはまいませんでした。

一つには佐為が緒方との対局だけで満足するはずがないのですから。

7. 新しい朝が来る

緒方が、塔矢行洋がいない時に限って、塔矢家に足繁く出向くようになったのに、最初に気付いたのは、行洋でもアキラでもなく、芦原でした。

緒方さんは、先生がいない時に限って、先生の家に入り浸っている。なぜ？まさか…。

緒方さんは、明子夫人とは10歳ぐらい年下じゃなかったかな。でも今は年の差婚も結構流行っていないこともない…。

先生に言った方がいいのか。いや、緒方さんにまず言うべきか…。そうなると碁盤のことを…。

「先生に言うべきか…」

「芦原君、私に何を言うのかね。」

自分の妻には、「そうか」しか言わなくても、弟子の様子には敏感な師匠なのでした。

聞かれた？ 僕、もしかして声に出して言っではいけない日本語を言っちゃったのかな。

彼は、気の良い口の軽い青年でした。

これこれ云々なんです…。

塔矢名人は、その話に、驚きました。彼も碁以外で驚くことがあるのです。

何？ 妻と緒方君が？

“そうか。そうだったのか。”

緒方君は明子のような女性が好みなのか。

こういう時、どうすべきなのか、行洋には全く思い浮かびませんでした。

その日、名人は家に戻って、妻の顔をつくづく眺めましたが、いつもの通りで、何の変化も見られません。

最も妻に変化が見られても、行洋には分からなかったでしょう。

その数日後、午後の会合が流れて、行洋は早くに家に戻ってききました。

その時は、芦原の言ったことなど、すっかり忘れていました。

玄関の鍵を開けながら、行洋は気づきました。

緒方の靴に目が行ったのです。

それが緒方の靴かどうかなどは、行洋には分かりませんでした。来客があるくらいは分かりました。

座敷に入ると、妻と緒方が碁盤を挟んで座っていました。

それは行洋にとって、結婚以来初めてと行っていい衝撃でした。

不倫など、どうということはない……。が、しかしこれは、まさに悪夢だ。

そうだとでもですが。行洋は、何よりもまず碁盤に目を向けたのです。

そして、それがすべてでした。

「美しい一局だ。」

悔しいことだ。なぜ対局者が私ではないのだろうか。

その声に、緒方と明子は、顔をあげました。

明子は碁盤を見ている夫の真剣な眼差しに胸が弾む思いでした。

自分を見ているわけではないのです。

緒方は、ひそやかな楽しみが終わったことが少し残念でした。

幽霊との対局は、俺の力を確実に伸ばしてきたのだ。師匠を超えるチャンスだったのに。

でもだ。幽霊とは話ができない。ゆえに検討ができない。

しかし、先生とは検討ができる。

損得勘定で行けば、こちらの方が得だ。

「お二人とも、こちらへ来てくださいね。」

明子は、取りあえず、行洋の書斎へ、二人を連れて行きました。

いろいろ算段があっても、幽霊さんには絶対話を聞かせたくない。

それは明子の意地でした。

明子がお茶を用意しに行っている間に、緒方が、これまでのいきさつをかくかく云々と説明しておりました。

「明子は、なぜ私に言わなかったのだ。」

塔矢行洋、結婚以来の、長いセリフでしょうか。

だつてあなたは幽霊を信じないでしょう。それに。

ここまでは口に出しませんでした。無用な軋轢を避ける何事にも賢明な明子なのです。

「アキラさんには内緒でしょ。ですからとりあえず、緒方さんと対局させてみたのよ。あの幽霊さん、本当に碁が打てるか試してみたかったし。緒方さんによると思った以上に強いそうなのよ。」

行洋は頷きました。

緒方君の実力は分かっている。

だから、さつき見た盤面でおおよそ想像はつく。

魅力的な打ち手だ。

「私とも打つてくれるだろうか。」

「打ちたがるでしょうね。」

幽霊さんのおかげで、会話が成り立っている気がするわ。

明子の感想でした。

明子は緒方に頼んで、碁盤の包みを書斎の隣の納戸に運んでもらいました。

ここなら、私の生活範囲から可能な限り遠くなるわ。

碁盤は風呂敷を解かれることはありませんでした。

明子が、風呂敷をほどこことを頑として認めなかったからです。

そして明子の意見は何より尊重されました。

なぜなら、幽霊が示す場所を見れるのは明子だけです。

明子がいなければ、対局は成り立たないのですから。

もしも幽霊さんの力が増して、ところ構わず、歩き回ったらいやですもの。

だから風呂敷を外すのは、絶対だめよ。

佐為は包みをほどこしてもらえなくても取りあえず、文句は言いませんでした。

もつとも文句を言っても、誰にも聞いてもらえませんが。

何といつても、これからこの者としよつちゆう対局ができるのですよ。

一回きりで消えるなんてことなくです。

私は正しかったのです。

明日から、私の時代が始まるのです。

新しい夜明けです。

8. それって楽しいものなのでしょうか

明子にとって幸いなことに、行洋も緒方もトップ棋士としてそれに忙しい身でした。

二人の相手をして石を置くといっても、週に二回もあればいい方です。

行洋は、夜中に対局をしたいと思ったのですが、それは明子が頑として断りました。

夜更かしをしたら、朝早く起きれないし、そうすると、アキラさんのお弁当も作れないわ。

それでも明子にとっては、これは新しい生活の始まりでした。

何しろ、結婚してから今まで、夫の一番である碁に触れることなどなかったことでしたから。

例え佐為の指し示す場所に石を置くだけであっても、夫と碁を通して対峙しているのです。

夫が人差し指と中指で、ぴしつと碁石を打ちつける様子に刺激されて、明子は、ひそかに人差し指と中指で石をつまんで置く練習を始めました。

佐為には知られないようにです。

明子には何と言っても佐為に対する意地がありました。

最初の悪印象が抜けなかったからでした。

私の存在を無視して、シカトして、夫とアキラさんにだけ接触しようとしたのよ。

佐為の方は明子が何をしているかなど、実際気にしておりませんでした。

行洋と緒方というトップ棋士と対局できる日々が嬉しかったからです。

佐為にとつても週二回ぐらいのペースが、今のところ最適でした。

虎次郎やヒカルといた時と違い、誰にも憑かずに幽霊として、対局

をするのは、実にエネルギーを消耗させるものでした。
碁盤でゆつくりと休んで回復させねば、体が持ちませんよ。
もっと長時間対局できるように、少しづつ鍛練を続けましょう。

明子には、特別の碁の才とか勘は備わっていないかもしれませんが。
それでも、毎回、当代きつての碁打ちの真剣勝負を、碁石を置くこ
とを通して、体験しているのです。

そのうちに、何となく、それぞれの癖というか特徴のようなものを
感じる様になってきました。

じっくり対局の様子を観察する余裕すら出てきました。
緒方君が一番分かりやすいのよね。

いい手が置けたと思うとすぐそういう顔をするし、やられると顔色
が変わるし、本当に見ていて面白いわ。

夫は分からないわね。幽霊さんと同じ。どう思っているか分から
ないのよ。

知りたくなつちやうわね。そこに石を置く意味を、何となくね。
私だつたらどこに打ちたいと思うかしらなんてね。

「ここに置いたらいけませんの？」
ある日明子はどうとう口に出してしまいました。

その返事は長いセリフでした。

「明子は碁は打たなくていい。石を置くだけでいいから。」
明子には当然予測できた言葉でした。

ただその時、明子の横にいた佐為が激しく頷いて、それに同意を示
したのです。

まあ、この幽霊さんは。夫が言うのは許せるわ。
でも幽霊さん、あなたって一体なんなのよ。その顔。

「そうです。あなたはただ私の指示通りに石を置けばいいのです。」つ
ていう表情ね。

許せないわ。あなたなんて、私がいなければ、夫とは打てないのよ。
明子はひどく憤慨しておりました。

夫にはありません。佐為に対してです。

今、明子は自分でも碁を打つてみたいという気持ちを抱いているので
す。

最高の棋譜並べを、臨場感溢れるそれを体験し続けてきたのです。
それは至高の碁を目指すとかそんなものではありません。

ただ碁って自分で打つとどんなものなのか知りたいわという素朴
な普通の気持なのです。

それなのに、打たなくていいだなんて。幽霊さんたら。

明子はその台詞が夫から出たということなど忘れておりました。
惚れた弱みでしょうか。

誰か碁を教えしてくれる人はいないかしら。

もちろん、この二人には絶対教わりたくないわ。

緒方さんも駄目。というか、夫の門下生に教わると面倒な気がする
し。

アキラさんは、悪くはないけど、あの子は夫とはツーカーの仲なの
よね。碁に関しては。

どうしたものかしら。

9. お茶しませんか

話はほんの少しだけ遡ります。

元々逆行しているのですから、ちよつとぐらい遡ったところで大したことはありませんが。

雨の日にこうなるとはなあ。傘を差して、傘を取りに行くなんてさ。やんなつちやうよな。

先日、眼科に行った時に忘れた傘を、ヒカルは、取りに行かされたのです。

「予備の傘はもうないのよ。」

母親の厳命でした。

あれ？ あいつ？

ランドセルを背負い、パンパンに膨らんだ手提げ袋にペーパーバッグを左右に持ち、軒下にかろうじて、身をすくませている少年がいました。

傘ないのか。もつとも、あの様子じゃ、傘があつても差せないだらうけどな。

そう思いながらも、ヒカルはひよいと傘を差しました。

「貸してやるよ。どこまで行くんだ？」

「あ、ありがとう。駅前まで。」

「丁度良かったぜ。俺もそつちに用があるんだ。それ持ってやるよ。差せないだら。傘。」

「えっ。悪いよ。」

「いいからさつさと寄せよ。何だ、軽いじゃん。」

少々強引なのが、ヒカルらしいところですよ。

「うん。段ボールの工作だから。」

「お前、何年？」

「僕4年だよ。」

「なら同じじゃん。」

道々聞くと、学年末で、いろいろ持ち帰らなければいけないとか。

この前、ちよつと休んでいたら、まとめて持って帰ることになって

しまったというのです。

「君は傘を持って誰かを迎えに行くのじゃないの？」

「そういうわけじゃないさ。こっちは予備の傘でさ。この前忘れたから取りに行かされただけ。」

「そうこうしているうちに駅が見えてきました。」

「あつ、僕は駅じゃなくて、そのビルに行くんだ。四階。」

「へえ。ついだから持ってってやるよ。そこまで。」

エレベーターに乗って四階に着くと、そこは店でした。

「あの、良かったら、お茶飲んでいかないか？」

初対面なのに大胆なお誘いです。

「えっ？だってここ店なんだろう。金かかるんじゃないか。」

「もつともな、ためらいです。」

「ここ、僕んちのお店だから。」

「へえ？」

ヒカルはその言葉に物珍しそうに、その子について、ドアの中に入りました。

「あら、アキラ君。雨大丈夫だった？濡れなかった？」

受付の女性がそう声をかけます。

「うん。傘、貸してもらったから。」

そう言つてアキラと呼ばれた子は、ヒカルの方を見ました。

「こんにちは。」

ヒカルはぺこんと頭を下げました。

「あら、お友達？」

「雨宿りしてたら、通りかかって、貸してくれたんだ。傘。」

「一本余ってたからな。ほら、これ、荷物。」

ヒカルは袋をアキラに差し出しました。

「ありがとう。」

「そう言つと、その子は言いました。」

「ねえ、市河さん。お茶出してくれる？」

「あら。君も碁を打つの？」

ヒカルはきよとんとしました。

「碁つて？ここつてお茶飲むのに碁を打つの？」

市河はくすつと笑いました。

「ここは碁会所つていうのよ。」

「ゴカイシヨ？」

「そう、ほら、テーブルに碁盤と碁石が置いてあるでしょ。」

「そーい。置いてある。」

「君は碁は打たないのね。」

「うん。打てない。一度教えてもらったことあるんだ。じいちゃんに。でもさ、次の時にはいつもすつかり忘れちゃうし。俺、物覚え悪いんだ。とうとう、じいちゃんが諦めたんだよ。」

それからアキラに言いました。

「お前つて、ずつと碁、やってるの？」

「うん。僕は二歳の時からね。」

「すげえんだな。お前つて頭よさそうだな。」

それを聞いていた近くの客が言いました。

「アキラ君は、そのうちプロになるんだよ。名人のお父さんみたいにアキラ君も名人になるんだよな。」

アキラはそれに堂々と答えました。

「いつか父に追いつき、越える。それが僕の目標ですから。」

ヒカルは、アキラのその様子に、目を丸くしました。

変わった奴だな。何というか。碁を打つてことも変わってるけど、その言い方がなんかさ。

そこに市川がお茶を持ってきました。

「はい。どうぞ。」

「お茶つて、お煎茶なんだ。」

「あら、紅茶だと思った？」

「ううん。俺、お茶つていうとき、こういうの、思っちゃうから。」

ヒカルは、湯呑みをくいと回して、両手で支えて飲む真似をしました。

「お茶ね！まさか、君お茶なんかやってないわよね。」

ヒカルの姿はどう見ても、今風のカーゴズボンに流行りのスニー

カー。前髪は金色で毛先も少し跳ねています。

「えっ？やってるよ。そんなに堅苦しくない奴だけどね。俺は作法通り飲むだけ。お点前は俺の友達がやるんだよ。」

市河とアキラは驚いてヒカルを眺めました。

「君って変わっているんだね。」

お前に言われたくないと、ひそかにヒカルは思いました。

「お前の方が変わってるよ。碁やってる方が。」

アキラはテーブルに座ると、ヒカルに言いました。

「碁って難しくはないよ。君のおじいさんがどうやって教えたのかは知らないけれど。」

それから黒石を一つつまみ、ピシッと碁盤に置きました。

「こうやってね、次に白をこう置くでしょ。それでこうやって、ほらこうやれば白の勝。」

「へえ、それ面白いな。」

「これは石取りゲーム。初めはこうやって慣れていくといいかもね。」

ヒカルはアキラに誘われて、二、三回石取りゲームをしました。

「俺、黒と白の色が好きなんだ。碁って茶色のイメージがあっただけど、碁も悪くないかもな。」

「茶色？」

アキラは不思議そうに言いました。

「僕は、碁って黒と白だと思ってたよ。」

「黒と白お。」

ヒカルは頓狂な声を出しました。

「だって、こうやって黒の石と白の石を交互に置くんだよ。で、盤の上は黒と白に埋まっていくでしょ。」

「ああ、そうか。考えもしなかった。俺、碁盤は茶色だからって、ずっとそう考えてたよ。」

それからあたりを見回して言いました。

「ここじゃあ、碁を教えるわけじゃないんだろ。」

「うん。」

市河が言いました。

「そうねえ。ここにもプロの先生が来ることは来るけれど、初心者向きってわけじゃないし、毎回料金もかかるしねえ。少し離れたところに保健センターがあるでしょ。あそこで初心者教室をやってるわよ。覗いてみたらどうかしら。」

「うん、考えてみるよ。打てるようになったら、ここに打ちに来るよ。俺、そろそろ行かなきゃ。」

そうやってヒカルは立ち上がりました。

「待ってるわね。」

市河はそれから、カウンターで、ノートを差し出しました。

「君の名前もまだ聞いてなかったわね。書いてくれる。」

「俺、進藤ヒカル。そうだ、お前は？」

「僕は塔矢アキラ。」

ヒカルは出された筆ペンで、個性豊かな筆跡で名前を記しました。

「みんな、ここに名前書くの？」

「そう。それで、棋力を聞いて、同じくらいの人を紹介するの。」

「棋力って何？」

「碁の腕前のことね。同じくらいの人と打てば、楽しめるでしょ。」

「そうかあ。」

市河はヒカルの字を見て言いました。

「君って達筆なのね。」

「達筆？普通じゃない？」

ヒカルが出て行ったあと、市河はつくづくその筆跡を眺めました。

「扇子に書いても面白い字だと思うのよねえ、これって。」

それから思いました。

考えてみれば、アキラ君も普通の子とは違うけれど、進藤君て子も変わってるわ。

アキラ君といい友達になればいいのだけれど。

10. 運命の巡り会い

ヒカルは、ベッドに寝そべりながら、碁サロンで貰ったチラシを眺めました。

『初心者向け囲碁教室。気軽に始めてみませんか。』か。

あの時、じいちゃんが教えるのをあきらめたって言ったけどさ。

俺、じいちゃんに碁を教わったのって、いつだったっけか。

実のところ、ヒカルには、その記憶は残っていませんでした。

母親が、ヒカルが落ち着きがなかったという話をするとき聞かせたことが頭にあるだけなのです。

ヒカルに碁を教えるという話が出たのは、小学校に入ってしまった頃でした。

保護者会の後、担任に呼び止められた美津子は、ヒカルが、授業中落ち着きがなく、教室を歩き回ったり、退屈そうに、他のことをしていると聞いて、シヨックを受けました。

たまたま舅の家でその話をすると、碁を打つと落ち着きが出ると言われたのです。

家に戻って、夫の正夫にその話をすると、「まだ学校に慣れないだけだ。大丈夫だよ。碁なんてやめとけ。」そう言われたものでした。

でも美津子は、試しにヒカルに「おじいちゃんに碁を教わってらっしゃい。」と言いました。

ヒカルは、じいちゃんもばあちゃんも大好きでした。

歩いていけるところですし、小遣いをもらえると聞いて出かけました。

でもです。正座は無理、あぐらでも5分座っているのも辛抱しきれなくて。その上、言われたことはチンプンカンプン。もともと自発的に興味を抱いたわけでもなんでもないので、身を入れることができなかったのです。

ひと月後に平八からの、まだ早すぎるようだと断念の言葉を受けて美津子は諦めたものでした。

幸いなことに、正夫の予言が当たり、ヒカルは2学期が過ぎた頃には、教室で一応落ち着いていられるようには、なっていました。

あの時、正夫は妻に話したものでした。

「おやじは教え方が下手なんだよ。俺もおやじのせいで、今でも碁アレルギーだよ。」

正夫が子どもの頃に、平八が碁仲間と一緒に毎年出場していた囲碁大会というのがありました。

そこで無敵を誇っていたのが井上さんという強者。

「アスカ町に住んでてさ。確かおやじより10くらい年上だったかも。アマの全国大会にも出たことがあるという人だった。」

ある年、その井上さんに平八は、勝ったというのです。

「親父は、それからはもう大威張りの天狗でさ。アスカ町の井上さんに勝ったのはわしだけだの台詞ばっかだ。」

その井上さんの息子が碁が上手らしく、平八が対抗心を燃やして、正夫に無理やり碁を教え込もうとしたらしいのです。アスカ町は葉瀬町の隣のそのまた隣の町ですから、比較的近所なのです。

「俺は碁も将棋もそういうの好きじゃなくてさ。親父はわめくばっかだ。」

正夫がいうには、おやじが碁をヒカルに教えようとしたのはきつとその井上さんの孫が碁をやってるからじゃないかというのです。

そのことを思い出して、ヒカルは呟きました。

俺、お父さんと同じで、碁はだめだよな。きつと。でもあの塔矢つて奴のあれ。

ヒカルは塔矢アキラの指先を思い起こしました。

人差し指と中指でびしっと石を置く動作。あれって結構かっこいいし、しびれるよな。

そう思うと、何となく未練たらしく、チラシをポケットに突っ込みました。

間もなく春休みとなりました。

「ヒカル?どこ行くの?」

美津子が外に出かけようとするヒカルを呼び止めました。

「別に、散歩だよ。」

ヒカルはぼんやり考えていました。

じいちゃんをびつくりさせてやるというのは、ちよつとそそられるけど。

やっぱ、俺には無理なんじゃないか。

何でそんなに碁のことが引つ掛かるのか、ヒカルには、分かりませんでした。

ジャケットのポケットにねじ込んでいた、くしゃくしゃの紙を引つ張り出しました。

実にタイミングよく、風が吹いてそれが飛んでいきました。

ヒカルはそれを見つめて、これでふっきれたのかなと思いました。しかし、そのチラシは近くを歩いていた人の足元に転がり、その人はそれを拾い、ヒカルを見つめました。

君の？という目です。

ヒカルは、仕方なく頷きました。

その人はヒカルに渡す時に、ちらとそのちらしに目を通しました。

「あなたは囲碁をやるの?」

「いや、それ貰っただけだよ。」

「どこで?」

「駅前に碁サロンがあるんだよ。そこで。」

「碁会所に行っているの?」

「ううん。」

ヒカルは何となくその人と話をする羽目になりました。

「ちよつとそこに腰掛けましょうよ。」

ベンチに腰掛け、かくかく云々と傘を貸した話をすると、その人は目を見開き言いました。

「そう、あなたがそうなの。奇遇だわ。私、その塔矢アキラの母親なのよ。あの日帰ってきた息子が傘を貸してくれた話をしてくれてたわ。どうもありがとう。」

「ゲツ、塔矢のお母さんなの？」

その女性は、その言葉に笑い、言いました。

「君は碁をやってみようか迷っているのね。私は一度も碁を打ったことないけれど、私と違って、あなたは若いんだから、どんどんトライしたらいいのに。」

「うん。俺も、碁をやってみようかなあと思ったんだけどなあ。でもなあ、俺、碁に向いてないかもしれないし。」

ヒカルも何となく深あくいため息をつきました。

それを見て 女の人は、また笑いました。

「そういうため息は私がつくものよ。夫も子どもも碁を打つことしかない家なのよね。その家で、ちよつと初心者が碁を打ってみたいと思うと、教えてもらえないのよね。」

「おばさんは、なんで碁を打ちたいと思ったの？」

ヒカルは尋ねました。

11. 心強い同志です

「本当に、私のことを何と思っているのかしら。」

明子でもいらいらすることはあるのです。

夫の性格は分かっています。今更です。

今の生活に不満はございませんことよ。

夫もできるだけ私に負担をかけないようにしてくれている。分かっていますとも。

研究会を棋院で開くのも、そういうわけです。

でも妻が碁に関心を示すことは夫には不満なのでしょう。

夫は幽霊さんの代わりに石を置かせていることを申し訳ないと思つて、碁に関心を持たなくていいと言つたのよね。

そう思いたい明子でした。

問いただしてみれば、行洋の真意も恐らくその辺りかもしれない。

あの言葉はそれでも、対局に集中したいから出た言葉でしたが。

それでもです。妻が何に関心を持っているのか、気にしないということはあるのかしら。

そもそも私が幽霊についてどう思っているのか、聞いてみたこともないわ。

夫と自分の生活の中にあるすれ違いに明子は、歯噛みしたい気分でした。

それにしても私もつくづく若かつたのよね。

こんな人に良く惚れて結婚したものよね。

何で見合いの時、あれほど行洋に夢中になったのか、今となっては分かりません。

かといって、他の男だったら、いいとかいうものでもなし。

明子には他の男と一緒にいる自分など、想像できませんでした。

例え、今夫と自分の間にある距離感に悩んでいても、夫を嫌いだとかいうものでもないのですから、厄介です。

本当に人間で、面倒くさいものよね。

食事もおいしいのか、まずいのか好きなのか嫌いなのか、反応はありませんし、特に会話がないうちから。

でも同じように主婦してる友人に聞くと、おいしいとは言わないけれど、まずい時は言うのよ、とか、

料理の腕ではなくて、単に好き嫌いしかないのよ、とか、そういう話。

何も言わずに食べてくれる方がいいというのがみんなの意見なのです。

会話なんてあるような無いようなものよ。とも言われました。

それでも明子には何となく、すまながっている夫の気持がほんのり伝わっては来るのですから。

それがあるから、やっていけるのよね。

今一番やりにくいのは、幽霊について、アキラに伏せておくということでした。

アキラさんが幽霊を怖がる？

それはあの時はそう思いましたが。

でも息子が幽霊を怖がるのはとても思えないのです。

行洋が、今幽霊についてどう思っているのか、それが聞きたい明子でしたが。

碁は打たなくていい。石を置くだけでいいからと言われた時から、わだかまりがあつて、明子は、それ以上、幽霊について、行洋と話ができなくなっていました。

いろいろ話し合いたいことがあるけれど、それを話せる人が、明子には今いないのです。

これが、単なる夫の愚痴なら、友達はいます。

でも幽霊を信じる人がいるかは疑問です。

そもそも、夫も緒方さんも、幽霊さんと打つてはいても、それでもその存在に半信半疑なのよね。

夫はそういうことを考えるのを止めるすべにたけているから、今はそのことを何も考えていないかもしれないわ。

ところで、最近、佐為は、週1、2回の対局に不満を持ってきていました。

鍛練？

どういう鍛練をしたのか分かりませんが、佐為は、以前より幽霊として碁を打つ体力がついてきているようでした。幽霊に体力があるのかという疑問はさておきです。

行洋も緒方も最新の棋譜をあちこちで検討したり、いろいろな棋士と打ち合いをしたりしていますが、佐為はそれを知る機会がありません。

緒方と行洋が自分の前で、対局の検討をした時に目にするのがやっとなのです。

私はなかなか強くなれないではないですか。

それは何も明子のせいではないのに、佐為はそのイライラを明子にぶつけるのです。

明子には、その佐為のイライラが家を覆っている気がするのです。

そこで明子もイライラするのです。

誰か信じてくれる人と思いつきりお喋りしたいわ。

それは息子のアキラが一番に違いないのですが、それができないとは。

そういう時にです。気の合いそうな人間に出会ったのです。

碁はやったことはないけれど、興味はある。

アキラと面識がある。年齢も同じ。

彼は幽霊を信じるかしら。

「君は進藤君っていうのね。君は幽霊とか信じる？」

突然に話が飛んだのですが、ヒカルは驚くこともなく明子を見つめました。

「おばさん、幽霊を見たの？」

「そうねえ。見たというより、家に住みついてるのよ。」

「へえ、すごいんだ。じゃあ、塔矢の奴も幽霊を知ってるの？」

「それがね、幽霊を見れるのは私一人なのよ。」

「へえ、そうなんだ。幽霊って誰にでも見えるもんじゃないんだな。おばさんてすごい能力持つてるのかな。」

「この子は、幽霊を認めることができる子ね。」

「そこで明子は、幽霊の話を詳しく話して聞かせたのです。」

ヒカルは、幽霊が碁盤についているという話に、何か心を惹かれました。

かといって、それで逆行の記憶が覚まされたというわけではありませんでした。

「おばさんは、塔矢のお母さんなんだよね。やっぱり。」

碁は打たなくても、何か、碁と関係があるんだよ。だから幽霊が見えるんだ。

「幽霊もきつとおばさんに会えて嬉しがってるんじゃないの？」

「さあ、それはどうかしら。」

明子は、そういうと、幽霊との関係やら何やら、悩みをすっかりヒカルに話していました。

夫婦の関係などヒカルにはちんぷんかんぷんではありましたが、そんなことは何も関係はありません。

ヒカルは、断言しました。

「俺がおばさんみたいな立場だとしたら、きつと俺も碁を打つてみたくなるよ。絶対。碁って何か知りたいと思う。だって自分だけが、なんか仲間はずれみたいで悔しいじゃん。」

その時、ヒカルは、明子にとってびつたりの聞き手でした。

まさに望んでいた通りの人物ね。

明子は、ヒカルの言葉に嬉しそうに頷きました。そうよねえと言おうとしたその時でした。

「ヒカル？何してるの？」

美津子が買い物袋を提げて、通りかかりました。

「どなた？」

「あつ、お母さん。このおばさんは、塔矢のお母さんなんだ。」

「塔矢？くん？クラスの友達？」

明子はさりげなく如才なく挨拶をしました。

「初めまして。私、塔矢明子と申しますの。息子は進藤君とは学校は一緒ではありませんけれど、この前の雨の時に、進藤君に傘をお借りして、助かったと申してますの。今日はたまたま出会ってお話して偶然、そういうことが分かって、つつい話し込んでしまつて。ごめんなさい。」

明子の立て板に水の喋りに美津子は、いえいえと言いました。

「俺、そんな時塔矢に店でお茶をぐ馳走になつてさ。」

ヒカルが、一言、口を挟みました。

お茶を？ヒカルは塔矢って言っているけれど、息子さんて一体いくつ？この人、私と大して年は違わくない？店でつて、一体どこでお茶をぐ馳走に??

疑問が頭に浮かび、美津子は言っていました。

「もし、お時間あつたら、家に寄つていらつしやいません。ちょうどお茶菓子、買つてきたところですよ。家まで、5分もかかりませんし。」
舅のところへ持つていこうと思つていたけれど、別に今日じゃなくてもいいわ。

そんなことを考えながら、美津子は道々話していました。

「ヒカル、子どもつぽくて。」

「あら、そんなこと、全然ありませんわ。むしろ大人つて感じがするわ。堂々と落ち着いていて、お母様のお仕込みがよろしいのでしょうね。」

明子は先ほどのヒカルの言葉に対する賛辞を込めて、最大限に褒めそやしました。

12. 当然の帰結でした

明子は、美津子の申し出に喜んでついて行きました。その時に決心していました。

進藤君に囲碁をやってもらわなくちゃ。

彼を囲碁教室に通わせるというのは、いい考えだわ。

だって、私にはできないことですもの。

明子はすぐに美津子の懐柔に取り掛かりました。

明子は策士ではありませんが、塔矢行洋のような男と結婚して、永年うまくやってきたのです。

結婚してから磨きのかかったおっとりとした精緻な話術で、明子は話をしました。

お茶を出しながら、美津子はうんうんと頷きました。

そう、この人のご主人は囲碁の棋士なの。

変わった職業だけれど、要するにお見合いで一目ぼれして結婚したわけね。

きっと大変なのよね。接待とか、後援会とか、もしかして政治家の奥さんとか見たいじゃないの？

美津子は美津子で、明子の話の内容を脳内でさらに加速させていきました。

要するに人付き合いだけでなく、碁の雑用も引き受けてきたので、自分も囲碁がどういうものか知りたいと思っただのね。息子がやっているのよね。お父さんと同じ棋士を目指して。

主人が何をやろうが構わないけれど、息子がやるものを母親が知らないってというのは、納得いかないわよね。

でも、ご主人は口出しするなってわけね。それって横暴じゃないの。

別に口出しでなくてちよつとわかりたいってだけでしょ。

「ヒカル君の持っていた囲碁教室のちらしだけれど、是非そこに通ってみてほしいの。私はその白川先生という方とは面識があるからまづいのよ。その方の先生が、主人と友人なんですの。だから是非ヒカ

ル君が碁を習って、私に少し教えてくれると嬉しいのですけどねえ。」
「俺？」

ヒカルは二人の話を無視してお菓子をぱくついていたのに、急に話が振られて目を白黒！

「ヒカル。囲碁教室へ行きなさい！」

美津子の一声です。

美津子は大体、子どもにああしろこうしろと言うたちではありませんでした。

明子とは違った意味でおっとりしたところがあるのです。

今まで、ヒカルがやりたいと言わなければ、何をしろと言ったことはまずありませんでした。

平八に碁を教えてもらいに行けと言ったほかはです。

夫の正夫がそういう性質なのです。

ほっとけというのが彼の口癖でした。

子どもの自主性を尊重するというより、面倒くさいというのが本音かもしれないが、ヒカルにとっては、実にありがたい親でした。

「碁を覚えて、おじいちゃんを驚かせてあげなさい。喜ぶわ。きつと。」

敬老の日のいいプレゼントになるんじゃないのという気持で、美津子は言いました。

「塔矢さんの息子さんは、中学はどちらへ？」

「主人が海王中の出で、あそこは囲碁が盛んな学校なんですって。ですからそこを受けさせるつもりですの。」

「まあ。頭が良くていらつしやるのね。」

「いえ、そんな。ですけど、もしかしたらそれは囲碁の効用かもしれないわ。最近学習効果を狙って、碁を取り入れる学校が増えてきているという話を聞いたことがありますわ。」

まあ、そんなことが。それは一石二鳥かも。

そんなこんなで、明子と美津子はずれあったまま、意気投合。ヒカルは囲碁教室へ、通うことになりました。

すぐに入った囲碁教室ですが、碁会所と同じ、大人ばかりです。

おじさんとおばさんばかりで、子ども、一人もいないぜ。もしかしてここは大人専用と違うんじゃないか。

ヒカルは、びびりました。

そこににこやかに、先生がやって来ました。

学校の先生よりは、優しそうな感じだな。

「そーいや、この先生の先生が、塔矢のお父さんと友達って言ったな。」

「ややこしい。」

「君は何で囲碁を始めたいと思ったの？」

「うん。実はじいちゃんやんが、碁を教えてくれるって言ったけど、何言ってるか全然分かんなくてね。無理って、諦められたんだ。俺も興味はなかったし。この間、たまたまこの囲碁教室のちらし貰ったんだけどね。お母さんがそれを見て、ここへ行って、囲碁を覚えておじいちゃんをびつくりさせなさいって言うんだ。それで、ちよつと来てみたわけ。」

ヒカルの話に、白川は考え込みました。

「実は。ヒカルが入会すると言ってきた時、とても張り切っていた白川でした。」

「大人も悪くはないけれど、もう少し、何というか…。」

「若い子が入ってきたと期待してたのに、もしかして、そんなに出来の悪い子なのか？」

「しかも碁が面白そうとか、そういう興味を持っていない子なんだ。」

「僕は何と星の巡りの悪い人間なんだろうか。」

「だけれど、待てよ。」

「今どき、理由はなんであれ、碁をやるうという子は貴重だ。」

「この子が碁を楽しむようになれば、碁のすそ野が広がる役に立つのだろうか？」

「そこまで、深い気持ではありませんでしたが、とりあえず、この『出来の悪そうな』子供を、碁を楽しめるようにしてやらねば、そのおじいさんとやらと打ち合えるようにしてやらなければと、責任を感じ」

てしまった白川でした。

そうなのだ。進藤君の未来は、僕の腕にかかっているわけだ。頑張らねば。

この子が途中でやめてしまう事態だけは絶対に避けなければならぬ。

固く決心した白川でした。

13. 親、おや、張り切り過ぎかな

春休みの家族旅行から帰ってきたあかりはビックリしました。

「ヒカル君、囲碁、習ってるんですか？」

ヒカルといると、驚くことが多いよね。

お習字の時も驚いたよね。もつとも、おかげでお茶とお習字は、私も得意になったわ。

それでも囲碁でしょよ。ヒカルのおじいちゃんがやってるあれでしょ。それって面白いの？

でもお婆さん、何か張り切ってない？

美津子はあかりの母親に話していました。

「碁をやると集中力がついて、学習能力が増すらしいのよ。それにヒカルもやり始めたら、嵌ってるみたいなの。」

あかりはヒカルの部屋を覗きました。

「ヒカル。碁やってるの？あれ、それって碁盤？」

「うん、折り畳みの碁盤。貰ったんだよ。」

ヒカルは少し古びたそれに、石をぺたっと押し付けました。

「今何してるの？」

「うん。石つてさ、こうやって、この指とこの指でもってこうおくと、かっこいいんだよ。」

あかりにはあまり格好良く見えませんでした。

「ちよつと私にもやらせて。」

あかりは石をつまみあげました。なかなかいい感触でした。

「こう？」

ピシッと、あかりは碁石を打ちつけました。

「うん。すげえ。あかり。そうだよ。」

「私、ピアノやってるし、指動くからかな。ねえ、ヒカルは何で碁をやることになったの？お婆さん、張り切ってるよね。」

「じいちゃんにできないって言われてるからな。今にじいちゃんをコテンパンにやっつけて、あつと言わせてみせるよ。」

そうなんだ。

あかりはあつさりと納得しました。

ヒカルって負けず嫌いのところあるもんね。

ヒカルはとりあえず、あかりと石取りゲームを始めました。

「何だか、単純なゲームじゃない？これって。」

「うん。そうなのかな。これはまだ碁じゃないけれど、こうやって石や盤に慣れていくといいんだってさ。」

そのうち、あかりは毎日ヒカルの家に通って、碁盤で遊ぶようになっていました。

今日は、囲碁教室の日です。

白川は、機嫌よく家を出ました。

囲碁教室を引き継いでから、一年半経ちました。

「君は、結婚しているし、きちんと時間の決まった仕事はいいんじゃないか。」

先輩はそういう、何かよくわからない理由で、この仕事を譲ってくれたのですが。

要するに阿古田さんを扱い兼ねて、僕に押し付けたんだ。

僕はこの仕事は好きだ。楽しいよ。

二点を除いてね。

阿古田さんを何とかして下さい。

若い人も教えたい。もちろん中年熟年も悪くないけれど…。

白川が講師になって初めて若い子が入会してきたのです。

三か月前のことです。

よくよく話を聞いてみると、親が押し込んだのでした。

あの時ががつくりきたけれど、でも違った。僕は運が良いんだ。

白川は、大人と対局しているヒカルを眺めました。

進藤君のおじいさんは、一体どんなやり方で碁を教えようとしたのかな。

さじを投げられた子どもと聞いて、心配していたけれど、とんでもない。

呑み込みは早いし、恐ろしく勘のいい子じゃないか。碁に対する相

性がこんなにいる子は滅多にいないんじゃないか。

たった三ヶ月で、もう結構様になる碁を打てるようになってい

し。
そうなのです。ヒカルの進歩の速さは、教室の中で際立っていて、
中年のおじさんお婆さんのやる気を増幅させていました。

「進藤君は、もう、おじさんと打ってみたのかい？」

「ううん。まだ。」

「きつとびつくりするよ。打ってみたら。おじさんは強いのか？」

「分からないけど、老人会とかいろんなところの優勝カップ持つてるよ。」

「おじさんと打つと、もつと強くなるよ。その結果を教えてくださいな
いかな。」

じいちゃんと打つ。もう打てるのかな？

何となくヒカルは楽しくなってきました。

そんなヒカルに白川は聞きました。

「おじいさんは、君にどうなふうに教えてくれたのかな。碁を。」

「うん、実は俺その時のこと覚えてないんだ。」

ヒカルはあっさりとして、小学校に入りたての時、落ち着きのある子に
なるように碁を教えてもらった話をしました。

そうなのか、正座しろとか言われたのかな？それで碁がやになった
とか？

ヒカルは、昔の未来で「プロ試験に受かった頃の力をまだ覚醒で
きてはいませんでしたが、もともと持っていた素質を素直に伸ばし始
めていました。

その上、囲碁をとて面白いと思いはじめました。

碁は俺が探していることとは違うと思う。

でもそれとは別に、楽しいよ。これって。

14. 逆行のスキルじゃないですが

ヒカルは、平八の家に行きました。

「じいちゃん、いる？」

「おう、ヒカルじゃないか。なんだ。」

「これお菓子。お母さんが持って行けて。」

「そうか、ちようどお茶にしようかと思っと思ったんだ。」

ばあちゃんとじいちゃんとお茶飲み話に花を咲かせるヒカルでした。

「ヒカルはこの頃、小遣いをせびらなくなったの。」

「せびったほうがいいの？」

「いやいや。この頃ゲームはしとらんのか。」

「してるよ。でも盤ゲーム。」

「盤ゲーム？なんじゃ。それは。もしかして野球盤でもしとるのか？」

「いやですね。おじいさん、人生ゲームとかモノポリーとかいうんじゃないの？今の流行は。」

ヒカルは嬉しそうにもったいぶって言いました。

「実は俺、碁を始めたんだよ。」

平八は食べかけのお菓子を喉につまらせそうになりました。

「何、碁おどとお。」

「うん、まだ始めたばかりだからだけだね。でも一応打ち方は分かったんだ。」

平八は隣の部屋にヒカルを引っ張って行きました。

平八の碁盤が置いてあるのです。

並べていた石を片付けると平八は言いました。

「九子置いてみる。」

ヒカルは不思議そうな顔をしました。

教室ではまだそういう打ち方をしていているわけではなく、初心者同士、打ち合っているだけでした。

言われるままに星に置き、対局が始まりました。

平八は軽く唸りました。

「なかなか、打てるじゃないか。一体いつから始めたんじや。」

それが三か月前と聞いて、平八はまた唸りました。

「むむ、ヒカルはわしの血を受けついどるんじやな。」

「じいちゃんの血い。やだな。」

「何を言っとる。」

そこに、ばあちゃんがお茶を持ってきて、のんびりと聞きました。

「どっちが勝ったんですか。」

平八のこめかみが、ぴくぴくつとしました。

「わしにきまつとるだろう。ヒカルはまだまだ初心者じや。そうだ。わしが鍛えてやる。明日から毎日打ちに来い。」

そんなこんなで、ヒカルが平八と打つ毎日が始まりました。

教室も五か月目に入った時、夏休みの頃でした。

今やヒカルは白川のクラスで、二番目の実力者になっていました。

とはいっても、初心者教室ですが。

「進藤君は本当に力が付いたねえ。」

「うん、じいちゃんとしよつちゆう打ってるんだよ。前は九子だったけど、今はもう六子になったよ。」

「おじいさんと一体どんな碁を打ってるのかなあ。見てみたいね。」

「じゃあ、並べて見せるね。昨日打った奴だけど。」

「進藤君？ 君、打った碁を覚えてるの？」

「当たり前だよ。自分が打ったんだよ。覚えてるに決まってるんじやん。」

それを聞いて白川は微妙な顔をしました。

それからヒカルが石を並べた碁盤を眺めました。

ふーむ。進藤君のおじいさんはかなりの強者だね。阿古田さんの敵ではないな。

「それにしてもよく覚えてましたね。」

「大したことないよ。俺さ。さつき、先生と阿古田さんが打ったのも、並べられるぜ。見てたから。並べて見せようか。」

白川はその言葉にあっけにとられて、それから急いで言いました。「進藤君。そうだとしたら君はすごい才能があるよ。でもそんな碁は覚えなくていいから、覚えるんなら、もつとちゃんとした碁を覚えた方がいいよ。」

「先生。わしの碁はちゃんとしてないっていうんですかね。」

阿古田が、横からねちねち迫ってきました。

「あは、いや。ちゃんというのは、プロの対局っていう意味ですよ。タイトル戦のような。この教室では阿古田さんの碁は皆さんのお手本ですけどね。」

阿古田が、納得して引き下がると、白川は、こっそりため息をつきました。

「阿古田さん」。それが、白川にとって今、最も憂鬱なことでした。

「というわけで、今日はここまでです。」

阿古田が帰ったのを確認してから、白川は、帰りがけのヒカルを呼び止めました。

「進藤君に、棋譜の本を貸してあげるから、勉強してみるかい。分からないことは教えてあげるけれど、おじいさんもいることだし、役に立つかもしれないよ。」

白川は思っていました。

本当に覚えられるのかわからないけれど、覚えるんだったら、まずは現代の碁がいいかな。

試しに、これはどうかなあ。

たまたま持っていた、薄い棋譜のパンフレットをヒカルに貸しました。

十局ぐらいしかないものでした。

ついでに棋譜の見方も、教えました。

「今度詰碁の本も貸すからね。とりあえず、こういうのを知っておくのもいいかな。」

翌週のことです。帰りがけにヒカルは言いました。

「先生、あれ全部、見ないで並べられるようになったんだけどさ、並べればいいだけなの？それだけでいいの？」

「し、進藤君、本当に全部かい？」

「うん。なんで？」

「一体どうやって？」

「ほら、いつも打ってる友達がいるって言ったろ。あつ、言ったよね。それであの本見ながら。並べてみたんだよ。初めは俺が黒、相手が白。それで俺は手順を覚えたから試しに、次は俺は本を見ないで白で、友達の方は本を見て黒。それで、OKってわけ。だって10個くらいしかなかったから、楽だったよ。」

15. 新たな段階へ

進藤君を囲碁教室に通わせるのは成功したわ。

ついでに、私も一応碁について知ることができたわ。

明子は時々、ヒカルの家を訪れ、ヒカルにいろいろ聞きました。

ヒカルには確かに、逆行の記憶が眠っているに違いありません。

碁についての説明が的を得ているのです。

明子は、初心者なりに碁の打ち方が分かってきました。

たまにはあかり相手に打つことすらあるのです。

今では、それこそ、囲碁教室に入ったばかりの同年代の人たち程度には、打てるようになっていました。

碁がつまらないとは思わないわ。そう、面白いものだとは思うわ。

でも私は、碁はこのくらいで、いいかな。

あまり野心の無い明子は、そう思うのです。

美津子さんやあかりちゃんのおしやべりも楽しいわ。

いろいろ分かって気分も晴々してくるけれど。

ただ、自分の家の居心地は、相変わらず、よくありませんでした。

あの幽霊さんを何とかしないとイケないわ。

その佐為ですが、自分がどうしたいのか、明確には、分かっていますんでした。

でもこのままでいいとは、とても思えません。

私は、確かにもつとあの者と打ちあいたいと願いました。

その願いは叶っています。

しかもあの者だけでなく、もう一人の強豪とも打ち合っているのに。

それなのに、中途半端な気持ちでぬぐえないとは。

私は一体何を望んでいるのでしょうか。

前に人に憑いていた時は、何も考えなかった佐為でした。碁を打つことがすべてで、充実した時が流れていたのに。

碁を打つことで派生する諸々のことは憑かれた人間が考えればよかつたのです。

ヒカルはだから棋士になったのです。

虎次郎は、優れた棋譜をこの世に残したのです。

あの奥方は、私を見ることができなのに、なぜ私はとりつけないのでしょうか。

私ではなく、あの奥方のせいです。

あの奥方が、心を開いてくれないから、とりつけないに違いありません。

明子は時々佐為が恨めしそうな何とも言えない形相で、自分を見ているのに、嫌気がさしていました。

私はやれることはしてあげていると思うのに。

確かに夫も緒方君も、幽霊さんと打っているにしては、この幽霊さんに冷淡すぎる気もするわ。

でもそれは私の問題ではなく、夫や緒方君と幽霊さんとの問題でしょう。

だから明子には、佐為が自分に対して、執拗に絡んでくるような態度にはとても腹が立つのでした。

一体、私に何を期待しているのかしら。

幽霊さんは、もしかしてアキラさんとも打ちたいのかしら。

夫や緒方君に飽きて、もつといういろいろな人と打ちたいか思っているのかしら。

もしかしたらきつとそうなのね。

そんな時、明子は、その話を聞いたのです。

「白川先生はネット碁はしないんだって。でも碁会所は大人だと一回千円はとるだろ。だから、ネット碁をやってるって人が何人かいるんだよ。あの教室でも。」

ヒカルがあかりに話しているのを聞いたのです。

「ネット碁って難しくないの？」

「さあ。知らない。けど、やり方が分かれば、あとは碁を打つだけなんだろ。ちよつと興味があるよな。」

「ヒカル、やるの?」

「だって、うちパソコンないもんな。」

「おじいさんに頼んだら。」

「じいちゃんに? うーん。でもさ中学生にならないとダメって言われるかもな。あかりんちにはないのか、パソコン。」

「ないよ。お姉ちゃんが高校生になったら、買ってもらえるかも。」

「高校かあ。」

先の話だな。

ネット碁ですつて?

あの幽霊さんの何とも言えない表情を見るぐらいなら、そうだわ。

佐為に嫌悪と同情の両方を抱いていた明子は決心しました。

夫にはないスキルですから、緒方にまた連絡を取りました。

「緒方さんは、ネット碁をなさってるのでしょ。」

かくかく云々、幽霊が、最近体力?をつけて毎日のように打ちたがっているみたいなのよ。

「で、奥様がネット碁を?」

「ええ、あの納戸を整理したの。テーブルも置いたからあそこにパソコンを置いて、ネット碁ができるようにしたいのだけど。」

夫の書齋にパソコンは置けないだろうと思う明子でした。

緒方は、明子を通して幽霊と対局している弱みもあつて、協力を約束しました。

それに幽霊がネット碁を打つというのには、興味がありました。

あわよくばネットでも、あの幽霊と打てるわけだな。

まあ、それでなくても、弱者相手にどんな手を打つのか、みてみたものだ。

緒方はそう思いました。

アキラの部屋にはすでにネット環境が整っていましたが、納戸で、ネットができるようにするのに、それほど時間はかかりませんで

した。

アキラさんに分かってしまったら、それまででしょ。
居直っている明子でした。

「とういうわけでね。幽霊さんにネット碁を打たせてあげようと思うのよね。」

「わあ、いいな。」

ヒカルは明子からその話を聞いて、羨ましそうに言いました。

「それで、名前を何にしようか迷ってるの。」

「名前？名前って？」

「ネット碁って、本名でもいいのだけれど、登録名っていうので打つよ。何でも好きな名前で打てるの。好きなドラマの主人公の名前借りたり、いろいろ。」

「おばさんの名前の明子じゃだめなの？」

「うーん。でも私は操作するけれど、打つのは幽霊さんでしょ。でも幽霊なんて名前で登録するのは、あまりにひどいし。」

「あのさあ。その幽霊、名前ないのかな？」

「あっても話ができないのよ。聞けないわ。」

「ほら、指で書いてもらったら、できるんじゃないかな。」

ヒカルは座っているベンチの空いているところに、ヒカルと自分の名前を書いて見せました。

明子は、なんで今まで、そういうことを考え付かなかったのだろうかと思いました。

「そうね。そうだね。考え付かなかったわ。ありがとう。」

明子は、緒方から、ネット碁のやり方を教えてもらいました。

佐為は自分の不運やら不満を嘆くのに忙しくて、すぐ傍で何が行われているのかに、全く気を使うことはありませんでした。

佐為には、明子は何をするのかなどに、全く関心がないのです。

佐為にとっては、明子というのは、石を置くのに必要な人物ではあっても、碁が打てない、あるいは凡庸な碁しか打てない人間なのでした。

だから碁を打つ時以外に何をしようと構わなかったのです。自分がいかに甚だしい勘違いをしているのか、気付かない佐為でした。

「幽霊さんと筆談をする？」

何で私はそこまでしななければならないのかしら。この失礼な幽霊さんに。

でもやるしかないのよね。ここまできたら。

あまり優しい気持を持ってないままに、明子は佐為に向かって言いました。

「あなたのお名前を教えてちょうだい。指で畳に書いてくればいいわ。そうね。ひらがなかカタカナがいいわ。読み易いでしょう。」

佐為はいきなりの明子の言葉に驚きました。

藤原姓など書くまでもないことなので、佐為は、言われるままに畳に指で『サイ』と書きました。

「サイ？そう、サイさんでいいのね。分かったわ。」

何だか、ずい分あっさりした名前ね。

16. 僕の願いが叶う時

ヒカルの碁の腕は、逆行前の状態へと、急速に覚醒していききました。逆行前の生活の記憶は、よみがえらないのですが、囲碁のスキルだけは、それとは別に、碁に触れる度に、目覚ましく回復していたのです。

楽しい。棋譜を並べるのも詰碁も何もかも楽しい。もちろん対局も。

それがヒカルのたった一つの気持でした。

もちろん消えたものは必ず探さず。でも今はこれが楽しいんだ。

秋風が吹く頃には、既に平八とは置石なしで勝てるようになっていました。

「ヒカル。強くなったのね。」

あかりはそれを見てくださいました。

「本当にヒカルは、すごいぞ。お前は今の教室にずっと通うのか？」

平八は聞きました。

ヒカルは首を横に振りました。

「辞めるつもりさ。だって、先生といつも打てるわけじゃないし、あそこですることはもうない気がするんだ。」

「私、その教室に行ってみようかな。ヒカルがそんなに強くなれたんなら、私もやってみたいもん。」

11月になった時に、ヒカルは教室をやめると白川に告げました。うん。やっぱりか。進藤君には、もうこの教室のレベルはつまらないんだね。

進藤君は、阿古田さんとは最近対局はしていないけれど、もう阿古田さんも勝てないだろうね。

とすると、僕の楽しみは無くなって、阿古田さんだけが残るのか。白川は、ため息をつきました。

ヒカルは実際のところ、阿古田に対する強力なストッパーでした。阿古田はひどくあくどい手で、弱い者いじめをするのですが、ヒカルが強くなってくると、そうもしてられません。

それでもたまにいじめにあい落ち込んだ生徒の相手を、白川はヒカルに頼みました。

ヒカルは実にうまく、いじけている相手の気持ちをほぐしてやることができました。

「おじさんもすぐ打てるようになるよ。楽しいと思えたら、すぐなんだ。俺なんてさ、碁は打てない、向いてないって言われてたのにさ、この教室で教わったら、楽しくってさ、ずいぶん打てるようになったんだよ。あつ、そこよりこっちの方がいいよ。ほらね。」

そんな話をしながら…。

「進藤君は、今日でやめるんだってね。」

「寂しいわね。たまには顔を見せに来てちようだいね。」

教室で親しくなった人たちが残念そうに言いました。

「うん。もちろん。」

「ふん。わしにしっぱを巻いて、逃げるとは残念だね。」

阿古田は、内心ほっとしながらも、早速、嫌味を一言。

ヒカルはまだ阿古田と対局していませんでした。ヒカルに、もうその気が失せていたからです。

ヒカルは阿古田の言葉を余裕でかわしました。

「俺の代わりに、次から俺の友達が来るって言ってるから、よろしく。」

「あら。進藤君のお友達か？それは楽しみね。先生。」

「そう言ってたね。同じ学校なんだって。」

「うん。同じクラスなんだ。俺が打っているのを見て、碁に興味が出たんだってさ。」

また若い子が来てくれるのは嬉しいけれど。

進藤君はいじめられるような子じゃなかったけれど、その子は大丈夫かな。

白川はちらりと阿古田の顔を見ました。

阿古田は手ぐすね引いて待っているといった風情でした。

阿古田のあくどい対局で、この教室を去った人の数を、白川はそつと数えてみました。

その日、指導が終わった後、ヒカルは白川に聞きました。

「先生。もう少し強い人のいる教室を教えてください。あつ、教えてください。」

白川はうーんと腕を組みました。

「うーん。進藤君に向いているところね。ちよつと、考えてみるよ。しばらく待つてて、くれるかな。」

もちろん教室はいろいろ知っているけれど、彼に合う教室となると…。難しい。

というか、わずか8か月ほどの間に、ここまで打てるようになった子を手放すのは惜しい。

間違いなく進藤君は逸材だ。

そう思う白川でした。

ヒカルのこととはさて置き、次の週の教室の日です。

その日は、白川にとつて、記念すべき日になりました。

「藤崎あかりです。よろしくお願いします。」

「あら、進藤君のお友達つて、女の子さんだったのね。」

あかりは、得意の全方位外交で並み居る大人たちをがちりと捉えました。

元々の素質に、自然と覚えた明子のスキルも加わっているかもしれない。

特に、阿古田さんがあかりにメロメロになったのでした。

「阿古田さんてこの教室で一番強いんだつて、ヒカルが言つてました。」

あかりは、そう阿古田に言いました。

あいつは意外にいい奴なんだな。

阿古田はヒカルのことをそう考えました。

「いやいや。ははは。何でも聞いていいからね。」

阿古田は鼻の下を伸ばして嬉しそうです。

阿古田の弱い者いじめは、この時からピタッとやめました。

あの阿古田さんが、何とかなった。

藤崎君にお礼を言わなくっちゃ。いや、進藤君にお礼を言うべきなのかな。

白川は、心も軽く生徒の対局を見て回りました。

17. ハッピーライフ

明子は、すぐに家でネット碁を始めたわけではありませんでした。佐為の為にいろいろしてあげるということが、すつきりしないのでした。

見れば見るほど、癩に障る幽霊さんよね。

佐為は、平安の御世で、佐為の君などと呼ばれた頃の雅さなどありませんでした。明子に対しては。

もつとも明子はそういう雅に心惹かれるタイプではないかもしれませんが。

何しろ行洋に一目ぼれするような趣味の人間なのですから。

明子はネットカフェに行つて、まず、自分でネット碁をやってみました。

実際にやったら、どんな具合なのか知りたかったのです。

登録名？ うふふ。内緒。

明子は緒方に、登録している人の情報を少し貰っていました。

佐為が打つのに、あまりに初心者ではということで、緒方が吟味した棋力を持つ者の名簿です。

いつでもいるとは限らないとは、言われましたが。

明子自身が打つのは、強い人じゃない方がいいので、適当に相手を選びました。

幸い明子と大して違わない初心者のようでした。

碁って結構楽しいものなのね。

家に帰ってネット碁をするのは、あの幽霊さんを楽しませるためと思うと、何となく、腹立つけど。

でも今の家の状態を打開しなくてはならないわね。

うまくいかしら。

明子は、一週間ほどグズグズしていたのですが、とうとう決心して

佐為に言いました。

「ネット碁を打たせてあげるわ。」

佐為は文机に置かれたノートパソコンを見つめました。

画面に盤面が映し出されていました。

「なるべく大きい画面のを頼んだのよ。指で打つところを指してくれればいいわ。」

液晶画面も、佐為が触れる場合は、傷みません。実際には触れないのですから。

「あなたの登録名は “s a i” にしたわ。」

“s a i”

それは佐為に、何かを思い起こさせる気がしました。でもただそれだけのことでした。

逆行した時に、佐為は、ヒカルのことだけをきれいに記憶の外に置き去りました。

忘れたというわけではありません。自分の意志で捨てたというのが正しい言い方です。

そう言えば、私は、前にネット碁を打ちました。

その時、自分が強くなれたことを実感しました。

また打てるのですね。そのネット碁を。

あの時とは別の時間が流れているのですから、もしかして、もっと強くなれる？

とにもかくにも、佐為のネットライフが始まりました。

佐為は、満足してくれるのでしょうか。

良かったわ。緒方君の名簿にある人がいて。

これで、幽霊さんの恨みがましい目が消えてくれれば、ネット碁に付きあう甲斐もあるのだけけれど。

明子は、佐為の指先にポイントを合わせながら、そう思っていました。

佐為がネット碁を始めた頃でした。

その日、研究会の帰りに、白川は、師匠の森下に呼び止められまし

た。

「白川君。昇段おめでとう。君はこの頃、やに調子がいいが、何かあったのか。」

白川君、最近、いやにニコニコして、楽しそうだな。

「はい。実はあの古山さんから受け継いだ囲碁教室なんです。」

「あの、問題な受講生がいるという。」

もしかしてその受講生が辞めたのかな？

「ええ、あの人がすっかり改心しましてね。教室の雰囲気が悪くなったのです。」

「ほう。それはまた。」

白川君は、古山君よりは人当たりがいいけれど、一体どうやったのかな。

「それはまた、良かったな。一体どうやったのかね。」

「いえ、私がどうかしたのではなくて。」

ん？小学生の女の子が入ってきて、その子が気に入った？

大丈夫か？危なくないのだろうか？

白川は森下の考えが分かりました。

先生は、しげこちゃんのことを考えて心配してるんじゃないかな。

「大丈夫ですよ。その子には友だちがいて、その子が囲碁教室をやめて、代わりに入って来たのです。彼がどういう人なのかは良くわかっている子ですから。」

何が大丈夫かよくわかりませんが、白川はそう言いました。

「なんだ。やめた子がいるのか。」

森下の思考はそちらへ流れました。

白川は急いで補足しました。

「やめたといっても。教室は初心者用なのでその子には、もうつまらなくなつたからです。」

その時閃きました。

そうだ。

「先生はもう弟子をとるおつもりはないのですか。」

「弟子？ない。今は和谷で手いっぱいだ。」

何を言い出すのだろうか。白川君は。急に。そのやめた子のことか？

「誰か、弟子志望がいるのか？」

「いえ、ただそのやめた子が、なかなか優秀でして、どこかでもう少し腕を磨けばと。」

「プロになりたいというのかい？」

「いえ。そういうことは、まだ考えていないようですが。」

「なら、君が教えたらいいじゃないか。七段になったのだし、弟子をとつてもいいんじゃないか。」

「ぼ、ぼくが弟子をとる???のですか？」

「そうだ。悪い考えじゃないだろう。」

ヒカルの話はそこまででした。

帰り道、白川は思いました。

進藤君は碁には興味があるけれど、プロになるとかは考えていないだろうな。

プロになれるかは別として、彼はプロになる素質がある。それは確かだ。

彼がこのまま打ち続けたら、どこまで強くなるのだろうか。

気が遠くなりそうだけれど、見てみたい気がする。

ともかく、僕が弟子をとるとするのは…。

意外と悪くないかもしれない。

それが進藤君のような子ならなおさらだ。うん。

18. 師匠で支障ありません

ヒカルは、囲碁教室を辞めましたが、特に当てがあったわけじゃありませんでした。

そういうことをあまり考えないでことを進めるのがヒカルらしいことなのです。

この頃、塔矢のお母さん来ないな。

ネット碁、どうなったんだろう。

俺もじいちゃんにパソコンねだつてみようかな。

でも小学生じゃ早いつて言われそうだなあ。

そうだ、一度、あの碁サロンに行つてみようかな。

ヒカルは、駅前の碁サロンへと足を向けました。

「こんにちは。」

「あら、えーと…。」

「進藤ヒカルだよ。」

「そう、進藤君だった。元気にしてた?」

「うん。」

ヒカルは、店内を見回しました。

「今日は塔矢、いるの?」

「来てないわ。」

「そうなんだ。」

「進藤君。少しは打てるようになった?」

「うん。あのチラシの教室に、四月から通つてたからね。」

「そう、もう半年以上は経つのね。」

「うん。」

その時、通りかかった芦原が声をかけました。

「市河さん。その子は?まさかアキラのライバルとか?」

いや、アキラより強い子なんて、いるわけないよな。

でもアキラに友達つていうのも、もつと変かも。

まあ、芦原さんは、アキラ君には友だちがいないと決めてかかつて

いるのね。

まだお友達とは言えないけれど、でもお友達になれる子よ、進藤君は。

「そういう期待を込めて、市河は言いました。」

「芦原さん。進藤君はお友達なのよ。アキラ君の。『碁』友達ではないわよ。『お』友達なのよ。」

ヒカルは、その言葉に首を傾げました。

友達っていうんなら、塔矢のお母さんの方が友達みたいだな。

「へえ。アキラにもいるのか。そうだよな。いなくちゃな。うんうん。じゃあ、また。」

にしても碁抜きの友達だった？

芦原は、納得したようなしないような気持で、出て行ってしまいました。

芦原の後姿を見ながらヒカルは言いました。

「少し打てるようになったら、来てみるって言っただろ。だからちよつと来てみたんだ。」

「進藤君の相手になりそうな人ねえ。アキラ君がいてくれたらいいのだけれど。」

市河は、店内を見回しました。

「いいよ。別に打たなくなたって。それよりね。あの教室、大人ばかりで。もう少し子どもがいるところってないのかなって思って、聞きに来たんだ。」

何となくやめたとはいにくいので、ヒカルはそう、遠回しに言いました。

市河は意外に理解を示しました。

「そうねえ。進藤君の学校には囲碁部はないのね。」

「ないよ。小学校だけ。」

「あら、小学校だって、あるところにはあるのよ。じゃあ、中学は囲碁部のあるところがいいわねえ。」

「俺、受験しないよ。」

「中学の大会じゃ、公立中もたくさん参加してるわ。君が行く予定の

中学、お友達にお兄さんとかお姉さんが行っている人いないの？どんな部活があるのか聞いてみたらいいんじゃないの？そうね。なかつたら進藤君が作るってのはどう？」

ヒカルはそれを冗談だと思いました。

「そーいや、あかりの姉さんて中二じゃなかったっけ。あかりに聞いてみよう。」

次の日、ヒカルは学校の帰りにあかりに聞きました。

「碁サロンに、ちよつと行ってみたんだよ。そうしたら、中学で囲碁部に入ったらって言われたんだ。葉瀬中に囲碁部があるか分かんないだろ。あかりの姉さんなら知ってるんじゃないか。」

「うーん。聞いたことないけど。でも聞いてみるね。だけど、ヒカル、まだ中学生には、なれないよ。だって5年生だもん。」

「うん。分かってるよ。そんなこと。」

あかりはそれから思い出したようにヒカルに言いました。

「そう言えば、白川先生がね、暇な時に覗いて欲しいようなこと言ってたよ。」

「へえ。もしかして、教室が見つかったのかな。」

翌週の囲碁教室が終わる頃、ヒカルは教室を覗きました。

「あら、ヒカル君じゃないの。藤崎さんのお迎え？」

「えっ、違うよ。久しぶりにおばさんの顔を見たくなくなったんだよ。」

そのおばさん、もとい熟年女性は、「まあ」と言っ、それでも嬉しそうに笑いました。

ヒカルの周りには結構な女性が集まって、何やかやと話が弾みました。

若い男の子は何といってもいいものです。少々若過ぎるかもしれませんが。

ヒカルにも、明子のスキルが身につけてきたのでしょうか。

それとも、もともと年上にもてるタイプなのでしょうか。

進藤君は、碁だけじゃなくて、そういう才能もあるのか。いいな。

僕にはない能力だ。

白川はその様子を横目で見ながら思っていました。

皆が帰った教室で、白川はヒカルに話しました。

「進藤君は、碁をずっとやっていって、どんなことがしたい？ただ強くなりたいわけじゃないと思うけど。」

プロになりたくないかいというメッセージを込めて、尋ねました。

「えっ？」

ヒカルには白川の意図がつかめませんでした。ちよつと目をぱちくりしました。

実は、強い人と打って勝ちたいと思っただけでしたから。

要するにただ強くなりたかったのです。

それ以外には何もないけれど。

でも、まさか、そういうわけにはいかないよな。

ヒカルにもその程度の気働きがありました。

「この間ね。囲碁部に入ったら、同じ年くらいの子たちと打てるって言われたんだけどさ。小学校にはないし、行く中学にも囲碁部があるか分からないだよな。まだ俺五年だけだよ。」

そうか、囲碁部か。囲碁部の大会とか出たいのか。でもそういうレベルではないのだけれど。

君は、囲碁暦が一年に満たないのに、もう院生試験をらくらく突破する力を持っているんだけどね。

「進藤君。いろいろ教室のことを考えたんだけどね。君には教室より、上手の人にたくさん打ってもらうのがいい気がしてね。それで、私の師匠に、弟子をとる気がないか聞いたんだけどね。今はプロを目指す弟子が一人いて、手いっぱい無理だからって言われてね。」

「先生の師匠？」

って、塔矢の親父さんの友達だよな。どんな人なんだろう。

「それでね。私が教えたらいいんじゃないかって言われてねえ。」

自分から君を弟子にしようとは言い難い白川です。何となく回りにくどい歯切れの悪い話し方になりました。

でもヒカルはずばりと言いました。

「もしかして、それって俺を白川先生の弟子にしてくれるってこと？」

「弟子って程じゃないけれど、当分僕が君の相手をしようと思ってるんだ。」

「わあ、嬉しいな。それで、弟子って何をすればいいの？」

「いやいや、特に何かしてもらうほどのことはないよ。君はまだ小学生だ。とりあえずは時間が空いているときに君と打つてことを考えてるんだけどね。」

「はい。お願いします。」

「ここじゃまずいので、場所は、やっぱり僕の家になるのかな。何かいい方法を考えようか。」

幸い白川の家は、一駅ほど離れたマンションでした。

試みとして、週に二回ほど、白川の暇な時に、通うことになりました。

美津子は考えました。

弟子って雑用をする人のことよね。付け人？

美津子の思考は、少しずれていました。

小学生だから、打つだけでいいって言われたのよね。

要するに個人レッスンということよね。

とすると、お月謝とか必要でしょう。おいくらかしら。聞かなくては。

冬休みに入る前には、ヒカルの弟子生活が順調に始まりました。

一局ごとにヒカルは力を伸ばしました。

そして白川もまた、そのヒカルの技量に触発されていきました。

さて、一月の下旬でした。あかりが言いました。

「明日、中学の創立祭があるんだよ。いろんな部活がお店を出すんだって。ヒカル、行くでしょ。」

あかりはヒカルの返事を期待などしていません。当然イエスだと思っ
ていますから。

19. 布石を敷かねば

創立祭は盛況でした。

三年生は受験を控えているから、一、二年が主体なのでしょうが、結構な人出でした。

「この中学って、一小と二小と三小から来るでしょ。だから生徒の人数が多いんだって。」

ヒカルが通っているのは、三小、葉瀬第三小学校でした。

それだけいけば、碁を打つ子も何人かは居る筈だと、思うのですが、見渡したところ、囲碁部はありません。

「囲碁部って、お店とか出す感じじゃないのかもね。」

「うん、そうだな。」

碁サロンみたいにしたってしょうがないもんな。

たこ焼きを食べていると、あかりが言いました。

「あそこ、茶道部はあるね。」

「俺、茶道部なんて入らないぜ。中学で。」

「そうだね。私、中学生になったら、まだやったことないことをしてみたいな。」

「あかりー。」

少し先の方で、あかりの友達が手を振っています。

「さやかたちだわ。」

「行つて来いよ。たこ焼喰ったし、俺、もうちよつとしたら帰るからさ。」

「うん。じゃあ、そうするね。」

あかりが行ってしまうとヒカルは将棋部と出ている看板の方に歩いて行きました。

その近くで中学生が一人、ビラを持って立っています。

「おい。そんなところで何やってんだよ。」

「何って、勧誘。」

「生徒に配らなきゃ、意味ないぜ。ま、配ったところで誰も入らないだろうけどな。碁なんて止めちまえ。」

ヒカルの耳に碁という言葉が飛び込んできました。

「今年からこの地区でも中学の大会が開催されるんだよ。囲碁部のある中学が増えたからだよ。葉瀬中でも三人集まれば団体戦出れるんだ。」

「出てもお前のへぼ碁じゃ勝てないぜ。どっちにしても諦めるんだな。」

「ほっといてくれ。」

中学にも阿古田さん並みに意地悪いのがいるのかな。

ヒカルは二人のやり取りを眺めていました。

その時ビラを持つてる子がヒカルの方を見ました。

「ビラいる？君は葉瀬中に進学する子？」

そう言つて、一枚くれました。

「そのつもりだけど。」

「君は碁を打つの？」

「うん、まだ一年たたないけどね。」

「じゃあ、もし中学生になったら、囲碁部に入ってくれないかな。」

「そりゃ、いいけど、でも俺まだ五年生だよ。囲碁部って、お店出していないの？」

「囲碁部なんてないんだよ。将棋部ならあるぜ。」

もう一人が言いました。

「僕は囲碁部を作りたいんだ。でもやってる人がいなくてね。」

「やったことなくてもやりたい人って居ないの？こういう時にお店を出して、初めての人を呼びこまなくちゃいけないんじゃないの？」

これはまた、ヒカルのなかなかの発想です。

逆行したおかげか、ヒカルは囲碁の普及という大問題に挑戦しているのでしょうか。

「おい。筒井よ。このガキの言うのが最もだな。勧誘のビラ配りじゃなくて、何かすべきだったな。がはは。」

そう言つて将棋部の子は、行つてしまいました。

筒井はヒカルに言いました。

「彼は加賀つていうんだ。将棋部なんだけど、碁も打てるんだよ。も

しあと一人いたら、団体戦出れるんだけどね。」

「団体戦って？」

「うん、大会にはね、三人一組で、そのうち二人勝てば次に進めるトーナメント戦があるんだよ。僕は、団体戦に出たいんだ。」

「えっと、筒井さんというんだよね。筒井さんの小学校には囲碁部はなかったの？」

「うん。なかった。でもクラスに一人、碁を打つ子がいたんだ。その子は私立に行ったから。君はどこの小学校？」

「三小。」

「僕は二小なんだ。加賀は一小だから将棋と囲碁を一緒にした部があったんだって。でも実際は将棋しかやってなかったらしいけど。」

ヒカルは筒井に中学に入ったら、囲碁と一緒にやろうと約束しました。

家に帰りながらヒカルは呟きました。

部活を作るって冗談なんかじゃないのか。でもすげえな。

ヒカルには、やりたいことをやるために、一人で頑張っている筒井の存在は、驚きでした。

学校というのはヒカルにとって、初めから存在するものという観念がありました。

要するに大人が作ったものです。それに子どもが口を出して部活を作るなどということは考えたこともありませんでした。

大体、ヒカルは学校には仕方なしに通っているようなところがありました。

逆行前、一応中学三年まで過ごしていたのですから、その感覚はどこに残っているのかもしれませんが。

正直、ヒカルにとって、学校は、かつたるいものでしかありませんでした。

何か忘れていることを探すのがヒカルのひそかな一番の目標でした。

それに今は、碁が大きな比重を占めていました。

学校へ行く時間がもつたいない、そんな気持でした。

ヒカルの弟子としての時間は、週二回から始まって、どんどん増えていきました。

早めの夕食の後、出かけるというそれは、塾に行く感じかもしれません。

受験する子は五年生でも九時十時に塾から家に戻りますが、ヒカルも夜の一時を白川のもとので、碁の相手をしてもらいました。

プロとの一局毎の対局で、ヒカルは佐為に磨いてもらった力をしっかり、がっちり取り戻していきました。

白川は、ヒカルにプロ棋士というものを分からせることにも時間を使っていました。

そういう意味で、白川は、なかなかによき師でした。

ヒカルは、逆行前プロ棋士として、少々の時間を過ごしてきた頃よりも、ずっと深く物事を見れるようになっていました。

年齢的には小五で、中三よりは若いのですが、でも考えたら、逆行した二年生の時から数えて、四年間を足した分だけ、人生経験は積んでいるのかもしれない。

さて、ヒカルを弟子にした白川ですが、彼は絶好調でした。

もちろん彼もずっと期するところがあって頑張ってきたのですが、プロになって十年余り、覇気を失っていたかもしれない。でも今は少し違います。

進藤君は本当に信じられない伸び方をしている。

そんな進藤君と打つと、僕にも力が湧いてくる気がするんだよね。いや確実に力を貰っている。

僕は今回は、リーグ入りできる、絶対に。確信がある。

こんなに調子がいい時にリーグ入りできなかつたら、いつリーグ入りできるっていうのか。

ヒカルが弟子になってから、白川は、幾つかの棋戦の予選を順調に勝ち進んでいました。

それはそれとして、進藤君はプロになりたいとなぜ言わないのだろうか。

院生になることを勧めるべきか。だが、彼は今はもう院生上位の力がある。

そして五年生の終り頃には、ヒカルの棋力はプロ試験を受けた頃ぐらいになっていました。

「進藤君は、プロになりたくはないのかな？」

白川は、初めてそう切り出してみました。

俺がプロ？

それはヒカルが、何となく心にはあっても、あえて考えないようにしていたことでした。

限りなく逆行前の棋力に近づくにつれ、ヒカルには、なぜか躊躇いのような感情が芽生えていました。

何に対する躊躇いなのか、それがよくわからない、躊躇いなのです。

厄介なものです。

もしかして、これって、俺が忘れた何かと関係ある？

そういう気がしました。

「先生。中学生になって決めたら、遅いですか。」

「いや、そういうことはないよ。」

もしかして、親御さんが反対するのかな。

碁をやることには反対しなくても、プロになるのは賛成しない。そういう親もいるけれど。

あるいは、進藤君は、自信がないのかな。僕としか打たないから。きつと、そうかもしれない。

彼は、もつと、多くの人と交わる必要がある。

とにかく進藤君を育てるのは僕の使命だ。

20. 四者四様

ヒカルは、白川にプロにならないかと言われて、初めて自分の心の内を覗きました。

本当は、とても嬉しい。白川先生は俺のことをそれだけ評価してくれている。

そして、何より俺はプロになりたいんだ。ずっと前からそうだったんだ。

それなのに、俺は何を躊躇っているんだ。

いや、俺は何を言ってるんだ？ずっと前からって。一体いつからっていうんだ。

ヒカルには分かりました。

ずっと前から。それって、碁の教室に行く前からだ。塔矢に会う前からだ。

そうなんだ。分かっていたのに。

ヒカルは、心の内を覗いて、微かに繋がっている記憶の片鱗を感じ取りました。

それはヒカルの中で、逆行前と今の生活が、繋がりを始めた瞬間かもしれません。

少なくともヒカルの中で、実質、プロ第一戦の三段を破ったその時の棋力と、碁への限らない憧憬が重なったのです。

俺が躊躇っている理由は。俺が思い出そうとしている何かと関係があるんだ。

ヒカルは、はっきりと悟っていました。

それは、もしかしたらプロにならないければ、思い出せないのかもしれない。いや、どうなんだろう。

プロになったら思い出せなくなるなんてことはないよな。

自分の中にある躊躇いとは何か、ヒカルは、もやもやを抱えたまま、最強の六年生になったわけです。

塔矢アキラはまだ父親と三子置きで打っていました。多分。

四月が来て、六年生の生活が始まった頃です。家にお客がありました。

「やっと東京に戻って来たのでご挨拶に。」

それは、四年前にヒカルが、歩道橋の事故で、クッションになった子どもの親で、高野といました。

あの事故の後、ヒカルの家に一度お礼に来たのですが、すぐに転勤で東京を離れていたのです。

毎年、律儀にお歳暮が届くので、ヒカルの家では、恐縮していました。

助かった子はもう、小学二年生でした。

「ヒカル君が息子を助けてくれた年になりましたよ。でも、うちは相変わらず小粒で。」

「いや、ヒカルもまだ小粒ですよ。でも中学生ぐらいになると、男の子は急に伸びますから、心配ないですよ。ご両親とも背が高くていらっしゃいますからね。」

正夫は、そう言いました。

「うちのは今サッカーに夢中ですが、ヒカル君はどうされていますか。」

「ヒカルは、学校じや、体育だけが取り柄の子ですわ。」

美津子はそう言うてから、付け加えました。

「でも今は囲碁にも夢中で、ネット碁をやりたがっていて、どうしたものかと考え中ですの。」

高野はほうという顔をしました。

「碁ですか。それは、すばらしい。碁や将棋を教育に取り入れている学校もボチボチあると聞いてますよ。」

「碁はいいんですけど。ネットって、どうなのかと。小学生でパソコンで早くないか。それが、ちよつと心配で。」

高野は頷きながら、聞きました。

「でもなんでネット碁なんです？」

「周りにやってるお子さんが少なく。碁会所には、いるらしいんですけど、お高いらしいです。小学校には囲碁部はないとかで。」

「はあ、なるほど。それなら、どうでしょう。」

高野がそう言い出した時、ちょうど、ヒカルが帰ってきました。

ヒカルは、居間にいる高野を見て、首をかしげました。

何か見たことある人だなあ。

「あれっ、もしかして高野さんかな？」

親子で写っている写真つきの年賀状で顔を覚えていたヒカルでした。

高野はニコニコとして頷きました。

「ヒカル君。ずいぶん、お兄さんになったねえ。しばらくは東京にいるので、うちの拓と遊んでやって下さいね。」

「はい。」

「ところで、今、お父さんとお母さんに伺ったんだけど、ヒカル君は碁をやるんだって。」

「うん、やっと一年くらいになるかな。」

「強いのか？」

ヒカルは何と聞いていいか戸惑いました。

「強いか分からないけれど、面白いよ。碁。」

高野はニコニコしました。

「ヒカル君は、ネット碁をやりたいのだと今ご両親から伺ったのだけれどね。」

「うん。」

「できたら少し手伝わせてくれないかなあ。」

「手伝い？」

ヒカルが不思議そうに首を傾げると、高野はヒカルの両親の方に向き直り言いました。

「私は碁のことは何も知りませんが、ネット碁のことなら少しお手伝いできるかもしれません。仕事でパソコンは使っていますが、私もネット碁とかゲームには疎いんです。」

でもそういうことに詳しい男を知ってるんですよ。気の置けない友人で、実はあの歩道橋の事故の時も、その友人を訪ねた折のことなんです。

そいつは、いろんなゲームの開発にも興味を持っていて。一度オフィスに遊びに行きませんか。ここからそうは遠くないところですから。彼に聞けば、ネット碁とか子どもがパソコンをやることとか、いろいろ情報をくれると思うんですよね。」

「それって、お邪魔では。」

「いえいえ、ヒカル君は息子の命の恩人ですから。前々から何かヒカル君にしてさしあげたいと思っていたのですが、やっとその機会に恵まれたと思えるんです。」

まあ、パソコン云々はともかく、そこで二、三度、ネット碁を試してみたらいかがでしょう。まだやったことないでしょ。ヒカル君は。」

ヒカルは頷きました。

「試してみてパソコンを購入するとかはそのあと、ゆっくり考えたらよろしいのじゃないですか。そういったことにも詳しいでしょうから、相談に乗ってくれると思うんですが。」

というわけで、高野がその友人に話を通して、世話をしてくれることになりました。

ところで、一足先にネット碁に触れた佐為ですが、saiという名前には反応しましたが、それは自分が強くなった時の感覚が呼び戻されただけでした。

彼の為にネット碁を打ってくれた人間については、何も思い出しませんでした。

佐為の最初の対局は、十時半ごろから初めて昼過ぎの一時頃まででした。

それはたまたま韓国のプロ七段との対局でした。幸いにもその時に、緒方のリストアップした名前があったのです。

それは、佐為には楽しいものでした。

一方の明子は、あの楽しかったネット碁がこんなに疲れるものだとはという思いでいっぱいでした。

緒方君が、持ち時間を一時間か一時間半に設定するように言ったの

は、正解だったわ。
もうくたくたよ。

いつも碁盤を通してやる対局より疲れるのはなぜかしら。

明子は、佐為の顔を見る気にもなりませんでした。

終局と同時に明子はサイトを閉じ、パソコンの電源を落としました。

そしてまっすぐ居間の方へ行きました。

残された佐為は、一言も発しないで、ネット碁を終了させた明子にひどく腹が立ちました。

せっかく楽しい対局が出来たというのに。満足感が急にしぼんでいきました。

前は一日中、日に何局もやれるだけ目いっぱい、ネット碁をやっていましたよ。

なのに、今日は、これで終わりというのでしょうか。

逆行前、ヒカルは夏休み、午前中からネットカフェに入りびたり、お昼は取らずに、持ちこんだ補助食をかじりながら、打ち続けていたのです。若さのなせる業です。そして特に何もする仕事を持たない子どもだったからできたことでした。

佐為は明子の後ろ姿を恨みがましく睨み付けていました。

奥方は一局でやめてしまったけれど、今の対局はやりごたえがありました。あの画面の中にもっと、面白い打ち手が潜んでいる筈です。

ネット碁が好きただけできるというのに、一体奥方は何を考えているのか、理解できない。なぜあんな女性としか、繋がれないのでしょうか。しかも話すことすらできないとは、もしかして、私は間違っただこにきてしまったのでは。もっと私が望むだけ好きなように打てる場があるのでは。

望んでいた行洋との対局はもう十数局にも上っていたのですが、佐為はそれをすっかり忘れていました。

明子は、疲れ切っていて、居間に着くと、座布団を三枚並べてその上にどさつと倒れこみました。

こんな時はベットが、せめてソファがあるといいのに。塔矢邸は畳の生活でした。

でも今は誰もいないから、お行儀は悪いけれど、仕方ないわね。

あら、誰もいないって言ったけど、幽霊さんがいるわ。

そんなことを思いながら明子は目を閉じました。それっきり明子は寝入ってしまいました。

しばらくしてハツと気づくと、もう四時を過ぎていました。

お昼も食べなかつたけれど、ものを食べる気力もないわ。

のろのろと起き上がり、お茶をやつと入れると、明子は、ふっとため息をつきました。

それからしばらく、明子は佐為と顔を合わせないようにしていました。

夫の書斎の掃除もしませんでした。

佐為が見えない範囲だけで生活していたのです。

でもいつまでもそうはできません。

一週間ぶりに明子が書斎の掃除をしているところに、佐為は現れました。

その姿を見て明子は諦めました。

結局、いつものように明子が折れて、週に一度ほどですが、一局だけネット碁をやるようになりました。

緒方は、登録名を明子に伝え、佐為との対局はネット碁に切り替えました。

俺には、この方があっている。明子夫人の顔を見ながら打つより、あるいは、俺の表情を見られずに打つと、勝てる気がしてくる。俺は絶対幽霊に勝つぞ。絶対に勝てる。

緒方には確信が沸き起こっていました。佐為との対局を重ねてきた結果の思いです。

21. きらきら星も悪くない

佐為の望みは果たされていましたが、佐為には不満でした。

でも、それより最悪なのは明子でした。自分の楽しみで打ったときは楽しかったのに。

私は何でこんなに疲れるのかしら。

もしかして幽霊さんに、体力を吸い取られてるのかしら???

4月も半ば、小学校の用事の帰りに、明子は、久しぶりにヒカルの家を訪ねました。

「今日はPTAの集まりがあつて、その帰りなんですけど、ちよつとお寄りしたの。ご無沙汰してましたでしょ。今日はすぐ帰らなくてはならなくて、お玄関先で失礼させて頂きますわ。」

明子は、時間を見計らいながら、公園に向かいました。

公園の前で、明子はヒカルに会いました。時間を合わせたと言ふべきでしょうが。

ピツタリね。

明子は憂さ晴らしに幽霊の話をしたかったのです。

その話が出るのは、ヒカルしかいませんでした。

「あれ、おばさん。偶然だね。」

「そうね。今、お宅に伺つてきたのよ。その帰りなのよ。ちよつと歩きましょうか。」

いつもに似ず、寡黙に歩く明子を見て、ヒカルは思いました。

「おばさん。もしかしてネット碁、上手くいってないの?」

明子は目を見張りました。

「なぜわかるの?」

「えっ、だっておばさん元気ないし。よくわかんないけど、おばさんがそうなるわけで俺が考え付くのは幽霊のことだからさ。」

そこで明子は幽霊のためにネット碁を打つことが、なぜかとてもなくストレスになっていることを話しました。

「ネット碁自体は楽しかったのよ。ネットカフェで自分のために打つたときはね。でもねえ、幽霊さんの顔を見るのが負担なのよね。幽霊さんは満足していない気がするの。」

私にはもう、これ以上何もしてあげられないわ。

つくづく思うのよ。何で、私にだけ見えるのかしらね。」

明子はため息をついて、続けました。

「もつと碁を打てる人だったら、幽霊さんに何かしてあげられるのかもね。でも私は主人と緒方さん二人との対局と、たまにお昼時のネット碁におつきあいする以外に何もできないわ。家事やらなにやらいろいろあるし、一応母親業もあるのよね。今日みたいに学校の用事も。なんだかもう疲れちゃって。」

「塔矢は、幽霊のこと本当に全然気が付いてないの?」

ヒカルには、それが疑問でした。

「もし気が付いていたら何か言うかするかするでしょうから。」

うーん。どうなんだろう。子どもって気にして言わないってこともあるんだよね。

俺のお母さんもそうだけど、やっぱりおばさんもそこところは分かってないかもなあ。

「俺、思うんだけど。塔矢に隠しているから余計に疲れるんだと思う。塔矢のお父さんだって、話せばわかるんじゃないの？塔矢に言うべきだよ。」

そうしたら、少しは軽くなるんじゃないかなあ。おばさんの気持。」

明子はふっと笑いしました。

そうかもしれない。家族が隠し事をしてるっていうのは。

もちろん、大人の事情は言わないことはいろいろあるけど、幽霊さんはそういうのとは違うわよね。

「そうね。でも私からはやっぱり話せないわ。今更だけど。誰かに話してもらえれば。幽霊のことを知ってるのはあと、緒方さんだから、彼に頼もうかしら。」

それから、ヒカルの方を見て言いました。

「進藤君に話したら、少し楽になったわ。いつもありがとう。お話聞いてくれて。」

ヒカルはそこで話を切り替えました。

「今度、俺、ネット碁をやるんだ。」

「パソコン、解禁？」

「うん。それも、もう少ししたらあるかも。でもしばらくはそうじゃないわ。」

そう言ってヒカルは高野の話をしました。

明子は驚きました。

「まあ、進藤君。歩道橋で事故を？二年生の時？本当に良かったわね。その子も進藤君もどちらも大したことなくて。」

「その子、拓っていうんだけど、この間一緒に公園で遊んだんだ。やんちゃでちよこまかしててさ、何か小さい時の俺に似てる気がしたよ。」

大人びた様子でそういうヒカルに、明子はクスリと笑いました。

進藤君もまだまだ子どもなのにねえ。

「そうだわ。進藤君は登録名は何にするの？」

「俺？考えてないけど、ヒカルでいいかなと思って。」

「ヒカルは、結構ありそうかもよ。同じ名前でもいいみたいだけど。そうだわ。」

明子はバッグからメモ用紙を取りだし、書きつけてヒカルに渡そうとしました。

「閃いたのよ。はい。これ。」

その時でした。

「ヒカル？まだ帰ってなかったの？あら、おばさん。」

あかりでした。

「あら、あかりちゃん。ちようどさつき、進藤さんのところへお寄りしたのよ。頂き物の御裾分けで。その帰りに進藤君に出会ったの。ネット碁のお話してたのよ。高野さんのお話を伺って。あかりちゃんもネット碁されるの？」

あかりは頷きました。了解は取っていませんでしたが。

「私もネット碁やってみたいし。お姉ちゃんが高校生になったら、パソコン買いたいって言ってたし。いろいろ教えてもらおうの。」

明子はにこやかに頷きました。

「私もね、どんなかと思って一度ネットカフェに入ってやってみたのよ。面白くてはまるかもね。あなたたちは若いから。それで、さっきの続きだけね。」

明子は改めてメモを差し出しました。

「はい。これ。差し上げるわ。」

ヒカルはメモを受け取ってみました。あかりも覗き込みました。

「英語？読めないよ。」

「それはね、twinkleよ。二人とも知らないかしら？きらきら星って歌。」

きらきら光る、お空の星よっていうの。英語の歌詞で、きらきら光るがtwinkleなのよ。

進藤君には、お世話になってるから、何かして差し上げたいと思ったの。

それで、ネット碁の登録名、どんな名前がふさわしいかしらって。どうかしら。お名前のヒカルにもかかるでしょ。

もちろん、自分の登録名ですものね。好きなのを考えればいいのよ。でも、もし気に入ったら使ってみてね。」

ヒカルは少し胸が詰まりました。少女趣味ではありますが、明子の気持が分かりました。

悪い名前じゃないよね。

「ありがとう、おばさん。少し難しい気もするけれど。」

「あら、パソコンやるなら、英語も大切よ。それに、すぐに中学生にな

るんですものね。」

明子が帰って行くのを見ながら、あかりが言いました。

「おばさん、いい人ね。本当に、そのアキラ君って子は、おばさんがいろいろやっていること、何も知らないのかなあ。」

「うん。どうなんだろう。気づいてるかもしれないな。」

22. ネット、トントン拍子

金曜日の放課後です。ヒカルはあかりと教えられたオフィスに向かいました。

ビルの二階にそのオフィスがありました。

「ああ、ヒカル君。待ってたんだよ。えっと、そちらが話していた君のお友達だね。」

高野は、あかりを見ました。

「はい。藤崎あかりといいます。」

「藤崎？　もしかして、あの時に、一緒にいた…」

「はい。ご無沙汰しています。私も碁をやっているので、ネット碁に興味があつて見学にきました。」

「そうかー。君たちはずっと仲良しなんだね。なあ、構わないだろ。」最後のなあくは、すぐそばにいた男に向けられたものでした。

高野の知人は、ラフな感じの人でした。

「もちろん。大歓迎だよ。私は泉。ここは第二オフィスというところかな。上に、秘密の仕事場があつてね。」

そうおどけて言いながら、泉は、何台かパソコンがある仕切りヘビカルたちを案内しました。

泉は、パソコンの画面をさしながら、説明してくれました。

「パソコンについて話すよりは、まず、ネット碁を見てみたほうがいいね。とにかく慣れることが大切だから。」

ヒカルとあかりと高野が見ている中で、泉は説明を始めました。

「ネット碁はいくつかあるけれど、一番の大手はワールド囲碁ネット。ここがそう。ちよつとやってみようか。」

碁盤が画面に映し出されました。

「僕も少し碁が打てるから、ここにも登録しているんだ。ここで相手を選んで、ほらね、相手がOKすると、こうやって始まるんだよ。先手は相手だね。」

泉は、小学生が相手だからか、くだけた口調で話しました。

早速、打ち合いが始まりましたが、相手は初心者らしく、とんでもないところに打ってきました。その上、大石を取られたところで、ばちつと消したみたいです。

泉は苦笑すると言いました。

「ここは最大手なんだけど、気に入らないと消しちゃうマナーの無い奴もいるんだ。何度も見ていけば、打ちたい相手が分かるようになるかもしれないけれど、相手の強さが分からないんだよね。」

それから、傍の空いているパソコンをさしました。

「まずは、マウスとキーボードに慣れないといけないね。ここに座って。マウスを動かしてみようか。」

ヒカルとあかりは、並んでパソコンの前に座り、クリックしたり、簡単な単語を打ち込んだりしました。

「ひらがなモードもあるけれど、大丈夫そうだね。ローマ字で。」

二人ともマウスの扱いにはすぐ慣れました。

「うん、そんなところで。やっぱり若い子は覚えが早いよね。そんなところで、とりあえず、ワールド囲碁ネットで一局打ってみるかい。慣れが一番だから。」

まずは登録だね。どうする？君は進藤ヒカル君だったね。じゃあ、ヒカルかい？」

ヒカルは、明子のメモを見せました。泉はそれを見て、言いました。「へえ、twinkleか。いいねえ。名前のヒカルにかけてるんだね。そちらのお友達が考えたのかな。」

泉は、そう言いながら、画面を指して説明を続けました。

「まず、この画面で登録、打ちこんでみて。…うん、そうそう、そこでこうしてね…」

設定が終わると、泉は言いました。

「とりあえず、適当に相手を選んでごらん。君より、強いかわいかわからないけれど、さつきみたいにならないようにきちんと終りまで打つことだけ約束してね。」

ヒカルはたまたま目についた相手を指名しました。
すぐに対局が始まりました。

わー。結構手ごたえのある奴にあたった気がする。いっちょ思いつきり打つちやうか。

そんなことを考えていると泉が言いました。

「Zeidaか。中学生か高校生かもしれないな。」

「どうしてですか？」

傍で見ていたあかりが聞きました。

「うん、ゲームやアニメ関連の名前つけるのって、そういう年代が多いと思うんだ。もちろん大人かもしれないけれどね。」

ヒカルのネット碁デビュー戦はあっけなく終わりました。相手が投了してきたからです。

結構面白かったのに、やりすぎちゃったかな。

ん？『プロの方ですか。』って、俺ローマ字はあんまりなあ。

「あかり、打ってくれる？」

あかりはあっさり引き受けてくれました。

「なんて？」

「小学生だって。」

「うん、『小学生です。』だね。」

「あれっ？」

『『ふざけるな。』だって。』

「じゃあ、お前は中学生かとか打ってよ。」

「うん。『あなたは中学生ですか。』」

『俺は院生だ。』だって。」

「へえ。じゃあ、もう一言。打つ手が楽しかったからまた打ちたいって書いてくれない。」

「もう、ヒカルったら、ちゃんとローマ字勉強してよね。これで最後だからねっ！」

ぶつぶつ言いながらあかりは書き込みました。

『あなたの打つ手は楽しかった。またお相手してください。』

「あれ、『お願いします』だって。」

ヒカルは泉に言いました。

「もう一局打ってもいいですか。」

物思いにふけていた泉は、ぼんやり、ああと頷きました。

次の相手はと、ヒカルが探していると、ヒカルにオフアーがありました。

「あつ、ヒカルに申し込んできた人がいるよ。」

また対局が始まりました。

ヒカルはすぐに相手が、並々ならない相手なのに気づきました。

白川先生ぐらい、もしかしたら先生より強いかも。

ヒカルは今度こそ、力の限り打ち込みました。

「進藤君はこういうところでツケてくるからね、厳しいよ。」

白川が良く言う言葉でした。

でも駄目だ。この人には、完全によまれてるよ。

「あー。負けた。」

ヒカルは、そう言って投了しました。

そう言いながら、ヒカルは、満足のため息をつきました。

俺、こんな碁が打ちたかつたんだよ。今、俺、すっげー力ついた気がするよ。

あれ、『君は本当に小学生?』だって?
って、あかりはもう打つてくれないんだな。仕方ない。

『YES』

ヒカルは、キーボードを探りながら、やっと、そう打ち込みました。
YESだけは覚えてて、良かったよ。

ボーっとして見えた泉がヒカルに向かって言いました。

「ヒカル君。君、強すぎないか。」

「えっ?俺、今、負けたのに。」

この人は何を言っているのだろう。

そう思いながらヒカルは答えました。

「高野。彼は、碁を初めて一年って言ってなかったか?」

「ああ、そう聞いてるけど。」

「あつ、正確には四年生の終りからだから、一年と二ヶ月くらいかなあ。」

ヒカルは言いました。

泉はネット碁の話はそっちのけで、ヒカルに聞きました。

「どんなふうにも、勉強してきたの?ヒカル君は。」

「碁のこと?初めは初心者囲碁教室に通って、打ち方分かったら、じいちゃんとも毎日何局も打って。それから今は、その教室の先生の弟子になってるんだけど。」

「ヒカルのおじいさんて、アマチュアでもかなり強い人だって、先生言ってたよね。」

あかりが付け足しました。

「先生の名前、教えてくれないか?」

「白川八段です。駅前の保健センターで囲碁教室やっている。」

「ヒカル君は院生じゃないんだよね。」

「ああ、はい。」

「ヒカル君で、そんなに強いのか？」

高野が良く分かっているように聞いてきました。

「多分な。強いよ。さっきの対局を見ていて、俺、しびれたよ。で、ヒカル君はプロになるのか。」

「中学生になってから考える。まだ家でもそういうことは話してないしね。そうだ。高野さん。お母さんたちには、内緒にしといて。プロのこと。」

「まづいの？」

「うーん。いろいろ考えたいことがあって。それで中学生になってから思ってるんだ。」

ヒカルは、曖昧に答えました。

「とにかく。ヒカル君の腕が分かったから、別のサイトを紹介するよ。」

泉は、そう言ってマウスを動かしました。

「ここなんだけれど。すごくエキサイティングな碁が打てると思うよ。ヒカル君ならね。」

23. まっすぐ、ルグル

zeldaこと、和谷はごろつとベッドに転がり、思いつきり声を出しました。

「わー、俺、悔しいかも。でも痺れた〜。」

こいつ、本当に小学生？プロが遊んでるのと違うか？

だって、小学生でまじこんだけ強いって。そんなの噂の塔矢くらいじゃないか？

これってまさか塔矢？そんなわけないよな。第一、塔矢にtwinkleはないよな。

もし院生だったら、俺が知ってる筈だ。関西の方かな。いや、院生のレベルじゃねえよ。

でも、楽しかったから俺とまた打ちたいっていったよな。こいつ。

それにしてもこの対局。俺の次に打ったのって、これってすげー対局じゃねえか。

こいつの相手は間違いなくプロだ。それもうちの師匠と腕変わんねーんじゃないの。

その相手に、小学生がここまでの碁が打てるのか。

俺との対局見てたんだ。だから聞いたんだよな。

本当に小学生かって。YESだってさ。

絶対、こいつもプロだよ。見つけてやる。こいつが誰か。

うちの師匠に言うのと、さっさとプロになれとかなんか言われるよな。

でもプロにならなきゃ、見つけれないか。

いや、もしこいつとプロ試験争ったら、まじやばくねえか。

そんなことよつか、こいつとまた打ちてえよ。

その和谷にtwinkleはないと言われた塔矢ですが、彼もまた大いなる悩みを抱えておりました。

僕の家がおかしい、変だ！

いつ頃からだろう。家の居心地が何となく悪くなってきたのは。アキラがそう感じ始めてから、少なくとももう半年は経っているでしょう。

お父さんとの朝の一局は変わらずに打っている。

そのお父さんに、特に変わったことは認められない。

お母さんは、優しく「行つてらっしゃい」と言つて、毎日学校へ送り出してくれる。いつも通りに。

お弁当だって、いつも美味しいのを作ってくれるし。

いや、そんなこととは違う。もつと別のことだ。それが何が、分からない。

強いて考えてみると、最近、お母さんが疲れているみたいじゃないか。

時々ためいきをついている。どつか悪いんじゃないか。

お父さんはそういうことには気が付かない人だ。そしてお母さんは我慢する人だ。

でも、そういうこと以上に、お母さんに普通にどうしたのかと聞けない雰囲気在家に充満しているんだ。

それが変なんだ。

こういう時、いったい誰を頼つたらいいのか、アキラには分かりませんでした。

もしおばあちゃんに連絡したら、どっちのおばあちゃんにしても、絶対大ごとになる。それは確かだ。

大ごとになるってどうなるのか、具体的にはアキラにはわかりませんでした。少なくともお母さんがますますため息をつきそうなことが起きると思えました。

市河さんは、いい人だけれど、こういう家の中の微妙さを相談するには、ちよつと。

なんだかんだで、アキラが、ため息をついているのを偶然聞いたのは、アキラのお友達で、早耳の、でも肝心なところは聞き逃すという芦原でした。

「おい、アキラ。どうしたんだい。ため息なんてついて。学校で嫌なことでもあったのかい。」

「ううん。違うよ。最近何か、お母さんが元気なさそうなんだ。」

芦原の気楽な口調にアキラもすいとそんな言葉が出てきました。

「へえ。」

最近緒方さんが先生のお宅へ足を運ばなくなったからかな。

そういえば、あの時、僕が言った言葉で、もしかや…。

「緒方さんも大変なのかな。」

「緒方さん？緒方さんがどうかしたの？」

「いや、なんでもないよ。塔矢先生はどうだい？」

「変わりないと思うけど。」

「そうか、そうか、うん。まあ、アキラが気にすることはないよ。大人の事情さ。ま、騒ぎになることもなかったわけだしね。」

最後の言葉は口の中で呟いたつもりでしたが、アキラには聞こえませんでした。

それって、何かあったのか？緒方さんに？何のこと？

でもそうだとしてもそれとお母さんに何か関係あるのか？

芦原のお蔭で、ますます訳が分からなくなって、もやもやが強まっています。アキラでした。

そして、アキラは見かけたのです。

公園で、明子とヒカルが親密そうに話をしていました。

あれって彼じゃないか？

名前は忘れていたけれど、特徴あるヘアスタイルは見覚えが。

お母さんと何を親しげに話しているのだろう？

でもお母さんは、話しながら深いため息をついている。

一体何を話しているのだろう。

アキラは頭がグルグルしてきました。

すぐに行って、話に加わればいい筈なのに、それもまたできませんでした。

もしかしておかしいのは僕なんじゃないだろうか。

アキラは、生真面目にも、そう思ったりしながら、結局そのまま、母親がヒカルと別れ、駅に向かうのを見送ったのでした。

アキラはその日、囲碁サロンで少しふさいでいました。

家に戻ると、明子はいつものように優しく「お帰りなさい」と、出迎えてくれました。

いつも通りだ。でもいつも通りって？ お母さんが普段どんな生活を送っているかなんて、僕、考えたこともなかったな。

アキラはヒカルが自分の母親と何を話していたのか、気になって仕方ありませんでした。

母親には、どうしても聞けなかったアキラは、ヒカルに聞こうと思いません。

今悩んでいることについては、そこが突破口の気がしたのです。

アキラに似つかわしくなく、うじうじしているうちに日は過ぎ、初夏の季節になっていました。

アキラは、ついに決心しました。

でも僕は、彼がどこに住んでいるか、知らない。名前も覚えてない。そこで碁サロンに着くと、アキラは、そろそろと市河に切り出しました。

「あのね、前に僕に傘を貸してくれた…」

「ああ、進藤君ね。」

市河はあっさりと言いました。

そうだった。進藤。そういう名前だった。

「この前、ちらつと、見かけたんだ。話す暇はなかったけど。」

「あら、そう。進藤君はねえ。確か去年の11月だったかしら。碁サロンに来てくれたのよ。」

「えっ？」

「なんでもあの囲碁教室が大人ばかりだから、子どもがいるところを教えるとか言ってたけれど。どうしたかしらね。また来てくれればいいのにな。」

「進藤がどこに住んでるか知ってますか？」

「あら、アキラ君。どうしたの。」

「うん。ちょっと、彼と話したいかな。」

へえ、市河は珍しいものを見るようにアキラを見つめました。

あの時、碁友達でなく、お友達って言ったけれど、本当にそうなるのかしら。

でもこれは。うん。よし。アキラ君がその気になるなんて。

「家は分からないけれど、たぶん、この近くの区立小学校だと思うのよ。あの囲碁教室にずっと通っていたらしいから、そこで、聞けば分かるんじゃない。家は教えてくれないでしょうけれど、学校は教えてくれるんじゃない。」

善は急げではありませんが、気のせくアキラは、その次の囲碁教室のある日、保健センターへ向かいました。

ここの先生って、確かお父さんの友達の森下先生のお弟子さんだ。

森下先生はすごく強いのに、なぜか、タイトルを取れないんだよね。

お父さんは、巡り合せとかって言ってたけれど。

アキラの父を行洋と呼び捨てにするのは森下だけでした。行洋も森下と呼び捨てにしていました。

でもいいな。碁を打つ仲間にそういう相手がいる。僕にもできるのかな？

プロになったらできる？

でもお父さんと森下先生はもつとずっと前からの碁を打つ同志なんだ。

そんなことをぼんやり考えて、教室が終わるのを待っていました。時間が来たらしく、受講生たちが教室から出てきました。

先生は、とアキラが目を追っていると、「あれっ、塔矢じゃないか？」という声が背後からしました。

丁度、教室から出てきたあかりは、ヒカルのその声を聞き、そこにいる子を眺めました。

これが塔矢君なんだ。明子おばさんに少し似てるかな。

2.4. 君に聞きたいことがある

アキラが自分に会いに来たとは思っていないヒカルは、あかりに向かって言いました。

「先生に言うことがあつてき。来たんだ。一緒に帰ろうぜ。待って。」

「うん。」

ヒカルが、教室に入ったのを見ながら、あかりはアキラを見ました。

アキラは、ヒカルが出て来るのを待っていました。

ヒカルがあかりに向かって言った言葉を自分に言った言葉だと脳内変換しているに違いありません。

アキラは、あかりの方を見向きもしませんでした。

会釈もなしで、全くの無視です。存在していないかのようにでした。実際のところ、今のアキラにとって、ヒカル以外は存在していないのでしたから。

あかりは明らかに気分を害しました。

明子お婆さんのことがあるから、我慢するけれどね。何か失礼よね。

でもこの子、何しに来たのかしら。先生に用があるのかな。

ヒカルが出て来るのを待ってるのよね。

ヒカルはすぐに出てきました。

あかりが何か言う前に、一直線に男らしくアキラは言いました。

「進藤。君に話があるんだ。聞きたいことがある。」

「急ぐのか。」

ヒカルは聞きました。

「うん。今すぐだ。」

「ヒカル。私、先に帰ろうか。」

あかりが、そつと言いました。

「構わねえよ。こいつ、別に二人だけで言ってねえもん。」

ヒカルはアキラを見ながら考えていました。

何が聞きたいのだろう。もしかして幽霊話を聞いたのか？
だとしても、なんで俺に話があるんだ？

それとも、囲碁教室の話か？まあ、いいや。

まあ、幽霊のことは、俺は話さねえよ。

「で、碁会所に行けばいいのか？」

「あそこはちよつと。どこか他の場所で。」

「長い話か？」

「君次第だよ。」

なんだ、こいつ？偉そうな言い方だな。

ま、いいか。そういう奴なんだなろうな。

逆行前の付き合いの名残がヒカルには残っているのかもしれない。
ん。

「じゃ。ともかく少し歩こうぜ。」

そう言つて、公園に向かって三人で歩きながら、ヒカルは聞きまし
た。

「で？何が聞きたいんだ。」

「少し前に、君が僕の母と歩いているのを見たんだ。」

この間おばさんが、ヒカルに登録名を考えてくれた時ね。とあかり
は思いました。

ヒカルの方は、のんびり答えました。

「ああ、そんなことあったな。で、お前のお母さん、元気にしてるか？」

その言い方が何となく気に障ったアキラでした。

芦原さんと同じような反応じゃないか。まったく。

それは置いておいて、アキラはとにかく、聞きたいことを尋ねまし
た。

「君は、僕の母と知り合いなの？」

「昔からの知り合いじゃねえよ。お前に傘を貸した後、ちよつとして
からだだったかな。駅前で偶然出会ったんだ。俺がああの囲碁教室のビ
ラを落として、それが風で飛んで行って、ちよつと歩いていたお前
のお母さんの足元に落ちたんだ。」

アキラは特に言葉を挟むふうでもなく聞いていました。

「でもって、それを拾ってくれてさ、碁を打つのかって言われて、碁サロンでもらった話をしたら、お前のお母さんだっていうじゃないか。そんなでもって、お互い驚いて、偶然であるなっていうんで、ちよつとベンチに腰かけて話してたら、俺んちのお母さんが買い物帰りに通りかかってさ。」

ヒカルは一息入れました。

「で、俺がお前に店でお茶をご馳走になったって言ったたら、家に来いって、お前のお母さんを家に連れていったんだよ。お返しっていうことかな。」

アキラは話の成り行きに少し驚きながら聞き入っていました。

「でもって、家でさ、話すうちに何か俺のお母さんと、お前のお母さんが二人で盛り上がってさ。すんごく仲良くなって、それから、時々家にお喋り来るんだぜ。お前のお母さん。」

この間もおすそ分けのお菓子持ってきてくれて、その帰りに、俺と出会って喋りしてたんだ。」

アキラは話の接ぎ穂がなくて、しばらく黙ったままでした。

それから聞きたいことを訊ねました。

「それで、君はあの時僕の母と一体何を話していたんだ。僕は、その話の中身を知りたいんだ。」

ヒカルは困りました。

「えつと、俺って何を話してたんだっけ。」

そう言ってあかりの方を向きました。

「ヒカル。ネット碁の話じゃなかった。」

「そうだった。俺がネット碁をやることになったって話したんだ。」アキラはヒカルの大雑把な話し方が気に入りませんでした。

「君はだいたい長い間、僕の母と話していた。そんな簡単な話じゃなかったと思う。」

その言い方にヒカルはむすつとしました。

俺が何か隠してるって言うのか。大体、こいつ、いつから見えてんだ？

もしかしてストーカーか。母親の？

ヒカルは黙ったまま、アキラを睨みつけました。

あかりが、ヒカルに向かって話しました。

「ヒカル。言ってたじゃないの。あの時。ネット碁するなら、パソコンを買ってもらえるのかって、明子おばさんが聞いたから。だからヒカルは高野さんのこと、話したんだよ。」

アキラはやつと、あかりに目を向けました。

「高野さんって誰？それと一体君は誰なの？僕は今、進藤と話してるんだ。部外者が余計な口を挟まないでくれないか。」

部外者が口を挟むですって。許せないわ。

あかりは、無視されてきたことから始まって、そのアキラの言葉で、完全に頭が沸騰してしまいました。滅多にあることじゃありません。「あのね。あの時、私も一緒にいたんだよ。ヒカルと明子おばさんと三人で話をしてたのよ。」

途中から一緒になったというのは省きました。

「記憶がない。」

アキラは言下にいいました。

ヒカルにとつてありがたいことに、あかりがまくしたてました。

「前に高野さんの子どもが怪我しそうになった時、ヒカルが助けたの。それでね、高野さんがお礼を言い、ヒカルのうちに来た時、小学生にパソコンはどうかっていう話になって。ネット碁をやるだけなら、知り合いの人が近くにいるから、頼んでくれるって言ったのよ。その話をヒカルはおばさんに話したの。そしたら、登録名があるわねっていう話になったのよ。」

あかりの話も舌足らずでわかりにくかったのですが、ヒカルが話すよりは、ずっとまじだったでしょう。

「何で、うちの母が、そんなにネット碁の話に興味を持つんだ。母は、碁をやらないのに。」

幸か不幸か、アキラの関心は碁の話に移りました。

「やるわよ。あなたのお母さんだつて。いいじゃないの。おばさんが碁をやつて、何が悪いの。」

あかりには、前に聞いた話がよみがえっていました。

『夫は、打つ必要はないっていったのよね。私は碁がどんなものかちよつと知りたかつただけなのに。』

おばさん、かわいいそうだわ。父親も父親なら、子どもも子どもね。

「僕の母は碁が打てない。」

アキラは当然のように、確信に満ちた声で言いました。

「打てるわよ。ヒカルが教えたんだから。」

アキラは驚いて口をあめぐりあけました。それからヒカルに言いました。

「初心者の君が教えただつて？ そんなことをしたら、ひどい碁を打つようになるじゃないか。」

あかりが何か言う前に、今度はすばやくヒカルが言いました。

「確かにな。でもな、お前のお母さんは、別に碁打ちになろうとか、強くなりたいたいか、そういうんじゃないんだ。自分の周りで、みんなが熱心にやっている碁って、どんなものかちよつと分かりたいって、そう思っただけなんだ。」

そうしたら、お前のお父さんが、碁を打つ必要はないって言ったんだよ。でも知りたい。そう思った時、俺と出会って、碁の教室のチラシを見たんだ。

それで、おばさんは、自分は通えないから、俺に代わりにちよつと通つて、教わつたことを教えてくれって、ちよこつとやり方を知りたいんだって、言つたんだよ。」

あかりは、かつかしなから言い足しました。

「おばさん、今はかなり打てるわよ。私もこれまで打てなかったけど、今は時々おばさんと打つたりもするのよ。いいじゃないの。ひどい碁だつて。」

普通の人はね、たいして打てなくても、お互いにいろいろ教え合つて遊んで楽しむんだつて。阿古田さんが言つてたわ。今はあまりそういう場所がなくなつたから教室に通つたりするけれど。」

ヒカルは阿古田が、そんなことを言ったと聞いて驚きました。
へえ、あの阿古田さんが。つて、それより、あかりがすげえよな。
あの阿古田さんにそんなこと言わせたのかよ。

25. 信じる者は、救われる

「ちよつと座ろうぜ。」

公園のベンチに三人で座りました。

そこで、ヒカルはアキラに聞きました。

「お前、何で自分のお母さんに聞かないんだ。俺たちじゃなくて。」

アキラは黙りました。痛いところを突かれたからです。

ヒカルはふと思いました。

塔矢の奴、もしかして幽霊について知らなくても、何か感じてるんじゃないか。

「お前さ。もしかして、お母さんが元気がないとか、そういうこと気にしてんのか?」

アキラは、はつとして言いました。

「君はそう思ったの?」

「お前、結局お母さんから何も聞いてねえのか? じゃあ、緒方さんという人にも聞いてないのか?」

「緒方さん? 何を?」

ヒカルの口から緒方の名前が出て、アキラは緊張しました。

この役目は俺がするのか? ちよつと違うよな。

でもヒカルは決めました。

決めたからには、早速、行動に移しました。

それでも前置きは、しつかり話しました。

「あのな。俺はお前の家のことは何も知らない。お前の家に行ったこともない。」

これはお前のお母さんが言ったことなんだぞ。

おぼさんは、俺以外の誰にも言っていない筈だ。そして俺に話した理由は、たぶん。お前の代わりだったんだろうな。年が一緒だから。」

アキラはヒカルを見つめました。

「お前のうちに幽霊が取りついてる碁盤があるんだそうだ。」

その幽霊を見ることができるのはお前のお母さんだけなんだって。その幽霊は碁盤に取りついていてるだけあって、碁を打ちたがるんだっ

て。

お前のお父さんはそれを信じなかったんで、おばさんは緒方さんという人を相手に、幽霊の言うとおり、石を置いて、碁を打ったんで。そしたらその幽霊がすごく強くて。

その対局をたまたま見たお前のお父さんも対局をしたいって言ったんだ。

そうやって、時々、緒方さんとお前のお父さんの碁の相手をしていたんで、おばさんは、自分で打ちたくなかったんで。」「

その話を聞いて、アキラは嘘つくなと叫びたくなりました。

あかりは逆に、納得したのです。

そうなんだ。おばさんの話に何か足りないものがあったのよね。でもこれで、すつきり繋がったわ。

「おばさんは、お前のお父さんにそう言ったんだって。そうしたら、お前のお父さんは、おばさんに石を置くだけでいい。碁を打つ必要はないって言ったんだ。その上、幽霊のことをお前に言っただけじゃないって言ったんだよ。お前に隠し事をする羽目になって、お前のお母さんは、悩んだんだと思うぜ。」

そこまででした。

アキラにしてみれば、幽霊を見れる母親だけでも異常なのに、さらに尊敬する父が狭量な人物だと言われている気がしたのです。

アキラは、すくっと立ち上がって叫びました。

「そんなウソを話すのか。君は。幽霊なんて。」

やっぱ、そうなるよな。

ヒカルはため息をつきつつ、続けました。

「だから、俺はおばさんが言ったことをそのまま言ったただけだ。俺は幽霊を見ていない。お前の家に行ったこともない。碁盤があるかも知らない。

お前のお父さんにも緒方さんという人にも会ったことはない。でも信じてるぜ。お前のお母さんは、嘘をつく人じゃないって。」

アキラは真っ赤になって怒った口調で言いました。

「もちろん、僕の母は嘘をつかないよ。僕の父だって、そんな君のいうような人じゃないよ。だから、それは君のくだらない作り話だ。」

ヒカルは、やっぱなど、無然としましたが、言いました。

「俺が言ったわけじゃないぞ。俺は伝えただけだ。だけど、そう思うんなら勝手に思えよな。」

それより俺はお前に聞きたいことがあるんだ。お前自身のこと。だから碁サロンへ行こうと思っていたんだ。どうしても聞きたいんだ。」

しかし、アキラは立ち上がり、冷たく言い放ちました。

「君は嘘つきだ。君たちと話をすることはもうない。口も利きたくない。顔も見たくない。碁サロンにも二度と来てもらいたくない。」

ヒカルはアキラが怒って立ち去るのを、諦め気味に眺めていました。

あかりもその後ろ姿を眺めながら、言いました。

「ヒカル。私、幽霊の話、初めて聞いたよ。私は信じるよ。」

「うん。おばさんに、一番初めに会った時、俺のお母さんが通りかかる前にさ。幽霊って信じる？って聞かれたんだよ。で、俺はおばさんは見たことあるの、俺見てみたいとか言ったと思う。」

そうしたら、碁盤に幽霊がついていて、見えるんだって。でも自分にしか見えなくてって、悩んでいたんだ。だから、俺はおばさんはすごい能力を持ってるんだって、素直に言った。

あの時、おばさんはさ、自分の子どもは信じるかなって、思ったんだよ。それで、同じ年だから、試しに俺にちよつと聞いたんだよ。

だからおばさんは悩みを話したんだ。俺だけに。でも他の人には話せなかったんだよ。幽霊なんているわけないって思うだろうか。ら。」

「そうなんだ。そうだよな。おばさん、信じられないこと人に言ったりする人じゃないよね。そうかあ。おばさんはきつと靈感がすごいんだね。」

「ああ、とにかくこれで、塔矢が家でおばさんに聞けば、おばさんも

すつきりするんじゃないか。」

「でもあの塔矢君が信じると思う？」

「さあ、幽霊と一局打てば信じるんじゃないやねえの。あいつのお父さんだって、それで信じたんだろ。」

そこで、話は別の方へ飛びました。

「ヒカル。さつき、先生に何話しに行ったの？」

「ああ。先生の奥さんが、今留守なんだよ。それで俺が行く時、夕飯の弁当を持っていきますっていう伝言。」

「いいなあ。ヒカルは。私も弟子になりたいな。」

「俺が弟子にしてやるよ。」

「ええっ？ヒカルの弟子。いいよ。私は白川先生の弟子になりたいんだから。」

最近ね、阿古田さんが弟子にしてやるってうるさいんだよ。私は、断ってるのよ。もっと強くなったら、考えるっていつてね。」

ヒカルの中で、さつき阿古田に持った好印象が消えていきました。

「あかり、教室。やめろ。」

「何言ってるの？ヒカル。私、面白いんだもの。止めないよ。」

26. 広がる輪

「もうすぐ夏休みだね。お休みはどう過ごすの？」

白川は、ヒカルの母親お手製の弁当を美味しそうに食べながら聞きました。

「はい。夏休みはネット碁と英語の特訓をすることになってます。」

ヒカルは、言葉遣いに気を付けながら、答えました。

前に、白川が言ったのです。

「進藤君は、いずれプロになるんだから。いや、なるべきだよ。その時、公に話すときは、『俺』はダメ。仲間内や、非公式では構わないけれどね。年齢に関係なく、『私』と言わなくちゃならない。」

もちろん言わない人もいるよ。でも仕事に就くと、進藤君のお父さんも会社じゃ、『私』と言っている筈だから。僕もそれほど言葉遣いがいいというわけじゃないけれどね。」

白川は、十段戦は、決勝トーナメントで、緒方と決勝を争って惜敗して、挑戦権を取り逃がしました。しかし天元戦は準決勝までコマを進めていました。碁聖戦は残念ながら準決勝で敗退。でもどれもリーグ残留を果たしていました。しかも次の次の名人戦の予選も順調に勝ち進んでいました。

今や彼は森下門下の星なのです。勢い、取材も増えました。言葉の問題は白川自身の実感があるので、ヒカルにも、その大切さが伝わったのでした。

「美味しかったよ。お母さんによくお礼を伝えてね。」

お茶を飲みながら白川は言いました。

「うん。」

あつという間にくだけた受け答えのヒカルです。白川も別に気にせず、続けました。

「ネット碁のことだけれど、君は本当に良い人に巡り会えるね。それもまさに運の一つだね。」

それから白川は心の中で続けました。

その運のいい君を独占している僕も、本当に運がいいよ。

ヒカルが、泉のオフィスに通いだしてから、かれこれ三か月弱になります。

白川の話によると、泉という人はアマチュアではかなりの腕の持ち主らしいのです。

「高校生本因坊になったこともあるし。学生本因坊と学生名人を取ったこともある筈だよ。プロになるのは断念した人だけれど、なかなか打てる人だね。」

その泉がエキサイティングな碁が打てると紹介してくれたサイトは、できたてのものでした。

「有料なんだよ。でも実は仕事の関係で知っている人がいるんだ。その人と打ってもらおうといいと思ってね。」

最初の日は、たまたまその人はいませんでした。でも泉が連絡を取ってくれたらしく、時間を決めて、そこで打てるようにしてくれました。

「相手には君の素性は内緒にしてる、だから君にも相手の素性は内緒だよ。当分の間はね。」と泉はいたずらっぽく言いました。

ヒカルの打った棋譜を見た白川は言いました。

「これはもしかして中国のプロなのじゃないかなあ。」

zeidaの次に打った人とはまた違う手を打ってくる人でしたが、しびれる強さは本物でした。

「先生。でも俺、いつかこの人にも追いつきたいと思う。一局打つたびに、ちよつとづつだけど、近づける気がするんだ。実際は、まだまただけれど。」

白川は笑って頷きました。

「たぶん、近づけるよ。君なら遠くない将来にね。僕はね。進藤君と打ったり、検討したりすると、すごい力がもらえる気がする。だから君を森下研究会に連れて行きたいんだ。君の独創性で、あの研究会を活性化するんだよ。」

ヒカルには、逆行前の知識があるのです。要するに佐為と培った三

年先の技量と、もともと持っている囲碁センスが相まって、興味深い手に繋がっているということでしょうか。

ヒカルは、あかりにせっつかれて、四月のひと月をかけて、何とかローマ字でチャットをこなせるようになりました。

ローマ字って、読むほうが大変。書くのは意外と楽だ。

チャットは、キーを打てば日本語が出てくるので、意外と早く慣れたのです。

zeidaとは、そのひと月で、8回以上は打ったのですが、zeidaは、もっと打ちたいと申し入れてきました。

「zeidaはね、早朝に一局打ってくれていったんだ。俺、パソコン持ってないし。そうしたらね。泉さんが、パソコンを貸してくれるっていったんだ。それで、うちに来てくれて、お母さんを説得して、ネットができるようにしてくれて。」

今、早朝の一局を毎日打ってるよ。zeidaってどんどん力付けて来てるから、油断できないよ。すごく勉強してくるんだ。何となく俺と相性がいい気がするんだ。でもチャットじゃいろいろ検討できないしね。」

そういうヒカルに、白川は言いました。

「院生だつて言ったね。そのzeidaに僕は、ちよつと心当たりがあるんだけど。確かめて君に紹介するよ。」

「えっ？本当ですか。会いたいな。」

ヒカルは嬉しそうに言いました。

「泉さんには、本当に感謝の一言だね。何かお礼をしたの？」

「うん。お礼っていうか、泉さんは、俺と打つだけでいいって言うんだ。泉さんも仕事があるからしよつちゆうじやないけれど、時々打ってる。あれを指導碁って言うのかな？俺が先生に教わってたみたいな感じ。」

「あれだけ打てる人だと、それなりに勉強になるね。」

「勉強って言えばさ、泉さんのところで俺とあかり、英語の特訓受けるんだ。」

泉の紹介した有料サイトは、英語しか使えないのです。基本、チャットはしないということになってはいるのですが、それでも時々相手が話しかけてくるときには、近くににいる人が手伝ってくれているのでした。

「中学生になるまでに、英語でチャットができるように頑張れば、中学生になってから、自分のパソコンを持つてもいいって、お母さんに言われたから。今あかりと頑張ってるんだ。で、夏休みの宿題もあるんだよ。」

ヒカルとあかりは中学生の教科書を勉強していました。泉がそれが一番だというのでした。

さて、アキラですが、ヒカルの言葉に腹を立てて、家に戻りましたが、それ以来注意深く母親の様子を見ていました。

明子は、アキラのいない時にしか、ネット碁をしませんし、行洋とも月に一度くらいしか打たなくなっていました。ですから、明子が碁を打つとかそういうことをアキラが目にすることは、全くありませんでした。しかもパソコンを置いてある納戸をアキラが覗くなどというところはありませんでした。

やつぱり、彼は嘘をついたんだ。でもなぜ嘘をつくんだ？

そう思うと、腹立たしく、でも何となく謎があるような気がしてくるのでした。

そんな思いが渦を巻いていたので、芦原に今年のプロ試験は受けないのかと問われた時、思い切つて受けようかと思いはじめました。

うじうじしていてもしょうがない。何かした方がいいかもしれない。プロになれば、何かが始まるかもしれない。

十段の挑戦権を白川と争つて手にした緒方は、残念ながら師匠との戦いに敗れ、結局十段位を取ることはできませんでした。それでも自分に力が湧いていることを感じていました。

ずっと続けてきたサイとの対局の成果が表れてきたに違いない。それにしてもネットの世界というのは。

緒方は、ネットに現れた面白い人物に興味を抱きました。

小学生だという、その人物に対局を申し込み、実に刺激的な対局をしたのです。

いずれ、プロになったら、強敵になる奴だ。だが、本当に小学生などというものはあるだろうか。

若手のプロかもしれん。JPNだから日本なのは間違いないだろうが。

そう思っていた時に、偶然その対局者、twinkleの情報を手に入れたのでした。

その日、たまたま行洋を車で家に送ってきた緒方は、明子と話す機会を持ちました。

「アキラ君は、まだ何も気づいていないのですか。」

「ええ、あの子がプロになれば、きっと夫もいいというのじゃないかという気がしてきたのですけれどね。」

「そのお茶は、私が運びますよ。」

緒方がお茶の盆を持ち、明子はふすまを開けました。

「ああ、ありがとう。緒方君は一局打つかね。」

「今日は夕方、畑中君の行っている研究会に誘われてまして。」

「そうか。」

行洋得意の「そうか」は、健在でした。

「アキラ君は、今年もプロ試験は受けないのですか。」

「その決断はアキラに任せているよ。自分が納得して、プロの階段を登らなければ、その先をやっていけないからね。」

「ところで、先生はサイと近頃打たれていますか?」

「月に一度ぐらいは、明子にお願いしているよ。緒方君はネット碁で打っているそうだね。」

「はい。月に1、2度。先だつて、やっとサイに勝てました。ネットは相手の顔が見えないので、やりにくいという人がいましたが、少なくともサイと打つ時はネット碁の方がいいですよ。サイの表情を見ることはできないのですから、私も表情を見せたくないです。先生もい

かがですか。」

「私は遠慮するよ。」

行洋はちよつと口の端に笑いを浮かべました。

気持がすべて顔に出るといふのは、緒方君の最大の欠点かもしれないな。

愛嬌とばかりは言っていられない。

「そうですね。でもネット碁もなかなかいいですよ。私は、最近ちよつと面白い人物を見つけましたよ。プロじゃないと言っていますが、もしかしたら、誰か若手プロかもしれないとも思える棋力の持ち主ですよ。なかなか興味深い手を打ってくるので、会って、いろいろ話してみたいと思っていますのです。」

「ほう、ネット碁というのは、名前は分からないのかね。」

「はあ、一柳先生などはそのまま、ichiryuと名乗っておられますが、好きに名前を付けられるのです。苗字ではなく下の名前だけとか、ニックネームとか。その人物もニックネームでしょう。」

そう言いながら、緒方は自分が打った一局を並べて見せました。

行洋は興味深そうに、それを見つめました。

「なるほど。ふむ。若手にもこういう碁を打つものが出てきているのか。」

「いや、分かりませんが。もしかして女性かもしれません。なんせ、twinkleなんて名前をつけていますからねえ。」

「まあ、twinkleですって。」

横でお茶菓子を用意していた明子は、思わず、声を出してしまいました。明子らしからぬ失態です。

緒方は、その声に、すぐに飛びつきました。

何しろ囲碁幽霊が見れる人間なのでから、twinkleを知っているもおおかしくはないと感じたのです。

「奥さまはご存じなのですか。この人物を。」

明子は、曖昧に答えました。

第一には、ヒカルに聞かなければ、答えられない気がしたのです。

それに、ヒカルたちとの交流は、自分のものだけにしておきたかったのです。

「ええ、そうねえ。そう名乗りそうな人を知ってはいるけれど。そんなにお強いんですの？」

「プロになる力は十分ある人物だと思いますよ。もうプロかもしれないが。」

「私の知っている方の息子さんがネット碁をそういう名前で打っているかもしれないけれど、でも…。」

緒方は身を乗り出しました。

「その人はプロじゃないのですか？」

「あ、ええ。その方、まだ小学生ですよ。」

緒方の目が光りました。

小学生だと。むむ。

「教えてください。どうしても知りたいのです。」

明子は思わず、身を引き加減にして答えました。

「あ、はいはい。でもちよつと、ご連絡してからでないと、確かかわかりませんもの。緒方さんが言われている方と同じ方なのか。」

「そうですね。では連絡してくださいませね。私はぜひ、会いたいです。電話をまっていますから。」

緒方は、執着心むき出しで、明子に何度も念を押して、帰りました。

明子は溜息をつきつつ、承諾したのです。

緒方にはいろいろ手伝わってもらっている弱みもありましたから。

27. 電光石火で石化する

緒方が念を押しした時には、一切口を挟まなかった行洋ですが、緒方が帰ると、おもむろに明子に切り出しました。

「明子。今緒方君と約束した人のことだが、どういう知り合いか教えてくれないか。人に言えないような訳があるのか。」

「いえ、そうではありませんのよ。でも大人じゃありませんのよ。勝手に紹介などできませんでしょ。彼が緒方さんに会いたいと言うようでしたら、ご両親にご了解をいただいてから、お引き合わせしたいと思いますわ。」

碁に関しては、絶対的に行洋が主導権を握っていました。というか惚れた弱みとでも申しましようか、明子は、結局、夫にヒカルの話をする羽目になりました。

あるいは結婚十数年の付き合いの中で、行洋は行洋なりに、妻に対する操縦術をしつかり身につけてきたのかもしれない。

もし行洋が囲碁棋士以外の職業を選ぶとしたら、取り調べ専門の刑事があっているかもしれません。自白率百パーセントの異能の刑事になれたことでしょう。

明子もすべて白状してして、すつきりでしょうか。

とにかく何もかも自分の知りたいことをすべて事細かに聞き出した後、行洋は言いました。

「森下はそういう子がいることを知っているのだろうか。」

「いいえ。何でも弟子をとる余裕がないとかで、白川さんが弟子にされたんですって。中学生にでもなったら、森下さんに紹介したいと言われたとか。進藤君は、本当に白川さんとかしか打つてこなかったから、ネット碁でいろいろな人と打ちたいと言っていたわ。」

1年半ほどでこれだけの碁を打てるようになった子ども。正直アキラより上手かもしれない。

「その進藤君とやらは、プロになるつもりはないのかな。」

「中学生になつたらって言っていた気がしますわ。あのお母さんは、小学生がプロ試験を受けると聞いたたら、卒倒されるかもしれませんも

のね。進藤君はそういうことが分かっているのじゃないかしら。」

聞くだけのことを聞くと、行洋の行動は実に素早いものでした。

翌日、棋院で白川を捕まえたのです。今日、白川が棋院にいるということも、チエツク済みでした。

「白川君、ちよつと話をする時間はあるかね。」

白川は非常に驚きました。塔矢先生が私に一体何の用だろうか。まだ先生の挑戦者にはなっていない。リーグ戦で、弟子の緒方さんの盤外戦でもやるつもりなのだろうか。いや、そういうことはしないだろう。

行洋は、白川を事務室に伴いました。

「塔矢先生。そちらのテーブルに碁盤を用意しておきましたから。」

事務室の職員は、あらかじめ行洋に言われていたようです。周到でした。

「白川君。まあ座って、ちよつとこの棋譜を見てもらいたいのだよ。」

棋譜？もしかして私の棋譜に興味か。

と思った白川でしたが、行洋の置いた棋譜を見て思いました。

なるほど、そうか。進藤君か。塔矢さんの息子さんや奥さんと知り合いと言っていたから、関心持ったんだ。

「進藤君のネット碁の棋譜ですね。」

「君はこの対局をどう思っているかね。」

「この対局で、彼は伸びましたよ。」

それから白川は思いました。

塔矢先生は、こんなにも押しが強い人だったんだ。

もしタイトル戦で当たっていたら、それだけで負けていたかも。

ぼくも見習わねば。ちよつと攻めてみるか。

「相手の方は緒方さんだと思うのですが、いかがでしょう。」

「ほう、分かったかね。」

「ええ、最近、緒方さんとも、よく対局するようになりましたので。」

行洋は軽く頷いただけで、それには答えず、言いました。

「白川君。進藤君に会わせてくれないだろうか。」

来た〜つと、白川は思いました。

直球じゃないか。

「森下は、進藤君に会ったことはあるのか？」

「いえ。」

「では、進藤君は、純粹に君の弟子なわけだ。師匠の君に是非お願いしたいのだが、だめかね。」

「いえ、そんなことはありませんよ。」

「ありがとう。ところで、君はこの後、何か用事があるかね。」

「いえ、今日は家に戻るだけです。」

「それは良かった。」

その時です。職員が覗いて、言いました。

「先生。頼んでいたタクシーが来ました。」

「ああ、ありがとう。では、白川君、行こうか。」

あつという間に、白川はタクシーに連れ込まれたのです。

進藤君の紹介料ということで、どこかで食事でもおごつてくれると
いうのだろうか。

いやいやそんなことはないだろう。などと、のんきなことを考えて
いる場合ではありませんでした。

「進藤君の家は、どこかね。」

「葉瀬三丁目ですが。あの一。もしかして今から進藤君の家に行くお
つもりですか。」

いくらなんでもそれはないだろうと、希望的観測を入れつつ、白川
は答えました。

しかし、行洋は、タクシーの運転手に言いました。

「とりあえず、葉瀬三丁目に向かってくれませんか。近くまで来たら
また。」

「はい。」

運転手は車を出しました。

白川は慌てました。

「塔矢先生。連絡もなしにいきなり行くおつもりですか。」

「君は携帯電話を持っているかね。」

「はい。その程度は。」

「良かった。私は持たないのでね。それで、ちょっと連絡を入れておいてくれないかね。」

余りに当然に、堂々と言うので、白川は毒気を抜かれた気持でした。

行洋が聞いているところで、電話を入れるわけです。

やれやれ、何と行ったものか。

いや、これは塔矢先生に負けるわけにはいかない。

「もしもし、ああ、進藤さん。はい、白川ですが。これからちよつとお宅へ伺いたいのですが、構いませんか。」

電話を入れ終わって、間もなく、碁サロンのある駅前を通り過ぎました。

白川は、運転手に場所を伝えました。

ものの五分もしないうちに、車はヒカルの家に着きました。

「あれ、先生？どこで電話をしたの？早すぎない？」

インタホンの音に出てきたヒカルは言いました。

白川が言葉を発する間もなく、行洋が言葉をかけました。

「君が進藤君かね。」

「はい？」

ヒカルは白川とともに降り立った着物の人物に目をやりました。

誰だろう？

白川は最悪だと思いつつ言いました。

「塔矢君のお父さんだよ。塔矢先生。」

ヒカルは目を白黒させてしまいました。事情が呑み込めなかったのです。

「ヒカル。早く入っていただきなさい。」

美津子が家の中から声をかけました。

玄関で、美津子は驚きました。

一緒にいたあかりもびつくりです。

これが塔矢君のお父さん？ 明子おばさんのだんなさんよね。
さて、とりあえず、美津子は落ち着きを取り戻し、言いました。
「どうぞ、リビングの方へ。お話はそこで。」

28. あの妻にしてこの夫

さて、行洋と白川、ヒカルとあかり、それにお茶を運んできた美津子との初顔合わせです。

しばし沈黙が支配した後、勿論この場を取り仕切ったのは行洋でした。行洋、渾身の四面打ちです。

「いつも妻の明子がお世話になっているようで、ありがたく思っております。」

おもむろに如才なく切り出しました。

「いえ、いえ。私こそ素敵な方とお近づきになれて喜んでおりますわ。」

美津子は、そう言いながら、つぶさに行洋を観察しました。

なるほど、明子さんが一目ぼれしたのも分からなくないわ。なかなか渋いわ。

「君が進藤君だね。今日は突然に訪ねてしまって、申し訳ない。前にアキラに傘を貸してくれたと聞いているがありがとう。今日はお礼に来たわけではないのだが、実は君の打つ碁に興味があつてね。ぜひ君に会ってみたくなったので、白川君に無理を言つて連れてきてもらったんだが、迷惑だったかね。」

「いえ、全然。先生はすごい碁を打っている人だし、会えるなんて思いもしなかつたですけど。お会いできてとっても嬉しいです。」

ヒカルは行洋に見えないように白川にそつとVサインを送りました。

白川に仕込まれていた日頃の訓練がものを言っていることを示したのです。白川はそれを見てホツとしました。

うん。進藤君は大丈夫そうだ。塔矢先生に押されていない。互角じゃないか。良かった良かった。

行洋はあかりのことも見逃しませんでした。すべての陣形に目を配っているのです。

「君は？」

「ヒカルの幼馴染のおともだちで藤崎あかりちゃんていうのです。彼女も碁を楽しんでますの。」

美津子も囲碁の周辺については明子に感化されていましたし、この辺りの言い方を心得てきているようでした。

行洋はおもむろに頷きました。

「そうか。君が。明子に聞いているよ。明子の碁の相手をしてくれているそうで、ありがたく思っているよ。あかり君と打つのはとても楽しくてためになると明子が言っていた。」

明子が、そんなことを言ったかは不明ですが、あかりは行洋のその言葉に一遍で参ってしまいました。

すてきだよ。このおじさん。明子おばさんもいい人だし、あの息子だけサイテーね。

そこで、あかりは物怖じせずに聞きました。

「先生は、本当に、おばさんに碁を打つ必要はないって言ったんですか。」

こんな素敵なおじさんが、言ったんだろうか。

あかりの最大の疑問でした。

「うむ。」

明子から何もかも聞き出していた行洋でしたが、あかりが幽霊のことを知っていることだけは知りませんでした。

それが、この場ではよかったです。

「実はね。私は碁を職業としてから妻には随分負担をかけてきたと思っただけ。妻が気苦労をしていると思ってきた。だから妻が碁を打ちたいと言った時、それが妻の義務感からきているのだと、誤解してしまっただけ。今は妻が碁を楽しんでくれていることが分かって、大変喜んでるのだ。」

あの時は本当に妻には申し訳なかったが、私の誤解のおかげで、こんなに素晴らしい人たちと知り合いになれたことは実に喜ばしい。あなた方には本当に感謝していますよ。」

さすが長年、後援会やらスポンサーを籠絡してきた行洋の社交術です。

この辺りの振る舞いは、白川にもヒカルにも大変勉強になったに違いないありません。

まあ、ということとは、明子さん、ご主人と仲直りできたのね。良かったわ。人前では愛想が良いけど、妻には説明しなくてもツアーカードと思うのが男の悪い癖なのよね。正夫さんもそういうことあるものねえ。

美津子の行洋に対する好感度は上昇し続けました。

美津子が残念そうに町内会の用事でこれから出かけなければならぬのですがと言うと、ヒカルが、白川先生とあかりがいるから大丈夫だからと言いました。

あかりは大丈夫でしょうが、白川はあまり大丈夫そうには見えませんでした。

結局その場で、行洋は、予定通りヒカルと対局することが出来ました。

あかりと白川が見ている中で、その対局は始まりました。

ヒカルは当然のようにコミ五目半でと申し入れました。

ネット碁で鍛えられてきたヒカルは、かなりの力量になっていました。

そんなヒカルの打ち筋を目にしながら、アキラとは二子置で打っていると言わなくてよかったと行洋は思いました。行洋は、打つ手を休め、碁盤を眺めたまま、じっと思いを馳せていました。

あの棋譜も、かなりの優れものだったが。白川君があの一局でかなり力をつけたと言っていたが、今の力はそれ以上だ。あれはかなり前のものなのではないか。緒方君は、明らかに私を意識してあの棋譜を選んだに違いない。彼のせめてもの盤外戦ということかな。とにかく緒方君が動き出す前に、すぐに手を打って正解だった。

ヒカルは不審に思いました。

なんで先生、こんなところで長考してるんだろう。ここに何かあるんだろうか？

それは白川にも疑問でした。

もしかしたら、ここで一気にその先の先まで見通しているっていうことなのだろうか。そういう碁を打つ人なのか？

「そうか、うむ。なるほど。」

行洋は一人納得した風でつぶやくと、現実に戻ったようです。やっぱ今のところに何か鍵があったのか？

疑心暗鬼のまま、やがてヒカルは投了することとなりました。

「ありません。」

行洋は満足そうに言いました。

「楽しかったよ。君の打つ碁は実に興味深い。白川君は、いつもこういう進藤君と打ってきたんだねえ。羨ましいことだ。いや、君がここまで導いたのか。」

白川は、あまりつまらない盤外戦に興味など抱かない、穏やかで率直な人間でした。

緒方のような狷介さは、全く持ち合わせていませんでした。

「進藤君の碁の感性は独特です。その持っている本質を伸ばすのに、私が少しは役に立てているなら、嬉しいですが、むしろ私がいろいろ刺激を受けていますよ。」

その言葉を聞きながら行洋は自分のことは柵に上げて思ったものです。

森下は強引で短気だから、白川君はきつと苦労しているだろうな。できれば緒方君と白川君を交換したいものだね。森下と交渉してみるか。そうすれば進藤君も私の元にくることになる。

ま、それはできない冗談だが、進藤君については、緒方君には絶対負けられない。」

「進藤君は。妻に聞いたところでは、なんでも五年生になる前の春休み頃から、碁を始めたと聞いているが、今打ってみて、倉田君並の進歩を示していると思つたよ。白川君はどう思うね。」

「私は彼に石取りゲームから教えました。19路盤で様になる碁を打てるようになるまで、二ヶ月もなかったですね。教室は週一ですから、それ以外は進藤君は、ずっと、おじいさんと打ってもらつていたんですよ。」

ヒカルはおっとりした口調で続けました。

「はい。俺のおじいちゃんが、碁好きなんです。若い時は全国大会にも代表で出たとか言っていましたけど。毎日うちに来いって言われて、毎日何局も打つてたんです。」

「ヒカル。あつという間に強くなって、置石がどんどん減って、二学期が終わるころには、おじいさんは、どうしてもヒカルに勝てなくなっちゃって、それで、白川先生がヒカルの個人指導を始めたの。」

あかりはリラックスしていたので、説明を付け足しました。

この人なら、部外者が余計な口出しするななんて言わないよね。
あかりもかなりの粘着質かもしれません。

「そうか。君のおじいさんには是非お会いしたいねえ。ご近所なのかな。」

白川はしまったと思いました。

塔矢先生のシナリオ通りの展開なんじゃないか。これは。

「歩いて十分もかからないところですよ。」

ヒカルは素直に言いました。

行洋は、明日早速平八に会いたいと言いました。今日これからといわないところがまた、行洋らしい名人芸なのです。ヒカルは言われた通りに平八に電話をしました。平八はもちろん、一も二もなくOKしました。一連の動きをつぶさに目にして、白川は中押し負けしたとつくづく感じたものでした。

玄関で、タクシーに乗る行洋を見送ってから、白川はぐったり、ソファーに身を沈めました。

「先生、大丈夫？」

「いや、私はダメだ。」

あかりは感嘆して言いました。

「それにしてもすごいね。明子おばさんに勝てる人はいないと思ってたけど、塔矢先生っておばさんよりもしかして強いんじゃないかしらん。」

「それはよく、分からないけど。でも塔矢先生の碁も同じだよね。ねっ、白川先生。とすると、毎日打ってもらっている塔矢って、どんな碁を打つんだろう。」

白川は眩くように言いました。

「そんなことより、たぶん、緒方さんも君に接触するよ。どうするか。彼は塔矢門下の筆頭だよ。彼も塔矢先生並に強引で、さらに独占欲が強いかもしれないよ。だって彼は師匠と張り合ってる人だから。」

「なら俺と同じじゃん。おれも白川先生と張り合ってるもん。ま、俺、よくわかんないけど、俺が誰と会っても、白川先生の弟子だっていうことは変わらないわけだから。でも張り合ってるなら緒方先生っていう人には、今日のこと、話さない方がいいのかな。」

「どうかな。隠す必要はないけれど、情報は最低限提示するに留めるというのが正しい。僕たちが塔矢門下のことに振り回される必要はないよ。本当に今日は大失敗だった。」

僕は今日、つくづく、森下門下で良かったと思つたよ。君を森下先生に紹介する前に、こういうことになったとはねえ。」

「俺、白川先生に会う前に、塔矢や塔矢のお母さんと知り合いだったんだし、いいんじゃないかなあ。」

その言葉に白川もほっとしました。

森下先生と塔矢先生は、若い頃からの気心の知れた知り合いだ。お互いの性格は知り尽くしているんだろうな。森下先生も強引で負けず嫌いで粘着質のところはあるけど、このことをどう話せばいいものか。いや、黙ってよう。進藤君が上手くやってくれるよね。任せよう。

「じゃあ、藤崎君、折角だし、一局打ってみるか。九子置いて。」
「あかりが嬉しそうに碁盤の前に座りました。」

藤崎君は、本当にすごい。阿古田さんのこともだけれど、今日、塔矢先生と互角だったのは藤崎君だけの気がする。

さてさて、その晩、明子から電話がありました。

美津子は不思議そうに言いました。

「ヒカル。どうなってるの？緒方さんという人が会いたいわって、言ってるけれど。あんたはそんなにプロの先生方に注目されているの？何でまた？別に大会とか出てるわけでもないのに。」

「さあ、わかんない。」

「いいじゃないか。ヒカルが誰に会っても、別にヒカルが減るわけじゃないんだろう。」

正夫はのんびりしたものです。

「それより、お義父さんが興奮して眠れないって言っていたわよ。だって、憧れの四冠の名人が家に来るっていうので。明日でしょ？塔矢さんが、おじいちゃんの家に行くのは。」

「うん。」

「へえ。そいつはヒカル親孝行したな。いや、爺孝行か。でかしたな。これで、おやじに貸しが出来たな。」

正夫はあくまで、そんな調子でした。

さて、翌日、行洋は教えられた住所にタクシーで乗り付けました。

今日は洋服でした。威圧感を減らし、くだけた感じを演出する。この辺りも心得ているのでしょうか。

しかも行洋は、平八がうきうきしているのをちゃんと分かっている、挨拶代わりに、まずは一局平八と打ったのです。四子置でした。

それは平八を喜ばすためだけではありません。自分の好奇心を満足させるためでもありました。

そうか。これだけの棋力なら孫を引き上げるのも造作もないか。しかし、逆に言えば、これだけのアマチュアを半年で凌駕すると言うのも、すごいことじゃないか。進藤君は逸材だ。時々は打ちたいものだ。

そこで、いろいろ話をしたついでに、平八の家で、時々ヒカルと、ついでに平八と対局する約束を取り付けたのです。凄技です。

緒方君の追跡も、進藤君のおじいさんのところまでは来ない。緒方

君は自分の領域で勝負したがる傾向が強い。ここで鉢合わせする心配は、99パーセントないだろう。

緒方の性格から、行洋はそう踏んだのでした。

29. 師もしなら弟子もでし・よ

師匠が、それだけの種をまいていることも知らず、緒方は、明子からヒカルが会うことを承知したと聞き、喜んでいました。

俺の部屋に来てもらう。そう決めました。

どんな子かしらんが、アキラ君のような子ではないだろう。それは緒方の直観でした。

棋力は別だが、それ以外はおそらく院生の子たちのようなもんだらう。

どういう子か詳しく聞き出すぞ。

明子は緒方にヒカルについては、一切説明をしませんでした。

ただ、本人とご両親が構わないと言っていると伝えただけでした。

一週間後、駅の東側でヒカルが待っていると明子がやってきました。

「なんか、変なことになってしまつてごめんなさいね。この間は、塔矢とも会つたのよね。」

「うん。でもお婆さんのせいじゃないし。俺がネット碁を打つたせいだよ。それに塔矢先生と打つて、すぐためになつたよ。先生また打ってくれるつて言つてたよ。先生つて、本当にかっこいい人だよね。あかりにもお母さんにも評判いいんだよ。大人だつて。」

明子はちよつぴり嬉しく誇らしく思いました。

まあ、私の選択も正しかつたつてことよね。

「緒方さんは、ご自宅で打ちたいらしいのよ。車で来るつて言つてたけれど、いいかしら。」

「うん。白川先生と同じくらしいの年なんですよ。俺、白川先生の自宅に通つてるから。大丈夫だよ。」

「そう。そうね。」

緒方君の扱い方はなかなか大変なのだけど、でも進藤君ならうまく付きあえるわよね。頑張つて。

心の中で、明子はそう呟いていました。

明子と話しながら約束の場所に歩いていくと、やけにかっこいい車が止まっているではありませんか。

その横に、白いスーツの男が立っていました。やや色のついたメガネをかけて。

ヒカルは思わず、後ずさりしました。もちろん気づかれない程度にですが。

白川先生は強引で独占欲が強いかもしれないとか言っていたけれど、それよりもどんな外見の人とかを聞いておくべきだった。明子おばさんが大丈夫だって言っているのだから、おそらく見た目とは違っているかもしれないけれど。気をつけねば。それにしても、塔矢先生から始まって、塔矢門下って、本当にすごいな。塔矢もそうだけれど。个性的っていうかなんというか、絶対、普通じゃないよ。

「緒方さん。こちらが進藤君。twinkleさんよ。」

「進藤です。ネットではお相手下さってありがとうございます。とても勉強になっています。」

白川といういろいろ決めてきましたが、とりあえず初対面の挨拶です。

「私が緒方です。今日はわざわざありがとうございます。君と是非碁盤を囲んで打ちたいと思ってるね。」

明子は、私はこれだと言うと、ヒカルに向かってにつこり笑いかけました。

「緒方さんは年の離れたお兄さんのように、息子にもよくしてくれるのよ。」

明子を見送ると緒方は車の助手席を開けました。

「ここからだとして20分くらいだからそれほど遠くないからね。帰りは駅か君の家まで送るよ。」

ヒカルは領いておとなしく助手席に乗りました。正夫は運転はできませんが、車は持っています。

普段は勤めがあつて乗れない。休みの度に車に乗るのも面倒だ、というのが言い分です。

ヒカルは車に対して特に興味はありませんでした。

緒方はおとなしく車に乗っている子どもを観察していました。

やはりアキラ君とは全然違うタイプだ。院生の子どもたちとも少し肌合いが違いそうだ。

「君はいつから碁を打っているんだい。」

「五年生になる前の春休みから。始めてちようど一年半ぐらいです。」

緒方の手が、少し止まりかけました。

なんと、なんと、本当なのか、吐かせてやる。

車はとあるマンションの地下駐車場へ入っていきました。

ヒカルはこういった場所は初めてなので、物珍しげにきよろきよろしました。

「緒方はその様子を注意深く見ていました。」

エレベーターの扉があくと、緒方は廊下の角にあるドアを開けました。

ヒカルは目を丸くして、ついていきました。

こいつはもしかやマンションを知らないのか？

「君は一軒家に住んでいるのかい。マンションは初めて？」

「あ、はい。俺の住んでいるのは普通の家だから。」

「そーいや、君はシートベルトを着けたことはないのか。お父さんかお母さんは車を運転するだろう？」

「もしかしたら運転はできるかもしれないけど、うちには車ないから、普段乗らないもの。」

車を買えないのか、いや、塔矢家にも車はなかった。明子夫人が車を運転しないからだ。

ま、あのあたりの公立に通う子どもものだから普通の家の子なんだろうな。

ヒカルの目は取りあえず、熱帯魚の水槽に行きました。

「すごい。病院でしか見たことないや。普通の家でも熱帯魚って飼えるんだ。難しくないの？」

「ああ、きちんと管理すれば、大丈夫だ。可愛いだろう。」

緒方は自慢そうに水槽のガラスをなぞりました。

魚って、可愛いのかな。たぶん、飼えば、何でも可愛くなるのかな。

この魚の目って、緒方先生の目に似てる気がする。

緒方は、ヒカルをテーブルに座らせ、麦茶を出しました。

普通の家の子なら、何を飲ませても文句は言わんだろうが、最近はやたらと、甘いのはダメ、カフェインはダメと、うるさいのもいるからな。無難がいいだろう。

そう思ったのでした。

ヒカルはコップに手をだし、美味しそうに飲みました。

緒方は折り畳みの碁盤を準備しながら聞きました。

「さつき、君は碁を初めて一年半ぐらいと言っていたけれど、どうやって勉強したんだい？碁を始めたきっかけは何だったんだい？」

「はい。俺のおじいちゃんが碁を打つんです。で、小さい時に教えようとしたらしいんだけど、その頃は俺は外遊びが好きで、結局やらなかったんです。

でもたまたま四年生の終りに駅前の保健センターの碁の教室のチラシをもらって、お母さんが敬老の日におじいちゃんを喜ばせなさいって行って、習うことにしたんだ。あつ、したんです。

ですぐ一応打てるようになったんで、おじいちゃんのところへ自慢しに行ったら、喜んでくれて、毎日うちに来て言われて、学校が終わったらすぐ、晩御飯までずっと打つことになって、半年したらおじいちゃんに勝てるようになったんです。教室にはずっと通ってたけれど初心者用だから飽きちゃって、そしたら白川先生が、その教室の先生なんですけど、個人指導してくれるようになったんです。

今は俺、白川先生の弟子なんです。でも先生しか打つ人がいないんで、ネット碁を始めて、それで最初の日に打ったのが緒方先生だったんです。」

「ふむ。パソコンは持っているんだね。」

「持ってないです。中学生になったら買ってくれるかもしれないけれど、小学生じゃ早いんじゃないかって親が言うもんで。」

「じゃあ、どうやって打っているんだい？」

「知り合いの人が口をきいてくれて、近所のオフィスで仕事をしてい

る人が碁好きで、ネット碁に詳しいっていうんで、そこで、教えてもらいながら打ってます。」

「教えてもらう?。」

「あ、はい。パソコンの扱い方をです。ネット碁のやり方とか、チャットの仕事とか。」

「よく、やらせてもらえるねえ。ほとんど毎日打っているんだろう。」

「うん。白川先生のところで打つ以外は、ほぼ。でも大変だったんだ。」

「何が?。」

「お母さんは一、二回ネット碁をするだけだと思ってたから、毎日通うのに反対されて。迷惑だって。」

それで、泉さんが。そのネット碁をやらせてくれる人です。泉さんがお母さんに掛け合って、英語のサイトで、打てるように六年生の間に、英語でチャットが出来るようにしてくれてるって言ったんです。で、泉さんはその見返りに俺と碁を打つ約束をして。」

「ふむ。ところで君は最近早朝打っていないかい?毎日。」

「zeildaのことですか。あいつ、毎日打ってくれて言ってきた、無理だって言ったら早朝学校行く前に一局打ってくれて言われて。それを見ていた泉さんが、また親と掛け合ってくれて、半年だけ、リビングにパソコン置いて、早朝だけ使うのを認めるっていうことになったんです。」

zeildaって結構打てるし、呑み込みは早いし、今はかなり競ってきてるんですよ。楽しみなんだ。毎朝。

いつか、顔を合わせて打つ日が来るんだと思うし。あいつには絶対にプロになつてもらいたいしね。」

「泉さんっていうのは随分熱心な人なんだね。」

「IT関連って言っていたけれど、仕事は良く知らない。ただ泉さんは高校生本因坊とか学生名人とか学生本因坊だったことがある人なんだって。全国大会の代表にも選ばれたことがあるって。」

俺のおじいちゃんも、若い頃アマチュアの全国大会に関東代表で出ていたらいいんです。」

ふむ。なるほどな、そういうのに恵まれて小学生で力つけたの

か。これは倉田より手ごわいのになりそうだな。

緒方は思いました。

それからヒカルは、緒方と碁盤を挟んで打ちました。

塔矢先生とは感じが違う碁を打つ人だ。前に白川先生と検討したんだ。この人のこの癖。でも実際打ってみると、やっぱり強いよ。

「ありません。やっぱり緒方先生っていつもしびれる手を打ってくるんだ。でも俺、絶対いつか勝って見せるからね。」

ヒカルは宣言しました。

緒方は、その言葉に、にやりとしました。

こいつは面白い。こいつは、素直で大人しいだけの小僧というわけじゃなさそうだ。

いつプロになるつもりなのか。

「君と公式に戦う日を楽しみにしているよ。ところで、進藤。君は随分力が付いてるけれど。何か特訓しているのか？」

ヒカルは嬉しそうに言いました。

「ネット碁のせいだと思う。」

これは白川先生と話をしておいたことでした。

ヒカルは竹林というサイトのことを教えました。そこにいる人が強くて、時々日時を約束して打っていることを。

「もしかして韓国とか中国のプロの人かもしれないって、白川先生と話しているんだ。」

「なるほど、そのサイトが英語だけの有料サイトなんだな。」

アキラ君は完全に負けているな。こいつはこいつなりに勉強と経験を重ねている。

白川はこいつを鍛えながら、自分も力をつけてきたんだな。羨ましい。

「君と打つのは刺激的だ。時々打つてくれるかい。ネット碁もいいが盤を囲むのもいいだろう。」

白川は言ったのです。

緒方さんと打ち合うのは君にプラスになる。言われたらお願いしますよ、と。

「ありがとうございます。先生の都合のいい時をお願いします。」

「君はなぜ、プロにならないんだ？」

「小学生でもプロになれるなんていったら、お母さん驚いちゃうと思うんだ。それにもしプロになったら学校と仕事で忙しくなりすぎそうだし。俺、もうちよつとしたいことあるし、腕も好きに磨きたいんです。白川先生も、俺の場合は、中学生になってからゆつくり考えても、遅くないって言ってくれたし。」

ふむ、こいつの場合は、アキラ君がプロ試験を受けないのとは、違う理由があるのだな。

それはそれとして、こいつはプロになりたいと思っている院生の腕を磨いてやっている。その上、おそらく、そいつをプロにして自分もいずれプロになって打ち合いたいと思っているわけだ。

すでにプロもどきの仕事もしてるじゃないか。強豪のママの指導碁までしているんだから。

白川は、もしかしたら、なるべく長く自分の手元に置いておきたいのかもしれないな。

ま、俺もこいつを弟子に取ったらそう思うかもしれないな。

俺は、決めた。とにかく、白川にだけ、美味しい思いはさせないぞ。緒方の魚のような目が、眼鏡の奥で、きらりと光りました。

30. 出会い系ね、つと

いつもの早朝の一局を終えるとアキラは言いました。

「僕、今年のプロ試験を受けるつもりです。」

「決心したのだね。」

「はい。」

行洋はしばし黙りました。

アキラも進藤君も碁の才能は抜きんでている。

だが、二人には決定的な違いがある。それは現在の棋力のことではない。

考え方の違いというべきか、いやむしろ目標の違いかもしれない。同年代の好敵手を望んでいたが、いずれ進藤君が棋界に出てくるその時がアキラの試練の時になるだろう。それまでにアキラには、しっかりとプロの世界で揉まれて力を伸ばして欲しいが。

「プロの世界は厳しい。」

行洋は思わず口をついて出てしまいました。

「分かっています。」

「うむ。明日の朝からは、常先で打つことにしよう。心しておくように。」

「はい。」

アキラは声を弾ませました。

プロになるということはそういうことなのだ。

いつまでもお父さんに甘えてはいけない。お父さんはそう言っているのだ。

僕はまっすぐ前だけを見据えて進むから、大丈夫です。

それは、アキラらしい若々しい決心でした。

プロ試験というのはプロになるための儀式の一つでしかないというのがアキラの認識でした。

本戦ですらそういう考えなのですから、予選などあってないようなものでした。

僕は今、お父さんと打つ碁しか夢中になれる碁がない。後は緒方さ

んぐらいかな。ほかの門下の人と打ち合う時があるけれど、五分五分だもの。芦原さんなんて、僕が手を緩めることがあるのにも気づいていない。僕の目標は、とにかく、お父さんのような名人になることなのだから、それに向かって進むだけだ。

市河はいつもの場所に座って、棋譜並べをしているアキラの姿を眺めました。

ここにいる誰も、アキラのプロ試験の結果など心配する人はいません。受からないなどある筈がないのです。

それよりも、市河はあの時からずっと、気になっていました。

アキラ君、進藤君に話が出来たのかしら。一体何を話したのかしら。まあ、友達としての話なら、いちいち誰かに言う筈はないわよね。でもアキラ君に友達っていうのがねえ。イマイチぴったりこないのよね。

ううん、今はプロ試験よね。試験の結果が出るのは十月ぐらいじゃなかったかしら。アキラ君のお誕生日の前よ。

ということは11歳で、プロ合格よ。確かそういう人は、今までで一人か二人、いるかいらないかよね。それってもしかして囲碁界の大ニュースじゃないの？

「ねえ。アキラ君。お父さんには何て言われたの？」

「うん。決めた以上はしつかりやりなさいって。」

そうよねえ。アキラ君になら、それ以外に何を言うことがあるかしら。ああ、それにしても何となく残念よ。プロになったら、それに来年からは中学生にもなるんだし、忙しくなるでしょうし、ここへ来る回数も減りそうね。

アキラの周りの常連は、既に浮かれていました。

「アキラ先生がプロになったら、大々的にお祝いしなくちゃねえ。」

市河は少し眉をひそめました。でもアキラは、そういうことを軽くやりすごす能力を持っていました。

ところで白川ですが、門下というものをそれほど後生大事に思っていないませんでした。

碁は個人の力がものをいうものだし、師匠と弟子といっても、碁を打つことで、教えられることは、おのずと限られている、そう思っていました。だからこそ、ヒカルを弟子にしていられるのかもしれない。

とにかく、もつと門下の垣根を越えて、お互い打ち合わなきや、強くなれない。

そう思うからこそ、ヒカルが緒方や行洋と打ち合うことを認め、勧めてきたのでした。

それでも私は塔矢門下じゃないし、振り回されるのはごめんだ。温厚な白川でも限界がありました。

このところの塔矢門下の様々な押し強さに圧倒される思いを抱き、正直腹立たしく思っていました。

正確には行洋と緒方にといいべきでしょうが。

緒方さんは進藤君を自分のマンションに何度も連れ込んでいます。

聞きようによってはかなり怪しい言葉ですが、その独占欲の強い囲い込みの姿勢を白川はひどく不愉快に感じました。それが、逆に白川に、強い決意を抱かせました。

本当に許しがたい。私は絶対に緒方さんより早くタイトルホルダーになる。なってみせる。

その思いは白川の碁にはつきりと反映されて、白川は、さらなる快進撃を続けていきましました。

それにしても塔矢先生も塔矢先生だ。進藤君のおじいさんをだしにして、進藤君と密会を重ねているとは。

これもまた非常に誤解を招く言い方でした。

でも塔矢先生にだけ、そういう便宜を図らせることはないよね。

うん。そうだ。和谷君をあそこに呼ぼう。広さもある。進藤君のおじいさんは寛大で、碁のことになると、何でも認めてくれる。それに言っちゃなんだが、塔矢先生効果で、僕が言うことは何でも通るようになってきている。

それを活用しなくてなんとする。

この前の研究会で、それとなく話をしてみても、和谷君が z e l d a

に間違いないことが分かった。

こうなったら森下先生云々は後回しにして。兄弟子として弟弟子を応援する。

和谷くんだけでなく、冴木君も一緒に鍛えよう。

そう決めた白川です。

さて、twinkle との初対局の後、ベッドに転がり、口惜しい、しびれた、でもまた打ちたいと願った和谷ですが、猛アツタツクの甲斐あって、twinkle との早朝対局にこぎつけることができました。

チャットの感じから、プロじゃない、子どもなのは本当らしいとは感じたものの、正体は依然つかめませんでした。それでも、twinkle が自分と対局することを本当に喜んでくれているのが感じられて、それが何より嬉しくて、夢中でした。気が付いたら、かなりの力がついていました。

そのせいとばかりは言えないでしょうが、和谷は、院生順位を八位にまで上げました。

院生一位の伊角は、和谷の好調な様子に目を見張りました。

「和谷ってこの頃、すごく強くなってきてないか。」

和谷は嬉しそうに答えました。

「分かる？俺特訓してるからな。」

その伊角ですが高一、去年のプロ試験ではミスをして、合格を逃していましたから今年の試験にかける意気込みは相当なものでした。和谷の言葉に早速飛びつきました。

「何、お前、森下先生に特訓を受けてるのか？」

羨ましそうに言いました。

「そうじゃねえよ。知りたい？伊角さん。」

「ああ、知りたい。もったいぶるなよ。」

和谷は自慢たらたらで、伊角を一晚自分の家に招きました。

親には風呂も飯もいらねえ。夜遅く来て、朝、すぐ帰るだけだからと言って了解してもらったのです。

早朝の twinkle と和谷の一局は、伊角に深い感銘を与えました。

「ネット碁も馬鹿にしたもんじゃないだろ。」

「ああ、俺も打ちたくなつたよ。パソコン買おうかな。俺とも打つてくれるかな。こいつ。」

「忙しそうだからな。それより、俺、こいつと会ってみたいよ。」

和谷は言いました。

そんなことがあつてすぐに、プロ予選の日がやってきました。

初日、和谷は、会場へ行く途中で、院生でない少年を一人見かけました。

横にいるのは、えっと、冴木さんのライバルの芦原プロじゃないか。塔矢門下の。

「じゃあな、アキラ。」

その言葉で和谷は理解しました。

あいつが塔矢アキラなんだ。今年試験を受けるって噂だったけど本当だったんだ。

それにしてもあのヘアスタイルは女の子っぽくないか。ああいうヘアスタイルをするっていうことは、もしかして、あいつが twinkle っていう可能性はないかなあ。あいつ小学生だろ。ちよつと確かめてみようかな。

でも、もし、あいつが twinkle だったら、やだな。何となくそりが合わない気がする。

そう思ったものでした。

意を決し、部屋の隅で詰碁本を読んでいるアキラに話しかけるまで少々時間がかかりました。

なんて言ったらいいんだろう？

「外来だよね。」

アキラは、和谷に目を向けました。

「君は？院生？」

「うん。俺は和谷義高。」

「そう、ぼくは塔矢アキラ。」

やっぱりだ。

「あのさ、塔矢君はネット碁とかやる？」

「ネット碁？ううん。やらないよ。」

それだけでした。

どうみても、こんなことで嘘つくような奴じやなさそうだし、こいつはtwinkleじゃない。

和谷は何だか、ひどくほっとしたものでした。

31. 艱難辛苦、thinkしてsinkする

とにもかくにも予選は通ったぜ。

ほっとした思いで、出席した研究会で、和谷は師匠の森下に、はっぱをかけられました。

「いいか。今年は塔矢アキラがプロ試験を受けるそうだ。絶対負けるな。落ちたら破門だぞ、いいな、破門だ。」

「先生。そんなプレッシャーをかけてどうされるんです。」

年長の都筑がとりなしました。それなのに、冴木は余計な口をききました。

「破門されたら、白川さんの弟子になればいいじゃないか。そうしたら、孫弟子のつきあいだな。」

「いいか。冴木。お前もこの次芦原君に負けたら破門だ。」

森下は冴木をギロツと、睨み、かつかと、わめきました。

冴木は、首をすくめました。

さてそう言つて、はっぱをかけた森下ですが、和谷の面倒を毎日見してくれるというわけではなく、そこは毎日父親と打っているアキラと比べ、明らかに不利でした。

プロ試験の本戦初日、玄関で出会った和谷はアキラに親しげに「ようっ！」と声をかけました。

しかしアキラは不審げに和谷を見つめ、軽く会釈して行ってしまいました。

「あいつ、覚えてないんだ。」

それは和谷には、軽いショックでした。

あいつ、やっぱり、そり合わねえ。よし、俺、この試験、頑張るぞ。

そう誓った和谷でした。

しかし、いくら誓つても、手の届かないものは届かないのです。

今年もやっぱ合格できなかったか。

納得しつつ諦めきれず、「また院生続けることになった」そう書き込みました。

チャットに書き込まれた、Zeldaのその言葉を見て、ヒカルは、やっぱりプロになるのは厳しいんだなと思ったものでした。

また院生の日々です。

「お前はまだいいよ。俺はもう高二になるんだぜ。後がなくなってきたよ。」

伊角はそう言いました。

俺ってメンタル弱いよな。いつも本番はこけてばかり。プロになれるんだろうか。院生順位はこのところずっと一位を保っているのに。

伊角は深刻にそう思っていました。

今年合格したうち二人は、外来でした。

「外来も強いのが多いよな。もしかして、来年あたりtwinlike、受けるのかな。そうしたら、梓は二人かあ。」

和谷はそう言って、呻きました。

不合格の報告の挨拶をするため、和谷は、恐る恐る師匠の森下の家に向かいました。

兄弟子の冴木が付き添ってくれました。

「気にすんな。先生は俺は11の時に受かった。行洋は13の時だった。何かというところというけれど、来年頑張れって励ましてくれるよ。」

森下先生って、なんだかんだって言っても、和谷のことは特別に可愛がつてるもんな。俺の時はもっと冷淡だった気がする。

冴木はそう思いました。

案の定、森下は、終わったことにこだわるな。また挑戦すればいいと励ましてくれたのです。

そこへ、白川がやってきました。

「この次の研究会は欠席になるので、ちょっと挨拶に寄りました。」

そう言ったのですが、和谷には、自分のことを心配してきてくれたのだということが分かりました。

「それ、なんですか。」

冴木が聞きました。

「この前、予選がてらで、中部へ行った時のお土産。貰ったんだよ。」
紙包みを開けていると、夫人が覗きました。

「あなた、塔矢さんよ。」

「何？行洋だと？何しに来たんだ。今頃？」

森下が玄関に行くと、行洋がアキラを連れて、立っていました。

「何、遠慮してんだ。入れよ。」

「いや、今日はすぐ失礼する。奥さんが、アキラのプロの合格祝いを下さったんでね。息子を連れて、お礼と挨拶に寄っただけだ。タクシーも待たせてあるし、すぐに失礼する。」

「ああ、そうか。おめでとう。アキラ君はいくつだ？」

「誕生日は12月だから、まだ11だ。森下と同じだ。」

行洋はあっさり言いました。

森下は目を細めて、しばし遠い目をしました。

「そうか。11か。アキラ君はきつといい碁打ちになるんだろうな。」

「四月からよろしく指導してくれ。それを頼みに来た。」

森下は生真面目に言う行洋に答えました。

「何言ってる。お前が小さい頃から鍛えたのだろう。俺の出る幕などないじゃないか。まあ、11っていうところだけは、俺と同じだが。ま、何かの縁だな。ははは。」

アキラは真剣な顔をして言ったものです。若々しい抱負をです。

「ご指導よろしくお願い致します。でも僕は森下先生と同じになるつもりはありません。僕の目標は父のようなタイトルホルダーになることですから。」

その言葉に固まることなかった森下はさすがです。ただ玄関のやり取りが聞こえた座敷にいた弟子三人は固まっていました。

行洋は、アキラの言葉には何も反応を示さず、言いました。

「アキラ、タクシーに戻って、運転手にすぐ戻るからもうちょっと待ってくれるようにと伝えておいてくれないか。」

「はい。」

アキラは森下にお辞儀をして出ていきました。

ちよつと沈黙があつた後、行洋は言いました。

「息子が失礼なことを言ったかもしれないが、許してくれ。あれはただ自分の抱負を語っただけなのだ。誤解を招く言い方だが、他意はない。そういう性格なのだ。しかたない。これから揉まれていくうちに自分で分かつて修正していくしかないだろう。」

「プロ棋士には一番の性格じゃないか。盤外戦にはもってこいだ。それにお前も期待してるのだろう。息子の才能には。全勝合格だったな。棋界も期待してるだろうよ。」

森下は、腹立ちを抑えて、苦笑して言いました。

「それは、私も親だ。息子が望んでいることが叶えば嬉しいかもしれないが、だが、そうならない時に、あれの誇りを支えるものがあるのか、それの方が心配なのだ。あれには私にとっての君のような存在がないからな。」

行洋の真摯な言葉に森下は、ちよつとドキッとなりました。

こいつは俺のところ以外ではこんな言葉は吐かない。本当にそう思ってるわけだ。なぜだ？

俺だったら、塔矢アキラのような息子がいたら、手放して喜ぶがな。

何か訳があるんじゃないか。

さすが長い付き合いだと勝負師としての勘が森下にそう感じさせました。

それでも軽い口調で言いました。

「何だ。お前。自分の息子が一生タイトルを取ることがないような口ぶりじゃないか。」

「そういったことは分からん。この先の戦績などは。だが、本当に力ある若手はこれから出てくるのだ。あの子は理解していない。直面してからもがく。まあ、それも人生だ。いや、愚痴を言ってすまない。」

お礼のつもりが、気分が悪い思いをさせて悪かったな。」

「いや、何だ。要するに後続を気にしろということか？今だって目標にすべき棋士はいるだろう。お前のところの緒方君とか。」

「そうだな。白川君とかね。君は実にすばらしい弟子を持っているよ。羨ましい。それより、いや、まあいい。タクシーを待たせすぎると失礼するよ。」

森下は去って行く行洋の後姿を複雑に眺めました。

あいつはあいつで子どもに苦労しているらしい。俺ぐらいにしか分からん事だな。

11歳で入段し、神童と騒がれた麒麟児、結局一度もタイトルを取れず、40代も半ばになってしまった男は弟子たちの元に戻りました。

森下は弟子たちの顔を見たら急に腹立たしさが、湧いてきました。

「いいか。和谷は来年は全勝合格だ。いいな。それから冴木、お前は芦原君だけじゃない。塔矢アキラも勝たせるな。いいなっ。」

檄を飛ばされた二人の弟子が帰った後、まだ残っていた白川に森下は聞いたものでした。

「白川君は、この前、本因坊予選で行洋とあたったんじゃないか。行洋の奴、どこが変わったところ、なかったか。」

「いえ、もともとの塔矢先生がどうなのかを知りませんから。ただ、塔矢先生はこれから若手が伸びてくるというのを感じているのでしよう。自分の息子が特別ではないということ。時代が動いているということをです。」

塔矢先生は、進藤君をそれだけ評価しているわけだけど、今進藤君のことを森下先生に話すわけにはいかない。話したからと言ってどうかなるわけでもない。

森下の方は、独特の勘で思いました。

白川君は何か知っているか、感じているのかな。

3.2. 交流会は直流かい？

「あなたたちの中には私立に行く人もいるけれど、葉瀬中に行く人が多いでしょ。だから、六年生の時に、スポーツやゲームで、一小、二小と交流を持ったらどうかということとで交流会というのが、各小学校持ち回りであるのよ。」

担任は肅々と話しました。この辺りは私立受験の子が結構いて、交流会はいつも今一つ盛り上がりがない傾向がありました。やらなくてもいいのじゃないかと言われながら、だらだら続いている催しなのです。

「時間のある人はなるべく出てくださいね。ことしの会場は二小よ。」

「交流会なんて来なければよかったよ。」

あかりはぶつぶつぶやきました。

先生が、当然のように、私やヒカルの顔を見るんだもの。参加名簿に名前を書いちゃったんだよね。書いたのに、まみちゃんは行かないって。お父さんの転勤で中学は静岡なんだっていうし。さやかはもともと私立志望だしね。ヒカルは連合運動会のリレーの練習で来れなくなっちゃったし。

一緒に来た友達は大縄跳びをやると、さつきと帰ってしまいました。

あかりも帰ろうと思ったのですが、ヒカルが、時間があったら来るかもしれないと言ったのを思い出して、まだぶらぶらしていたのです。知らない子といきなり話なんてできないよねと思いつながら。

あれっ？教室でも何かやってるのかな。

よくみると、教室でゲームをやっていますと張り紙がしてありました。

ゲームってなんだろう。時間つぶしになるかと思って、あかりはその教室を覗きました。

一つの教室は人でいっぱいでした。

もう一つの教室は、十人ぐらい人がいるだけでした。

あかりがちよつと覗くと、よく来てくれたと言わんばかりに、歓迎されて、引つ張り込まれてしまいました。

あかりは向かい合って碁を打っている子たちを見つめました。

「碁ですか？」

「そうなんだ。でも敬遠しないでちよつとでいいから、遊んでくれると嬉しいのだけれど。」

中学の制服を着た男の子が言いました。

この人、OB？

「良ければこれに名前だけでも書いてくれる。」

一小、二小、三小の欄がありました。

藤崎あかりと書くと。「もしかして、あかり？」

傍にいた女の子が言いました。

あかりが見ると何となく見覚えがあるような、ないような子でした。

「覚えてないかも、あたし津田久美子。幼稚園で一緒だった。」

「くみこ？うん、覚えてるよ。久美子って二小だったんだ。」

「うん。でも二年で転校して、この二学期に戻ってきたばかりなの。」

「で？ 久美子、ここで何してるの？ 久美子も碁を打つの？」

「ううん。打ったことないよ。でも担当にあたったの。お世話係の。」

それから、久美子は、碁盤を囲んでいる子たちを指して、そつと教えてくれました。

「窓の傍で打ってるのが、一小の三谷君って子と二小の土呂君って子なの。それからこつちで打ってるのが夏目君っていつてやつぱり一小、で相手の金子さんは私と同じクラスなんだよ。あとは碁石を使ったゲームをやってるの。それ教えているのが、水田先生っていうの。」

「少ないんだね。」

「うん。隣の将棋は多いのにね。ちよつと見に来て少しゲームやって帰った子も何人か、いたけどね。そういえば、三小は誰も来なかったよ。あかりが初めてよ。」

「先生、縄跳びやドッチボールのことは言ってたけど、碁の話はしてな

かったから。聞いてもやる人がいるのかは分からないけれど。」

中学生が言いました。

「藤崎さんていうんだね。良かったら少しルール教えてあげるからやってみない。意外と面白いんだよ。」

「私、ルールだけは一応知ってるの。そうだ。久美子に教えてあげてください。私、受け付け変わりますから。」

「藤崎さんは強いのか?」

「全然。ちつとも勝てないけど。でも久美子、ルール覚えたら、今度一緒にやって遊ぼうよ。ねっ。」

あかりはさつきと二人を空いている机に座らせました。

中学生は丁寧に優しく教えていました。久美子は熱心に聞いていました。

あかりはそれを見るときもなく見ていました。

「ありません。」そう言って、土呂君という子が投了して、そこで行われていた碁は、すべて終わったようでした。

その時、あかりは初めてヒカルがその対局を熱心に見ていたことに気が付きました。

「ヒカル? いつ来てたの?」

「さつき。でも、もうドツチは終わってたよ。最も、俺、くたくただからやるのは無理だったけどね。二時間も走らされたらもうダメ。あかりが待ってるといけないから、迎えに来たのに、お前いないじゃん。で、ちよつと見たら教室で何かやってたからさ。覗いたんだ。」

その時でした。三谷という子が言いました。

「俺、もう帰る。夏目はどうするの?」

「僕も帰るよ。」

中学生が慌てて言いました。

「中学に入ったら、ぜひ囲碁部に来てね。楽しみに待ってるから。」
「考えときます。」

そう言って二人は帰っていきました。

「先生。もう片付けますか。」

金子という女の子が言いました。

「一つだけ出しておいて、後は片づけてくれるかな。」
「私も手伝う。」

久美子も立ち上がり、慌てて手伝いを始めました。
それを眺めながら水田先生は中学生に言いました。

「筒井君。来年は何か囲碁部できそうじゃないか。金子さんも土呂君も入るよね。」

「僕は葉瀬中行くかわからないから。」

「あつ。そうか。」

「時々で良ければ。私、中学じゃ、バレーボールやりたいんです。」

その時、ヒカルが言いました。

「筒井さん、どうしてここにいるの？中学生なのに。」

「進藤君が創立祭で言ったから僕も考えて、来年進学する小学生を勧誘することに決めてね。水田先生にお願いしたんだ。隣の教室には加賀もいるよ。でも、君が来ると思ってたのになくて、がっかりしてたんだよ。」

「へえ、そうなんだ。すごいんだね。筒井さん。碁が本当に好きなんだ。俺、連合運動会出ることになって、今日もリレーの特訓させられてたんだ。それで良かった。」

金子と土呂が居なくなっただけ、久美子はまだ教室に残っていました。

「ヒカルって、あの進藤君だよね。」

「うん。ヒカル、久美子、覚えてる？幼稚園の時よく一緒に遊んでた津田久美子ちゃんだよ。」

「名前は何となく。で、津田、お前って碁をやるのか？」

「全然、何も知らないよ。二小だから、ここの担当で雑用係なの。」

そう言っていると、加賀が覗きました。

「筒井。少しは効果あったのか。将棋部は来年も盛況だぞ。結構打てる奴もいて。」

それからヒカルに目を向けました。

「お前、確か、どっかであったな。」

「創立祭で。」

水田先生がその時言いました。

「さて、まだ時間があるから、一局打つ？筒井君は少しは腕あげた？」

「相変わらずです。打つ人がずっといなくて。」

「筒井さんの碁って見てみたいな。」

「見てもしようがないぜ。こいつのはへぼ碁だからな。勉強にはならん。」

そこで、水田は加賀に聞きました。

「君は将棋部でしょ。碁もやるの？」

「加賀君は強いです。口惜しいけれど、憧れちゃいますよ。」

「じゃあ、一局お相手してくれる？このところ、碁を打ってくれる子がいなくてね。」

加賀は、意外にも素直に水田と打ちました。

面白いよ。二人ともなかなかいい手を繰り出すよね。

加賀って、将棋の方が好きなのかな。碁をずっと打っていれば、いところまで行ったのに。

水田先生は、泉さん程には打てないけど、結構慣れてるな。加賀より上手だとは思うけど。

あつ、そこはダメだよ。加賀の思うつぼだよ。

「これは。」

水田は言って、投了しました。

「本当だ。加賀君は結構強いね。助っ人で、囲碁部に来てくれれば、いのにねえ。筒井君。」

ところで、その君は。熱心に見てたけど、碁って面白いでしょ。やってみないか。ルールだってそんなに難しくもないし。」

ヒカルは少し困りました。

「はあ。俺、少し打てるんですけど。」

「じゃあ、打ってみるかい？」

「うーん。あかり。お前、先生に打ってもらったら。三子置とか。」

これって、白川先生のいう対外試合というか、そういうのになるのかな。そういうのやると、破門なのよね。

「はい。お願いします。」

あかりは、水田の前に座りました。

「あかりって、大丈夫？」

久美子が心配そうに言いました。

「私って負け慣れてるから。先生にはもちろん勝てないけど。」

「先生についているの？」

「駅前の初心者教室にちよつと通い始めて。もうすぐ一年ぐらいになるかな。」

あかりは、素直な碁を打ちました。いつも上手の人に導かれていたので、気持ちいい手です。

そうか。最近あかりの対局、まともに見たことなかったけど。ちやんと上達してるじゃないか。

「ありがとうございます。」

あかりは頭を下げました。

「藤崎さんだったっけ。金子さんといいい勝負になりそうだね。これで、津田さんが碁を覚えれば、女子も大会に出れるんじゃないの？」

「大会？」

あかりが不思議そうに言いました。

「中学の大会。団体戦というのがあるんだ。三人一組で、二人勝てば、次に進める、トーナメント戦。」

水田は楽しそうに、ヒカルに向かって言いました。

「君も藤崎さんに習ったら？ 藤崎さんと打つと勉強になるんじゃないかな。」

ヒカルは何と答えたものかと、戸惑いました。

筒井をちらと見ると、筒井が可笑しそうな顔をしていました。

俺が前に言ったこと覚えてるんだな。フォローしてくれてもいいのに。人が悪いな。

「私。ヒカルには、たまに九子置で打ってもらってます。」

あかりは恐れ気なく、爆弾発言をしました。

水田は少し驚いた顔をしました。
筒井が言いました。

「僕は進藤君とは一度しか会ってないんですけど、去年の中学の創立祭で。確かプロの先生に弟子入りしてるって聞いてます。囲碁部に来てもらって、打ってもらえるのを楽しみにしてるんです。」

「君は院生か何かかい？」

「院生ではありませんけど、大会とか対外試合は出られません。」

水田は泉より粘着質かもしれません。

「進藤君。暇があったら僕と打ってくれる？君の腕前を見たいよ。」

ヒカルは気乗りしませんでした。ヒカルはヒカルなりに、いつも忙しいのです。

「駅前の碁サロンなんかどう？」

「あそこはちよつと。」

「塔矢君が来るなって言ったからよね。」

あかりが、あっさりと言いました。

「塔矢君って、塔矢アキラを知ってるの？」

「ただの知り合いなだけけど。」

そこに加賀が口を挟んできました。

「お前。塔矢アキラとケンカしてるのか？」

「碁のじゃないよ。ただの小学生同士の口げんか。だって、塔矢は俺が碁を打てるって知らないと思うから。」

ヒカルは不機嫌に言いました。

「お前、ちよつと座れよ。打ってくれ。」

加賀にしては珍しいことでした。

「何子置くの？」

ヒカルは仏頂面して言いました。

「俺様に置き石をさせる気か。互戦に決まってるだろ。」

加賀が握り、黒を持ちました。

打ち合いながら、ヒカルはぼんやりと感じていました。加賀の碁に對する屈折した思いをです。

加賀は強いのに、何で将棋やってるのかな。きっと碁より将棋が好

きなんだろうな。でも何で筒井さんにちよつかいを出すのだろう。

創立祭で、筒井に絡んでいた加賀を思い出しました。

何か嫌な思い出でもあるのかな。そんなの忘れて、碁そのものを好きでいてほしいな。

こんな面白い碁を打つんだから。

加賀は思いつきり打ってきました。それは水田と打っていた時とは、また違った感じでした。

あかりのとは違った意味で真つ直ぐな碁を打っていました。

何かの思いが溢れている。だから俺はそれを思いつきり受け止めてみよう。きれいな模様を作ろうぜ。二人で。

正直、加賀じゃ力不足だけど、でも手は絶対抜かないからね。

とても静かな時間でした。

「ありません。」

加賀が投了しました。

「すごいよ。」

筒井が呟きました。水田も頷いています。

「進藤君はいつたいたいのくらい打ってきたの？」

「俺？一年半かな。」

その言葉に水田も加賀も固まったようでした。

「その前に少しは打ってたんだよね？」

「ううん。ちよつとしたことで塔矢と知り合いになって、碁サロンで石取りゲームを教わったことが最初。それから初心者教室でゼロから教えてもらって、今その先生に個人指導受けてるってところかな。」

俺帰るから。

石を片づけると、そう言いながら、ヒカルは、あかりと帰りました。

「久美子も一緒に帰ろうよ。」

あかりが言う久美子も頷きました。

教室には水田と筒井と加賀の三人だけ。しばらくは沈黙が支配しました。

「筒井君。進藤君は囲碁部を手伝ってくれるのかい？」

「たぶん。いえ、絶対頼みます。」

その時でした。

「ははは。」

思いつきり、からつとした嬉しそうな笑い声でした。

加賀は、初めて中学生らしい年相応の笑い声を出していました。

「あいつ、全く手を抜かなかつた。しびれたぜ。楽しかった。」

憧れるぜ。ここまで打てる奴に。あいつ、全然上手なのに、でも俺

の力をすべて受け止めて、バシツと思いつきり返してきやがって。

おかげで、思いつきりすつきりした気分だ。何か、いろいろなこと

にこだわってたのが馬鹿らしくなった。

碁も悪くないよな。将棋が一番だけどき。碁もたまにはな。

加賀は立ち上がりました。

「さ、俺も帰る。筒井、今日は誘ってくれてありがとうな。」

33. 夢見る午後

十月も末の研究会の後で、白川は和谷に声をかけました。

「和谷君。君はネット碁で z e i l d a という名で打っているよね。」

「はい。」

何で知ってるんだろうと戸惑いながら和谷は答えました。

前に白川先生に一度聞かれたな。ネット碁をいつやっているの
かって。毎朝、学校に行く前にネットで一局打つていると言っただけ
ど。先生もやるのか？

「心当たりがあつたんで聞いてみたんだよ。 t w i n k l e だけど、
君と会いたいと言っていたよ。和谷君はどう？」

「それ、本当ですか。会わせて下さい。お願いします。」

和谷は驚きながらも意気込んで言いました。

白川先生と、どんな知り合いなんだろう。やっぱプロなんじゃない
か。森下先生は知ってるのかな。

和谷の考えを見透かしたように、白川は言いました。

「森下先生には話していないよ。当事者は君だからね。早速だけど君
はいつが空いている？」

「いつでもいいです。会つてくれるのなら。」

その言い方に白川は苦笑しました。

「院生対局に差し障らない時ならいつでもいいということだね。じゃ
あ明後日の水曜日で構わないかな。場所を教えてください。」

白川と別れると、和谷はその場で伊角に電話をしました。興奮して
誰かと話したくてたまらなかつたのです。

伊角は、その話を聞いて、とても羨みました。

「和谷、頼む。お願いだ。俺も連れてつてくれないか。白川先生がダ
メだって言ったら、諦めるけど。今度、回転ずしおごるから。」

和谷は白川との待ち合わせ場所を教えました。

「そこ、白川先生の教室がある駅なんだってさ。そこで先生に頼んで
みればいいよ。」

ヒカルの小学校はその日、半日授業だったのです。

約束は12時半でしたが、和谷は約束の時間より30分も早く駅に到着しました。学校は二時間目で早退。駅の傍のコンビニでおにぎりをひとつ買って昼食を済ませました。そこへ伊角がやってきました。

「早いな。学校は？」

「俺は早退。伊角さんは？」

「俺は休んだよ。」

その時です。

「和谷、早いな。張り切ってる？ええつと、そっちは誰？」

「和谷君の院生仲間で伊角と言います。」

伊角は頭を下げました。

「ふーん。そうか。君もネット碁仲間か。僕は和谷と同門の冴木、今三段ね。」

「冴木さんも？なんで？」

和谷は不思議に思っただけで聞きました。

「聞いてないんだな。白川さんはね、弟弟子を二人鍛えるって、張り切ってるんだよ。いいだろ。俺も仲間に入れてくれよな。」

伊角は居心地悪そうに言いました。

「僕は白川先生に了解を取ってないのですけれど、大丈夫かな？」

冴木は神経質そうにしている伊角に聞きました。

「君は師匠は誰？」

「僕は九星会なんです。」

「そうか。じゃあ、別に支障ないんじゃないの。楽しみだよね。 t w i n k l e 君に会うのって。」

冴木は気楽に言いました。

「t w i n k l e 君？」

「あつ、やつ、和谷は何も聞いてないんだ。いや、そうなんだよ。 t w

inkle君なんだよ。」

「何を知ってるんですか？ 冴木さん。」

冴木が問い詰められる前に、白川が来ました。

「みんな、早いね。おやつ、君は？」

「九星会に所属している院生の伊角と言います。和谷君から今日の話聞いて、どうしてもtwinkleっていう人と会いたくて。打ってもらいたいんです。」

「伊角さん、今年ダメだったけど、今、院生一位なんです。」

和谷が言い添えた。

「そう。別に構わないよ。あんまり人数が多いと部屋が狭くなるけれど。3人ぐらいならね。さ、行こうか。歩いてもすぐなんだけど、タクシーにしよう。」

和谷と伊角が異様に緊張しているのを見て、白川は笑って言いました。

「相手は小学生なんだよ。リラックスして。」

「えっ、小学生なんですか？」

「そっ、僕の弟子だからね。そんなに気を遣わなくても大丈夫だよ。和谷君とは気が合うと思うよ。何しろ僕と気が合うんだからね。彼は。」

白川は、二人の反応を楽しみながら、言いました。

白川先生の弟子だって？ そうですね、先生が弟子をとったとか前に聞いたことあったっけ。冴木さんは知ってるのかな？

それを見透かして冴木が言いました。

「和谷。森下先生には言うなよ。これは白川さんとtwinkle君の好意なんだからな。言ったら今度こそ破門だぞ。」

「和谷君が破門になっても、僕は引き受けないからね。」

白川はそう言い足しました。

「そのtwinkleさんの家に行くのですか？」

伊角は聞きました。

「いや、別の場所。」

タクシーはすぐ平八の家に着きました。

門の外に立って待っていたヒカルは四人が降りてくるのを見て目を丸くしました。

和谷つてどれなんだろう。ちびっこい奴だな。たぶん。

そんなことを考えながら、ヒカルは、気易く声をかけました。

「こんにちは。俺は進藤ヒカル。あつ、挨拶はいいから、まず家に入つてね。」

和谷と伊角はヒカルを穴の開くほど見つめました。

こいつがtwinkleなのか。何か拍子抜けするほど子どもっぽいな。確かに気を遣う相手つて感じじゃないな。

冴木は別の思いで見っていました。

この子が白川さんの秘蔵っ子か。やけに可愛い子だな。男の子にしておくのは惜しいな。

部屋には脚付き碁盤が一つ置いてありました。その前で人待ち顔だった平八に白川は言いました。

「今日は、三人連れてきました。よろしくお願い致します。」

白川は自己紹介するように冴木を促しました。

「あの、僕は白川先生の弟弟子で冴木光二といいます。現在3段です。」

「同じく弟弟子の和谷義高です。院生です。」

「僕は院生の伊角慎一郎といいます。」

「というわけです。もう聞いただろうけれど、これが進藤ヒカル君で現在六年生。でもって私の弟子。それから、こちらがその進藤君のおじい様で、この家の主。」

平八は楽しそうに言いました。

「白川先生。今日はまた若い碁打の皆さんに会えて嬉しいですよ。ど

うぞ、自由にこの部屋をお使いください。で、私もちよつと見たりしていても、構わんですかな。お邪魔でないですな。」

「もちろんです。さて、進藤君、これからどうするかい。」

「うん。みんなの好きに。良ければ、誰かと打つてもらいたいけれど。zeidaとは打ってるから、ほかの二人のどちらかと、打たせてもらえたらと思うけど。」

「うん。そうだね。じゃあ、君、伊角君で言ったね。君、まず、打つてみたら。僕は冴木君も和谷君も一応わかっているから。どう進藤君？」

「はい。構いません。」

伊角は、いきなり打てと言われて、かなり緊張していました。和谷は、やばいと思いました。

伊角さんてさ、ほんとメンタルが弱いよなあ、碁は強いのに。この場で、いきなり言われたら俺も緊張するよな。

「伊角君は九星会に所属しているんだそうだ。前に話したことあったよね。そこ出身のプロ棋士が後輩の面倒を見るシステムの会だよな。それで彼は現在院生一位だそうだよ。」

伊角の緊張は、それを聞いてひどくなりました。和谷は頭が痛くなりました。

白川先生って意外に人が悪いよ。伊角さんの緊張をあおちゃって、弟子に肩入れしてるのかよ。

ヒカルは、この場の状況を見るともなく見ながら、どうするか決めました。

伊角さんは、あがりやすいたちなんだ。それで試験に落ちるのか？今は普段の実力を出させて、どういう碁を打つのか見極めてみたいな。

そんなことができるのであれば、元々の素質に行洋や緒方と知り合つて磨いたスキルの賜物です。

ヒカルが握り言いました。

「先手は俺だね。伊角さん。俺、院生になってないでしょ。ちよつと院生つていうのに憧れてたんだよ。」

伊角の顔を見てニコニコして続けました。

「だからね、今日は院生対局の雰囲気をお願いします。もちろん真剣勝負は真剣勝負だけど。いい？」

ちよつと上目遣いのヒカルの必殺技です。緒方は、これにやられたのです。

「う、うん。」

伊角は少しドキドキしながら頷きました。

「じゃあ、まず深呼吸ね。一緒に、すうーふうっ。」

ヒカルの横の方で、平八まで深呼吸をしています。場が少し緩みましました。

それからヒカルは、第一手を置きました。右ウワスマ小目。その時から、時間がすつと変わったみたいでした。

伊角は不思議な感じがありました。すごく緊張してたけど、深呼吸してリラックスしたと思ったら、俺、もう碁盤の中だ。

俺は *winkle* の強さは良く知っている。あの後、和谷がつけていた対局譜のいくつかを二人で随分検討したんだから。

正直かなわないんじゃないかと思った。でも俺も院生一位だ。それだけの強さを示したい。

和谷はじつと盤面を見ながら思っていました。

へえ、伊角さん。緊張していたから心配してたけれど、普段通りじゃないか。ちゃんと、やってるよ。

それにしても進藤つて、こいつ、すげえな。初めっから、厳しい手を置いてくる。甘いところが全然ない。

でも伊角さんをよく分かっている、リラックスさせて、強さを引き出してきている。そういうところもすごいや。こいつ、やっぱ間違いない。正真正銘の *winkle* だ。

対局は、伊角の投了で終わりましたが、伊角は満足感を覚えていました。普段通りの自分の碁が打てたし、何より相手が力を抜くことな

く、まっすぐ打ってくれたと感じたのです。

「伊角君はなかなか打てるね。どう思う。冴木君。」

白川が聞きました。

「はい。よく頑張っていたと思います。読みも結構深いですし。でも進藤君がうわてだから、ここまでだったですね。俺、なんだか進藤君には勝てそうにないなあ。」

「冴木君。君を進藤君に会わせたのは勝ってもらうためじゃないんだけどね。まだ時間があるから、検討はあとにして、次は冴木君の番だよ。」

次の対局は冴木の先番で始まりました。

白川はそれを見ながら、思っていました。

塔矢先生と、多分緒方さんもだろうが、毎回互角に手を抜くことな
く打ってもらっているから、進藤君はそれが身についてきているんだ
な。手を抜くことなく相手を引き上げる感覚のようなものかな。進
藤君の進歩がよく分かる。でもそれはやっぱり相手によりけりだ。
冴木君はどうだろうか。

冴木がアツと思った時には、勝負がついていました。

でも冴木が投了しようとした時、ヒカルが言いました。

「まだ道は残ってるから。」

「どこに？分らない。」

冴木がうめくと、ヒカルは白川を見ました。

「進藤君、構わないよ。」

「じゃあ。冴木さん。俺が黒を持つから。」

ヒカルが言いました。ヒカルは、さっき自分自身が置いた白石の下
に黒石を置きました。

そこにつけるのか？

冴木ですが、伊角と和谷も驚きました。

そんなので、いけるのだろうか。

しかしその後の展開に、そこにいた者は深いため息をつきました。「これが進藤君の碁の真骨頂なんだよ。この碁は前半は白が良かったけど、黒は頑張れば巻き返せたんだよ。まだここにこれだけの広さがあるんだから。」

「そうですね。言われるまで気付かなかった。どうやっても駄目な気がしてて。」

「時間がせっていると、そうなるけれど、これは早碁というわけではないし。時間がある時は、ヨミきることだよ。」

白川は言いました。

ヒカルはそれにただ静かに付け足しました。

「冴木さんはプロだから、頑張ってもらいたと思う。まずは白川先生のところまで。」

「君のところまでじゃないのか。」

冴木が言うと、ヒカルは笑って言いました。

「だって俺、プロじゃないもの。プロの対局って、雰囲気が違うんじゃないかって思ってる。」

それを聞いて伊角も和谷もこいつ本当に訳わかんねえ奴だな。変わっていると思いました。

「ずっと、和谷と、あつ、ごめん、和谷君と」

ヒカルが言い直しかけると、和谷はあっさりと言いました。

「和谷でいいよ。」

「うん、じゃあ、俺も進藤でいいからね。伊角さんも、いい?」

二人に確認を取ると、ヒカルは続けました。

「俺、パソコン持ってないんだよ。パソコンをしばらく借りてるんだ。今年いっぱい、返さなくちゃなんないんだ。だから白川先生に z e l d a が弟子らしいって聞いて、それで会って話したかったんだ。今まで、俺とたくさん打ってくれてありがとうって言いたかったからね。毎日、すごく楽しかったよね。」

ヒカルはニコニコ笑いながら言いました。

「和谷の碁って、俺なんだか、分かるところがあるんだ。ネットだどあまり検討とかできないじゃん。俺チャット苦手だしさ。だから和谷と検討してみたいっていうのがあったんだ。」

zeidaには上手く伝わってないんじゃないかっていう、もどかしさがあったんだよ。俺が石をそこに置いた意味をきちんと分かってもらって、もつとお互い磨きあいたいっていうのがあった。」

和谷は目を丸くしました。

俺はこいつに全然及ばないじゃないか。こいつつてもしかして、白川先生と互角に打ち合ってるんだよな。なのに俺と打ってて楽しかって、お互いに磨くだって。俺が磨いてもらうだけじゃないのか。本心なのだろうか。何を考えてるんだろう。こいつはどうやって強くなつていくのだろう。」

「和谷君の家はここから遠いんだね。」

「電車で一時間半。」

「伊角君は？」

「僕は和谷よりは近くて、一時間ぐらい。」

「さてどうする。進藤君。今日はともかくこれからどう打つ時間を取るのか考えないとね。」

「冴木さんはプロだからやっぱ、忙しいんだよね。白川先生みたい。」

「うーん。どうかなあ。」

「冴木君はいいよ。別口だよ。今日は顔合わせできてもらったんだ。伊角君と和谷君のことだけ考えればいいよ。進藤君。和谷君にはプロになつてもらいたいって言うていたけれど。」

「うん。伊角さんにも勿論プロになつてほしいと思つたよ。今日の碁って、すごつく刺激的だったよ。あんまり同世代の人と打たなかつたから、今日はすごく勉強になった。これからもいっぱい打ちたいよ。でも二人とも学校もあるんでしょ。何かいろいろやることも多いんでしょ。」

「いや。俺は院生対局と森下研究会と森下先生のところで打ってもらっただけ。」

「俺は院生対局と九星会だけだけど。」

「じゃあ、進藤君が一番忙しくないかい？」

白川が可笑しそうに言いました。

「何、ヒカルはそんなに忙しいのか。一体、何をやってるんじゃない？」

平八が言いました。

「ん。それは。いろいろあるでしょ。ほら。」

さすがに平八も、ああそうかと気づきました。

名人と緒方と白川。ネット碁の中国のプロ。泉への指導碁。パソコン取得のためにやっている英語の勉強。習字とお茶は小学校が終わるまではやめてはいけないと美津子に釘を刺されていました。

ヒカルは、平八がそれ以上言わないので、ほっとして続けました。

「それに学校もあるよ。来週は連合運動会なんだよ。雨で延びちゃって来週。俺、選手に選ばれちゃったから、居残りで練習させられて。」

「ヒカルは何に出るんだ？走るだけじゃないのか。」

「うん。リレーと走り幅跳びだよ。」

「進藤って体育得意なんだ。」

和谷の言葉に、ヒカルは少し渋い顔で言いました。

「というより、体育以外で得意な科目はないんだよ。後は給食の朝食だけだって皆に言われてるんだ。」

冴木も伊角も思わず笑いだしました。

「和谷君は、とりあえず2学期中は早朝対局は続けられそうだね。」

「あとは時間かかるけど、どこかで打とう。ここでもいいけど駅から少し遠いし、俺んちの方がずっと近いよね。後は他にどこか打てる場所があれば。お休みなら俺んちに泊まってもらっても構わないけどさ。二人は無理かな。そんなに大きくないから。俺の部屋。」

「泊まるんなら、うちに泊まってもらっても構わんよ。泊まり賃は気にせんでいいから。わしと一局打ってくればいい。」

「泉さんみたいだね。じいちゃん。」

ヒカルは笑いました。泉って誰なんだろうと和谷と伊角は思ったのですが聞きませんでした。他にもいろいろ聞きたいことがいっぱいでした。

「とりあえず、顔合わせは済んだし、今日はこれでお暇しよう。」

白川が言いました。

「うん。じいちゃんまた来るからな。みんなには帰りに俺の家を教えるから、そうすればこれから来れるでしょ。」

白川は、ヒカルの家で美津子に挨拶して言いました。

「時々この二人が進藤君のところにお邪魔することになると思いますが、よろしくお願いします。」

「嬉しいわ。お二人とも、ヒカルの碁を打ってお友達ですね。どうぞ、いつでも気軽にいらしてくださいね。」

34. 叶うかもしれない

白川とは途中で別れヒカルは二人を送って駅に向かいました。

「この道が一番近いんだけど、大通りからまっすぐ来た方が、迷わないかもしれない。どれも同じような家だからさ。ここらの家。」

和谷は言いました。

「進藤ってさ。」

それから黙りました。

「何?」

「いや、お前って強いじゃないか。俺たちと打ってって、本当に楽しいのか?俺たちをプロにしたいって、それ白川先生に頼まれたんじゃないのか。」

ヒカルは少し黙りました。

「ちよつとどつかで話できる?俺は急いで帰らなくても大丈夫だけど。和谷や伊角さんはここから帰ると遅くなるでしょ。」

「俺たちは小学生じゃないからな。大丈夫だよ。じゃ、あそこにしようぜ。」

和谷が駅前のマックを指しました。

「俺、お金持ってないよ。」

「今日の対局のお礼っていうことでいいんじゃないか。」

伊角がそう言いました。

トレイを置いて、三人でテーブルを囲むと、和谷は言いました。

「俺、昼はおにぎり一個だったから、腹が減ってさ。」

ハンバーガにかぶりついて一息つくつと、和谷が言いました。

「で、さっきの話の続き。」

「うん。その前に。和谷も伊角さんもいつごろから碁を始めたの、何で院生になったの?まずはそこから。」

「俺は家族が碁を打つんだよ。おじいさんも父も。それで俺も子ども頃から碁を打っていた。小学校の時、大会があつて優勝したんだ

よ。それで九星会に誘われて、院生試験受けて、プロになりたいと思ってるよ。碁をずっと打ちたいもの。」

「俺は幼稚園の時、碁を打つ友達がいてさ。伊角さんの家みたいなの。一緒に遊んでいるうちにのめりこんで、そいつはもう引越しちゃったんだけどな。俺も伊角さんみたいに小学校の大会に出てさ、その時、大会の手伝いに来てた森下先生に目をつけられて、弟子にしてもらったんだ。」

ヒカルはじつと話を聞いていました。

この二人と話していると何か思いつきそうな気がする。大切なことを。顔を合わせて打っていけば、何かが起きるんじゃないかって、そんな気がする。zeidaだけじゃなくて、伊角さんが一緒に付いてきたのも偶然じゃない気がするんだ。俺には。

「進藤はいつから碁を打っているの?」

「俺? 五年生になる前の春休みから。まだ二年経たないよ。」

伊角も和谷もあんぐり口を開けました。

「それ言うって嘘だって言われるんだよね。でも嘘じゃないよ。春休みに白川先生の囲碁教室に通ったのが初め。すぐその保健センターでやってる。理由はいろいろあるけれど、一番はお母さんが敬老の日のプレゼントでおじいちゃんと碁を打ってあげたらって言ったから。ゼロから教わって、でも二、三ヶ月で様になってきたから、試しにじいちゃんの家に行って打ったんだよ。そうしたらすすごく喜んでもらえてね、毎日打ちにこいつて言われて毎日行ったよ。で、九子置きから始めて半年で置き石無になった。言っとくけど、じいちゃんて、アマの全国大会に関東代表とかで出たことあるんだよ。」

じいちゃんより強い人と打ちたくて。その時、白川先生が森下先生に紹介しようとしたら忙しいからって断られたんだ。そこで白川先生が俺の面倒を引き受けてくれたわけ。」

伊角が恐る恐る聞きました。

「進藤は今も白川先生とだけ打ってるのか? それだけでそれだけ強く

なれるのか。」

「ネット碁を始めるまではそれだけだよ。でも、ネット碁を始めてからいろいろの人と打つ機会が増えた。和谷もその一人。だけどね。」

ヒカルは考えました。白川は話すなど言いませんでした。ヒカルの好きにさせたのです。

こいつらに嘘はつきたくないし、でも今は名前は今は言えないよな。

「俺パソコン借りてるって言ったけど。知り合いの知り合いなんだ。その人。IT 関連の仕事をしながら、ネット碁も楽しんでいる人。この近くにオフィスがあつてね、そこで初めは放課後打たせてもらった。和谷が朝打ちたいっていうのを見て、お母さんに掛け合つてくれて、パソコン、リビングに置いて半年だけ打たせてもらえることになったんだ。」

その人が教えてくれた有料サイトがあつて、そこにすごく強い人がいる。

たぶん中国か韓国のプロ。その人とも時間を決めて打ってもらえるようになったんだ。ずっと打ってるよ。

それとは別の伝手が、ネット以外でたまたまあつて、二人のプロ棋士の人と打てるようにもなった。ネットじゃないよ。碁盤を囲んで。その人たちも白川先生みたいに凄く強いし、俺はもちろん、一度も勝てないけどね。鍛えてもらっている。それで毎日、忙しいんだ。

あと、そのパソコンを貸してくれてる人と毎回対局してるし。それは指導碁なんだけど、学生名人とか本因坊だったこともある人で強いんだよ。結構ためになってるよ。」

伊角も和谷もしばらく何も言わず、それからため息をつきました。

こいつって運がいいのかな。いや元々才能があるから、それだから人が集まってくるんだろうな。こいつが打つてて楽しい、プロになつてほしいって言うてるんだから、俺たち見込みあるのかな。

「進藤。よろしくな。」

「うん。よろしく。みんなで頑張ろうね。プロになったら、仲間であ

イバルだからね。」

「お前は来年のプロ試験受けるの？」

「来年は受けない。再来年からかな。来年、もしかして中国棋院に連れてってもらえるかもしれないんだ。一週間ぐらいだよ。俺行ってみたって頼んだんだ。観光はなし、あつちの院生と碁を打つだけの武者修行だよ。」

和谷は飛びつきました。

「俺も連れていってくれ。金かかるのかな？」

「出世払いでいいんじゃないの。そんなに高くないと思う。」

伊角は躊躇いました。中国って強いんだろ、そんなところで打てるんだろうか、みつともない無様な碁を打ちたくないという気持が頭をもたげてきたのです。

「本当に連れて行ってもらえるかは、分からないよ。でも頼んでみるね。泉さんに。本当だったら、後二人一緒に行きたいって言ってるって。その前に二人とも、冬休み、俺と合宿して打つ気ある？朝から晩までだよ。ずっと。」

伊角と和谷はホームのベンチに腰かけていました。

「和谷。今日はありがとうな。来てよかった。」

「うん。俺も。あいつに会えてよかったよ。あんな奴がいるんだな。来年は試験受けないって言ってたから、俺たち頑張らないといけないのかな。あいつ、この次どんなことするのかな。」

「お前のところの冴木さんにしたみたいなの。ああいうのじゃないか。ってか、普通に打って検討するんだろ。」

二人はしばらく黙りました。和谷がぼそつと言いました。

「正直、俺、ついて行けるか心配だよ。でもあいつは俺と打っていて楽しかった。そういつてくれたし、俺をプロにしたいって言った。信じて付いて行くしかないよね。」

「和谷。あいつは飛びぬけているよ。だからって、あいつに追いつかないからって、俺たちが、プロになれないわけじゃないと思う。それより、俺は自分の弱さを痛感したよ。今日、初めて会ったのに、話もしないのに、あいつは俺のこと見抜いていた。でもあいつは、俺のそ

ういうとこを叩くわけじゃなく、かといって、手を抜くわけでもなくてさ。俺は今ほただもつとあいつと打ちたい。打ってもらいたい。ただ、そう思っているよ。」

「うん。伊角さんが、あがってるから心配したんだけどね。すごいよな。あいつ。」

それから和谷はまた言いました。

「あいつさ。白川先生以外に、二人のプロの人に打ってもらっていいって言ってたよな。一体誰なんだろう。あいつ勝ったことがないって言ってたよな。白川先生みたいに強い人だつて。」

伊角が考えるように言いました。

「確かにあいつ、強いし、読みもすごいけど。当たり前だけど、白川先生には勝ててないんだろ。最近、白川効果って言われているけど、白川世代の棋士が何人もリーグ入りとかしてるだろ。俺はそのうちの誰かじゃないかって思う。白川先生の親しい知り合いとか。弟子取ってるのを知ってて、鍛えるのを手伝って打ってくれてるとか。」

「うん。そうかもな。」

そう相槌を打ちながら、何となく違う気もしました。

勿論進藤が誰と打っているか、当然白川先生は知ってるんだよな。でも教えてくれないのはなぜだろう。秘密？

まだ、森下先生に紹介してないからか。大体何で、いまだに森下先生に会わせないんだ？よくわかんねえよ。でもさ、あいつ、隠し事得意じゃなさそうだし、何たって、小学生だしな。そのうち、一体誰と打ってるのか絶対、聞き出してやる。

そう思った和谷でした。

35. 思惑、わくわく、想い湧く

幽霊さんこと、佐為の周囲は少しづつ変化し、いろいろな現実が進んでいました。

でもそれは人間の側の変化です。

佐為がそれに興味を持てば何か変わったでしょうか。

今のところ、それは佐為に何も、もたらしませんでした。

ただ律儀な明子のおかげで、ネット碁は、ずっと続けていました。

twinkle騒動で、行洋との間にあった隙間が埋まったため、

明子に気持の余裕が出てきて、佐為のために時間を取ることがそれほど苦痛ではなくなったのです。

それもこれも進藤君のおかげだわ。

明子は考えました。

進藤君って、そんなに有望なのかしら。夫も緒方君も呆れるほど執着してるわ。

緒方君はともかく、夫が進藤君に夢中になっているのを見ると少し妬けるわ。

進藤君から碁を教わったんだから、私って進藤君の弟子ってことにならないかしら。

今度聞いてみようかしら。正式に弟子にしてつて。立派な三角関係よ。ちよつといいわね。うふ。

塔矢家を変えた出来事は、もう一つ、アキラがプロ試験を受けると決めたことでした。

これで中学受験が終われば、ほぼ自分の役割は終わるのね、と明子は思いました。

もちろん子どもだから、お食事や着るものこととか、日常いろいろしてあげることが続くでしょうけどね。

でもアキラさんの将来はそれで定まってしまうのですものね。滅多なことでは辞めることのない仕事よ。

明子は息子がタイトルホルダーになることには執着がありませんでした。

夫がそういったことはすべてやってしまったせいでしょうか。

夫が息子に相当な期待を寄せていることは知っていましたから、才能があることは分かっていました。

だからのんびり構えていられるのかもしれませんが。

穏やかな生活ができれば一番でしょう。夫がアキラさんに何を期待しているのか、わからないけれど、別にタイトルとらなくても、みなさん、それぞれ家庭を持って立派に生活されてるじゃありませんの。森下さんだってそうでしょ。

それより、今は進藤君が緒方君にいびられていないか、ちよつと心配よ。白川さんと緒方君は今棋聖の挑戦者を目指して争ってるでしょ。緒方君で、そういう時に対抗心むき出しになるから暴走しかねないわ。何があっても私は進藤君の味方ですからね。

そのヒカルは忙しい日々を送っていました。ひと皮むけてきたヒカルにとって白川は実に有益な師匠になっていました。ヒカルがひと皮むけたとすると、白川はひと皮もふた皮もむけた感がありました。

白川は、緒方とは一線を画し、ヒカルのことについては、全く話すことはありませんでした。が、白川は平八の家で行洋とは打つこともありましたし、ヒカルも交え三人で検討をすることもありました。

棋界関係者が見たら、さぞかし不思議に思う光景でしょう。

竹林で中国のプロとの対局、泉に対する指導碁、しかも英語の勉強はパソコンを手に入れるために必須でした。

碁はともかく勉強の方はあかりがヒカルの家庭教師のように面倒を見て一緒にやってくれましたが。

今は、そこに伊角と和谷と、時々冨木との打ち合いが入り込んで、目の回るような忙しさでした。

緒方は、ふつとため息をつきました。名人戦の挑戦権は畑中に行きましました。

王座戦も天元位も挑戦権を逃してしまった。今年ももう終わる。

そんな頃でした。

明子は緒方がヒカルをいびっているのじゃないかと心配してましたが、その心配は無用でした。ヒカルと緒方の関係は微妙でした。それは緒方が佐為に執着したのと同じように、ヒカルに執着しているためでした。やはり粘着質なのです。

ヒカルは緒方が、ポーカーフェイスが苦手なことを知りました。だからといって、それでどうかするということがないのがヒカルでした。

緒方は感じました。

こいつのような奴ばっかりだったら俺もネット碁を打つ時のように打てるのに。

あの桑原の爺。

「全く自分がいやになる。」

緒方は声を出しました。ヒカルには、それだけ安心して心を開いているのでしょうか。

「なにがいやになるの?」

盤面をじつと眺めながら、ヒカルは、聞きました。

「俺は顔にすべて出るのだ。対局中に。」

ヒカルは顔をあげて、緒方を見ました。

「俺、打っている時、対局者の顔を見るなんてそんな余裕ないよ。たぶん、緒方先生の表情を読める人って、それだけ余裕のある棋力の持ち主だよ。ということ、表情を見たからどうかするなんて必要ないよ。その人の打つ手に緒方先生の表情は影響しないと思う。きつと。でも緒方先生の方には影響するんだよね。自分が顔に考えを出しているっていう気持が、先生の手に現れちゃうんじゃないの。」

緒方は苦笑しました。

上手の俺に向かつて、言うこととは思えないが、あまり腹は立たない。得な奴だ。

それに、こいつの言うことは半分は当たっている。俺と渡り合う奴らは、俺が気持を顔に出すのを分かっている、盤外戦を仕掛けてくるが、結局俺がそれに乗ってしまうだけだからな。

顔に出てもそれと打つ時の心持というのは意外と切り離せるかもしれない。全く俺の問題か。相手を気にしないか。顔に出ることをそういうもんだと割り切ればいいのかもな。

緒方は、全く表情を変えない師匠と先ごろプロ試験に合格したその息子を思い出しました。

アキラ君も同じタイプかな。いや、父親を見習いたいと思っているんだな。

アキラ君は本当に悔しい思いをしていないからな。これからだな。まあ、低段者は相手にならないから、当分はポーカーフェイスもできらるだろうが。

そのてん、進藤はどうなんだろうか。ポーカーフェイスでは、ないわな。素直に気持を表しそうだが盤外戦は効かないな。対局に集中して、余計なことは一切考えない奴だからな。

こいつは一体どういう生活を送っているんだろう。まだ12年ほどしか人生を送ってないのに。何考えてるんだか時々めまいがするな。やはり小学生だと思ふ時もあるが、いやに大人っぽい感じがする時もある。

アキラ君の場合は大人ぶっているわけだが、こいつはそういう時、自然に大人なんだな。もう何度も盤を挟んで打っているのに、話もしているのに、こいつについては、知らないことがまだまだある。不思議な奴だ。俺はこいつの何を知らないのだろう。

「進藤。俺に何か隠し事してるか？」

緒方はずばりと聞いてみました。ヒカルはちよつと考えました。

「話してないことはたくさんあると思うよ。それが隠し事なのかは分からないけれど。」

「碁のことですか？」

「うん。それもあるし、他にもいろいろ。」

「お前は、まだ俺の半分も生きていないのに、いろいろか。それは俺に関係するか？」

「関係するって言ったらするのかな。関係ないって言ったたら関係ないかも。でもなんで俺のことなんかそんなに気にするの？俺、まだそこ

まで強くないのに。」

緒方は違う方向から攻めてきました。

「進藤は、この前は、約束の日を変えてくれって言うていたが、何かあったのか？」

「この前？えっと。連合運動会だった。ずっと雨で順延になつてたんだ。俺、選手だったから。ずっと放課後、練習させられたりして、随分大変だったよ。」

「かけっこか？」

「うん。リレーもやった。それと走り幅跳びにも出た。リレーは、俺、アンカーだった。」

「そうか。お前は小柄だけど、運動が得意なんだな。」

「うん。体育だけが取り柄って言われてるよ。俺、別に受験しないし、いいんだ。」

「そう言えば、相変わらず、森下さんに紹介されていないのか。」

「森下先生？うん。もう少し先で構わないって、白川先生はそう言ってる。今でも何かと忙し過ぎるからって。中学生になったら、俺、習い事とか、いろいろ整理するんだ。そうしたら少し余裕ができるし。」

「何？進藤は何か習い事してるのか？」

「別にどうってことないよ。お習字とお茶だけだし。あと、英語でしょ。中学になったら、パソコン買ってもらえそうだよ。そうすると泉さんのところも行かなくてよくなるから往復の時間が減るかな。それだけでも随分すっきりしそうだよ。」

緒方は他のことはともかく、習字とお茶という言葉に啞然としていました。

「進藤。これは筆ペンだが、これで何か書いてみる。この新聞紙でいいから。」

「何を書くの？俺、漢字、苦手だよ。」

習字を習っているという割には、心もとない返事です。

「何でもいい。自分の名前とか小学校の名前でいい。」

ヒカルは筆ペンを、手に取り、少しいじくりまわしてから、傍にあった新聞紙を広げ、名前と小学校を書きました。

「葉瀬第三小学校 六年 進藤ヒカルつと。これでいい?」

うーむ。嘘じゃなさそうだ。なかなか味のある慣れた字だ。こいつの碁みみたいな文字だな。驚いた。

「それで、お茶っていうのは何だ?」

「お習字の先生がさ、お茶の先生もしてるんだよ。だからお習字の後で簡単にお茶の作法を覚えてくれるんだよ。お点前とかは、一緒に習字をやってる他の子がするから。俺は飲むだけだから正式にはやっていないとは言えないかも。でも毎回、お菓子が食えるから続けてるんだ。正座もするけど、それは碁を打つ時の役にも立ってるから、良かったよ。」

ヒカルは澄まして言いました。

「習い事の清算か。いずれ、お前との碁も清算されるのかな。これも習い事かもしれんな。お前には。」

緒方は自嘲的に呟きました。

ヒカルはそういう緒方を気にもせず、言いました。

「俺がプロ試験受かったら、今みたいにしよっちゅうは打たなくなるでしょ。緒方先生とは。きっと。でもこれを習い事とは思ってないよ。先生が思っただけなのに。」

白川先生はね、いろいろなうわ手の人に打ってもらうのは俺のためになるって、これからの若い人たちは、門下とかを気にしてはいけないうんだって、そういうんだ。」

「そうだな。それは俺もそう思うよ。ところでお前がプロになるというのは。いつだ?それは。」

「再来年かも。落ちるとは思いたくないけれど、中学生の間にプロになりたいな。受験したくないもん。」

こちらは中国棋院。主のように暮らすヤンハイは二人部屋を一人で占拠してし、独り言をつぶやきながら、何やらやっていました。

「ヤンハイ。何をぶつぶつ言ってるんだよ。またネットで遊んでるのか?」

「遊んじやいないよ。俺のスポンサー予備軍に貸しを作ってるんだよ。だがなあ、貸しと思っていたら、これがまた何とも面白いんだよ。日本にもこれだけ刺激的な碁を打つ奴がいるのかねえ。力の点では、まだ俺の比じやないがな、数年先にはどうなるかな。伸びる先が楽しみだよ。こいつ、一体どこまで行くんだって気がする奴なんだ。下手な手も打つけれど、これはという手も多いんだぜ。おい、ちよつと見てみるよ。この打ち方をさ。相手はホアソンリーだぜ。あいつが押されてるんだぜ。ここに打った石が効いてるんだ。」

「うーん、なるほど。日本にも少しは強いプロがいるんだろうさ。」
なめられたいい方です。

「いやいや。どうなのかな。その俺のスポンサー候補が、ネット碁だからお互いの素性は明かさないことにしてますと言うんだ。でも最近な、こいつに会わせてもいいって言い出したんだ。ここ。棋院だけどな、ここでしごいてくれたらって条件でさ。それってプロがやると思うか？」

「日本から勉強に来るやつもそれなりにいるよな。でも、その話、面白いかもな。身が入らないちびつこたちに少し活を入れて、刺激与えられるかも。もしも、アマがこんだけ打てるってんならな。」

「師範に許可もらっておくかな。」

俺は、日本の奴で、もうひとり、素性を知りたいのがいる。ワールド囲碁ネットに。

そいつは恐らくプロだろう。二、三日に一回くらいしか、顔を出さないが、そこそこ強い奴を選んで、打っている。そいつはほとんど負けたことがない。負けたのは2回ぐらいじゃないか。

俺も一回打ったが、すばらしい打ちまわしだ。俺の神の一手プロジエクトに役立ちそうなやつだ。顔を出す回数が少ないので、あまり騒がれないが、プロだとしたら誰なんだろう。

ヤンハイは、自身が知る日本のトッププロの顔を思い浮かべ、いやいやと、首を横に振りました。

その時、無意識のうちに、ふと呟いていました。

「あの twinkie が力をつけていけば、sai のようにな

るんじやないか。」

36. 肅々と合宿

ヒカルは、和谷と伊角と、平八の家に二週間泊まって、ハードな合宿を行う約束を取り付けました。

全員、それまでに宿題を終えておくこと、大掃除を済ませてくること、大晦日と元旦は、家に戻ることが条件でした。

和谷も伊角も20日には、やってきました。

平八の妻も、美津子もなぜか異様に張り切っていました。

「ヒカルも可愛いけれど、何かとよく気が付く和谷君もいいわ。平八さんの若い頃に似てないかしら。」

「私はお義父さんのお若い頃は知りませんから。何とも。」

それに和谷君じゃあ、ヒカルが二人になったみたいじゃないの。

私は絶対伊角君がいいわ。背も高いし、イケメンよね。それに高校生というのは大人よ。でも純真なところもあって、可愛いわ。

お義母さんと趣味が一緒じゃなくて本当に良かったわ。待って。もしかして正夫さんて、お義父さん似じゃないでしょうね。

まあ、それは置いておいて。あの奥座敷に籠りつきりって、お勉強もそれぐらいやれば、海王中ぐらい受かりそうよね。押し入れに布団を三組でしょ。碁盤が二つ。他は何もないんですって。洗濯機を貸していただければ、洗濯は自分たちでします。風呂と奥座敷の掃除は自分たちがします。夕食の片づけもしますですって、ヒカルにも、見習わせてやらせなくっちゃ。

さて、約束の初日、伊角と和谷は荷物の整理もそこそこに、早速、碁盤の前に座ったものです。

「進藤が来る前に一局打っておこうぜ。早碁だ。」

「いいぜ。」

「あれ、二人とも早いね。夕方かと思ってたよ。」

夕食前に、平八の家に来たヒカルは、二人の気合の入りようにびっくり、大喜びでした。

合宿は極めて順調でした。

「そこでなくて、ここ。そこも悪くはないかもしれないけど、上手の相手には効かないと思う。ここの方が先の広がり大きいから。」

左が薄くならないかと、和谷が躊躇うと言いました。

「和谷の力ならいける筈だ。これに慣れなくちゃ。これからずっと打っていくんだったら。」

ヒカルはふと思っていました。

懐かしいな。こんな風に碁のことだけ考えて、朝から晩まで打つて。いろいろなこと指摘されて……。今は俺が指摘する側なんだ。

えっ？俺、何を考えてるんだらう。懐かしいような切ないような。胸がキュンとするような。

ヒカルは頭をぶるんと振ると言いました。

「おかしいとか、こつちの方がいいとか遠慮なく言つてね。何でも検討してみなくちゃね。」

「こつこつ。こつちちに置いた方がよくはないか。」

「そうか。こう打つとどうなるんだらう。続けてみようよ。」

食事の時も、碁の話ばかりでした。

平八は頭をひねるように言いました。

「伊角君は院生一位っていうのに、なぜ落ちるのかねえ。見たところ、凄く強いじゃないか。ヒカルも、もう追いつかれてるんじゃないか。」

「うん。追いつかれるっていうより、元々強いものね。伊角さんの場合は、気持の持ち方が一番だからって、白川先生が言ってたよ。」

「俺は？」

和谷が自分を指して言いました。

「そんなの、和谷がじかに聞けばいいだろ。兄弟子なんでしょ。白川先生は。俺より付き合いい長いんでしょ。」

伊角が言いました。

「俺、緊張してあがる癖があるんだ。普段はあがったって、問題ないと思うけど、碁を打つ時は致命傷だよ。」

「人っていろんな癖があるよね。盤外戦でいきりたったり、上手く打

てたとか、まずったとか思っつて、すぐ顔に表したりとかも。緊張して力が発揮できないっていうのもあるんだね。俺、それって、訓練すれば、乗り越えられると思うんだ。」

「性格が訓練で変わると思うのか？進藤は。」

「ううん。きつと性格は変わらない。あがるのは慣れで、いつかは克服はできるかもしれないけど。」

ただ碁を打つことに限って言えばさ、それって、今打っている碁そのもの以外の何かに気持が行ってるってことだよ。だったら集中するしかないよ。毎回、今打ってる碁のことだけに。

これに勝てば合格だとか、もしかしてプロだったら、リーグ入りだとか、タイトルとれるんだとか、そういうことに頭が行くのは当然だと思う。でも打ち始めたら、もうそれはないんだ。碁を打った結果として、それはついてくるんだから。

打ち始めたら、ただひとつ、盤の上では自分がいかに相手をしのいで、相手の考えていることの上を行くか、よくなければ今の局面をどうやって追いつくか、そういうことに集中するしかないよ。ヨムことに集中すると、もう他のことは考えられない。

少なくとも俺はそれほど器用じゃないからね。

集中することで先につながるんだもの。それは合格したい、上に行きたいと思うよ。おそらく誰もが。でもそれで今打っている碁にそれ持ち込んで、どうするの。

俺は。伊角さんも和谷も、切り替えて集中する訓練を積みあげ、もつともつと強くなれると思う。俺もいつでも集中し切れてるわけじゃないけど。でも頑張つてその力をいつも磨いてるつもりだよ。それでも負けるのは今の自分の実力ってことで、しかたないと思う。

とにかく、反省はしても、後悔しない碁を打とうよ。二人とも。」

次の日は終業式ということで、ヒカルは夕食を終えたと家に戻りました。

「伊角さん、さっき進藤が言っていたことどう思う。」

布団を敷きながら、和谷が言いました。

「俺、思い当たるよ。よくさ、雑念を払って集中とか、合格とか考えるとかいわれるんだけどさ。進藤のはちよつと違うんだな。打つ前はいろいろ思うのは当たり前だけれど、打ち始めたら、それを切り替えるっていうんだな。それが訓練しだいって、ひとつの習得できる技術なんだって言うてるんだな。」

相手が誰かとかいうのに惑わされてはいけないうのも。あれ聞いてて、俺、なんだか力湧いて来て、やれそうな気がしてきた。「そうだな。俺、さっきの聞いて、進藤がなぜ急いでプロになるって言わないのか、少しわかった気もした。あいつは自分が納得のいく碁を打ちたいっていうのが一番にあるんだな。」

それに危なっかしい空中戦みたいなのを俺たちに打たせるだろ。あれもいずれ、ああいう碁を打っていかなければ、この先やっていけないって言うてるんだよな。今それを思いっきり打ってみて、ここで失敗したり、いろいろ経験して、その力を手にするっていうことなんだな。あいつも、今まで、そうやって打ってきて、あそこまで打てるようになったんだって、そういうのが見えてきた気がする。この合宿で。」

「実際、進藤もしょつちゆうつまずいているよな。ここで打ち続けていて俺気が付いた。あいつは、今のところ俺たちの中では、絶対的に強くもあるけど、でも本当は、いつも強いつてわけじゃない。必死で考えて打っているんだって。でも、ただ勝てばいいとは思ってないんだよな。自分が狙うとおりの碁を打ちたいんだな。そのために訓練してる。そうだな。反省はしても後悔はしない碁か。」

「まだまだ時間はあるから頑張ろうぜ。あいつ、でもなぜ、そこまでやってくれるんだろう?」

「俺は、おまけで来たんだけど、和谷って秀策スキーだろ、進藤もそういうところがあるんじゃないか、前に言ってただろ、和谷の打つ手が嫌いじゃないって。それに、あいつ、ライバルを作りたくないじゃないかっていう気がする。ライバルっていうか、碁を打つ仲間、切磋琢磨する仲間。九星会なんか、そういう仲間意識はあるんだけど、進藤が望んでいるのは、もつと親密な高め合う仲間なんだろうな。」

大晦日の夜、家に戻った和谷は翌日師匠の家に挨拶に行き、帰りに一緒になった白川に言いました。

「進藤に伊角さんが聞いたんです。白川先生とだけ打って強くなったのかつて。そうしたら進藤はネットの中国のプロ棋士の外に日本のプロ棋士二人に打ってもらっているって言ってたんですけど。その二人にまだ一度も勝てたことないって。それって誰なんですか。白川先生は知っているんですか。」

白川は少し笑いしました。

「そうだね。進藤君のことだから、君たちが進藤君の目に叶うとこまで来たら、きつとそのプロ棋士たちと打たせてくれるんじゃないかな。特訓の総仕上げっていうところかな。まずはプロ試験を目指して、頑張ることだよ。謎はいずれ明らかになるさ。それに和谷君がプロになってくれないと、僕も森下先生に進藤君を紹介できなくて困るからねえ。今年は期待しているよ。」

合宿の最後に持ち時間三時間で、和谷と伊角は打ち合いました。その日は白川も来て、その碁を見ました。

「前に見た時とは全然違ってるよ。二人とも。よく頑張ったね。」

「これだったら、春休みの武者修行も大丈夫じゃないかな。ね、伊角さん。」

ヒカルはそう言いました。

「うん。楽しみにしてるよ。前は、中国棋院なんて、そんなところへ行って大丈夫かなんて、びびってたんだけど、今は碁に国境なんてないんだって、そう思える。」

「今度、泉さんに二人を紹介するんだ。」

「二人とも、武者修行に出る気概が備わったわけだね。」

「うん。二人とも、もともとちゃんと打ってたんだから、俺のすることはそんなになかったけどね。」

ヒカルは続けました。

「それで、今度から、伊角さんもパソコン導入、和谷と交替で早朝対局するっていうんだよ。俺は二人を竹林に紹介したいと思ってるんだ。」

けど、ちよつと料金高いしね。そうそう、お母さんが折れて、俺もパソコン手に入れたんだよ。リビングにある奴はそのまま、買い取って、お母さんとお父さんが使ってる。お母さんなんて、それで家計簿つけ始めちゃって。」

ヒカルは、楽しそうに笑いました。

俺がやっていることはあっているんじゃないか。そういう気がするよ。

俺探せるんじゃないかな。見つけたいものを。もうすぐそこまできてる気がするよ。

37. 才チ、付かないのが落ち着かない

アキラの新初段戦は、一柳棋聖との組み合わせでした。棋聖位を早々防衛した三月の初めに行われました。

囲碁界のかつての栄光を求めてやまない事務局の坂巻は、塔矢アキラに過大な期待を寄せていました。

以下は坂巻の好みが反映した個人的な感想です。
ひとつ。

最高のスターを手に入れた。見栄えもいい、しかも最近の若者のような浮ついた格好をしていない。

制服のある私立の小学生ですし、休みの時も単に明子の趣味の服を着ているだけでしたが、明子と坂巻はファッションセンスが一致しているのでしょうか。明子がそれを知らないのは僥倖でした。
ひとつ。

挨拶にもそつがない。そもそも11歳でプロ試験に全勝合格したのだし、実力も十分、しかも四冠を維持している塔矢先生の息子さんだ。

坂巻の頭には、輝ける未来が見えていました。新初段戦の組み合わせが、決まると、早速一柳に挨拶に行きました。

棋院で坂巻に「新初段戦よろしくお願ひします」と呼び止められた棋聖は、「ははん」と思いました。

坂巻君が塔矢さんの息子に並々ならない肩入れをしていると聞いているけれど、まさか新初段戦についてまで口出しかい？それはどうしたものかねえ。

私の門下が聞きこんできたところによると、彼は、何でもプロ5段ぐらいの棋力はあるらしいけどね。ミニ塔矢行洋というところなかね。

うちのかみさんは言ってたんだが。子どもが棋士にならなくて、本当によかったって。一柳ジュニアは一流かいなんて言われてほしやったらいやだとか。まあ、それは私が言ったことだけだね。

塔矢さんは、抜かりないからね。子どもがぼしやるなんてことは、

まず無いだろうけどねえ。

私は内緒だけど、実は新初段戦なんて、くだらないからやめちゃえばいいと思ってるんだけどねえ。

それを作った頃は、プロ試験に受かったばっかりのは、すべてひよっこばかりという頭があつたんだろうけどね。確かに、今までは実際ひよっこばかりだったがね。まあ、シヨウなんだから、楽しく面白くでいいんじゃないの。でも上の棋士がポカして、ボケかますっていうのも毎回じゃあ、どうかとは思うけどね。

いつそ塔矢さんと父子対局にすればいいんじゃないの？盛り上がるよね。

一柳の頭の中では言葉がポンポン溢れていましたが、実際には一言、言ったきりでした。棋聖に相応しくない反応でした。

「そうだねえ。盛り上がるといいねえ。」

坂巻は少し拍子抜けしました。

あの一柳先生がどうしちゃったんだろう。

その一柳の頭は、どうでもいい新初段戦ではない、全然別のことでいっぱいなのでした。

この前、緒方君を思いつきり、からかっちゃたからねえ。緒方君、よっぽど頭来たのかもしれないが。でも私は、桑原先生程じゃないのにねえ。緒方君もしつこい男だねえ。江戸の仇を長崎でとか何とか、とにかくネット碁で、対局を申しこまれちゃったのよ。

それが三日前のことでした。

相手は、アマチュアですが、是非、指導してやってくださいと。でも緒方君のことだ。何かあるに違いないとは思ったが、負けちゃったよね。

全く、軽い気持ちで打ち始めたのがいけなかったよ。相手は序盤から思いつきり飛ばしてきたねえ。

ありや、私の勘だが、緒方君より断然筋がいいよ。アマチュアだということ、プロになったらどうなるのかねえ。

相手が新初段戦で当たったら、やだねえ。逆コミだなんて。それじゃあ、楽しめないよ。

まあ、次の日緒方君を呼び出して聞いてみたはいいけれど。あの相手は、間違いなくアマチュアだっというんだよね。プロでああいう感じの碁を打つのは全く知らないしね。そう、なんというか、新感覚とでもいうのかな。この先実力のある若手の間で、はやりそうな手になるかもしれないよ。

緒方君、あの時、一言、言ったんだよね。「アマチュアだろうと、子どもだろうと侮れませんよ。」

もしかして緒方君もやられた口かねえ。

それで、もしやと思つて、あれは塔矢さんの息子さんかいと聞いたら、「試験に受かった時点で、私はプロだと思つてますよ。」だつてさ。要するに違うんだね。

「言つてくれるねえ。会つてみたいねえ」と言つたら、「そのうち、プロにでもなつたら、いやでも対局できますよ、そう、タイトルリーグで、すぐにでも」と、きたもんだ。

だからさつき、塔矢さんに会つた時に聞いてみたんだ。

緒方君は、ネット碁に嵌つてるのかねと。

何と塔矢さん、私が打つた碁を知つていたんだね。緒方君が教えてくれたらしい。

緒方君は会わせてくれないんだけど、塔矢さんどう思うつて聞いたら、良く知りませんがチャットとかいうのがあるそうですから、聞いてみたらいいのじゃないですか。私はどうもパソコンとかそういうのは苦手です。

そういや、塔矢さんは、携帯電話も持っていないんだつてねえ。

ということはやっぱり緒方君の嫌がらせかなあ。そう呟いたのよ。

そうしたら塔矢さん、いやいや、こんな対局を経験されるなんて一柳さん。ネット碁というものは案外いいものじゃないかと思ひましたよ、私もやつてみたくなりましたよ、だつて。いうんだよねえ。

今度は思いつきり手を抜かず、打つてみたいねえ。

私もそう言つてしまったよ。

で、早速緒方君に聞いてみたんだ。あの相手と、どこで会えるのか。そうしたら、何でも有料のサイトがあるんだと教えてくれたよ。

あまり、ワールド囲碁ネットには現れないらしい。

私はちよつとは遊ぶけど。そこまで、ネット碁、詳しくないんだよね。

でも早速そのサイトに申し込んだよ。

そうしたら、件（くだん）のあいてがいるんだよね。

緒方君の言い方じゃないが、本当にリーグ戦みたいな対局よ。凄い碁を打ちあつてたのよ。

私は早速申し込んでみたよ。

相手はしっかり私の名前を憶えてくれてたんだね。嬉しいねえ。

そりや楽しい経験をしたよ。私もまったく、タイトル戦を戦っているような気持ちで打ちちゃったねえ。

勿論私が勝ったよ。いや、勿論はなし。とにかく斬新な手を体験したよ。私は、そこまでで、かなり地合を稼いでいたからね。正直、ころうじて勝ったという気もしたよ。

で、チャットをしようとしたら、何と何と。英語しか受け付けなかったことが分かって。あれは日本人なのかねえ。

でもきつと緒方君は、あそこで英語でチャットをしたんだね。で、子どもだって分かった。子どもって言ったって、何歳なのかねえ。プロになるのかねえ。緒方君に少しさぐりでもいれないとねえ。気になつてしょうがないよ。

「進藤君に「柳先生をけしかけたんですね。」

緒方は白川にとつつかまり、思いつきり、苦言を聞かされたのですが、澄ました顔で言ったものです。

「私は、ただ、ネット碁で強い相手を紹介したまででね、それ以外は何も言つてませんよ。一柳先生も進藤の素性なんて一切知りませんから、いいじゃないですか。進藤には良い経験でしょう。」

白川はそれとなく一柳棋聖の様子を窺ったのですが、どこも変わったところはないし、ヒカルのこと知られていないことが分かりました。

やれやれだが、心配だ。まずは私が棋聖位を取る。私にできるのはそれだけだから。

それがヒカルとどう関係するか分かりませんが、緒方に対抗するには、そのくらいいしか道はない白川なのでした。

さてそうこうするうちに、新初段戦の日が来ました。

「これが塔矢君かい。お父さんに似てるかな。未来の名人かい。頑張りなさい。」

「はい。」

もちろん、当たり前ですの意味を込めてアキラはにつこり笑いしました。

おやおや、こういうところは子どもだねえ。楽しいねえ。

一柳は、心の中でちよつと苦笑しました。

さて、対局はスムーズに始まりました。

モニタールームには、芦原と和谷と伊角がいました。編集部の天野が言いました。

「和谷君と伊角君か。気になるかい。やっぱり。」

「そりゃあ。」

「アキラの奴。張り切ってるな。張り切り過ぎじゃないか。」

芦原が言うと、天野は当然といった感じです。

「全勝で試験に通ったんですよ、張り切りもするでしょ。小学生なんですから、素直な気持ちじゃありませんか。」

それを伊角も和谷も複雑な思いで聞いていました。

俺たちの関心は、塔矢と進藤、どっちが強いのかだな。

進藤の方が見た目は断然子どもっぽいけど、中身は大人じゃないか。少なくとも碁を打つことに置いては。

碁は、まさしくお手本のように進んでいました。一柳が、きちんと定石を踏んでくるからでした。

「アキラ、ずっと先手で攻めてきたけれど、ここにきて、気付いてみれば、左辺の攻防は一柳先生の先手になってるね。」

伊角は和谷に言いました。

「ここはもう終わりだな。後は、右上あたりかな？」

対局場の一柳には、既視感がある石の並びが突然飛び込んできました。

何でこんな時に。この前の勝負の分かれ目と同じじゃないか。この形に限って言えばだが。こりや、面白い。これで、塔矢君の技量が図れそうだねえ。

緒方君は、あの時、「私は子どもとは小学生までだと考えてますよ」とのたまわったね。いろいろ仕掛けてくるけれど、緒方君は案外、素直な性格だ。嘘はつけないんだよね。あまり腹黒いことはできない。塔矢さんと一番違うところだね。

緒方君は英語でチャットしたんだね、きつと。

アマチュアの小学生があんな碁を打てるのなら、5段の実力がある塔矢君はどうするね。これを。同じ小学生だよ。ワクワクするね。

アキラは、極めて普通の手を指しました。

そうか。ああ、そうだよ。それが当節一般的な流行りだけれどね。塔矢君は、それが勝につながる手だと思ってるんだね。ま、仮にここがダメでも、他のところが自分に優位だと分かっているということかな。

一柳は、そう思った時に、突然、気が付きました。

考えてみたら、私はずっと、この形を作り出すように、打ってたんだねえ。新初段戦で勝つてもしようもないし、ただ負けるといのは相手の棋士にも失礼だしねえ。だから、やってみたかったんだよね。

これは逆コミだからね。だから、普通は、これで勝てると思うわな。だけど、あのネットの子どもなら、絶対違いそう。私が勝つと分かっても、あの手を繰り返すのだろうか。

あの子も勿論、勝負にこだわりはあるだろうけれど、でも何よりも碁に対する気概だね、全く。うん。気に入ったよ。早く出てこないかねえ。とにかく、これは勝負あったね。

一柳は最後の言葉は口に出しました。

「勝負あったね。塔矢君のこの手で。」

それは一柳の言った意味とは真逆の意味で、受け取られたようでした。

「さてと、塔矢君、初勝利というところで。対局室で取材だね。」

伊角と和谷はちやつかり天野についていきました。

入口には坂巻が嬉しそうに立っていました。

「これはもう少し先まで打てば変わるのじゃないですか。」

芦原が恐る恐る尋ねました。

「そうだねえ。普通の対局ならね、でもこれは新初段戦なんだよ。だからここで終わり。それでは、だめかい。」

「はあ、逆コミ5目半ですからね。」

「いやいや。そういうわけではないが。とにかく塔矢君はよく頑張ってるよ。先が本当に楽しみだ。すぐ上にくるんじゃないかねえ。」

一柳の言葉に、坂巻が嬉しそうな顔をしています。

伊角と和谷は、顔を見合わせました。二人とも先日、一柳とヒカルがネットで打った時、目にしていたのです。

“デジャブ”

一柳先生があれを忘れる筈がない。これはだから逆コミでも一柳先生の勝なんじゃないか。

取り分けて、詳しい検討もなく、対局は終了しました。

伊角と和谷は、そつと部屋を出ました。入口で、飲み物を買おうと、二人でロビーの隅に佇み、黙って飲んでいました。

しばらくしてから、和谷がぼそつと言いました。

「なあ、何で一柳先生は、あそこで止めちやつたのかな。勝ってたよな。先生。逆コミでも。」

「さあな。塔矢を勝たせるように頼まれたとか、それとも。」

「何だよ。伊角さん。」

「もしかして、先生は塔矢の打った手に、がっかりしたんじゃないか？ そんな気がした。塔矢に期待してたんじゃないか。でもありきたりな手を返してきた。そこまで無理に勝つ必要はないじゃないか。ハングのある碁で。」だって、進藤と打った碁に比べたら、今の対局なんて霞んじやうじやないか。

二人は誰も聞いていないと思つていましたが、それを耳にした人間が何人か、いました。

ひとりは一柳本人。傍にいた天野に聞きました。

「あの子たちは？」

「院生です。」

「小学生かね。」

「いえ、中学生と高校生ですよ。それより、今の碁は勝っていたのですか？先生。」

一柳は、それには答えず、ははと笑つただけでした。

私はあの手を、こんなところで、みんなに披露するつもりはないよ。それでも、いずれあの手が主流になる時が来るかもしれないねえ。

「いや、最近の若いのは楽しみなのが多いね。洞察力があるねえ。あの子たちがプロになるのが待ち遠しいよ。」

さて、別の隅で話を聞いていたのは、芦原と坂巻でした。

「へえ、あの碁は一柳先生が勝つていたのか。やっぱり新初段戦にご祝儀をくれたのか、一柳先生は。」

俺は全然わからなかったけど、あの院生たちは分かったのか。いや、すごいねえ。ヨミが。あの子たちがプロになったら強敵だよ。」

軽く笑う芦原に対して、坂巻は何やらもやもやしたものを抱えていました。

一柳先生は何を考えているのだろうか。あの院生たちが言うように、塔矢君に見切りをつけたのか???

でもすぐ上上がったとくるといふようなことは言っていた。

実に、落としどころのない対局でした。そう、プロの駆け引きは、鶴(ぬえ)のようなものなのです。

38. 最愛の sai、AI

「ほら、この窓から見えるだろう。あれが棋院。歩いて通える距離だから、荷物を置いたら、早速案内しよう。」

空港に迎えに来た泉は、ヒカルをホテルに案内して言いました。

そう今から中国棋院での武者修行が始まるのです。と言っても、和谷と伊角は三日前に、泉の出張にあわせて出発していました。

伊角の父は、中国行をあつさり認めてくれました。和谷は中学在学中に受かるからと、進学費用を用立ててもらって、武者修行の費用に充てました。ヒカルは卒業式を終わらせてから、一人で出発することになったのでした。

空港までは美津子が付き添い、向こうでは泉が出迎えてくれるというのですから、何も心細がることはないのですが。ヒカルは、ぶつぶつと呟いたものです。

「伊角さんも和谷も一緒に行ってもいいのに、待ってくれないなんて…。」

そう、逆行前も今も、ヒカルは一人旅などしたことはないのです。棋院に着くと、泉は言いました。

「こちらで、挨拶をしてからね。私はそう時間は取れないから君を置いてすぐ行くからね。」

紹介されたのは、穏やかな年配の人でした。

「こちらが教練の李先生。先生。これが三人目の。」

「進藤ヒカルといます。よろしくお願いします。」

「よく来ました。しっかり勉強してください。」

ごく簡単に挨拶をして泉は帰っていき、ヒカルはすぐ訓練室に案内されました。

伊角と和谷がそれぞれ相手をしてもらっているのが見えました。

「二人、大変熱心です。」

伊角が顔をあげて、ヒカルを見つけました。

「進藤。」

ヒカルはほつとして、取りあえず、伊角の居る方へ行きました。
ヒカルはその時からもう何年もいるような顔をして、訓練室で打ち合いを始めました。

その日、消灯まで粘った後、ホテルに帰り着いてから、ヒカルは言いました。

「俺さ、一人で飛行機乗った時は、二人とも先に出かけてって、怒ってたんだからな。でも良かったよ。二人が先に棋院に行ってくれていきなりだったら、本当に大変だったと思う。言葉通じないしさ。」
「うん。俺たちも着いた時は大変だった。あそこは本当にエリートが集まってる場所だから、俺なんか相手にされないし、言葉わかんないし、年長の人が相手をしてくれたけどね。伊角さんは、初めから結構引つ張りだこだったよな。」

「本当に助かったよ。でも今日はしゃべれる人いたよね。日本語。あの方が竹林で打ってくれた人らしくて。俺が今日行くなって知ってて、待ってくれてみたいだね。で、あと何人か俺と打った人がいるって。棋戦で留守の人もいるんだってね。プロだもんな。みんな。」
和谷はずっと三子局でしたが、伊角とヒカルは互先で頑張りました。

初めは何を言っているのか分からなかったのですが、検討に必要なことは何となく分かってくるものです。

ヒカルは検討にも積極的に参加しました。ヒカルは日本語で、相手は中国語ですが、碁石が説明をしてくれるのでした。

朝から晩まで熱気が溢れている訓練室は本当に楽しい。こんなに強い奴がうようよいいて、打ち合って、検討し合って、頑張りあってるんだもの。もしここで、ずっと頑張り続けたら、どうなるかな。

ヒカルはそれから頭を振りました。

やっぱ、できないよね。俺、探さなくちゃいけないんだもの。ここにはないよ。たぶんね。それは日本にあるんだよね。

その日、昼ご飯を食べている時でした。

「もう明後日でお別れか。残念だね。進藤君なら、北京チームに誘っ

てあげるのに、残らないか？」

流ちような日本語を使っているのは、泉が知りあいだといっていたヤンハイでした。

「うーん。ここの昼ごはんは美味しいけど、言葉覚えるのが大変だもん。」

「進藤はすごい人気者だよ。みんなが進藤と打ちたがるんだもの。俺、正直妬けた。」

和谷は羨望を込めて言いました。

「進藤君が碁を覚えてまだ二年っていうのは。でも嘘じゃないと思うよ。君の碁は斬新だ。いつか俺の最強の棋士の相手になってほしいね。」

「誰？それ？」

「俺が開発中のAI。人工知能だよ。」

「囲碁ソフトですか？」

「うん。そんなものかな。俺はね、絶対来ると思ってるよ。チェス、それに日本の将棋はかなり強いのが出てる。囲碁もいずれそうなる。俺が最強のを作る。それでAI名人戦をやって、名人になったAIは、人間の名人と対局する、ワクワクしないかい？」

「すごく面白そうです。でもそういうことは進藤が人間の名人になるっていうことですか。さっき相手してくれって言ってたけど。」

「あは。まあこれから出て来る人はみんな可能性はあるよ。そうだね。そうか。俺が考えていたのはね、そういう意味じゃなくてさ。進藤君の碁が面白くて、興味があるんだ。だから最強のAIを作り上げるのを手伝ってもらおうかと。そういう意味だったんだけどね。」

「そうだ。君たちはネット碁をやるんだよね。」

「はい。」

「JPNでsaiっていうのが誰か知らないかな？」

「sai？」

和谷は首を傾げました。

「ああ、そうか。君たちは学校に通ってるから知らないのかもね。saiは、週二回ぐらいかな、たいていは昼間、現れるんだ。ほとんど

負けなしで。」

「強いんですね。その人。saiって、何となく韓国の人の名前みたいですね。JPNでも。」

「そうかもね。まあ、プロだとは思っただけだ。まさか誰かが作ったAIだとは思えないしね。その人に会えたら、是非、私の神の一手プロジェクトに協力してもらいたいと思ってるんだけどね。」

中国棋院での武者修行は、三人に多くの実りをもたらして、無事終りました。

帰りの飛行機の中で、伊角は言いました。

「俺は、自分の世界が狭いということを知った。あそこはすごいよね。年齢関係なくエリートが互いに腕を磨いていて。進藤と磨いてきたおかげで、気後はしなかったよ。俺の今の力で、やれるだけのことはできた。頑張れた。」

「俺も俺なりにやったよ。俺、ヤンハイさんのAIの話が面白かったよ。AI名人戦ってありそうだな。十年ぐらい先には絶対にあるな。saiって、そんなに強いのかな。一度見てみたいな。」

ヒカルは二人の話を聞きながら、ぼんやりしていました。

何かが、胸の中でうずいていたのですが、それが何か良く分からなかったのです。

ただ一言言いました。

「チャオシーもルーリーもヤンハイさんだって、結果を残さなければ、北京のあそこには、居られないんだね。厳しい世界に身を置いてるんだよね。」

伊角はそれを受けて言いました。

「俺、前は、ただプロ試験に受かりたいって、それしか考えてなかった。今は試験に受かるっていうのはもちろんだけど、それだけじゃない、プロになってどうしたいのかを考えている。もっと強くなりたい、中国棋院で頑張ってた奴らと棋戦で対局して、勝てるようになりたいって思ってるよ。」

39. 願いが叶って

春休みの間、ヒカルが武者修行に出かけている間、あかりはあかりで忙しくしていました。

平八の家で、碁の特訓を受けていたのです。

あかりは特訓と思っていましたが、平八は楽しみに打っていました。

わしは本当に運がいい。ヒカルのような孫がいて。おかげで、塔矢名人や白川先生のようなトッププロに指導を受けることが出来て、その上、あかりちゃんのような可愛い子と碁を打つ楽しみまでできた。

あかりは、お茶を飲みながら、やっと、パソコンが来たという話をしていました。

「お姉ちゃんと私の入学祝だって。でも二人で一つじゃつまらないわ。入学祝は一人ずつもらうものの気がして。」

平八の妻はニコニコ頷いていました。

「そうねえ。でもパソコンは高いものだし、きつとお姉さんが大学に行く頃には、一人ずつ持てるようになるんじゃないかしら。」

「わしはヒカルに脚付き碁盤を送る約束をしてみました。まあ、パソコンほど高くはないのをな。」

「新しいのですか。」

「まあ、わしの家にも二つ脚付き碁盤があるが、それぞれ思い出深いものでね。置いておきたいからねえ。ひとつは碁の大会の副賞でもらったものだ。もし兄貴の碁盤があつたら、ヒカルにやっても。」

「いやですよ。本当に幽霊が出たらどうするんですか。」

「幽霊って?。」

あかりは不思議そうに聞きました。

「あかりちゃんが怖がっちゃいますよ。」

「いいじゃないか。どうせここにはないのだし。」

そう言って、平八は烏帽子をかぶった幽霊が出るといふ碁盤の話をしました。

「わしの兄貴というのが変わったものが大好きというもの好きだった

んじやよ。ヒカルは赤ん坊の時から、毎年、兄貴のところへ遊びに行つてたから、その碁盤で遊んどつたがな。碁をやるのじゃなくて、何か違うことをしとつたんじゃないかな。ヒカルは一人っ子だから、兄貴の孫たちと遊ぶのが楽しかつたんじゃないやあ。もしかしてその幽霊も楽しくて、一緒に出てきて遊んだかもしれないな。ヒカルはまだ幼稚園に行つていたころの話だよ。」

その時、塔矢家の碁盤のことは頭から抜け落ちていたあかりです。

ふーん。幼稚園の子達と一緒に遊ぶ幽霊つて、なんか可愛くないかしら。もしかして座敷童みたいなのかもしれない。

勿論、あかりは座敷童を見たことはありませんが、たまたま可愛い座敷童の出てくる絵本を持っていたのです。

春休みが終わる頃、ヒカルは戻ってきました。

中学入学のための制服やら何やらの用意で忙しく、あかりはヒカルとあまり話はできませんでした。当然、座敷童のような幽霊の話をすることは、ありませんでした。

めでたく中学生になったヒカルは、当然のように、筒井に囲碁部へ誘われました。大会には出ないことを条件にです。

夏目はすぐに入部したのですが、三谷は全く寄り付きませんでした。

とうとう夏目と金子が無理に引っ張つてきたのですが、たまたまヒカルは、居ませんでした。

夏目と筒井が打ち始めたのを見ながら三谷は言いました。

「こんな弱いのはっかりなんて、詰まんねえ。」

三谷が、そう言い捨てた時に、火のついたたばこが理科室に放り込まれました。

筒井は慌ててそれを踏みつけました。

煙草に続いて、窓から加賀が飛び込んできました。

「火事になるじゃないか、というより。」

話は途切れました。

加賀は窓際の壁にしゃがみ込み、そこへ、生活指導の勝俣がきて、筒井に聞きました。

「君たちは理科室で何をしているんだ？」

「囲碁部の部活です。理科室を使つていいと言われてます。」

勝俣は分かったというように頷いて言いました。

「加賀を見たら、知らせるように。」

教師の姿が見えなくなると、加賀は立ち上がり、伸びをしました。それから理科室にいる面々を見回しました。

「男子と女子、両方とも大会に出れる人数じゃないか。」

「俺、囲碁部じゃねえよ。」

ぶすつとして言う三谷に、加賀は座れと言いました。

「つべこべ言わずに、囲碁部に入れ。お前、打てるんだろ。俺様に勝つたらまあ好きにしているが、勝てるわけはねえからな。だから入部決定だな。」

三谷は当然に頭にきて、打つてやると言いました。

さて打ち始めてみると、加賀の強さは相当なものでした。

三谷は愕然としました。

強いよ、こいつ。一体何なんだよ。

勝負は間もなくつきました。負けた三谷は言いました。

「でも強い奴が居ねえところで打つても面白くない。加賀は囲碁部じゃないんだろ。」

加賀は、筒井に聞きました。

「進藤はどうしたんだ？」

「今日は、用事があつて遅れるとか言っていたけど。三谷君。僕たちはいつも、みんな進藤君の指導を受けてるんだ。」

「誰？進藤って？」

「最強の中学生だな。俺も歯が立たねえ奴だよ。」

その時です。

「遅くなっちゃったけど、これ、碁盤。」

折り畳み碁盤を持ってきたヒカルがいました。

「あれ、これヒカルがずっと使っていたのじゃない?」

「うん。この間じいちゃんに碁盤もらったから、囲碁部に寄付。三面あれば、かなり効率良いじゃん。」

こいつが進藤?こいつが指導してる?ずいぶん子どもっぽい奴じゃないか。

「お前、一年だな。」

「うん。やっと会えたね。三谷だろ。」

「お前、強いのか?だったらお前が大会に出ればいいだろ。」

「そう言われると困るけどさ。俺、一応、プロ目指してるからね。大会とか対外試合は禁止なんだ。」

「じゃあ、加賀が出ればいいじゃん。」

「俺は将棋部だからな。大会の時期は大体重なるんだよ。俺も進藤も幽霊部員だな。言ってみれば。だから、お前が出るのが筋というもんなさ。お前は俺に負けたんだから、もう囲碁部員なんだよ。」

ヒカルが幽霊って。小さい時に、もしかして幽霊さんと遊んだからかな。ここに可愛い座敷童さんがいたら、一緒に碁を打ったら、楽しいかも。

あかりは平八に聞いた話をふと思い出しました。

こうして、取りあえず筒井の囲碁部は、加賀が強引にかじ取りをしてくれて、ぎりぎりの船出をしたのでした。良かったね。

40. やつと出会えた君

四月を迎え、アキラはプロ棋士の生活を始めました。

中学は義務教育ですから、学業に支障があまり出ない範囲で、始めました。

例の新初段戦にまつわる、つまらない噂などアキラは気にしませんでした。

所詮は逆コミなんだから、どちらにしても、意味はあまりない。

碁の対局というのは、その対局だけでなく、いろいろなところすでに始まっているかもしれない。

今まで父親や、門下生たちを見ていたアキラはそう思いました。新初段戦だって、その一つなのだ。

少し前まで、碁を打つ年代の同志のような人が現れればとか思ってた筈ですが、その気持ちは、今やすでに遠い過去になっていました。

アキラは、低段者をバツタバツタと容赦なくなぎ倒し、圧倒的な強さを示していました。

いやいや、やはり、塔矢アキラは間違いなく棋界のスターだ。

坂巻はほっとした気持ちでアキラの快進撃を眺めていました。

五月には、若獅子戦が開かれました。注目はやはりアキラでした。いや、アキラと倉田というべきでしょう。

塔矢アキラが優勝するのか、いや、いくらなんでもそれはない。倉田に決まっていると噂される中で、戦いは、始まりました。

「和谷、残念だな。俺と当たるなんて。」

和谷の一回戦の相手は何と冴木だったのです。

冴木は、ヒカルに刺激されて、碁に対する姿勢が明らかに変わってきました。

その上、白川が密かに特訓を施していて、近頃とみに進境著しい碁を打つようになっていました。

和谷は、もちろん武者修行の成果をぶつけました。冴木は少し唸りました。

凄いな。和谷。短い期間だが、留学の成果が現れてるじゃないか。

とはいえ、俺ももう四段になる身だ。弟弟子に負けてはいられないよ。

伊角は順調に勝ち進み、三回戦までたどり着きました。相手は今伸び盛りの倉田五段でした。

倉田さんて進藤と同じような伸び方だよな。碁を初めて二年でプロになったっていうのだから。

それにやっぱ強い。進藤とは全く違うタイプだ。面白い打ち方だな。俺、ワクワクしている。

伊角は自分の感じ方に驚きました。

倉田さんは今年で若獅子戦最後じゃなかったかな。俺と歳4つくらいしか離れてないんだ。

進藤もそうだけど。どちらにしても、負けていられないよ。

倉田は、伊角と打ちながら感じていました。

こいつ、なかなか強い。何で未だに院生なんだ？そんなことより本腰を入れて打たないと危ないぞ。これだから後から来るやつは怖いんだよな。

倉田と伊角の周りは人だかりがしていました。

「院生にも強いのがいるな。」

「さすが院生一位だよ。」

「でも倉田には勝てないよな。」

「いやあ、なんていうか、そうでもないよ。盤面見ろよ。力は僅差の気がするぜ。」

伊角は、投了しました。中押し負けです。

「君は、強いな。」

倉田は、さりげなさを装って、言いました。

言ったのはそれだけです。倉田は密かに思いました。

こいつはすぐプロになる。それで俺の要注目人物になる。

アキラは、倉田と決勝戦で当たりました。

「倉田には勝てないよな。」

確かに塔矢アキラは強いな。でも塔矢だけじゃない。あの伊角っていう院生も塔矢に負けず劣らず、強敵だ。どちらが上かは分からない

い。

倉田はそう感じました。

若獅子戦の出番が終われば一組の院生たちの関心は、プロ試験しかありません。

ことしの外来はどうなんだろう。去年は外来が二人、プロになったからな。

皆の噂はそれでした。

一学期が終り、夏休みが始まりました。

和谷はプロ試験の為に全力を傾けてはいましたが、昼ごろ出てくるというネット碁のsaiにも関心を抱いて、探していました。すでに休みになってから五回は見かけました。

こいつも秀策スキーかもしれないな。いややっぱりプロだよな。しよつちゆうは出てこないということは、忙しいからだろ。一局打つとすぐ消えちやうし。かなり前からいたのかな。強い奴を選んで打ってるもの。俺は選ばれないよね。でも、ちよつと打ってもらいたいな。

さて、夏休みも終わりという時でした。

その日は、囲碁祭りに駆り出されたアキラでしたが、早めに帰っていいと言われて、家に戻ってきました。

玄関を開けて中に入ると、行洋がいるようでした。

お父さんは今日は家にいるのかな。出かけるとか言っていた気がするけれど。

そつと、父親の書齋を覗いたアキラは、ついに目撃したのです。やつとというべきでしょうか。

父と母が碁盤を挟んで対峙していました。

アキラは、なぜか部屋に入ることが出来ず、そつと襖を閉めてしまいました。

頭がグルグルしていました。自分の部屋へ行き、じつと考え込みました。

進藤は嘘をついていなかったのか？

それとも、あれは母が父に碁を教えてもらっているのか？いや、そんな雰囲気ではなかった。

そのうちに動きがありました。行洋が出かけたのです。

アキラは初めて、父に挨拶しませんでした。

父親が出かけてしばらくして、アキラはやっと、部屋を出ました。

「あら、アキラさん。帰っていたのね。声をかけてくれればいいのに。」

明子のはんびり言うのと、アキラにお茶を出しました。

「お仕事。疲れたでしょう。」

「ううん。早く帰らせてもらったから。」

それから、一呼吸して言いました。

「ねえ。お母さんは、お父さんから、碁を習ってるの？」

明子は微笑みました。先ほどアキラが、覗いていたのは知っていました。

行洋は、出かける前に、アキラにも、もう幽霊のことを話してもいいだろうと言ったのです。

「そうじゃないのよ。アキラさん。一局打ってみる？」

アキラは少し緊張しながら、座敷に行きました。

明子は行洋の書斎に入り、納戸をそっと開け、囁きました。

「息子と打っていただけかしら。」

佐為は驚きました。

奥方がそういうことを言うとは。

この子と一度打ってみたいと思ってたんですけど、やっとその時が来たのですね。

納戸に碁盤が収まってからは、佐為は時々、朝の一局を覗いていたのです。

この子は、おそらく負けず嫌いです。父親である名人と打つのと、私に対するのでは、きつと違った気持で向かってくるに違いない。楽しみなことですよ。

アキラは、母親と碁盤を挟んで座ると、少し不思議な気持ちがありました。

でも母親の手が、ぴしつと佐為の一手を置いた時から、その対局に夢中になりました。

毎日でも打ちたい。そう思いました。

すぐに二学期です。アキラは学校とプロ棋士としての対局と仕事以外は、碁サロンにもよらず、ひたすら、家で母親相手に碁を打ち続けていました。

明子も、家のことはすべて午前中に済ませ、アキラが学校から帰ってくる頃にはその対局に備えていました。

明子は、佐為がアキラとの対局を嬉しがっているのを感じました。

幽霊さんは、こういう対局がしたかったのかしら。アキラさんと打つのがことのほか気に入っているのね。だって、アキラさんは素直に幽霊さんに夢中ですものね。幽霊さんもそれが分かるのよね。

佐為は毎日が満たされている気がしました。

この子はいずれ、龍になるような子ですよ。完成されていない分、私には打つ楽しみがあります。今日の一局を、明日までに研究して、また打つてくるのですからね。

本当に、この子とは打ち合っている甲斐があります。

勿論あの者との対局もネットでの対局もいいものです。

この子と打つようになって、あの者との対局が、より私には喜びと なって戻ってきています。

佐為が満足感に満たされると、明子も気持が落ち着いてきました。

アキラさんは、こういう対局に夢中になるのね。見ていて楽しいわ。本当に。

それは、夫のために石を置くのとは違う楽しみでした。

これで、たまにアキラさんが、幽霊さんでなく、私と打ってくれば、万々歳なのだけれど。アキラさんにはそういうことは望めないわね。それは進藤君に頼むしかないわね。

進藤君もものすごく忙しそうだけど。中国へ修行に行った話、あかりちゃんがいろいろ教えてくれたわね。来年はプロを目指すって。その時、ふと思いました。

もし、進藤君がこの幽霊さんと打つたらどうかしらね。

幽霊さんはアキラさんと打つのも同じように嬉しいのかしら。

4 1. 母子ほのぼの

その日は、行洋は泊りがけの仕事でした。

明子が夕食の片づけを終えて、のんびりしていると、アキラが聞いてきました。

「お母さん、幽霊のこと、誰かに話したことある？」

「お父さんと緒方さんの外についていうことかしら？」

「うん。」

明子はちよつと考えました。

行洋さんは、進藤君はプロになると言ってたわね。ということはいづれアキラさんとも顔を合わせると言うことよね。

「ええ、もう一人お話したわよ。」

「誰にですか？」

「アキラさん、覚えてるかしら。前に学校の帰りに傘を借りたって言ったでしょ。その貸してくれた子、進藤君よ。」

「もちろん、覚えてます。」

アキラは少し疾（やま）しさを覚えながら答えました。

「本当に偶然に出会ったのよ。あなたが傘を借りてひと月もたたない頃よ。駅前で偶然。ちよつとしたきっかけで話をしたら、傘を貸した子だってわかったのよ。」

その時思ったのよね。アキラさんを知ってる子で、同じ年で男の子で。そういう子が幽霊をどう考えるかしらって。学校は違ってるんだから、変に思われても支障はないかなって。

だから幽霊がいるって信じる？って、軽く聞いてみたのよ。」

「進藤は信じるってすぐに言ったんですか？」

「ううん。そうじゃなかったわ。逆にすぐに信じますとか言われたら、話さなかったかもしれないわ。」

明子は、くすつと思い出し笑いをしました。

「じゃあ、なんて言ったんですか？」

「そう、確か。そうだったわ。目を丸くしてね、もしかしておばさんは幽霊を見たことあるのとか聞いてきたわ。」

だから、見たことあるわ。碁盤にとりついていて、碁を打ちたがる幽霊をつて。ちよつと言つてみたの。

そうしたらね。進藤君。ますます目を丸くしてね。すごいって言ったのよ。私はね。でも見えるのは私だけで他の人には見えないと言つたの。」

明子は少し遠い目をしました。アキラは口を挟まないで、母親の話を聞いていました。

「それはおばさんが特別なんだつて。アキラさんが碁を打つことも、お父さんが名人のことも知っていたでしょ。進藤君は。アキラさん、あなたが話したのよね。」

だからだつて、だから何かわけがあるんだつて。私だけに見えるわけがあるんだつて、励ましてくれたわ。全然笑わなかつたし、馬鹿にしたり、憐れんだりしなかつたのよ。

おばさんは嘘をつくような人じゃないから信じるつて言つてくれたわ。」

「進藤と。進藤と今も話してますか。」

明子はふふと笑いました。

「私は進藤君のお母様とお友達なのよ。今でも時々お宅にお邪魔することがあるのよ。学校の用事の帰りに。中学も海王中は近いし、今まで通りじゃないかしら。たまには進藤君とも会える時もあるのよ。最近は、いろいろ忙しいとかで、お家にいないから滅多に会えないけれど。」

それから明子は付け加えました。

「私ね。お父さんがあなたに幽霊の話をしていないようにつて言った時、まだ9歳ぐらいのあなたが、怖がるといけないからだと思つたの。碁盤に幽霊がいるなんて言つて、碁盤を怖がったら碁を打てないでしょ。その時は、単純にそう思つていたの。でも今考えると違つたのよね。たぶんよ。お父さんの考えを聞いたことはないから。」

でも今はこう思うのよ。プロ試験を受けることを躊躇っているあなたに、幽霊を会わせたくなかつたんじゃないかつて。

あの幽霊さんはとても魅力的な碁を打つよね。だから緒方さん

もお父さんも夢中になったわ。でも二人にはプロの仕事があった。幽霊さんとだけ打っているわけでもないし、いろいろな方と碁を打っていたわ。

あなたがあの時、幽霊さんと出会って、幽霊さんとだけ打ちたがったら、まずいんじゃないかって思われたんじゃないかしらね。

今は、あなたは決心してプロになったのよね。そういうあなたなら、幽霊さんと打つても大丈夫だと、ちゃんと戻るべき場所に帰ってくると分かっているから、あなたが毎日のように幽霊さんと打つてもそつとしておいてくれるのだと思うの。

そう思った時、私、ふと思ったの。進藤君が私にだけ見えるのには訳があるんじゃないかって言ったこと。あなたにあの時、幽霊さんが見えたらどうなっていたのだろうって。お父さんが心配した通りのことが起こったかもしれないし。だから、私にだけ見えたのは、もしかしたらそう神様が取り計らったのじゃないかしらってね。」

アキラは明子のような母親を持てたことを誇らしく思ったものでした。

とてもよくお父さんを理解してくれる。

あの時、僕がプロ試験を受けようと思ったのも、きつと神様がそう計らってくれたのかも。あの頃、幽霊に出会っていたら、僕はプロになることに、魅力を感じなくなっていたかもしれない。そう思える。それとともに、アキラには、苦い後悔が頭をもたげました。

「進藤に会えるかな。」

明子は微笑みました。

「会えるわよ。進藤君も碁が好きなのだから。」

そうだ。今度会ったら碁会所に誘おう。アキラはそう考えました。その時アキラは、ヒカルを巡って、緒方と父親が張り合っていることなど知る由もありませんでした。

もちろんアキラは、父親の周りの棋士が勝てなくて苦悩し絶望する姿を見たことはありません。でもそれは人が自分の才能について懊悩する姿でした。父親ほどの棋士が、若い才能に入れ込み、そこに自分の存在を介入させたがるなど理解のほかのことです。

アキラは、ひたすら囲碁の高みのみを追い求める純粋な本当にいい子なのです。順風満帆で、さらに佐為と出会い、若くて未来は無限でした。

ヒカルは、リビングで美津子がパソコンを操って家計簿をつけているのを眺めていました。

美津子は聞きました。

「ねえ。ヒカル。ヒカルは塔矢さんのようなプロになるつもりなの？」

パソコンの画面に目を向けたまま、聞きました。

今まで、そう言ったことは一度も話されたことなく、いろいろな事態が進んでいました。

「うん。なりたいたいと思ってるよ。」

美津子は去年アキラがプロ試験に合格したことをしっていましたし、今年は、ヒカルが仲良くしている伊角と和谷がプロ試験に挑戦していることを知っていました。そもそも、ヒカルが手助けしていたのですから。

「今年、試験を受けないのね。ヒカルは。」

「プロ試験受けてもいいの？」

「いいのって、ヒカルはダメって言っても受けるでしょ。構わないわよ。」

美津子は明子と知り合ってから、プロ棋士という人たちと交流していましたし、子どもがプロになるということも分かってきました。

そして何より、ヒカルには碁の才能が有るらしいということも分かっていました。

正夫と話したことがあるのです。

「ヒカルはあんまり勉強が得意じゃないから。大学だつて入れるかどうか。ヒカルには碁の才能があるみたいだから、あの子がプロになりたいというのなら、好きにさせたいと思うのよ。」

正夫は全く反対しませんでした。

「ヒカルがそうしたいっていうんだつたら、それが一番じゃないか。」

そこで、美津子はヒカルの意志を確認したのでした。

正夫もですが、美津子も、ヒカルが落ちるとは夢にも思っていないところがすごいのでした。

ヒカルの周りには、プロになりたかったのに、プロになり損ねたという人は存在していませんでしたから、当然かもしれないが。

42. 六つ巴大乱戦

アキラが、幽霊のことを知ったからというわけではないでしょうが、ついに行洋が始動し始めました。

行洋が堂々と、緒方の前で、ヒカルを誘ったのです。

事の起こりは碁サロン前の大通り、あかりとヒカルと一緒にその場所を歩いていたことが、ことの始まりです。それは恐らく行洋にとつて織り込み済みの出来事だったのでしよう。だから、ここで仕掛けると決めたのです。

「進藤君、どうかね。碁サロンに寄っていくかね。」

傍にいた緒方の顔は、それこそカメレオン、いや七面鳥。頭の中が全て、顔に出ていました。

緒方は、その時、理解しました。ヒカルが言っていた碁のことで話していないことというのが何か分かったのです。

進藤に、どういう手を使って、俺に話させないようにしたんだ？何か術をかけたんだらうか。

塔矢行洋、俺の師匠だが、本当に子どもじみているやつだ。俺が進藤に執着しているのを知って、進藤に接触したに違いない。でもだからって、このタイミングで俺に一体どうするっていうのだ。タイトル争いの盤外戦など塔矢行洋には必要ないことじゃないか。何でだ。それよりだ。こういう時に、進藤が言っていた技術を使えるのだろうか。

ヒカルの方はいつかこういう時が来ると白川に言い含められていたので、用意はできていたのですが。

碁サロンだった？

「それはダメなんだ。俺、塔矢の奴を怒らせちゃって、碁サロンに来てほしくないって言われてるから。」

それは行洋も緒方も予期しない言葉でした。

「進藤君は息子と打ったことがあるのかね？」

「ないです。塔矢とは、そういう碁の関係じゃないんです。ご近所小学生のつきあいで。俺が碁を始める前の知り合いなんです。俺が碁

を始めたことは知ってるだろうけれど、それ以上のことは知らないと思う。大体、その前に喧嘩別れになっちゃったから。」

「なぜ？」

「なんだっけ。」

その理由はすっかり忘れていたヒカルです。あかりに向かって聞きました。

「明子おばさんのことですよ。」

あかりが言いました。

それは行洋と緒方双方にダブルパンチだったようです。

緒方は、行洋に反撃のチャンスを見つけた気分でした。

進藤は、師匠に取り込まれているというわけじゃないようだ。きつと白川が何事か言い含めているんだろう。

「碁サロンがダメなら、あそこのコーヒーショップでちよつと話を聞かせてくれないか。君はえーと。」

緒方は、早速あかりの懐柔に取り掛かりました。

「藤崎あかりです。ヒカルのクラスメートで、白川先生の囲碁教室に通ってるんです。」

小学校の時のクラスメートというのは省きました。

ふむふむ。親しいんだな。碁を打つてことは、進藤に感化されたか。

あかりはさらに続けました。

「でもお話だったら、この先に、かわいいケーキ屋さんがあるんですけど、そこだったら、コーヒーショップより静かで、人に聞かれないでゆっくりお話しできると思います。この人数だったら、ちよつどいいし。」

ヒカルはあかりを見ました。白川先生が塔矢門下の争いに巻き込まれるなど言っただけど、これはあかり、大正解か？ やっぱ。あかりはすごい。絶対すごい。俺そこまで頭回らねえよ。

「ケーキ屋さんちよつと、電話を入れておきますね。」

あかりは少し隅によって、携帯を取りだし、しばらく何事か話してから、戻ってきました。

「席、空けといってくれるそうです。」

というわけで、8分ほどの道のりを、言葉少なに、奇妙な一団体が歩いて行きました。

その間した話は、中学に囲碁部が出来たという話だけでした。そして、団体戦で、男子も女子も準優勝したということでした。

「海王中は男子もだが女子もかなり強いからな。」

「くじの組合せが良くて、助かりました。」

あかりは澄まして言いました。

ケーキ屋に着くと、緒方も行洋も負けました。

このあかりという子は、結構策士だ。もしや、進藤の指南役、あるいは白川に言われてる、お目付け役かもしれない。しかし、俺は救われたな。師匠とだけだったら、絶対負けていた。

「お待ちしていたわ。ケーキは適当に頼んでおきましたわ。ここはお紅茶がおいしいので皆さん、お紅茶にしてありますわ。よろしいでしょ。」

明子がにこやかに言いました。

「私、明子おばさんと、ここで待ち合わせてたんです。そうしたら、ちよūdōこういうことになって、明子おばさんが席を用意しておくからって。」

あかりは、澄まして言いました。

「進藤君は、アキラとどういう関係なのか。喧嘩をするような関係なのか？聞かせてほしい。」

行洋は、衝撃が収まると、この場の主導権を取り戻しつつありました。

またまた、その時です。

「遅くなりました。」そう言って、白川がやってきました。

「いえいえ。」明子が答えます。

「先生？」

「ああ、塔矢先生の奥さまがご連絡くださってね。君の家に行こうとしていたから、早く来れたよ。」

白川は、落ち着いた様子で言うと、ヒカルが良くやるVサインを

そつと出しました。

ヒカルは思わず、笑いました。

行洋の主導権は立ち消えてしまったようです。

緒方は考えました。

白川がいる方が、師匠に負けられない。ラッキーだ。俺がVサインを出したい。

「ちようど今、進藤君とアキラさんが喧嘩したって聞いて、ワクワクしてますのよ。」

明子が興味津々で言いました。

この分だと、塔矢の奴、いまだに知らないんだろうか。

ヒカルはあかりと顔を見合わせました。そこで、ヒカルは、聞きましました。

「塔矢は、あのこと知ってるの?」

「幽霊さんのこと?あかりちゃんも知ってるのね。」

あかりは頷くと、話しました。

「もう前になるんですけど、おばさんがヒカルに考えてくれたでしょ。twinkleって、ネット碁で使う名前を。あの時ね。たまたま、塔矢君がおばさんとヒカルを見かけたの。それでね。白川先生の囲碁教室に、塔矢君、押しかけてきて、ヒカルに話があるって。そこにたまたまヒカルが居たから、塔矢君、会えたんです。

それで、公園に行つて話をしたんです。

塔矢君はヒカルとおばさんが何でそんなに親しいのか、一体何を話してたんだって、ヒカルを問い詰めたの。

ヒカルはその時には話したことなんて忘れてたんですけど。途中から私がいたから、私が覚えてること話してあげたの。

おばさんとヒカルがネット碁の話で盛り上がったこと。そうしたら碁が打てないのに、何でネット碁で話が盛り上がるかわかんないって。だから言ったの。おばさんは碁が打てるって。

嘘だつて塔矢君は言ったわ。だからヒカルが教えたんだって私は言ったの。そうしたら、ヒカルみたいなのが、教えたら、ひどい碁を打つようになるって、塔矢君、すごく失礼なこと言つて怒つたの。」

話はだいぶ脚色されてるかもしれませんが要点はまさしくそれでした。

「それで、けんか別れしたのか？」

緒方が聞きました。ヒカルは首を横に振りしました。

「違うよ。あの時、あかりは、すごかったな。おばさんはプロになるとか、強くなるかかそのために碁を知りたいんじゃないやなくて、碁ってどういうものか知りたいって思っただけなんだって言ったんだよ。それから普通の人は知っていることを教え合って碁を楽しむものだって、そう塔矢に言ったんだよ。すごいよな。その考え。俺はそういう考え、大好きだな。」

「まあ、あかりちゃん、私の考えていたことをよく分かってくれていたのね。嬉しいわ。」

明子が言いました。

その話は、アキラ君と進藤の違いに触れてはいるが、しかし話がされている。

そこで、緒方は口を挟みました。

「じゃあ、ケンカの原因は一体何だ？」

「それは幽霊のこと。塔矢は分からないけれど、家の雰囲気が変わって、気づいていたんだ。で、それを気にしていた時に、俺とおばさんを見かけて。俺が何か知ってるんじゃないかって、話に来たんだ。そう思ったから俺、おばさんが幽霊を見ることができんだって話したんだ。塔矢の家には碁盤にとりついている幽霊がいるんだって。それで、塔矢先生と緒方先生に、おばさんが幽霊に代わって石を置いてあげて打ち合ってたって。それに塔矢先生が息子にはいいうなって、言ったんだって。」

それでね、塔矢は怒っちゃったんだ。だってお母さんが幽霊が見えて、お父さんがその幽霊とお母さんを通して打っていて、それを子どもには内緒にしているって言われたら、怒るかもな。俺もそう思ったから、ほっておいたんだ。

そのうち塔矢も見つけるに違いないから。幽霊を。信じられなくても一局打てば信じると思うから。」

「塔矢君は、本当に怒っていて、お母さんもお父さんもそんな人じゃない、顔も見たくないし、碁サロンに来てほしくないって言って帰って行ったの。私はその話を初めて聞いたんだけど、何となく納得できたの。おばさんが話してくれたことに今まで、抜けていることがあるような気がしたから。幽霊なんて言ったら、普通信じないと思うから、話さなかったんだって。」

白川は、突然起こった幽霊話に内心ひどく驚きましたがポーカーフェイスを保っていました。幸いなことに白川に注意を払う人はいませんでした。

これは塔矢家の中の話だ。塔矢先生の家には、変わった碁盤などが持ち込まれるのかもしれないが、幽霊は一体本当に存在するのか？

「進藤は信じてるのか。打たなくても。」

「俺、不思議なんだけど、変に思えなかった。碁盤に碁を打ちたい魂が取りつくつていうのはありだと思えたんだ。それにおばさんは嘘つく人じゃないしね。もつとも、俺は幽霊を見たこともないし、塔矢先生の家に行ったわけじゃないし、その幽霊と碁を打ったこともないし。でもおばさんだけが見えるのには、何か意味があると思ってるよ。」

「アキラは今、幽霊と夢中になって打っているよ。プロになったのだから、私は放っているがね。」

「そうですね。アマのうちからあれに嵌るのはまずいかも 아닐ですけどね。現実を見失う危険性もあるか。アキラ君は猪突猛進というところがありますからね。一つのことには夢中になると、周りが見えない。」

「俺、塔矢の碁も見たことないんだ。塔矢も俺が碁を打つていっても、まさかプロになろうとは思ってないだろうし。」

「塔矢君。明子おばさんと打ったことありますか。幽霊とじゃなくて。」

「あかりは、そう聞いてきました。」

「残念だけど、アキラさんはそういうことは全然考えてないわね。進藤君は、私のこと、よく面倒見てくれるけれど。私、進藤君のお弟子

さんになろうかと思ってるのよ。」

「そうなんですか。私はヒカルの弟子より、やっぱり白川先生の弟子になりたいな。」

「白川君は人気だね。緒方君も誰か弟子をとったらいいのではないか。そうすれば、進藤君を追い掛け回すこともないと思うがね。」

「先生ほどには追い掛け回してないと思ってますが。それに私は先生にいろいろ教えていただきましたが、師弟愛については教えていただいていない気がして、弟子をとるには未熟の気がしますから。もう少し先にしたいですよ。」

緒方が切り返しました。

白川はその様子を見ながら思いました。

進藤君はこれだけトップ棋士に、特別に目をかけられているのに、自分の居場所というか、立ち位置をぶれずに保っていられるのはすごい。それこそが進藤君の所以なのだろうな。

だから逆に塔矢先生も緒方さんも進藤君にちよつかいをかけられるのだろうか。どんなに突っついても進藤君は、勘違いをしないから。

ヒカルがヒカルの才を巡って、いろいろな波紋を引き起こしていることから、悪しき影響を受けないのは、ひとえに、“ふわふわ”のおかげでした。

ヒカルは思いつきり、碁の世界に足を踏み入れました。日本の囲碁界のトップ、アマ碁の強豪の愛好者、有望な院生たち、巷の囲碁好き、どこをとっても碁碁碁です。

それでも、不思議とその噂は広がりませんでした。

ヒカルは、自分の周りで起きていることを認識してないわけではありませんでした。そしてそれに抗うこともしませんでした。

目的を見誤らなければ大丈夫。自分が求めているものを探し当てる、その気持ちは少しも失われていませんでした。

それにこうやっていることが、目的に近づいていると感じさせてくれるから、俺はこれを大切にしたい。

しかし、多くの棋士と知り合いながら、アキラとだけは打ち合うこ

ともないのは不思議と言えば、不思議でした。

43. 師匠慈愛・悲哀・地合

さて、なんだかんだと言っているうちに、プロ試験が始まりました。和谷は今年は予戦はパスで本戦に進めました。

森下は試験が近づいたので、和谷への指導時間を増やそうと思っていました。

和谷はこのところ急速に力をつけている。どうやら白川君が弟弟子を氣遣って、面倒を見ているらしい。冴木の面倒も見ているようだが、本人はリーグに4つも顔を出しているのに、よく時間があるな。若いからか。

今回は森下は余計なプレッシャーを和谷にかけませんでした。

塔矢アキラはひたすら白星を重ねて、連勝街道を突っ走っていました。

行洋が言ったような心配は何もなさそうじゃないか。

分からんな。あいつは何を気にしていたんだ？

それはさて置き、森下の期待通り、和谷は順調に勝ち星を重ね、十月の初めには、早々と合格を決めました。

和谷は対局が終わったそのすぐ後に、師匠に電話で報告を入れました。

すべて終わってみれば和谷は一敗。伊角が全勝。そして後は、四敗で院生の真柴が滑り込みで合格しました。

白川は和谷に言いました。

「これでやっと森下先生に進藤君を紹介できるよ。」

「あの一、俺、明日、森下先生のところへ、合格の挨拶に行くことになってるんです。」

「そうか、じゃあ。その日の夕方にも。」

「一緒じゃまずいですか？」

「何で？」

「だって俺、どうやって力をつけたのかわかってきつと詳しく聞かれそうな気がするんですけど、進藤のこと、どういったらいいか分かんなくて。」

ふーむ。森下先生がひねくれるのをを心配してるわけだね。仕方ない。

「和谷君、じゃあ、君が行く時に時間を合わせるよ。冴木君も呼ぼう。君は気にしないで、ありのままを話せばいい。少なくとも和谷君、破門とかないからね。正直に話せばいいよ。正直が一番だから。」

その日、和谷が森下の家に挨拶に出かけると、ケーキで歓待されました。

「このケーキ、大変だったんだよ。」

しげこは、ケーキを差し出しながら、とくとくと言いました。

和谷は、ぱくりとそれを平らげながら、何が大変なんだと不思議そうな顔をしました。

ただのケーキじゃないか。

森下は苦虫をかみつぶした顔をして、森下夫人は可笑しそうな顔でした。

「ま、ケーキのことなど、どうでもいい。なんでも白川君と冴木が来るって言ってたな。あいつらのケーキはないぞ。」

「あなた、ケーキのことなどどうでもいいのでしょうか。」

そうこうしているうちに、白川がやってきました。

「冴木君と途中で一緒にになりました。」

ん？白川の後ろにいるのは誰だ？

ヒカルは、一歩前になると、お辞儀をして言いました。

「初めまして。白川先生に個人指導を頂いております進藤ヒカルと言います。」

ははーん。前に言っていた、白川が弟子にどうですかと言っていた子か。白川君の弟子っていうわけだな。

「和谷君が無事合格したので、先生もお手すきかと存じまして、ご挨拶がてら連れてきました。」

さて、奥座敷には、人がいっぱいです。

「おい、しげこは少しあっちに行つてなさい。」

「わー、つまんない。」

その時、しげことヒカルは目を合わせました。

ヒカルは素早く内緒の合図を送りました。しげこは、くすつと笑って頷きました。

それから部屋を出ていきました。

「さてと、白川君の弟子に、お互い自己紹介をするか。」

冴木がすかさず言いました。

「先生。俺も和谷も進藤君のことは知っています。白川先生に少し、しごいてもらった時に出会ってますし、進藤君には本当に世話になってるし。特に和谷はね。」

「和谷が世話をかけたというのか？進藤君に？」

冴木君が余計な話を始めるから、何かひどくまずい展開になったと白川は思いました。

ヒカルは臆する風もなく、にこにこしながら話しました。

「俺、和谷とは、実はネット碁仲間なんです。ネット碁で知り合って、その棋風というか打ち方が何となくうまが合うというか。で、ネットでチャットして。ネットで短い通信文が書けるんです。毎日打ちたいねっていう話になって、それで早朝毎日ネットで一局打っていたんです。その話を白川先生にしたんです。先生は、たまたま和谷が毎日、朝早くネットで打っているって話してるのを聞いて、俺の相手が和谷じゃないかって思っ。それで引き合わせてくれたんです。」

それで、和谷とは碁盤を囲んで打ち合う仲間になりました。今年の春、俺、中国棋院に誘われた時に、だから和谷を誘って、一緒に揉まれて来たんです。世話をかけるとかそんなじゃないんですよ。すごくいい仲間。一緒に高め合える同志なんです。冴木さんもそうです。」

森下はヒカルの話にぽかんとしました。というか、話がややこしくて、一瞬呑み込めませんでした。

何だかわからんが、要するにこの春、和谷が中国に行ったのは、この進藤という子が誘ったからか。

「進藤君。君は中国棋院の誰かと親しいのか？」

「俺が親しいんじゃないかって、俺の知り合いの人が仕事の関係で中国に

行き来していて、プロ棋士の人と知り合いになったんだそうです。それで、その人とネット碁をさせてもらって、棋院に招待してくれることになって。そこで、他に二人ほど一緒に行ってもいいと言われて、一人は和谷に決めたんですけど。」

聞けば聞くほど、よく分からない、頭が痛くなるような話でした。これ以上聞くのはよそう。後で白川にわかりやすく説明してもらおうと、森下は思いました。賢明な判断です。

「で、白川君。進藤君を私に紹介して、どうするのかね。」

「はい。森下研究会に連れてきてもよろしいかどうか伺いたくて。」

「いいよ。君が弟子にとったんだし、私にとっては、孫弟子だろう。で、君はプロになるつもりなのかい。」

「はい。来年、試験を受けるつもりです。」

殊勝に、にこやかにヒカルは答えました。

白川は早々に腰をあげました。

「じゃあ、私はこれで。和谷君、おめでとう。四月からよろしくね。さ、進藤君、行こうか。」

「もう帰るのか?」

「はい。では先生、今度の研究会、孫弟子をよろしくお願いします。」

白川はヒカルを連れて、ささっと帰ってしまいました。

「先生。俺も帰ります。進藤君。一緒に帰ろうよ。」

冴木は、そう言うのとヒカルたちを追いかけました。

和谷は何となくひとり、居心地悪げでした。

「和谷。午前中にご両親が挨拶に見えたよ。一緒にとってたが、仕事で午後は無理なので。」

「はい。学校から帰ったら、母がそう言ってました。」

「本当によく頑張ったな。一敗で合格だ。俺は鼻が高い。その全勝した院生には、プロの対局でリベンジを果たさねばな。」

「はい。お互いに切磋琢磨してきましたので。伊角さんには、絶対追いつきたいです。」

「追いつく?」

森下は和谷の言葉を聞きとがめた。

「あの、それは伊角さんは院生一位でしたし、お互いよく打っていたし、今回は一緒にずっと頑張ってきたんです。」

「親しいのか?」

「はい。でももちろん勝負は別です。でも伊角さんも進藤も中国棋院では、やっぱ違ってて、みんな二人には勝負を挑んでくるもんですから。俺、頑張って二人に追いつきたいと思って。」

「何?中国には、そいつも一緒に行ったのか?」

「はい。進藤がそう決めましたから。」

「あの進藤という子は、強いのか?どのくらい。なぜ今までプロ試験を受けないできたのだ?」

「それは俺に言われても。でも進藤は強いです。中国のトップ棋士とも互角に渡り合えるんです。それに、俺、ここまで来れたのは本当にあいつのおかげの気がするんです。あいつは最初に会った時、俺をプロにしたい、それで一緒に頑張っていきたいっていうようなことを言いました。でも正直、俺はネット碁では、指導碁打たれてたと思うんです。だから初めは、本当に俺なんかと頑張りたいのかって、疑ってました。」

「白川君も水臭いな、何で俺のところ連れてこなかったんだ。」

「白川先生が俺をしごくことに決めたのは、俺を早くプロにして、進藤を森下先生に紹介するためだったんだと思います。俺で手一杯だから、新しい弟子はいらないって、言われたからって、白川先生は言うてました。」

俺、でも良かった。進藤と知り合えて。あいつの碁に対する思いが俺好きなんだと思います。進藤にとつて、頑張るっていうのは、碁を打つことで何かが生まれるんだっていうことじゃないかって、今は思います。

あいつは、タイトルを取るとかいうのが、一番の目標ではないんだって、もっと碁そのものの持つ何かを求めているんじゃないかって感じるんです。」

いつのまにか、和谷は熱弁をふるっていました。話しているうちに、ヒカルの求めているものは、こういうことじゃないのかという結

論にたどり着いたわけです。

そこにまたしげこが顔を覗かせました。

「和谷君は晩御飯食べていくの?」

和谷は大急ぎで答えました。

「今日は家で留守番頼まれてるのですぐ帰ります。しげこちゃん、ケーキごちそう様。」

「ううん。今度はおごってもらうんだもの。冴木さんも昇段するたびにおごってくれたんだもの。楽しみにしてるね。和谷君。」

「しげこ。いい加減になさい。和谷君も冴木さんも碁を打つお仕事のためにいらしてるのよ。あなたと遊びに来てるわけじゃないのよ。」

そこにやってきた森下の妻はしげこをピシリと叱りました。しげこは、しよんぼり少し涙ぐみました。

それを見て森下は胸がきゅんとして、言いました。

「そんなに叱らなくても。ケーキぐらい構わないじゃないか。」

森下の妻は、夫に言いました。

「あなたはお弟子さんにはいろいろ仰るのに。しげこには甘すぎますわ。」

「あの進藤君はまたケーキおごってくれるのかな。」

父親が甘いことを知って、しげこは、もう元気です。

「何? あいつを知ってるのか。しげこにケーキをおごっただと? 許せん。わしは今日初めてあいつに会ったんだぞ。白川に破門だと言ってやる。」

森下はもやもやを吹き飛ばすようにわめきました。

「あれ? お父さん。二度目だよ。昨日、お父さんがケーキの箱取り替えた時の人だもん。」

「何?」

「あなた。進藤さんは昨日ケーキ屋であなたにいきなりケーキを取り換えてくれて、箱を取り上げられたんですよ。あなたはあの時、一緒にいたもう一人と交渉したつもりなんでしょうけれど、だから覚えてないのね。本当にしげこも恥ずかしいですけど、あなたは大人なん

ですからね。子どものわがままに踊らされて。しげこに諭すのが筋でしょう。

あのお嬢さんが快く取り替えて下さったからいいものを。進藤さんといった方、お姉さんじゃなくて、従妹さんとかご親戚の方じゃないかしらね。

進藤さんもあなたに恥をかかせないで、中学生だそうですけど、見上げた方ですわ。」

「恥をかかさない？あいつは気がついてもないぞ。おれも気が付かなかったんだからな。」

「分かってたよ。私に合図して、黙っているようにって、こうしてたもん。内緒って。」

しーっと、指を口に当てる真似をして見せました。

「気が付いていたんですよ。でも大人だから、ケーキのことで目くじらなど立てなかったんですよ。本当に白川さんのお弟子さんっていうのも領けるわ。穏やかで、行き届いていて。私は、白川さんに言って、せめて差額をお返ししたいと思ってるのよ。」

「差額？」

「うん。お父さんが取り替えたケーキ、二個多かったもの。お兄ちゃんと私が二個づつ食べられたの。」

森下は言葉を失っていました。和谷は目を丸くして話を聞いていましたが、すぐに我に返りました。

明後日の研究会が恐ろしい。

「では、先生。俺、今日は失礼しますので。」

和谷は森下の返事も待たず、後も見ずに玄関へ急ぎました。

4.4. 時のオカリナで戻りたい

ヒカルが、孫弟子デビューを終え、森下の家から戻ると、あかりがいました。

「森下先生って、塔矢先生みたいなの？」

ヒカルは首を横に振りました。子どもっぽい感じはどちらも同じだけだな。

ヒカルは逆行前に千年の棋聖である佐為のことを子どもっぽい、ペットみたいだと思っていたくらいですから。神の一手にもっとも近い男の行洋を子どもっぽいと言えとはさすがです。

ヒカルは、ケーキ事件の人が森下先生だったことをあかりに話しました。

ケーキ事件というのは、前の日に白川の家にあかりも呼ばれた時のことでした。

それは塔矢門下の大騒ぎに巻き込まれた時のあかりの対応に感謝して、白川が呼んでくれたのです。

碁の集まりではないのですが、白川の知り合いが何人か一緒だと書いていました。

それで行きがけに、お土産にケーキを買っていくことにしたので

「イチゴのショートケーキを四つとチーズケーキを四つお願いします。」

次の子が、買おうとした時には、イチゴのショートケーキは売り切れでした。

めそめそする子の傍にいた父親らしき人物が、あかりに交渉したのです。

「ケーキを取り換えてくれ」と。

面倒くさいのであかりはあっさり頷いて、箱を取り換えたのですが、白川家について開けてみれば、六個しか入っていませんでした。

「明後日、研究会に行くのなら、ヒカル、ケーキ持って行ったら。」

「えっ。買いに行く暇がないよ。」

美津子は話を聞いていて、おかしくて笑ってしまいました。

これは、明子さんが来たら、一体、森下さんという先生はどんな方なのか聞かなくては。

「そのしげこちゃんというお嬢さんは、ヒカルに気づいたのね。」

ということは森下先生は、ぼつの悪い思いをされてるわけね。

ここはヒカルのために。うん。

「ねえ。ヒカル。白川先生に明日森下先生にお暇な時間があるか聞いてみたら。それで、時間があるならヒカル一人で会いに行つてらっしゃいね。ケーキは持つて行つてはダメよ。でもそのお嬢さんも好きそうなものを何か持つていった方がいいわね。それはお母さんに任せておいて。」

「おばさん？」

「点数稼ぎよ。ふふ。」

美津子はそう言つて笑いました。

ヒカルは狭い世界でこれからやつていくつて言つてるのだから、なるべく恩を打つておかなければ。息子が生きやすいように。

美津子の母親としての深慮遠謀でした。

白川はヒカルから電話をもらい、ケーキのことを知りました。

むむ、研究会は荒れるかもしれない。しげこちゃんが絡むと森下先生は尋常じゃなくなるからな。

それから電話を替わつた美津子の話に、またまた唸りました。藤崎君や明子夫人だけではない。進藤君のお母さんもまた。

次の日の午後でした。森下家では、森下がそわそわとしていました。

進藤君という子は、何で白川君にも内緒で会いたいというのだ？

ケーキのことで文句を言うつもりか？

ヒカルは、すぐに座敷に通されました。しげこ森下夫人も一緒にしました。

ヒカルはしげこに、にっこり笑つて、小さな包みを夫人の前に差し出しました。

「母がよろしくと申ししていました。」

「まあ。それはごく丁寧に。」

ヒカルにはすでに好印象を抱いていた森下の妻はにっこり受け取りました。

ヒカルはそれからまっすぐに森下を見つめました。

「昨日はきちんとお話できませんでしたが、研究会で個人的な話は無理だと思いました。」

それで、今日伺いました。いきなりですみませんが、一局ご指導いただきたいのです。お願い致します。」

森下は、ヒカルのその気配に、すっかり棋士としての自分を取り戻していました。

うむ。こいつは。なるほど。

「しげこ。あっちへ行きましょう。」

しげこはいやいやをしました。

「お父さんは碁を打たれるのよ。」

「あのおう、俺は別に構いません。しげこちゃんが退屈しなければ。」

しげこは嬉しそうに父親と母親を見ました。

「静かにしてるならいいよ。進藤君。黒を持ちなさい。」

そんなこんなで、対局が始まりました。

森下は、すぐにその対局に引き込まれました。

勿論、まだ俺には及ばない（と思いたい）が、だが、こいつは何かを求めて碁を打っている。和谷が言っていた意味が少しわかった。

「ありません。」

ヒカルは、静かに頭を下げました。

「進藤君。君は随分和谷と打ってくれたそうだが。礼を言うよ。あいつが伸びたのは恐らく君のおかげだ。」

ヒカルはちよつと目を丸くしました。

「そう言って頂けると嬉しいです。俺が和谷の邪魔をしてなかったんだって分かって。冬休みに合宿をしたんですけど、楽しかった。俺一人っ子だから。もう一人、伊角さんという院生も一緒に、三人で朝か

ら晩まで、二週間一緒に頑張つて。二人ともプロになれて、俺本当に嬉しかったんです。」

ヒカルがそう言うと、傍にいた森下夫人が聞いてきました。

「ごめんなさい。あの時ケーキ屋さんに一緒にいらした方は、ご親戚かご兄弟？」

森下は渋い顔をしました。

何も今頃言わなくても。

「あれは友達です。あいつも白川先生の囲碁教室に通ってるんです。あの日は、白川先生のところと呼ばれて、ケーキを買って行こうって、たまたま、あんなっちゃったんだけれど。」

「申し訳なかったな。」

森下は言いました。

「いえ、俺、ケーキなんて何でも構わないし。自分のために買ったわけでもないし。それに、どうしてもそれが好きっていうのも、分からないですから。」

「いえ。しげこがわがままで。」

「俺は一人っ子だから、結構好きにさせてもらってるから、俺も我がままかも。でも大きくなっていくと、やっぱり自分の好きには出来なことがいっぱいあるって、だんだん分かってきます。小さい時には許されても。大きくなると許されないこともいっぱいあるですよね。」

しげこはヒカルの傍で、何となく感じ入って聞いていました。

「あのお姉ちゃんは強いのか？碁？」

「始めたばかりにしては結構打てるよ。今中学の囲碁部に入っているし。チーム戦で大将してるよ。しげこちゃんは碁好き？」

しげこは首を横に振りしました。

「好きじゃないよ。打てることは打てるけど。お父さんは、へぼだへぼだっていうんだもの。私、学校で囲碁部なんて絶対入らないもの。」

ヒカルは笑いました。

「しげこちゃんの碁ってみてみたいな。きつと美味しいと思う。いちごケーキが詰まっています。」

「本当？」

「嘘は言わないよ。きつと甘くて美味しいかもね。」

森下は何も言いませんでした。

しげことヒカルは碁盤に向き合いました。

「しげこちゃん、ケーキは、いくつにしようか。」

「ケーキ？」

「うん。この石がケーキなんだよ。初めに九つ、ここに置くからね。じゃあ、頑張つて、ケーキがたくさん手に入るように始めようね。」

しげこは指導碁を受けることには慣れていました。ですからヒカルは非常に打ちやすかったのです。

津田と同じくらいかな。

そんなことを思いながらヒカルは楽しそうにのんびり、しげこを導きました。

昔、誰かが俺を、碁なんか好きじゃないって言っていた俺を、全く打てなかった俺を、優しくきちんと導いてくれたよ。遠い記憶。甘い記憶。昔つていつなんだろう？

「ここまでだね。取った石を埋めてごらん。」

しげこは地を埋めていきました。

「良かったね。三つしか違わないよ。」

ヒカルが帰った後、しげこの兄の一雄が聞きました。隣の部屋ですべて見ていたのです。

「お父さんの弟子には思えない子だったね。誰？」

「白川さんのお弟子さんよ。明日にでも私、進藤君のお母様にお電話を入れておくわ。」

森下へのヒカルのデビューが終わって一息ついた頃です。

ヒカルは家で、伊角と和谷と、今終えた対局を検討をしていました。

「和谷、俺が打ってもらっているっていったプロ棋士のこと、気にしてらんだって？白川先生から聞いたよ。」

「うん。気になるさ。当然な。」

「俺、二人のことを話したんだ。そうしたら、その先生たちが、二人と打ってくれるっていうんだ。明日だったら、一人はOK。もう一人は一週間くらい先になるかな。」

あのケーキ屋での邂逅で、ヒカルは、プロ試験に受かったら、ぜひ二人と一局打って下さいとお願いしたのです。

「そうか、進藤と中国に修行に行った仲間なら、いつでも相手をしてやる。」緒方は言いました。

行洋は表面上は何もない顔をしました。中国武者修行の話を知らなかったものだから、それはそれで、強い関心を抱きました。

ということで、平八の家で、打ってもらうことに話はその時決まったのです。緒方は平八に会ったことがなかったのですが、それがきっかけで、平八に会ったのです。

なるほど、先生は進藤のじいさんにまで手をまわして進藤を囲い込んでいたのだな。

緒方は、自分のことを棚に上げて思ったものでした。

翌日、誰が来るのだろうと、ワクワク、ドキドキしながら、平八の家に着いた二人は、緒方の顔を見て、ぎよっと

しました。何で塔矢門下の。

緒方は二人を値踏みしました。アキラ君ほどではなさそうだな。

「よろしくお願いします。」

そう言って、特に話をする風でもなく、碁盤を囲むことになりました。

進藤が昨日言ってたよな。白川先生と打ってもらっているのと同じに打ってればいいって。

今まで何で進藤に鍛えてもらったか思い出せ。中国棋院で中国一のトップともぶつかっていったじゃないか。頑張れ、俺！

あの塔矢アキラの奴は緒方先生としょっちゅう打ってきたんだろ。和谷が先でした。伊角はじっとその手合いを見つめていました。

緒方先生は、指導碁を打っているわけじゃないけど。それでも少し

ゆとりを持って打っている。和谷の力をじっくり測っているんだ。もしかして俺のことを考えてるんじゃないか。

俺の時はきつと進藤と打ち合っている時と同じように、打ってくるかもしれない。恐れる必要はない。それより、俺は今とんでもない幸運をもらっている。白川先生と打ってもらったのもそうだけれど、トップ棋士と思いつきり打てるチャンスなのだ。

緒方は和谷の力は早々に把握しました。

新人としては、まあまあだな。芦原よりはよっぽど、勘所がいいかもしれない。

伊角は心を落ち着けて、緒方の前に座りました。

沈潜せよ。そう念じて。

緒方はすぐに気が付きました。

こいつは。打てる。ヨミが正確だ。そういえば、若獅子戦で、倉田といい勝負をした院生がいたと聞いているが、こいつのこともかもしれない。進藤とも互角の勝負ができる奴だ。俺は一柳先生の二の舞はしないぞ。しっかり受けてやる。

さて、勝負がついた後、緒方は言いました。

「和谷君と言ったか。君は勝負勘はよさそうだが、やはりヨミをもっと深めることだ。」

伊角君はだね。もう十分に強敵だ。すぐにリーグ戦で戦えるようになるだろうな。頑張りたまえ。」

ヒカルは嬉しそうに、言いました。

「ねっ。二人ともなかなかでしょ。」

「確かに面白かったよ。で、進藤。来週もあるのだろう。」

「うん。ある。そういう約束だしね。」

「では、俺との約束も忘れるなよ。白川には、もう話をつけているからな。」

「分かってるよ。楽しみにしてるよ。」

伊角と和谷には分からない、ため口の話に二人は哑然としていました。

緒方はそのまま、車で帰りました。ヒカルは二人を途中まで送りま

した。

「また来週、二人目に会わせるからね。楽しみにしている。」

「進藤はどうやって、緒方先生と知り合ったの？」

「元々は、ネット碁で。和谷と一番初めに打っただろ。あの後すぐ俺に対局を申し込んだのが緒方先生だったんだ。」

『『本当に小学生か』って聞いてきた人か？』

「うん。白川先生にその対局を見せたら、緒方先生じゃないかって。白川先生は緒方先生と打つ機会が増えてたから。緒方先生の癖に気が付いたんだ。白川先生が感じる癖だよ。直接会うきっかけは別の人が絡んでるだけだね。」

和谷と伊角は歩きながら話していました。

「来週は誰に会わせてくれるんだと思う？」

「俺はもう何も驚かない。進藤が誰を連れてきても、平常心で打てるように頑張るだけだよ。」

「もちろん。俺も。今日は勉強になったもの。来週までにまた腕を少しでも磨いておこなくちや。」

すっかり腕を磨いて次の週、平八の家を訪ねた二人は、驚くのも忘れるほど、驚きました。

そして思いました。

緒方先生とああいふ形で打つたのだから、塔矢先生がそれを知って、進藤と打つようになったっていうのも当然じゃないか。何でそのことを思わなかったんだろう。

でもとにもかくにも二人は全力で、四冠の名人に向かっていきました。

なるほど。進藤君はいい仕事をしたな。二人とも良い棋士になる。特にこの年長の子は、アキラと打つても遜色がないだろう。深みのある良い碁を打つ。

「楽しませてもらったよ。君はここでもっと積極的に打って出るべきだ。もちろん守るのも悪くはない、その見極めが大切だ。」

それからヒカルに聞きました。

「先週はどうだったね。」

「緒方先生は、すっかり打ってくれたよね。」

「はい。指導碁なんかじゃなくて、でも導いてもらったきもして。あの一局、すごく勉強になった気がして。あれが今日の碁につながった気がしてるのです。」

伊角はそう言いました。

行洋は頷きました。

素直な良い若者だ。それに引き替え、我が弟子は。

「進藤君。緒方君は何か無理を言っているのじゃないかね。白川君に迷惑をかけたら申し訳ないが。」

「大丈夫です。俺のためには、いいことかもしれないですし。ちよつと興味津々です。」

「そうか。それならいいが。何かあったら明子に話すとよい。」

「先生の奥さまにですか？」

平八が尋ねました。

「ええ。女性というのは侮れないものです。妻は私の弟子たちの性格をよく心得ていて扱いに長けているのですよ。」

「はあ。そうですね。」

平八は女性は侮れないというところに感じ入って、頷きました。

行洋はその先を天然に続けました。もしくは天然に見えるように。

「進藤君は、妻の師匠ですしね。」

ヒカルは、ややうんざり気味に思いました。

塔矢先生。こんなところで盤外戦か。ケーキ屋の仇討??

伊角も和谷も口を挟まないで黙っている分別だけがありました。

帰り道、ヒカルに聞きました。

「塔矢先生には、緒方先生から紹介してもらったのか？」

「いや、違うよ。俺。塔矢家の中で一番親しいのが、明子おばさん、先生の奥さんなんだよ。俺の家に時々息抜きに来るんだ。俺のお母さんとお喋りをしにね。俺、緒方先生と会う前に、塔矢先生と対局してたんだけど。」

ヒカルは何とも言えない顔をして、続けました。

「俺、今分かったことがあるよ。塔矢先生と緒方先生、本当に張り合ってるんだな。面と向かってだよ。俺は緒方先生が一人で張り合ってるのかって思ってたけど、違ったんだ。」

緒方先生が俺と打ちたいって、明子おばさんに言ったのを聞いて、それで先回りして、俺とじいちゃんに会いにきたんだ。塔矢先生は、

二人とも結構性格が悪いよな。塔矢も変わってる奴だけど、あんな風になるのかなあ。父親を尊敬しているって言ってたから。

師匠と弟子って、本当にいろいろなんだな。

和谷は森下先生とどんな付き合いなんだ。白川先生とは違ってるんだろうな。俺、本当に良かった。白川先生が俺の師匠でさ。

絶対に塔矢門下のもめごとには関わらないようにって、言われてきたけど。

和谷も伊角さんも気を付けてね。たぶん、塔矢先生と緒方先生に目をつけられているよ。

二人とも新初段戦の相手は誰なんだろうね。楽しみだね。でも塔矢先生はないと思うよ。」

目をつけられているから、気を付けてと言われたって。

二人は、駅のホームでしばらく無言。

「俺、今日の話で森下先生に言うべきなんだろうか。森下先生が塔矢先生に絡んだりしたら、俺は完全に巻き込まれるな。塔矢門下の張り合いに。」

「白川先生にでも相談したらいいんじゃないか。まあ、俺は九星会だから、その点は良かった。俺は今回の対局、二回とも有難かったよ。今日は、とてつもなく力もらえた気がしてさ。新初段戦は逆コミだろ。恐れることなく打てそうだな。楽しみだね。」

和谷は恨めしそうに伊角を見ました。

俺、この先の人生が恐ろしいよ。」

45. 盤外戦、前哨戦

前回の棋聖戦は、たまたま二月からだったから、一月の新初段戦に出られたが、今回は、来月からだ。

恐らく白川君だな。侮れない相手だ。畑中・緒方・白川・倉田が次世代四天王とか言われているが、僕がその先峰でやられたくはないよねえ。ま、棋界のためにはそろそろ新しいのにも頑張ってもらおう方がいいが。

あの時の院生は、今年のプロ試験を通っているね。二人とも。すぐに実力は分かってしまうものだけど。そうになると、やっぱり気になるのは *winkle* だねえ。

ということ、一柳は、緒方に聞きました。

「緒方君、君は *winkle* にじかに会ったことはあるのかい？」

緒方は余裕で聞き返しました。

「会ったことがあるとしたら、どうなんです？」

「私も会ってみたいのだよ。」

「そうですか。でしたら来年には会えますよ。」

「なぜ？」

「来年はプロ試験を受けると聞いていますからね。」

「ということは君は知っているんだね。何もそう出し惜しみをすることはないだろう。君とは当分リーグ戦でも争うことはなさそうだし。」

「は？リーグで戦うなら会わなくていいっていうんですか？それくらいなら何も聞かなくていいでしょう。」

「緒方君は意外と粘着質だねえ。」

「別に、そういうわけじゃないですけどね。あの *winkle* には師匠がいるんですよ。ですから俺がどうかいうことはないですよ。師匠がいいと言ったら、会えるんじゃないですか？」

「何？師匠は誰なんだい？誰の門下生なんだ？」

一柳は頭を巡らしました。

おそらく九段あたりの棋士か、或いはタイトルホルダーの誰か？ま

さか。桑原さんじゃないだろうな。一番い怪しい人物だ。

「どちらにしても、先生はリーグ戦やらで争う人なら遠慮されると言ったのですから。私は失礼しますよ。」

むむ、ということは。

「それに、私だって先生とどこぞのリーグで当たることもあるかもしれませんよ。これから。棋戦はいろいろありますからね。」

そこに具合よく桑原がやってきました。

「おや、一柳さん。緒方君に何かちよっかいを出しているんですかな。本因坊戦は挑戦者は、どなたでも構わないですよ。緒方君とばかりだと飽きてしまうのでね。ふっふっふっ。」

本当に嫌味な爺だな。見ている。すぐに、古い奴らを蹴落としてやる。

「ちようど良かった。桑原先生は小学生のお弟子さんはいられますか？」

「いや。残念ながら今はいないねえ。」

緒方は一言付け加えました。

「一柳先生。彼は去年は小学生でしたが、今は中学生ですよ。あしからず。」

そこへまたまた森下と白川がやってきました。

そうです。今日は高段者の対局がある日なのです。

「皆さん、お揃いでこんなところで何をなさっているのですか？」

奇妙なメンバー構成に森下は少し眉をひそめました。

師匠としては、少しでも白川君を雑音から遠ざけておきたいものだが。何しろタイトルがかかっているのだから。森下門下の悲願だ。

緒方はここぞとばかりに、行洋譲りの技を繰り出しました。

「いえ、一柳先生が、タイトル戦を前に、どうしても白川さんのお弟子さんに会いたいと言ってるのですよ。」

それだけというと、緒方はすたすと去って行きました。

どうせここにいてもろくなことにならない。食い物にされる前に、消えた方がいい。結果は後で進藤に聞けばいいのだから。どうせ俺が立ち会うことなどできないだろう。あの桑原の爺が興味津々だか

らな。同席はごめんだ。

一柳はぎよつとしました。

だが、考えてみれば、あの斬新さは、若い実力者にこそ合っている。そうだったのか。白川君ねえ。

でもタイトル戦を前に、気になっていいることに決着をつけねば、落ち着いて打てないよね。あの手、白川君は知っているのだろうか。当然に。

「白川君には、中学生のお弟子さんがいるのかい。」

「はあ。一人います。」

用心しい白川は答えました。

緒方さんや塔矢先生が絡んでいいるのだからいずれ、何かとややこしいことが起きると思っっていたけれど。

私は全く構わないけれど、進藤君は棋界の星になる子だ。守らねばならない。

「是非、紹介してくれないか。腕前のほどを直に見たいのだよ。」

白川は少し考え込みました。森下が横から口を出しました。

「失礼とは思いますが、一柳先生。来月から棋聖戦ですよ。今頃なぜ白川の弟子の話？」

「いや、私は白川君に何かしてるのではなく、ただお弟子さんに会いたいだけでね。」

「それは今聞きましたよ。でもそいつはまだ中学生になったばかりの子どもですよ。しかもプロじゃない。白川だって、ホイホイと返事はできませんわな。」

その時また新たな人物が。

「これはみなさん。先ほどからちよつとお話を聞かせてもらってましたが、白川君。緒方君が君に何とも面倒くさい話を振って申し訳ない。森下。すまん。」

そう行洋が言いました。

他の高段の棋士たちは、ややこしいことはごめんだと、彼らをさつさとよけて行ってしまいました。

「それにしても、一柳さん。なぜ白川君のお弟子さんにそんなに執着

「されているのですか？」

白川はそれを聞いてなんと白々しいと思っていました。

この集団で一番進藤君に執着しているのは、塔矢先生じゃないか。「いや、私はネットで打ったことがあってね。碁盤を囲んで打ちたいと思っただ。そもそも緒方君が紹介してくれたんだよ。ネット碁の相手として。」

桑原がついいと口を挟みました。

「何か面白い話だねえ。そんな若いのに緒方君はともかく、棋聖とあろうものが関心を持つとは。何かわけがあるんですかな。それとも白川君を揺さぶって棋聖戦を有利に運びたいのかな。いやいや、そんなせこいことを考えていると、勝てませんぞ。」

一柳は思いつきり嫌な顔をしました。

桑原さんの弟子じゃないかもしれませんが、全く何にでも面白いと口を突っ込んでくるのは、困った癖だ。

行洋は言いました。

「一度棋院でさつと打つたらいいのではないか。森下は反対か？棋戦までひと月あるから、できるだけ早くやれば、気にすることもないだろう。白川君なら影響など受けないよ。」

「まあ、そうだな。」

白川には行洋が、ヒカルが大丈夫だと言っているのが分かりました。

「彼もトップ棋士がお相手下さると聞いたら、喜びますね。一柳先生とはすでにネットで何回かお相手頂いているのですから、なおさらでしょう。」

そう白川は言いました。

「ではいつにするかね。早速部屋を申し込んでおこう。」

森下が無愛想に言いました。

「彼は孫弟子でもあるんで、俺の研究会に来るんですよ。研究会の前に一局お相手下さればいいんじゃないでしょうか。大げさでもないし。ちようど明日研究会がありますんで、二時間ほど早く来るように言っておきましょう。白川君、学校の方は大丈夫かな。」

「それは構わないでしょう。連絡しておきますよ。」

「森下。私も立ち会ってもいいだろうか。」

「行洋。なんでお前が？進藤に関心があるのか？」

「いや。彼は私の妻と親しいのでね。前から彼を知っているのだが。」

「何？」

森下は目を剥きました。

どういう関係なのか？

白川は、あっさり言いました。

「ここにいる方々で、進藤君が打ってないのは、桑原先生だけです。いろいろなことはどうでもいいのではありませんか。森下先生。進藤君のお母さんと塔矢先生の奥様はたまたまご友人なのです。それだけなのですよ。」

「ではこれで、手打ち式だね。明日はわしものぞかせてもらうよ。楽しんでねえ。」

そう言うと、桑原は先にエレベーターの方へと行きました。

白川は、ヒカルに連絡を入れました。

「お昼過ぎに行きます。学校は大丈夫です。」

そして、その日、森下が研究会のため午後から予約していた部屋には、昼過ぎにはもう名だたるタイトルホルダーが三人も顔を揃えていました。和谷はヒカルに聞いて、その日は早退し、対局を見に来ました。

「そうか。君は森下さんの門下生か。ではあの新初段戦を見破ったのは、やはりあの対局を見ていたからだね。」

一柳はそう言いました。

「何かね。一柳さん。新初段戦とは。」桑原が聞きました。

「いやね。塔矢さんがいるのに申し訳ないが。」

「いや。分かっていますよ。私は息子には言っていないませんが、あれは逆コミでも一柳さんが勝っていたのですな。一柳さんがご祝儀をくださるとは、あの時は少々驚いたものですよ。」

「いや、私は別にどうしようとも思わなかったんですよ。流れでそう

なつてしまつてね。そもそも新初段戦などもう古い。私はいらぬ棋戦だと思つてますよ。少なくともこれから来る進藤君というのですか。彼のような若者が、プロの門を叩くのに、逆コミ五目半などは。」

「そうですね。」

その時、ヒカルがやつてきました。

中学生と聞いていたが、小学生にしか見えないじゃないか。

これは、そこにいた桑原と一柳の感想です。

ヒカルは、そこにいる年配の面々に少し面くらいました。

「君が、twinkleという名前で打っているのかい？」

「はい。初めまして。進藤ヒカルです。一柳先生にはネットではご指導いただいております。」

「時間もあれですから、すぐに始めた方がよろしいと思います。」

というわけで、ヒカルは一柳と向かい合つて、打つことになりました。

気が負いが全くない。しかし、この集中力はすごい。何を言つても聞こえていない。それよりこの手は、新手というわけでもないのかもしれないが、斬新だ。ふむ。

実に、面白そうな小僧だと、桑原は思いました。

46. 私はお化けが苦手なの

一柳戦では、ヒカルは気負うことなく打ちました。

白川先生のタイトル戦の相手だから、先生にとってつまらないものにならないようには打つ。勝ち負けよりもつと面白い碁を打つてみたい。もちろん負けるつもりはないけれど。

それだけでした。

打合いが終わると、さすがにトップ棋士です。検討は興味深いものでした。

長年対局を続けてくると、こんな違う観点でみるのか。そうか。

白川は、当然ながら一切口を挟みませんでした。

「白川君はこんな優秀な弟子をどこで見つけてきたの？」

一柳は聞きました。それに答えたのは、行洋でした。

「白川君は見つけてきたわけじゃないんですよ。たまたま進藤君は白川君の囲碁教室に習いに来て、石取りゲームから始めて、白川君がすべて鍛え上げたんですよ。」

「塔矢さんは、なぜそんなに進藤君のことを。」

「いや、別に。ただ白川君は控えめだからそういうことは言わない気がしてね。緒方君が騒ぎの発端だから、私が少しホローしなくてはと思ったまです。では、私はこれで、進藤君。明子がよろしくいっていた。そうそう、これを渡してくれと。」

行洋はそう言つて、お菓子の箱をヒカルに渡して出て行きました。

「わしも失礼するよ。進藤とやら。次はわしが相手をしたいのう。」

「ありがとうございます。ぜひご指導ください。」

桑原は立ち上がりました。

実に面白いものを見た。

一柳はいろいろ聞きたいことはありましたが、取りあえず立ち上がりながら、聞きました。

「進藤君はいつから白川君の教室に通っていたの？何時碁を始めたの？」

「えっと。碁を始めて、ちょうど2年8か月ぐらいかな。」

最高の前哨戦をしてくれたね。進藤君は。君は最高の弟子だよ。本当に。

白川は、桑原と一柳がぎよつとした気持を何とか取り繕うのを見て思っていました。

ところで森下研究会に菓子をことづけた明子ですが、またまた悩みを抱えていました。

ことの初めは、ケーキ屋で、六つ巴の舌戦があつてから、しばらくした時でした。

気づいたのは、佐為が先か明子が先かわかりません。

幽霊さんてきれいな。透き通るよう。あら、そうじゃないわ。透き通つてきているのよ。

碁石を置くようになってからは、指先にしか注意を払わないできたから、気が付かなかつたわ。

指先だけははつきりしているわ。まだ。

明子はまだと自然に思い、そして、佐為を見ました。

幽霊さんは分かっているのだわ。このまま、幽霊さんは透き通つて、見えなくなる。

でも碁を打ちたい一念で、指先に全ての思いを込めてるのだわ。

明子は胸が熱くなってきました。

このことを誰に話すべきなのか、当然夫と緒方にまず知らせねばなりません。

しかし、実際に話したのは、12月も中旬を過ぎていました。

緒方には家に来てもらいました。

幽霊の姿が薄れている。

「緒方さん、いつまで見えるのか私には分からないわ。でも幽霊さんは、全力で指先だけは、薄れさせないようにと頑張つてはいるの。もしかしてこれが最後かもしれないわ。碁盤で一局、打って差し上げて下さい。」

行洋が立ち会う中で、厳かな雰囲気、その碁は打たれました。

我ながら名局だった。負けただけれど緒方はそう眩きました。

勿論、今しばらくはもしかしたらネットで打てるかもしれないが。それでもこれが盤で打つ最後だと緒方は感じていました。

ついに姿は見えなかったが、俺を引き上げてくれた。碁の神に感謝しよう。

その日は、アキラは泊まりで仕事に出ていました。

「アキラにはいつ話すのか？」

「ええ、戻ってきてから。でも納得してくれると思うのよ。3か月ほどでしたけど、本当にたくさん打っていましたもの。それに幽霊さんもアキラさんと打つのがことのほか、嬉しいらしくて、そんな様子でしたもの。」

「何か縁があったのだな。打てる間はしっかり相手をしてくれるとありがたいが。明子にばかり負担をかけてすまないが。明子の話を聞くと、碁打として実に心を打つ姿だと思えてならない。」

次の日、戻ってきたアキラに、夕食の後、明子は話をしました。

「緒方さんとお父さんには、昨日、お話したのよ。緒方さんは、お座敷で、碁盤を挟んで対局をしたわ。もしかして最後になるかもしれないからって。」

「今はまだ見えるのですか。」

「体は本当に透き通って霞んできているの。でも指先だけはまだ、碁盤の目を指す人差し指の先はまだ見えるわ。いつまで続くか分からないけれど、碁を打ちたい気持ちだけで存在してるのよ。」

明子は少し涙ぐんで言いました。

「アキラさんが毎日相手をしてくれて、本当に良かったわ。幽霊さん、本当に喜んでいたわ。アキラさんは毎日打った手を勉強して次の日に頑張っていたでしょう。そういうのが幽霊さんには分かって、とても嬉しかったのだと思うの。」

アキラは少し嬉しく、少し心が痛みました。

幽霊はいつまでも幽霊でいることはできないのかな。もしかして僕が毎日打ったせいで、そんなに早く消えてしまうのじゃないか。そんな気がしたのです。

それから幾日もたたない朝でした。

明子は、佐為の姿を見かけました。指先もすでに霞んでいました。打てなくなってしまったのね。とうとう。

明子は家にいたくなくて、出かけました。どこに行くという当てがあるわけではありません。

「お婆さん。どうしたの？どこか具合が悪いみたいよ。」

いつの間にか、ヒカルの家近くに来ていたのです。

幽霊の話が出来るのはヒカルぐらいしかいませんでしたから。

「ああ、あかりちゃん。」

明子はよろっとしながら、近くのベンチに腰を下ろしました。

「大丈夫よ。私はね。」

明子はあかりに幽霊が消えてしまいそうだという話をしました。

「で、家にいたくなくて、でもどこかに行くということもなくて、いつの間にかここにきてしまったのよ。」

明子がふらついて見えたので、あかりは心配でした。

「お婆さん、あそこでタクシーを拾ったほうがいいわ。」

明子を送って、あかりは初めて塔矢家に来ました。純和風の家をちよつと珍しそうに見つめました。

でも家に入りたくはないわ。幽霊がいるんですよ。

あかりは、結局家に入りました。居間に行くと、明子はお湯を沸かそうとしました。

「お婆さん、お湯は私が沸かすわ。」

あかりがお茶の支度をしているので、明子はお菓子を出してお皿に載せていました。

二人でお茶を飲みしばらくすると明子は言いました。

「ごめんなさい。幽霊さんを見てくるわ。」

あかりは、ぞつとしない気持でしたが、一人になるのは絶対嫌でした。

それで明子について行きました。

「まあ」

明子は呻くような声を出しました。

佐為は霞のようになっていました。

「私は、私はまだ打てるのに、打ちたいのに。」

あかりはその声を聴きました。

「おばさん。幽霊さん、今話をしてるわ。」

「あかりちゃん？」

「私、幽霊さんは見えないわ。でも声が聞こえるの。まだ打てるのに、打ちたいのについて言ってるわ。」

明子は立ち尽くしました。

でも最後なのかもしれない。だったら。

「あかりちゃん。お願いがあるの。」

明子の願いは幽霊さんと打たせてほしいというものでした。

「九子でも少ないけれど、九子で私と打ってくれるか聞いてみて。」

それはあかりにとつてとつてもなく不思議な経験でした。

明子がいたので、恐ろしいという気持はありませんでした。この家に来た時は、正直気味が悪くて怖かったのですが。

あかりは、佐為が口にする手を碁盤に並べました。

「ありがとうございます。」

明子は幽霊に向かって頭を下げました。

明子には、その時、佐為が微笑んでいるように思えました。そして微かに煙のようにかすんでいくのをただ見つめていました。

「居なくなってしまうわ。少なくとも、私にはもう見えないの。」

明子は悲しそうに言いました。

あかりは何と言っていいか分かりませんでした。

そのまま、帰りはタクシーで、家に戻ったあかりでしたが、その日の経験はずんと心に残って、誰かに話すことなどすぐにはできないと思いました。

だから明け方近くでしょうか、声が聞こえた時は驚きました。

夢？

「私はもう見ることもできない。でも頭の中に碁盤があります。だから

ら打てるのに。」

あかりは飛び上がりました。

隣の部屋のお姉ちゃんに気づかれないように、でも声に出して尋ねました。

「幽霊さん？どうして？あなたは碁盤から離れることはできないって、聞いたのに。」

「私には分かりません。でもあなたは私の声を聴くことが出来たから、だから私はただあなたのもとに行くことが出来たのかもしれない。私にはもう姿はないのです。声だけの存在。それもいつまで続くか分かりませんが。」

碁を打つ時だけ、声をかけてください。そうしたら、私の声は目覚めて、打てるはず。ただ、もう相手の打つ手も見えない。あなたがすべて教えてください。お願いします。今しばらく、私を生かしてください。」

声は静かになりました。でもあかりはもう寝るどころではありませんでした。

「私はお化けが苦手なのに。」

もう一度声がしました。

「私はお化けではありません。幽霊なのです。」

そうきつぱり言うと、声は消えました。

47. 始まりの時

佐為は、自分の体が消えかかっているのに気づいた時は、愕然としました。

逆行しても、千年の時は越えられないのか。いくらなんでも二度は逆行なんてできないだろうし。

そう思いながら実はひそかに期待したりして…。

もし叶えられるなら、次の時はあまりあれこれ注文を付けまい。碁を打てるだけで我慢しよう。

少し虫のいいことを考えていたりしました。千年を経てきた佐為は、さすがというしかありません。

それで、いよいよという時、ちよつと言ってみたのですが。

誰につて？私を千年も魂として生きながらえさせている神様とかにですよ。

「姿が見えなくなっても、声は出せるから碁を打てる」のだと、試しにですよ。

私は勘が冴えてました。さすが棋聖の私ですよ。

まあ、綱渡りながら、運が良かったというべきかと思いますがね。

佐為はあかりにあつたときは、すでに霞んでいたもので、あかりの顔ははつきり見えませんでした。

それよりも碁盤の石が見えることのほうが肝要ですからね。

それでもあかりが、塔矢アキラと同じぐらいの年のおなごだとは分かりました。

ん？もしかして逆行すると、女人にしか認識されないというわけではないでしょうね。

いや、これは、かつて、佐為の君とか言われて、ほいほいと浮かれていたころの仕返しではないでしょうか？

生霊のなせる業？いや、もう千年も経つのです。死霊のなせる業？

まあ、私だつて、幽霊ですからそんなの、怖くはありませんけどね。でもよかった。この娘が、少しは碁を知っているようで。だって1

5の6ツケとか、小目とか言って、わからないようでは時間がもつた
いないではありませんか。初めから教える時間などありませんから
ね。今の私には。

この奥方が声だけ聞こえるということだったら、本当に大変なこと
でしたねえ。よくしたものです。

でも何気に、この奥方、凡庸ですが、碁が少々は打てるようですよ。
私の石を置いていたから、碁を打つことに目覚めたのですね。

明子を9子で導きながら、そんなことを考えていた佐為でした。
それよりもです。私はこれで、どうなるわけでしょうか？

佐為が自分についてきたということが分かったあかりの方がその
問いは深刻だったかもしれない。

寝不足で起きてから、すぐに問いただしたものでした。

切羽詰ってましたから、急がなくなっちゃ。

「お化けじゃない、幽霊さん。あなたは私以外の声や音も聞こえるの
？」

女人のことに詳しい佐為にはピンとききました。

「娘御。私はあなたが声に出すことしか聞けないのです。ほかの音も
声も聞けません。また見ることも全くできません。何より、あなたに
ついていくからと言って、あなたが何を考えているかなども分かりま
せん。以上。」

何もご心配なく。私はあなたが対局を手伝ってくれるだけでいい
のです。何もあなたの生活の邪魔などいたしませんし、できません。
あなたが私に向かって声に出した時だけ、聞こえるのです。ほかの方
としゃべっているのを聞くことはできないのです。それもいつまで
もというわけではありません。あとほんの少々の時間しか残されて
いませんから。私には。」

あかりは、ほつとしたように、「わかったわ。」と言って、トイレに
駆け込みました。

それでも、その日一日は用心したふるまいをしたものです。

佐為の方は、女人に憑くということは何かと配慮のいることすな
どと気楽に考えておりました。

翌日、あかりは悩みながら、何となく公園に向かって歩いていました。

家だと一人になりたくて、何も考えられなかったのです。

なぜ、私は幽霊さんの声を聞くことができるの？

おばさんを見るのができたのよね。おばさん一人が見ることができたのには訳があるって、ヒカルは言ったのよね。

あかりはケーキ屋で六人が話をした時のことを思い起こしました。

塔矢君がプロになる前に見るとまづいからって、言ってたわね。

じゃあ、私が声を聞くことができるのは、なぜ。それだけじゃないわ。幽霊さんは声だけになったら、碁盤から離れて、私の傍にいるようになったのよ。それはどうしてかしら。

あかりは一生懸命頭をひねりました。

それは幽霊さんは、塔矢家ですることが終わったから？　じゃあ、私のところで何をやるの？

私は碁盤の幽霊なんかと何にも関わりがないのに。

その時、思い出しました。

私、座敷童だと思っちゃったけど、ヒカルのおじいさんは、そんなことは言わなかったのよ。

烏帽子を被った幽霊が出る碁盤の話。もしかして関係あるのかしら。

私、この話をヒカルにする方がいいの？ヒカルはまだプロになってないわ。

あかりは、思い悩みました。

白川先生に相談したいけど、もうすぐ棋聖戦が始まるのよ。こんな話は今はできないわ。

どうしよう。それに…。

あかりには、もう一つ心配事がありました。

幽霊さんは、今はまだ声が出せる、耳が聞こえるって言ってたけど、いずれ声も出せなくなるのかしら。

それがすぐだったら、どうしよう。私が声が聞けるたった一人だっ

たら、私は明子おばさんがそうしたように、何かしてあげなくちゃいけないのよね。ネット碁？何となく違う気がするわ。

ふらふらと歩いているあかりに、ヒカルは気が付きました。白川の家からの帰りでした。

進藤君と打つのは、棋聖戦の邪魔にはならない。むしろ役に立つ、そう白川は言ったのでした。

「あかり、どうしたんだ？」

その顔を見て、ヒカルはビックリしました。目の下に隈を作って、具合が悪そうでした。

「顔色が悪いぞ。家に帰った方がいいんじゃないか。」

「うちにいると、ゆっくりできなくて。」

あかりは、苦渋に満ちた声で言いました。

こんなあかり、俺見たことないぞ。

取りあえず、ヒカルはあかりを自分の家に連れて行きました。ヒカルの部屋で、あかりは、ぼんやりしていました。

「ちよつと待ってろ。」

ヒカルは台所へ行くと、何かないかと探し、やっとココアスティックを見つけました。

年末の買い物で美津子は留守だったので。

「これでも飲んで、少し休めよ。邪魔なら俺、下にいてもいいぞ。」

ヒカルは熱いココアを差し出しました。

「ううん。大丈夫。あのね、ヒカル。」

そう言つて、あかりは黙りました。

「おい。あかり。お前何か悩んでる？俺で良かったら話してみろよ。」

「うん。」

あかりはしばらく黙つて、ココアを啜っていました。

「ねえ、ヒカル。来年プロ試験受けるよね。プロになるよね。」

ヒカルは、あかりの言葉に驚きました。

「うん。そのつもりだけど。」

「絶対そうするって約束してくれる。約束破らないって。そうした

ら、話せるから。」

「うん。絶対約束するよ。でも、なんで？」

「だって塔矢君はプロになるまで幽霊さんと打たせてもらえなかったんでしょ。あの時、そう言ってたよね。塔矢先生も緒方先生も。」

「ああ、そう言ってたな。」

それがどうしたんだろう？

あかりはやっと話しました。

「私、一昨日明子おばさんに会ったのよ。おばさん具合悪そうで、ぼんやりしてたのよ。だから聞いたの。」

あかりは明子を送って塔矢家まで行ったこと、あかりには幽霊の声が聞こえて、そこで幽霊と明子が一局打って、幽霊の姿が消えたことを話しました。

ヒカルは驚きました。幽霊が指先に込めた碁を打ちたいという思い、その執念に、思わず胸が熱くなりました。

あかりがその時、塔矢家で幽霊の声を聞くことができ、おばさんが最後の一局を望んだのもすごい。

「あかり、すごいな。明子おばさんも。幽霊は嬉しかっただろうな。おばさんと記念の一局が打てて。あかりがその時、そこにいて幽霊の声が聞いたのは、運命だったんだよ。きつと。」

あかりはちよつと笑って、それからまた黙りました。

まだ何かあるのか？

「ヒカル。話はこれからのな。私、白川先生に話そうと思ったんだけど、先生棋聖戦がもうすぐだし。だから誰に話そうかと思って、ヒカルはプロじゃないから。でもヒカル、今約束してくれたから。」

ヒカルは、あかりが話したことに驚きました。

あかり、幽霊の声を連れて、家に戻っちゃったんだって？

「明子おばさんにだけ姿が見えたのにも訳があるのなら、私にだけ聞こえるのにも訳があるのかもしれないわ。」

それよりも明子おばさんは幽霊さんのために碁を覚えて、石を置いてあげたんでしょ。私もおばさんから引き継いだのなら、幽霊さんのお手伝いをしてあげたいと思うのよ。」

だって、幽霊さん、話せるのも長い間じゃないっていうようなこと
言ってるの。今しばらく、ほんのしばらくの間だって。だからヒカ
ル、手伝ってくれる？」

だから俺に約束させたのか？プロになることを。あかり。

あかりの気配りに、ヒカルは胸が熱くなりました。

そう言えば、明子おばさんが幽霊と打ってる時、俺、何で打たせて
くれて一度も言わなかったんだろう。ネット碁もやってたんだよ
な。塔矢と打つことがないのも不思議だと思ったけど、それ以上に不
思議だよ。

いや、今は、そんなこと考えている時じゃない。

「あかり、ありがとう。気を遣ってくれて。俺、手伝う。っていうよ
り、俺、その幽霊と打ちたいよ。塔矢先生も緒方先生も塔矢の奴も夢
中になったんだろ。そいつの碁に。だからあかり、手伝ってくれ。俺
は大丈夫。絶対プロになるから。」

その場で、ヒカルは幽霊と一局打ちました。あかりの重荷を少し分
けて受け持つつもりでした。

でも。あかりが帰った後、ヒカルはぼんやりと碁盤の前に座ってい
ました。

厳しくて魅力的な対局。あかりがヒカルの手を読み上げるのも不
思議な感覚でした。あかりが幽霊の声を聞くことができたので、対局
後の検討も思いつきやれました。

やっと佐為とヒカルは、ヒカルの部屋で、脚付き碁盤で対峙して打
ち合うことになったのでした。

こんな形でしたが、それでも辿りついたのです。

でも前と違うこともありました。ヒカルも佐為もお互いあかりを
仲立ちにしなければ、接触できないのです。

また二人はお互いがどういう存在なのかを思い出せていませんで
した。

それ以上に、逆行前と違うことがありました。何よりヒカルの棋力
が大きく違っていました。

逆行前に最後に二人が打ったときよりも、ヒカルの力は格段に進歩していました。行洋や緒方と数年にわたり打ち合ってきた佐為にとっても、ヒカルは非常に魅力的な打ち手でした。

白川の棋聖戦が終わるまでに、あかりはできるだけ毎日、佐為をヒカルと対局させることに時間を費やしました。あかりには佐為の存在のともろびが日々小さくなっていくことが何となく感じられていたのです。ですからあかりにとって対局を手伝うことは、自分にとっての救いでもありました。

冬休み中、ヒカルとあかりは向かい合って、不思議な対局を続けました。

間もなく冬休みが終わり、三学期となりましたが、あかりは英語の勉強を口実に、学校帰りにヒカルの部屋に行き、幽霊との対局は続きました。

ヒカルはその頃には、いろいろ考えるのはやめていました。

ただこの毎日の一局に、すべてを委ねる。自分が今までにやってきたことのすべてを託して、石を置く。相手が応えてくれるその手に、自分もまた応える。ただそれだけだ。純粹に打っただけだ。

48. やっちまったなあ!

さて、ヒカルとあかりと佐為が、ひたすら三角関係的対局にいそしんでいる間に、棋界ではいろいろなことが進んでいました。

まず、和谷と伊角の新初段戦がありました。

和谷が対局者を伝えられたのは、ひと月前でした。座間先生が俺の相手か。でも頑張るぞ。

そう思っていた和谷は、研究会で、帰りがけに森下に呼び止められました。森下は、さっそく発破をかけました。「座間さんが相手だったな。あの人はお祭りごとには手を抜く人なんだ。それに逆コミだ。いいか。何が何でも勝て。いいなっ。塔矢アキラは、去年勝ったんだからな。」

そんなこといっても。そりや逆コミで、適当に手を抜いてくれるかもしれないけど、にしたってさ。

そう思ったものの、和谷は「はい。」と返事をして、森下にお辞儀をして部屋を出ていきました。

それから盛大にため息をつきました。

「よっ。何、ため息ついてんだよ。もうプロなんだぞ。」

冴木が肩を叩きました。

「うん。新初段戦のこと。」

「そういや座間先生とだってな。座間先生とじゃ、何か、まずいのか?」

「そうじゃないよ。森下先生がどうしても勝てつていうんだ。塔矢アキラは勝ったって。」

「はあ、また先生の無茶振りかあ。期待されてるんだな。ひいきが過ぎるよな。」

「先生は、要するに期待してるんだな。お前に。いいんじゃないか。勝つつもりじゃなければ、どうやって打つつもりだったんだ?」

「えっ?」

「そうかあ、俺、何、考えてるんだらうな。」

森下はちようど二人の会話が聞こえて、うんうんと思いました。

冴木もたまにはいいことを言うな。おや、これは白川君の声だ。

森下は、聞き耳を立てました。

「冴木君。君が手伝ってあげればいいんじゃないかい。」

白川が、ニコニコと言いました。

「手伝う?。」

「うん。冴木君は最近頑張ってるから、高段者の手合いにも顔を出すようになってる。座間先生の棋譜も勉強してるんじゃないの?。」

俺、今、結構頑張ってるんだよな。で、王座戦のリーグ入りを目指してるってこと、白川さんは知ってるんだ。うるうるするな。

森下先生は、そのこと何にも言わないんだよな。もしかして気づいてない?和谷ばっか。俺ひねくれちゃうぞ。

ん?冴木は王座リーグ入りを目指してたのか?知らなかった。今どこまで進んでいたかな。予選は。

今度激励してやらねば。

森下はそう思って聞いていました。

冴木の少しむすつとした顔を見て和谷は言いました。

「俺、進藤に頼もうかな。」

その言葉に、今度は白川が眉をひそめました。

「和谷君。そりゃあ、進藤君と、座間先生の棋譜を検討するのも悪くないよ。これが新初段戦でなければ私は全く反対はしないよ。進藤君は、喜んでやってくれるだろうしね。」

でも私は思うんだ。進藤君は君を仲間と思ってるんだよ。対等に打てる相手として、プロの君とプロとして打ち合うのが望みなんだ。だからね。新初段戦はその気構えを問うところだと思う。

森下先生は何も絶対に勝たなければいけないなんて思っていないよ。だって座間先生は日本の棋界を担っているトッププロなんだよ。

森下先生が言いたかったのは、恐らく勝つという気構えで戦えと言っているんだよ。まだひと月あるんだし、しっかりやりなさい。こせこせと勝とうとしないで。

もちろん負けれると思っただけじゃないよ。この先、プロ対局は、勝つことが大切になる。

でも新初段戦は、勝つことよりも、自分のこれからの対局姿勢を示す場だと思つて、今まで頑張ってきたことの意味を考えて、打つんだよ。負けても恥じない碁をね。」

和谷は、ハツとしました。

「そうだ。俺、進藤と訓練してて思つてたんだ。進藤の口癖。反省はしても後悔しない碁を打つっていうの。」

それ、今思い出した。俺、頑張ります。そんなもって進藤がプロ入りしたら、あいつを迎え打ちます！」

冴木がその言葉に頷きました。

「うん。俺も、いつも対局前には、その言葉を思い出して、王座戦の三次予選までコマを進めてくれたんだよ。手伝つてやるよ。座間先生対策。弟弟子の門出だもんな。」

隣の部屋で森下はそのやり取りを聞いていて思つていました。

悔しい、悔しい。俺は白川に負けた。

何がって、俺は和谷に、ご祝儀相場があるはずだから勝てよつて思つてたんだ。行洋の息子が順調だからって。それが何だ。和谷は和谷じゃないか。

白川だけじゃない、冴木まで。俺は勝つていう実績にばかり目を奪われてきた気がする。俺こそ気構えを失つてきていた。自分のことも弟子のことも。

森下の悔悟の念など知らず、和谷は必死に勉強を重ねました。ヒカルも和谷の勉強を覗きました。

「伊角さんは桑原先生が相手なんだつてさ。今本因坊戦の棋譜を検討しているんだつて。」

「そうなんだ。桑原先生は知らないけれど、座間先生つて結構バランス重視の碁を打ってるのかな。」

「うん。相手によりけりだけれどね。年季の入った手厚い碁だと思うよ。」

「でも和谷は大丈夫だな。普段通り、まっすぐ自分の碁を打てば。」

「平常心つてやつだな。」冴木が言い足しました。

「勝てるつて思う？」

和谷が嬉しそうに聞きました。

「いや、勝てるかどうかなんて知らないよ。でも良い碁にはなると思う。」ヒカルはそう答えました。

新初段戦の当日でした。座間はのんびりしたものでした。

この前、出版部の連中に挨拶されたけどね。新人は緊張してるんだろうねえ。

去年は一柳さんが新人に華をもたせたって聞いたけれどね、どうするかね。半目差ぐらいで勝たせるかな。

新初段戦は初めてだけれどね。ほんと、気楽な対局だよな。

「幽玄の間は初めてじゃないんだろう。えっと、」

名前何だっけね。

「和谷です。」

「そうそう。和谷君。」

「院生でしたけれど、ここでは記録係とかは、しませんでした。いつも憧れて覗いていた場所です。」

ふむふむ。緊張はしてないかな。こいつは。普通に喋っているな。

「ま、私のタイトルにビビることはないよ。気後れしたら勝てない。同じ初段だと思って向かってきなさい。」

「はい。頑張ります。」

ふむふむ。そういや天野さんが言ってたなあ。今までの新人は委縮するか気負うかのどっちかだつて。とすると、この子は気負うタイプか。ま、打ってみりや分かるわな。

さてさて結果ですが、王座が新初段だからと甘く見て始めたため、何度も扇子を齧る羽目になるのを、周囲にいた者は目撃することになりました。王座は思いました。

こいつはやっぱり気負うタイプだね。それほどの腕というわけではないが、ずいぶん俺の碁を勉強してきているようだ。

和谷は気負ってはいませんでした。

俺が今までやってきたことの総決算をここに出して、そこから始めるための対局だ。

中国でもトッププロにしごかれたじやないか。塔矢先生にも緒方先生にも白川先生にも打ってもらった。進藤とずっと早朝対局を続けている。

それから、思い出して付け加えました。森下先生にも打ってもらった。

それでも俺はまだまだだ。でも頑張れるだけ頑張る。堂々とした碁を打つだけだ。

途中から王座の顔がきつくなりました。

こいつはそれほどすごい腕の子じゃあないが。前半を甘く打ち過ぎた。

俺の名折れになる。せつかくご祝儀をくれてやろうと思ったのに。

俺の本気、トッププロの本気を思い知らせてやろう。

それでも和谷は崩れることなく頑張り抜きました。ただし勝敗は別のこと、王座の壁に和谷は善戦むなしく散ったのです。

俺って、まだまだだ。中盤をしのぐ力をもっとつけなきゃいけないんだ。

和谷は自分の碁の宿題を見つけました。

対局が終わって検討に入った時、天野が笑いながら言いました。

「和谷君、いや、本当に頑張ったね。」

わっ、俺の頑張りが認められたのか。

「あっ、ありがとうございます。先生に胸をお借りしました。これからの対局の力にさせていただきます。」

嬉しくて、殊勝に述べた和谷に天野は笑いながら付け加えたのです。

「いやあ、中身は、私は分からないから、これから解説をいただくとして。私が言ってるのはね。この一局で座間先生の扇子を一つダメにしたんだからね。だから張り切ったんだねって思ったんだけど。」

和谷はガクツと来ました。

「いや、扇子はすぐ買えますよ。座間先生。それより、入れ歯の方は大丈夫ですか。」

さらに余計な言葉を言ったのは、編集見習い？の、名前は？ 知ら

ない。たぶん、絶対古瀬村でしょう。

かじり散らされてぼろぼろになった扇子を見ながら、和谷は思いました。

今の言葉のせいで。俺、何気に座間先生にこの先に生まれそうな予感がする。俺ってなんかいつもそういうところあるんだよな。

俺が言ったんじゃないのに。俺のせいになってる？座間先生の顔が、そう言っているぜ。

そりや今の碁、後悔はしないけどな。俺のこの先の囲碁人生が暗くなりそうな予感がする。

落ち込む和谷はさておき、一週間後、伊角と桑原本因坊の対局がありました。

桑原は本因坊戦にすべてをかけていましたので、特に新初段戦などはちよつと、盤外戦で脅してさっさと終わらせる戦法でした。

ところが、伊角はそういうことは全く効かないタイプです。

「伊角君といったの。最近は中学生で入るのが多いと聞くが君は少しようがたっているかの。」

桑原のその嫌味な言葉など、伊角には聞こえていませんでした。

ひたすら盤面を見据え、その中に沈潜していました。

桑原先生には長年培った力がある。でも俺はヨミだけは負けたくない。

さてさて逆コミもあって、中押し勝を果たされた桑原は、ふっと、ひそかにため息をつきました。

最近の若いのは、まったく面白くないわ。こやつも集中して、盤外戦が効かないタイプじゃな。あの小僧と同じだ。その上、ヨミも深いときている。つまらん。対局相手には、緒方君のようなのが良いわい。楽しくて。

得意の毒舌が効かずに調子を狂わされた桑原は、心の中でそう呟きました。

そしてメインイベント、白川の棋聖戦挑戦が始まりました。

去年は余裕をこいていたから、新初段戦などに出たものだけ、今年度は違う。

棋聖戦は、二日の碁だからね。それに七番あるからね。緒方君だったら良かったのにねえ。

白川君は安心できない。どこを攻めていいか分からないところがある。食えない碁を打つようになってきた。

新旧変わり目とかいうけど、塔矢さんが相変わらずなのだから、私も負けてはいられないよ。

一柳はそう思っていました。

緒方は、何気に古株のタイトルホルダーたちに人気のおようです。緒方自身は嬉しくないでしょうが。

棋聖戦は二月の終わりに、白川の四勝一敗で終わりました。白川の決意が実ったというところでしょう。

緒方さんより早くタイトルホルダーになる。どちらが進藤君の師匠にふさわしいか、決着をつける。

緒方はそんなことは思っていなかったでしょうが、白川の自負心でした。

一柳は、つくづく思ったものでした。

桑原さんじゃないが、私は、せこいことをした。新初段戦であの手をきちんと提示していれば、その気概があれば、こうはならなかったかもしれない。私の碁はあの時から、萎縮していたよ。

森下は、門下生の前で、白川を祝福しました。そして一つの決意を抱きました。

俺だってまだ頑張れるかもしれない。決して遅くはないのじゃないか。正直、白川君がここまでの変貌を遂げるとは思いもしなかったが。年齢に関係なく、人は意外と変わるものだ。師匠として俺も負けてはいられん。

49. 4冠、汗（かん）、勘、第六感

白川が棋聖位を奪取したのを緒方は横目で見ていました。

確かにタイトルを取ったのは白川が先だったが、それは棋戦のシユケジュールの違いにすぎん。

ということ、恒例の？緒方の本因坊挑戦が始まろうとしていました。

メインイベントとは、白川の棋聖戦ではなく、俺の本因坊戦のことだ。

とは言ったものの、緒方には白川の快拳は、間違いなく追い風になっていました。

「また緒方君とかね。ちよつとは違った相手とも当たりたいものよの。飽きてきた。」

俺にはもう盤外戦は効かない。しかし、効いている振りもいいものかもな。

これで3回目だ。俺もだいぶ学習したんだ。

「そうですね。俺もお手伝いしましょう。来年は攻守変えてお相手というのも、気分が変わっていいかもしれませんよ。」

桑原は、心でちつと舌打ちしながら、それでもシレつと次の手を放ってきました。

「ところで、今回は必勝祈願のお守りはないのかね。」

来たぞ。言うと思った。

「はあ。あれは落とすと不吉なんだそうで、今年は家の神棚にまつっておきました。きつとご利益は抜群でしょう。」

ふむ。こやつ、今回はあまり面白くないわい。

「緒方先生？お守りっていうのは何ですか？」

傍にいた記者が聞きました。

「いや、大したことじゃないんだ。前回、前夜祭の時にね。ファンがくれたお守りをね、落つことしたんだ。それを桑原先生が見てたんだよ。」

「そうですか。桑原先生にお守りを渡すなんてファンは、いそうもあ

りませんからね。きつとひがまれたんですね。」

桑原は背中ですれを聞いて少し齒ぎしりです。

というわけで、緒方の本因坊戦は、まずは舌戦から、順調な始まりを見せていました。

白川は、一局目を緒方が制したのを見ながら、思いました。

私は進藤君の前哨戦に助けられた形で、タイトルを取れた気がするけれど、緒方さんも随分、調子が良さそうだな。

さて、一局目を自分のペースで勝てた緒方は気分をよくして、今日は友人宅でくつろいでいました。

友人？知り合い。どんな知り合い？

ま。緒方も大人です。大人な私生活があっても良しとしましょう。

師匠の行洋の大人な私生活は今は順調でした。白川は気の合った相手と落ち着いた結婚生活を送っています。緒方にも、あってもいいでしょう。

「あら。もう帰るの？」

「うん。来週は、二局目があるしな。」

「精次君って、いつも碁のことばかりね。でもせっかく来たんだから、もうちよつと楽しそうな顔をしたら。」

「おれは、いつもこういう顔なんだ。でも飯、うまかったよ。」

「そうですね。これ精次君のお母さんが送ってくれたのよ。精次の好物だから作って食べさせてくれて。」

緒方は顔をしかめました。

勘弁してほしい。まったく。

「ま、大切な対局控えてるんですものね。頑張ってるね。」

「ふん。碁のことなんて知らないくせに。」

「ええ、知らないわよ。でも精次君のことは分かってるわよ。碁が一番だってことはね。」

緒方はぼそつと言いました。

「碁より面白いものはないよ。」

「まつ、つまらない男。でも碁が一番てのは分かる気もする。私も仕事は大切にしてるしね。それじゃあ、精次君の二番目に大切なものは何？」

「二番目？それは熱帯魚だ。」

緒方のお相手は、ふうつとため息をつきました。

まあ、これが精次君よね。ほんと、変わってないわ。とにかく、お母さんが二番目でなくて良かったわ。

緒方ファンの皆さんはこの後の展開をお知りになりたいでしょうが、それは今のところ不明ということ。

さてさて、棋聖のタイトルにまつわる諸々のイベントが一段落したある日でした。ヒカルの家で、あかりの身に起きた異変を聞かされて、白川は驚きました。

決して幽霊の話は作り事とは思ってはいなかったのですが、本当なのだろうか。

本当だとしたら、その幽霊は、何とも悲しいほど碁に執着した霊なのだろう。人間の業をすべて背負っている気がするじゃないか。

「先生、幽霊と一局、打ってみて頂けませんか。」

あかりと向かい合い、自分の置いた石をあかりが読み上げるといふ、不思議な形で始まった碁でしたが、白川もまたその深い世界に引き寄せられていきました。ヒカルも一緒に幽霊との検討も興味深いものでした。

不思議だ。進藤君と出会って、いろいろなことが変わってきたが、これほどの経験は初めてのことだ。それにしてもなぜなのだろう。なぜ幽霊は塔矢先生の奥さんにだけ見え、藤崎君だけが話せるのだろうか。しかも藤崎君にくっついていてというのはどんなわけがあるのだろうか。

その日、ヒカルの家から帰る時、白川は、あかりに言いました。

「ちよつとそこまで歩こうか。」

白川とあかりの公園デートは初めてのことですが。

「で、藤崎君は、幽霊がくつついてきたことに、何かわけを感じているの？」

あかりは頷きました。

平八から碁盤の話聞いたことを話しました。

進藤君が幽霊に絡んでいる。何となくすとんと胸に落ちる気がする。

先ほどの対局を思い浮かべながら白川は思いました。

「進藤君はそのことを覚えてるのかな？」

「ヒカルは、小二の時に、歩道橋の事故にあつて、それ以前の記憶をなくしたみたいなんです。今、私、幽霊さんにいろいろ話しかけてるんですけど。たまに答えてくれたり呟いたりしていることはあるんですけど。」

白川は、その話を聞いて、幽霊がここにいる理由に、ヒカルが関連しているという確信を抱きました。

それを解き明かすことに意味はあるのかわからないけれど。でも私は何かを任されているかもしれない。そんな気がするんだよね。

「藤崎君。ご苦労だけれど、幽霊が話す言葉を書きだして、教えてくれるとありがたいのだけれど。やってくれるかな。これは進藤君にも言わないで、私と藤崎君だけの間の話にしておきたいのだけれど、いかな。」

あかりは頷きました。

私も感じてるのだけれど、先生も感じてるのだわ。幽霊さん、ヒカルと関わりがあるのよ。昔遊んだ事が影響してるのかも。でもヒカルがプロになるまで、ヒカルにはいろいろ話さない方がいいのよね。きっと。だから内緒なのね。

それから白川は、話を別の方向へ持っていきました。

「この話は塔矢先生か誰かに話したの？」

「ううん。誰にも。」

「塔矢先生の奥さんには伝えたほうがいいね。きっと心が軽くなるだろうから。」

あかりは、白川にそう言われて明子に連絡を入れました。

「まあ、あかりちゃん、ご無沙汰ね。あの時はどうもありがとう。えっ、ええ、いいわ。あのケーキ屋さんね。内緒の話って何かしら。楽しみにしてるわね。」

その電話は、運悪く行洋の耳に入りました。行洋にとつては運よくかもしれません。こういうことは逃さずに、キャッチするところはさすがといえましょう。

「今の電話は？」

「あかりちゃんからです。あのケーキ屋さんで又デートのお約束をしましたの。」

さて約束の日です。

ケーキ屋では、ヒカルとあかりと白川が待っていました。

明子が席に着くと、4人は微笑を交わしました。秘密結社の仲間というところでしょうか。

「白川さんまでいらっしやるとは、どんなお話なのかしら。」

「藤崎君から話すかい？」

そこで、あかりは頷くと、かくかくしかじかと、話をしました。

「まあ、そうだったの。じゃあ、あかりちゃんは。」

明子は、その話を聞いて、驚いた後、少し声を詰まらせました。

その時です。その場に呼ばれていない二人が、ケーキ屋に現れたのです。

白川は心の中で舌打ちをしました。

この人たちは本当にどこにでもしゃしゃり出てくる人たちだ。

緒方は、ん?と思いました。

今日棋院で会った師匠の様子がおかしかつた。俺にも第六感はある。付いてきて正解だった。

次の本因坊戦は十日以上先だからな。

「まあ、あなた。緒方さんまでなんですか?」

明子はさすがにむっとしました。

本当に二人とも、白川さんや進藤君の爪の垢でも飲ませたいわ。私

の交友関係に口を突っ込むなんて、まったく。

緒方は、お構いなしに言いました。

「白川。何の話をしているんだ？俺にも聞かせろ。」

彼もアキラと同じ、自分の興味の赴くままに突っ走る傾向があるのです。

行洋が師匠だと、弟子がそうなるというわけではないでしょうが。いえ、たぶんに行洋が影響しているのかもしれませんが。類は友を呼ぶです。アキラの場合はDNAが影響しているかもしれませんが。

白川はため息混じりに言いました。

まあ、これもしかたがないことかもしれない。

「あなた方もまったく関わりがないとはいえませんがね。まあ、お座りください。お話ししましょう。」

何？ あの幽霊がこのあかりという子に取りついた？ しかも声だけの存在になって？

「それで碁を打っているのか？」

「私が塔矢先生の奥様において願ったのは、碁を打つことについてではありませんよ。」

白川は憮然として言いました。

「そうですね。緒方さんですが、あなたもよ。今あかりちゃんはとも負担になることを背負っているのよ。私もそうだったから良く分かるのよ。だから白川さんは私にお話くださったのよ。」

「今幽霊は、姿を失っています、ですから目も見えないのです。対局するには相手の打った手を読み上げてもらわねばならないのですよ。藤崎君はそこまで幽霊にしてやる義理はないでしょうが、奥様から受け継いだと感じているから。幽霊の碁に対する熱い思いに応えることにしたのです。だから今は、進藤君を相手にして対局をさせています。奥様がこの話を聞いたら、幽霊がまだ存在することを知ったら、少しは心が軽くなるのではないかと存じまして、ご連絡をしたのです。」

それから白川はヒカルとあかりに声をかけました。

「君たちはこれから用事があるのだろう。帰りなさい。」

そう言つて二人を帰しました。

二人の後姿を見送りながら、緒方は聞きました。

「まだ、何か話があるのか？」

「本題はこれからですよ。」

白川は声の調子を少し落とししました。

「藤崎君は幽霊は遠くない先に声も失うと言っています。彼女は今、日々それを感じて過ごしているのですよ。幽霊自身は今しばらく打たせてくれといっているそうです。声が消えるまでの間。」

私は藤崎君が幽霊を失つた時に、奥様に藤崎君を支えて欲しいとお願ひしたかったのです。

幽霊の手を聞きそれを置き、さらに相手の手を幽霊に読み上げる、それは藤崎君には大変な負担だと思ふのです。でも何もしないで、幽霊が消えてしまつたら、それはもつと辛いでしょう。彼女の性格ならずっと苦しむことになるでしょう。」

明子は言いました。

「分かりましたわ。私にどれだけのことができるか分かりませんが、私にできる限りのことはさせて頂きますわ。」

「でもなぜ彼女なんだ？」

「さあ、でも彼女はその意味をつかもうと頑張っていますから、いずれ。なぜそうなのかが分かるのじゃないですか。奥様の時のように。」

「白川君はこれをいつ知つたのだね。」

「数日前ですよ。わたしが棋聖戦を終えて、一段落するのを待っていたのでしよう。彼女は気を遣う子なのです。それと、」

白川はやや躊躇いがちに言いました。

「進藤君に言うのもずいぶん悩んだですよ。塔矢君がプロになるまで、知らされていなかったことを知ってましたからね。でも誰にも言わないうちに、幽霊が消えてしまうことのほうが心配だったのでしよう。」

私は今年は絶対に進藤君にプロ試験を受けさせますよ。藤崎君の心から、少しでも負担や重荷になるものを除かなくてはなりませんか

ら。」

「あかりちゃんは本当に心配りできるお子さんですわ。わたしがあの時、幽霊さんと一局打って頂けたのもあかりちゃんのおかげですもの。あれで、私本当に気持ち良かったのよ。」

幽霊のことを知っている私たちは、あかりちゃんも、今打ち合っているという進藤君も守る必要がありますわね。」

白川君はタイトルホルダーになったからというわけではないが、本当に師匠の貫禄が備わってきたな。

行洋はそう思いました。

それに白川君は何か幽霊のことに考えを持っているようだ。一度それを聞いてみたいものだが。

それは、名人のシツクスセンスでした。

50. あんなこと、こんなこと、あつたでしよ♪

緒方の本因坊戦は終わりを告げました。

緒方は、四勝一敗の成績で桑原をねじ伏せました。

本因坊位を手にした時、緒方は思いました。

これで白川とは互角だ。勝負はこれからだぞ。しかし、これはあの伊角という奴に礼を言う必要があるかもしれないな。

桑原は、伊角との新初段戦以来、不調の波が襲っていたのでした。碁の対局も舌戦も両方ともです。

さて、本因坊戦の中盤と重なるように、十段戦が始まりました。棋界は常に忙しいものです。

初めて挑戦権を手にした倉田は、張り切っていました。しかし行洋は抜群の安定感で倉田を下し、十段位の防衛を果たしました。

それを一番ほっとした思いで見ているのは緒方でした。

先生を一番に仕留めるのは俺だ。

そう思っていましたから。

和谷も伊角も順調に、プロ生活をスタートさせていました。

和谷は独立したかったのですが、中学を終えるまではと親が認めてくれなかったのが残念でなりませんでした。

それでも棋院に部屋を申し込んで、若手の研究会を発足させました。

若手のプロ、院生、そのほか、メンバーでした。院生は本田、小宮といった和谷の親しい仲間、それに院生一位の越智にも声をかけました。そのほかというのは、ヒカルのことでした。

来年は絶対独立し、そこで研究会をやる。

和谷の頭には、あの中国棋院の訓練室の熱気が浮かんでいました。

そのヒカルが、和谷の研究会に出向いた折のことです。

ヒカルは、院生じゃなかったもので、今まで棋院に来ることはなかったのですが、和谷の研究会に出るために棋院に赴いて以来、棋院の建物に懐かしさを感じていたのです。ですから今日は三時からと分

かっけていましたが、かなり早くやってきました。

資料室とか覗けるかなあ。

そう思ったのですが、とりあえず、一般対局室を覗きました。その時、目が合った男がいました。

なんか目つきが、悪い。見なかったことにしよう。

でもそうはいきませんでした。その男は言ったのです。

「君、打たないか。」

その一言で、一局が始まりました。

この人、すげえ強いな。プロじゃないようだから。とすると、俺の知っているアマの中では抜群に強いよ。

ヒカルは素直な感想を持ちました。但し対局はヒカルの中押しで終わりました。

男は呆然としているようでした。

「君。院生か？」

「ううん。でも今度プロ試験受けるけどね。」

その時、外に和谷たちの姿を見つけ、ヒカルは言いました。

「楽しかった。ありがとう。じゃあ、俺行くから。」

「進藤？何をにや付いてるんだよ？」

「ううん。別に。今、すごく楽しい対局ができたから。あそこで。」

和谷は一般対局室をちらと見ました。

「へえ。そうか。進藤が楽しいっていうのはどんな奴なんだろうな。そんなのが来てるのか。」

「もしかしてプロ志望の人かもしれないぞ。ぞつとしないな。今度外来で、来るかもしれないぜ。」

院生の小宮が暗くつぶやきました。

そんなことになったら、枠が一つになっちやうじゃないか。

和谷は、言いました。

「来週から若獅子戦なんだぜ。来年はお前がいるからな。今年は頑張るぞ。」

その若獅子戦は、倉田が六段となり、出場しないので、アキラが注目の的でした。

アキラは実は、若獅子戦など目じゃありませんでした。

アキラは連勝街道を突っ走っていて、リーグ入り間近と目されている若手のトップなのです。低段の棋士など、まして院生など目じゃありません。

若獅子戦も、もちろんちゃんと打つよ。でも、倉田さんもないし、格下相手のただそれだけの棋戦だ。つまらないよ。棋院の昇段システムは間違っている。

そんなことを考えていたアキラでした。

アキラは別に人に嫌われるような性格ではありませんでしたが、碁打ち仲間からすると、人好きのしない人間と言えました。

アキラが目標とするものは、幽霊に磨かれてから、より鮮明になっていったのです。

幽霊のあの手に相応しい打ち手になる。いずれ対等に打てるようになるまで。

それが自分の身に起きたことだと感じたのです。

あの幽霊と打てる人間というのは、“選ばれた人間”だという意識が芽生えていたのです。

佐為との三か月というのはそれほど、アキラに影響を与えたのでした。

それは棋力よりも、意識という点においてより鮮明でした。

僕が今プロとしてできることは、トップ棋士と戦うこと。それ以外のことには自分の勉強の時間を割きたくはない。プロ棋士として割り当てられた諸々の仕事は別として。

だからですが、和谷に研究会に誘われた時、当然断ってしまいました。

「若手や院生上位の奴やアマチュアの強豪（ヒカルのことでした）を交えた研究会を開いてる。塔矢には、是非加わって欲しいんだ。だって塔矢は若手の有望株だし。みんなもお前と勉強したがってるんだ。」

僕は、院生にもアマチュアにも、それに君のいう若手のプロにも関心はない。だから。

「僕は忙しくて、その時間はないと思う。」

「毎回じゃなくても来れる時だけでいいんだけど。」

「悪いけど、その機会は絶対がない。僕は碁を極めることに人生をかけているんだ。だから余計なことに時間を費やしたくはないんだ。」

傍にいた若手棋士や院生は呆然と、その言葉を聞いていました。

アキラが去った後、近くにいた倉田がおかしそうに言いました。

「諦めろ。あいつとはリーグ戦にでも入って、打ち合うんだな。あいつは、ただ上だけを見て、まっすぐ進んでいく、そういう奴なんだよ。別にお前たちの勉強会をけなしてるわけじゃないけどな。結果としてはそうなるかな。俺が替わってやろうか。一度ぐらい、その研究会とやらに出てやろう。院生と打つ時には指導料ぐらい、出せよ。」

「昼飯ぐらいなら出せます。」

「じゃ、行ってやろう。」

倉田は伊角がその研究会に出ていることをわかっていました。

塔矢は上ばかり見る奴だけど、俺は下からやってくる奴に注意を払っているんだ。俺の勘が囁いているんだ。

その研究会で、倉田はヒカルと顔合わせをすることになったのです。

倉田は昼飯にラーメンを頼んだのですが、ラーメンを頼んだのはほんとにヒカルだけでした。

ラーメン繋がりです。

「進藤。ラーメン代しっかり払えよ。」

「うん。大丈夫だよ。ラーメン代ぐらい。」

倉田はすまして言いました。

「俺二人前な。」

ラーメン代を持ったヒカルと、倉田は打つことになりました。

ま、腹ごなしにアマチュアと打つっていうのもちようどいいか。

「で、何子で打つんだ。」

「互い戦でお願いします。」

「俺と互い戦で打とうっていうのか。」

アマチュアなのに、身の程知らずめと倉田は思いました。

こういう天狗は打ちのめしておきたい、というのが倉田の考えでした。

「いいか。俺はタイトルの挑戦者になった男だ。どうしても俺と互先で打ちたいというんだったら、白色碁で打ってやろう。」

「ハクシヨクゴ?」なんだ?食後の碁?

「要するに白石だけで打つんだ。」

そう言つて、倉田は意地悪く、傍にあつた碁笥を引き寄せました。「お前が先手でいいぞ。」

みんながわらわらと集まってきました。和谷の研究会に出ている者は、白色碁くらいで驚いてはいません。やり方が分かればヒカルにも別段大変なことはありませんでした。

石が全部、白でも黒でも赤でも、碁だからな。それより、倉田さんと打つ経験のほうが大切だ。

ヒカルは、二年以上も、日本のトッププロや中国のトップ棋士やらにもまれ、更に、このところの、佐為との連日の対局で、大化けをし始めていたのです。

「うーん。ここがまずかったか。」

倉田は対局が終わつてから、頭を抱えながら言いました。

こいつ一体何なんだ?白色碁でも関係ないんだ。

「プロじゃないんだろ?院生でもない?」

「はい。でも今度のプロ試験を受ける予定です。」

「倉田さん。彼は白川棋聖のお弟子さんなんですよ。」

伊角が言い添えました。

「有名なの?」

「さあ、倉田さんが知らないのなら、有名じゃないのでは。白川先生と俺たちは知ってるけどな。」

「俺は、またここへ来るけれど、進藤にラーメンは、おごらないぞ。ヒカルは頷いて言いました。」

「又、打ってくれたらいいよ。というかお願いします。倉田さんが、始

めから本気で飛ばしてたら、今の対局、危なかったもの。俺、もつと勉強しなきゃ。倉田さんの本気の対局に勝てるように頑張るぞ。」

こいつが勉強していったら、どうなるんだろうな。ちよつと見てみたいぞ。来年は要注意の奴が一人増えたわけだな。いや、この分だと、まだまだ誰か出てくる可能性があるな。うかうかしてられない。

そうこうしているうちに、若獅子戦が始まりました。

今年の院生は本当に不甲斐ない。プロ試験は大丈夫かという声が囁かれました。二回戦まで進めたのは、院生一位の越智だけでした。

二回戦で塔矢と当たった越智は、その強さに脱帽し、プロになってリベンジを果たすぞと、決心したのでした。

さて、その塔矢ですが、優勝を逃しました。

決勝戦で伊角と当たり、敗退したのです。

「伊角さん、この頃すごく研ぎ澄まされてない？」

「和谷だつてそうだよ。進藤との早朝対局が効いている気がするよ。」

「うん。俺もだ。俺なりに頑張つては、いるよ。それに研究会の奴らも、みんな進藤に影響されてるよな。進藤つて、この頃、すごいもの。それに白川先生がまた、言われてるらしいよ。鬼気迫る碁を打つてさ。師弟揃つて、最近、何気にすごいことになってると思わないか。」

「和谷。俺たちも塔矢じゃないけど目指そうぜ。」

「うん。囲碁の高みつて奴だよ。打つ時はいつもそれを目指すんだな。」

七月になり、ヒカルはプロ試験予選に出場しましたが、そこでいきなり声をかけられたのです。

「進藤君。よろしくな。」

「? あつ、この前の人? 何で名前知ってるの?」

前に棋院の対局室で手合せした人でした。

「泉さんから聞いたよ。先輩だからな。俺、門脇つて言うんだ。」

「学生タイトル、全部取ったっていう人？ 泉さんがこの前教えてくれた。そうかあ。それで強かったんだね。楽しかったもん。あの対局。」

「ありがとう。君は例外だから気にするなって言われたよ。中国棋院でも修行したんだって。」

「うん。泉さんのおかげだよ。ゼーんぶね。」

予選が終わってすぐ、ヒカルは仲良くなった門脇に連れられて、いくつか碁会所に出向きました。

「君とはもう少し打っておきたいんだよ。本戦までにね、特訓だな。」

「進藤君には本当に、歯が立たないな。でも君が特別なんだよね。」
そう思わなきゃ、やっていけないじゃないか。門脇はそう思いました。

でもこの年でこの棋力って、憧れるぜ。進藤君はトッププロ並みだ。だから彼と打てるのは本当にラッキーだ。

その日、たまたま入った碁会所で、強豪が多いという碁会所を紹介してもらって、二人は行ってみました。

そこでヒカルは首をかしげました。見覚えのある人がいるのです。
「あれっ、どこかで見た人がいるなあ。」

「君は、もしかして葉瀬中の生徒さんじゃないかい？」
「そうだ。海王の先生だ。」

「葉瀬中の子は、皆なかなか強かったね。君は出てなかったけれど、何でここに来たの？」

「あ、えっと。」

門脇が代わって答えました。

「いえね。ちよつとこの先の碁会所に入ったら、とても強い人たちがいるところを教えてくれるって言われて。それがここなんですよ。」

「確かに。俺たちは強いよ。試しに打ってみるかい。」

「是非、お願いします。」

ヒカルは、そういつて始まった門脇の対局を見つめました。

これは、門脇さんの方が絶対的に分がいいかな。さすがだな。

「へえ。あんた、結構強いんだな。」

「いや、どうも。でも結構きつかったかな。当分、ここでもう少し腕を磨かせてもらおうかな。」

門脇はさすがに社会人、無用の軋轢を避ける知恵を持っているようです。

「君も打ってもらったら？」

ユンが、見ていたヒカルに言いました。

「俺は。」

ヒカルは、遠慮しました。

「君は何年くらい碁を打ってるの？」

「俺？碁を始めてから、三年半ぐらいかな。」

「じゃあ、少しは打てるんじゃないかな。遠慮してたら強くなれないよ。強い人に相手になってもらわなきゃ。そうか、その人が君の先生かな？」

ヒカルは困ったような顔をしました。

その時ヒカルより少し年下ぐらいの男の子が目につききました。

ペットボトルを手に、むすつとした子でした。

「じゃあ、あの子となら打つよ。」

「いや、それはダメだよ。君の相手じゃないよ。彼は。」

「ふーん。そうなんだ。」

「へえ。あの子強いんですか？進藤君より強いなんて思えないなあ。」

門脇が言いました。

その言葉をその少年に伝えるおせっかいが居ました。

「打ってやるっていつてるよ。」

ヒカルはその子と向かい合いました。

「何て言っているの？」

「何子置くのかって。」

「別に、互先でいいよ。」

そう言ってヒカルが握りました。先手はその子でした。

やる気なさそうにしていた子でしたが、すぐに目の色が変わってききました。

周りの大人たちも集まってきました。

何なんだ。この子は。

ヒカルは感じていました。

こいつ、迷ってるんだな。だったら思いっきり俺にぶつかってこいよ。

受け止めてやるよ。こいつは強いよ。もつともつと強くなるよ。楽しいよ。久しぶりに。わくわくする。

手加減なんてしないぜ。思いっきり叩いてやるよ。そうしてもらいたいんだな。こいつ。

周りの大人たちは、しんとしていました。

「すごい。君はだから大会に出ないんだね？ 院生じゃないんですよ。」

「三年しかやってないなんてウソだろ？」

「嘘じゃないんですよ。俺も驚いたけどね、俺は進藤君に打ってもらって強くなりたくてね。」

「プロじゃないんだ。」

「今度、プロ試験を受けることにしたんだ。」

「スヨンは韓国の研究生、日本の院生みたいなものだけどね。」

「そうなんだ。強くて楽しかったよ。」

「でも負けたって言っているよ。」

「じゃあ、伝えて。スヨンは、もつともつと強くなる。だから手加減なんてしなかったって。思いっきり打ち返したよって。もつと強くなったスヨンと戦うのを楽しみにしているって。」

「スヨンは日本にいないよ。」

「大丈夫だよ。スヨンはプロになるもの。絶対。俺がそう言うんだから間違いないよ。」

ヒカルは笑って、手を差し出しました。

「俺、待ってるからね。」

「君の名前をもう一度教えてほしいって。」

「進藤ヒカル。」

ヒカルとスヨンは、お互いの目をじっと見つめました。

51. 子哀・子愛・地合・時合

本戦が始まる前の夏休みでした。

あかりが姉と十日間の語学留学に出かけるというのを、白川は熱心に後押しをしました。

「藤崎君は、この辺で、少し碁から離れた方がいい。そうしないと、本当に消耗してしまうから。君が碁を打たない間に幽霊が消えるなんてことは絶対ないから、安心して楽しんできなさい。」

ヒカル一家は、あかりの家族と共に、見送りに行きました。

「あかりちゃん、戻ってきたらきつと、ペラペラね。英語が。」

「さあ、それはどうですか。でも度胸はつきますね。きつと。」

帰りはあかりの両親と一緒に帰りました。

「どこかでお食事していきましようよ。お昼過ぎてるから空いているでしょう。」

そう話していた時でした。ヒカルは、東京駅で、ぼんやりベンチに座っている子に出会いました。

「あれ、あの子、ずっとあそこに座ってる？俺、行きも見たよ。」

ヒカルはその子に声をかけました。

「どうしたの？」

「財布、落としてしもうた。」

「いつからそこに座ってるの。」

「九時くらいから。」

「四時間も？お腹空いてるでしょ。」

美津子が驚いて言いました。きちんとした感じの子だったので、その子連れて、ファミレスで食事をして、いろいろ聞きだしました。

何？大阪から来た？電話代貸すから、親に連絡したら。えっ？家出？どうして？

ヒカルと同じ年なのか。

レストランから出たその時でした。きよろきよろとしていた男がその子を見てほっとしたように言いました。

「清春。帰るぞ。こんなことだろうと思っていたよ。」

「あなたはどなたですか？」

「私はこの子の父親ですよ。」

「本当かい？」

正夫は少年に尋ねました。

男は不愉快そうに言いました。

「あなたたちこそ何なのです。」

その時少年が言いました。

「俺が財布を落として困っていたんで助けてくれたんや。今そこで、飯もごちそうになった。」

「それはお手数をおかけして。食事代はおいくらでしょうか？」

正夫は、さすがに少しむっつとして言いました。

「それはご丁寧に。それより少し気になるんですけどね。お子さん、家出してきたと言ってますけど、どうなっているのですか？」

「そんなことあなた方には関係ないことでしょう。」

「はあ、清春君っていうんですね。うちの息子と同一年だそうで。後学のため、ちよつとお聞きしたかったんですよ。」

「俺が碁打ちになりたいって言ったら、反対されたんや。」

それを聞いた、あかりの父親が言いました。

「へえ。君ってそんなに下手なの。親に反対されるほど出来が悪いの？」

その言葉に、清春の父親がむっつとしたように言いました。

「うちの息子はできは悪くありませんよ。碁の先生にプロになれる、才能がすごいって言われてますよ。」

「はあ、それならどうして？いやあ、碁のプロになるって、そんなによくないことなんですか。知りませんでしたよ。うかつだったなあ。」

正夫が少し驚きを込めて言いました。

私はヒカルの将来を軽々しく賛成しちまったのかなあ。

清春の父親は、当然のように言いました。

「いいですか。息子が碁のプロになりたいと言った時、私は自分のまわりで聞きましたよ。」

碁を打てる者は数人しかいませんでした。息子に至っては今まで

友達に碁を打てる子は一人もいませんでした。そんな現状では囲碁のプロになつても組織自体が危ういのと違いますか。」

「はあ。」

「そんな廃れかけている世界に誰が息子を好き好んで行かせると思います？ 私は息子に幸せになつてほしいんですよ。」

「はあ。」

「はあつて、あなた分かつてるんですか？」

「はあ。確かに私の職場でも碁を打つのはあまりいませんでしょうねえ。聞いても。でもいいじゃないですか。いつの世にもマイナーなものがありますからねえ。それに息子さんが引退するとか死ぬ頃までは、碁も続いているんじゃないですか。それって、たかだか、5、60年のことですよ。息子さん才能あるんですよ。やらせてあげれば。」

清春が60年後に死ぬと思つているのか。

正夫の発言の、そのところに反応して、男は語気荒く言いました。「人の息子のことだと思つて。あなたの息子さんが碁打ちになりたいつて言つたら、あなただつて反対されるでしょう。」

「私ですか。私だつたら、もう手を挙げて賛成しますよ。だって、才能があれば。ちよつとプロになつて、ちよこちよこつとタイトルのひとつ、ふたつとつて、何千万も稼げるんですよ。悪くないかなと思ひますよ。しかも好きなことをやって、生き生きして。」

言つては何ですが、うちの子は学校の勉強はあまり得意じゃないんですよ。ですから、得意なもので身を立てられれば、言うことないですよ。ばんばんざいです。」

私も息子を愛していますからね。でもあなたのような親御さんもいるんですね。勉強になりました。」

男は正夫の言葉に眉をしかめました。

私はまっとうな仕事を続けている。忍耐・努力・辛酸・苦汁の連続で楽な道ではないが。そうして、まっとうな息子を育ててきたんだ。

それから、男は、ヒカルを見ました。

この子、勉強が嫌いで、流行の格好をしてる軽薄な子どもっぽい子

じゃないか。軽薄な親には軽薄な子ども。できのいい清春と大違いの子じゃないか。これで同い年か。確かに頭もあまりよくなさそうだ。

そこでヒカルに聞きました。

「お父さんは、ああ言ってるけれど、君は碁って知ってるかい？君のまわりに碁を打つ子はいる？」

ヒカルは頷きました。

「いるぜ。俺、中学じゃ囲碁部に入ってるしね。小学校も囲碁部だった子もいるよ。この前、地区の大会があつたよ。優勝した学校の囲碁部は部員が60人か70人ぐらいらしいけどね。

でも確かに少ないよね。まあ、おじさんが言うように日本の社会全体から見たら、マイノリティかも知れないよね。」

ヒカルは、得意の英語を駆使(?)して、とうとうと述べました。

ヒカルのそういう言葉づかいに驚いたのは、清春の父親と、もしかしたら清春だけでした。

あかりの父親は、そうだねと頷きました。

「そうだねえ。うちの会社にも囲碁部があるんですけどね。会社創設以来の伝統の囲碁部ですよ。アマの全国大会でも実績はありますよ。団体戦にも出て、まあまあ成績を収めますしね。会社はそこそこ力を入れてますよ。まあ、オリンピック種目にでもなれば、もっと活気が出るかもですねえ。」

黙っていろいろ聞いていた美津子が言いました。

「私たちの子は公立だけれど、進学率のいい私立の学校じゃあ、今は囲碁と将棋は注目の的でしょ。大学もそうだけれど、プロ棋士に教えに来てもらうっていうところも、結構あるらしいのよ。そう、トツプクラスの学校のことですけどね。」

明子からのあやふやな情報をすっかり披露した美津子です。

「うーん。それでかなあ。うちの社の囲碁部の奴で、退職して棋士になりたいなんて言ってるのがいますよ。昔何度か挑戦してダメだったとかでねえ。やっぱり忘れられないんですね。」

「俺知ってるよ。実際に会社辞めちゃって、プロになろうとしてる

人。」

「ああ、あの人だね。Z大学出て、A商事入ってた人だろう。なかなか入れる会社じゃないのにね。プロの方が魅力的なのかなあ。まあ、自信があるんだろうな。」

「会社についても、自分の力は生かせないって言ってた。そういえば、泉さんの会社みたいなのに、大学と組んで、人工知能の開発に碁のプロと一緒に取り組んでるところもあるよね。碁ってさ。日本だけのものじゃないから、外国に教えに行ってる人もいるんだよね。」

またまたヒカルです。

一体この人たちは何なのだ？

清春の父親は、気味悪く思い始めました。

「それよりも。清春君で、背は何センチかしら。170センチ以上は、あるんじゃない。」

「うん。うちのヒカルみたいに小柄なのも可愛いけれど。それになかなかワイルドなヘアスタイルよね。そういう子が、碁を打つと、なんか受けるんじゃないやありませんの。ファッションセンスも悪くないわ。」

「そうねえ。伊角君と背はどっこいだけど、雰囲気はまだ違ってて、いわね。和谷君に近い？いっそのこと、若手棋士の見栄えのいいのを何人が集めて、組んで売り出したら流行るんじゃないのかしら。碁をやる子が絶対増えるわね。もちろん腕も確かな子をよ。」

「そうですね。清春君のお父さん。あなたが廃れる世界なんて言うってどうするんですの。今こそ商機と思って、むしろチャンスじゃないですか。息子さんが救世主になるって思いませんか？男が積極的に打って出ないなんて、魅力ゼロよね。」

清春の父は、母親パワーに押されて、商機ではなく正気の沙汰ではないと思っただけです。

それにお構いなく美津子とあかりの母親は盛り上がりました。「そうですね。ちまちま安全なところに息子を置こうなんて、息子さんも今は、魅力満載ですけどね、あなたに感化されたら、将来、結婚もできませんわね。」

「ねえ、清春君。君は才能あるのよね。自信あるのよね。だったら、

しつかりしなさいよ。家出なんかしないで、きちんとお父さんを打ち負かすのよ。そうよ。碁で勝負したら。二十目位置いて打ち負かすのよ。」

清春は困ったように、やっと言いました。

「おやじは碁が打てないよ。」

ヒカルはズバツと言いました。清春の父親の顔を見てです。

「それはないよ。俺が見るところ、お前のお父さんは碁を勉強してるぜ。そうだな、通信教育とか碁を打つって知り合いに教わってか、どっちかだな。子供と接触しないところで勉強してるよ。だって、そんだけ反対するんだ。知らないで反対できるわけないだろ。」

清春の父親は、その言葉に少しびくつとしました。

「そうねえ。だったら、打ってあげなさいよ。ヒカルが。息子に負けると意固地になるかもしれないでしょ。他人ならいいんじゃないの？」

「そうよ。こうなったら。そう言えばちよつと先のビルに、なんだか碁のセンターみたいなのがあるって出てたわよ。そこなら打てるんじゃないの？ここから何分もないところよ。まさか大した腕もないのに息子の将来を反対する親なんて、いたら失礼よね。絶対。」

母親。パワーに押されて、清春父子は訳が分からないうちに、そのビルとやらに連れていかれました。

そこは、何と子供囲碁大会の真っ最中でした。

「すごい熱気だね。」

あかりの父が、初めて見た光景に驚いて言いました。

「しつ、みんな必死なんですよ。子どもの幸せを願って、子どもが勝てるように。何でもそうでしょう。そしてその中で、プロになれるのはほんの一握りのエリートなんですよ。そのエリートの中でほんの一握りがトッププロというわけですね。で、君はそのトッププロになろうと思ってるんだね。清春君。」

「うん。」

清春は、正夫のその言葉に力強く頷きました。

「ちよつと、こっちの控室に行こうよ。会場じゃ、話できないよ。あつ

ちに碁盤があるかも。」

その時でした。

「あれ、清春。何してるんや？おや、お父さんもご一緒に。中学の部もありますよ。まあ、これは清春のレベルじゃお遊びですけれどね。」

それを見た美津子は頭を働かせました。

「ねえ、あなた、私たちはもう失礼しようよ。清春君には、お父さんがいらっしやるんですもの。後はもうお任せして、私たちはもう帰りましょ。先生もいらっしやるみたいだし。」

「そうだね。じゃあ、私たちはもう失礼します。あつ、食事代は結構ですよ。色々教育論を伺って、勉強になりましたし。」

ヒカルたち五人は、清春たちをそこに残し、ささっと帰ってしまいました。

「あいつ、碁を続けられたら、いいのにな。」

「本人の意志が強ければ何とかなるだろう。世の中はいろいろだからね。私たちがみたいな親ばかりじゃないってことだよ。」

「うん。感謝してるよ。」

ヒカルはそう言いました

5.2. 幻のワイルド塔矢が蘇る

佐為は静かに漂っていました。囲碁指南役をしていた頃の雅な佐為に戻っているかのようでした。

私は、姿が見えた時よりも今の方がずっと充実している気がする。

私が憑いてるこの娘は、しばらく旅行に出るから碁が打てないと
言っていた。

私には今、時間がある。いつもは碁のことにかまけて、考えてこなかったことを私に考えさせてくれる時間だ。

あの者の家にいた時は、一日でも打てないと、きりきりしていたのに。そして実際、毎日打てるなどということはなかった。だからいつもきりきりしていた気がする。

しばらく打てないというのに、なぜ私は、今こんなにも落ち着いていられるのだろうか。

言葉でやり取りができるようになってから、ほとんど毎日打っているせいかもしれない。一日一局だが、密度の濃い時間だ。しかも対局者と仲介者を通して検討ができる。

でもそれ以上に…。

佐為は感じていました。分かっていたのです。

私は、今、私の相手になつていている者と打つ碁が好きなのだ。その者の打つ手は、私にはなぜか懐かしい。そして驚くほど強靱で、力強く、若々しく驚きを秘めていて楽しい。その者は私と打つても遜色がないような碁を打ってくるのではないか。ほとんど同等と言えるほど、力強い。いや、先だつては、私は明らかに負けたのだ。それでもこの相手は、熱心に検討を重ねてくる。その場の勝ち負け以上に、碁の持つ可能性を追求しているようなそれ。それが私を揺さぶるのだ。

そして、ほかに今一人、対局者ができた。時々打ち合う相手だ。その二人目の相手は、私がいつも打つ者の師匠だそうだ。あの者や緒方という男と同等の力を持っている。彼の碁には天才の閃きはないが、強い意志の力が感じられる。彼は私に対して何がしかの感情を抱い

ている気がする。私を単なる囲碁幽霊とは思っていないらしい。彼は私に何か言いたいことがあるのかも知れない。

そういえば私が憑いている娘は、私の声を聞き取れるがゆえに、私に、いろいろ尋ねてくる。

不思議なのだろう。きつと。私の存在が。私は時々、呟いてしまうようになった。その娘の問いに答えるように。その娘は話を誘導するのに実にたけているのだ。

私なぜあの者の家にいるようになったのか、その訳をだ。

誰にも言えないできた、忘れようとしてきた私の業をだ。

忘れていたと思っていたが、忘れるわけではないことを。

私のような天才棋士のみが有する碁に対する深い思いからくる業など、この娘にはどうても理解できないだろうが、問われれば、話そうではないか。

やっと言葉で人とつながっていられるのだから。毎日、あんな碁を打っていると、言わずにはいられなくなるのだ。

もうひとつ、この娘は、私なぜ自分に憑いているのか、そのわけを知りたがっている。

それが一番知りたいことのようなのだが。私にすら分からないわけをどう説明できるといふのだ。

いや、もしかすると、私は本当は分かっているのだと思える。

そう、私は、毎回一局打つたびに、そのわけに近づいているのだと分かっている。

そして私は何かを恐れているのだ。でも私は一体何を恐れているのだろう。

さて藤崎姉妹は無事、語学留学から戻ってきました。ほんの十日ほどでしたが、日本の生活に戻れるまで、しばらく時間がかかりました。がそのうち、またいつもの毎日が戻ってきました。

あたりはほつとしていました。

白川先生が言った通り、大丈夫だったわ。幽霊さんは消えてない。それに、私は幽霊さんの話をたくさん聞いたわ。碁が打てない分いっ

ばい。多分今の時代の話じゃない、昔のことらしいけれど。千年も生きている幽霊さんだつて言っていたもの。

あかりは、その幽霊の話した身の上話を白川に手渡しました。

そうこうするうち、まもなく、プロ試験本戦が始まりました。本戦は、ヒカルには楽しいものでした。

懐かしい気がするんだ。みんなが緊張して戦ってるその中に、俺もいるっていうのが、わくわくするんだ。俺は何かをなぞっている気がする。あるいは辿っているのかな。

ヒカルがプロ試験で連勝を重ねている時に、白川は行洋相手に碁聖戦を戦っていました。

白川君は棋聖になって貫禄が付いたというか、あの温厚な彼が、碁を打つ時にはなんだかぞくぞくする、気迫に満ちた碁を打つようになった。

それはもっぱらリーグ常連の間で囁かれている噂でした。

そして、八月末に三勝二敗で碁聖戦を制したのです。あの塔矢行洋を下して、二冠となったのです。

俺も頑張らねば白川に先を越されてしまった。白川は幽霊と打っているのだろうか？

おそらく時々は、打っているだろうな。あの気迫は幽霊との打ち合いの中で醸成されたものだ。

緒方は、そう思いました。

行洋の思いは別でした。

今回の棋戦は、負け惜しみではないが、白川君の思いが、まさったからの気がする。

「白川君。君に是非聞きたいことがあるのだが。そうだね。進藤君のプロ試験が終わってからでいいのだが。君の考えが、どうしても知りたいのだよ。」

「幽霊のことですね。私が話せる範囲でお話ししましょう。進藤君がプロに合格したら。先生にも、ぜひお願いしなければならぬことがありますから。」

行洋が幽霊について深い関心を示している時、息子のアキラは、いろいろな思いにさいなまれていました。

プロ棋士として、アキラは自分の前を行く者だけを追っていました。それはアキラらしいまっすぐな姿勢でした。そのため、アキラはヒカルがプロ試験を戦っていることをまったく知りませんでした。

それよりも、アキラは若獅子戦に敗れた時、伊角に強い手ごたえを感じて、彼とはもう一度打ちたいと思っていました。その彼が、若手の研究会に誘ってくれた和谷と帰っていくのを見かけたのです。

そうか。僕は断つちやっただけ、ちよつと覗いてもいいかな。その研究会。彼と打つ約束ができるかもしれない。僕は猪突猛進の癖があるって、芦原さんが言うけど、なんでもすぐに断るのはやめよう。

そういえば、お母さんも言っていたっけ。ものによるけれども、物は、すぐに決めないで、先ずは考える時間を確保して、それから決めると後悔しないことが多いって。

後悔という言葉は、アキラの今までの人生には、まずない言葉でした。アキラがその人生で後悔したのは、これが二回目でしょう。

その一回目は、ヒカルと言い争ったことでした。

あれは本当だったんだ。進藤は嘘を言っていなかったんだ。それに僕の母を信じてくれていた。

そのヒカルとめぐり合う機会が今まで一度も訪れなかったのは不思議でした。また積極的に会いに行かなかったのも不思議といえば不思議かもしれません。

でも、その機会は唐突にやってきたのです。

ヒカルが棋院のある最寄り駅に降り立ったのです。

プロ試験は別会場でしたから、それは全く偶然といえれば偶然でした。

こんなところで彼に会うとは。この機会を絶対逃してはいけな

アキラは思いました。そして思うと同時に、ヒカルに向かって突っ

走っていました。

その時です。

ヒカルの前にいるおばあさんが転んだのです。足を踏み外して。

ヒカルに、デジャブが走りました。

あの時と同じだ。そして、同じように、それを当然、支えたのです。ただ、そこは階段の途中でした。それでも何とか支えたはずですが、ちよつとしたアクシデントが加わりました。

アキラはヒカルを見失わないようにと、ヒカルの元に、猪突猛進、走り込みました。

その時、何かがアキラを止めたのですが、それは何かわかりませんでした。とにかくアキラは女性に触れることすらありませんでした。アキラは何も覚えていませんでした。

でも、ある角度から見ると、アキラがおばあさんを押したようにも見えたかもしれません。

そのある角度にいたのは、幸か不幸か、棋院の坂巻でした。

ヒカルは支えたおばあさんを抱えるように階段を、体を横にして滑り落ち、下にいた二人にろうじて、受け止められて救われました。

手すりに頭をぶつけた脳震盪、鎖骨の骨折、足首の捻挫という診断が、担ぎ込まれた病院での検査結果でした。

アキラが何かしたわけではありませんでした。

そのアキラ自身はというと何かにさえぎられていました。今の状態を把握することができませんでした。

事故が起こったことも理解できなくなっていました。

アキラの意識は何かが阻み、別世界へ飛んでいました。その間、自分がどこにいるかも分かっていませんでした。

周りが事故でざわめいている最中に、ぼけつと突っ立っていたアキラは急に腕をつかまれました。

えっ、何？この人、確か棋院の事務方の、えっと、坂巻さんだっけ？

そんなことを考えているうちに、駅の外に押し出され、タクシーに

乗せられていました。

忘れなさい？ あなたには関りがないのですから。

何が？ あなたは誰？

アキラは頭がぼーっとしていました。何かが介在していましたが、それも分かりませんでした。

タクシーを降りると、坂巻はアキラを連れて、ある店に入りました。

「例のヘアスタイルに。」

例の？とは何でしょうか。

美容師は慣れたものでした。

「はい。あれですね。お任せください。染めますか？」

「時間がないので、今日はカットだけで。」

「はい。」

坂巻の頭には先ほどの声が響いていました。

坂巻と同じ角度からそれを見た人間が何人かいたのです。

「女の子みたいな髪をした子が押したんだよ。」

「女の子？」

「じゃなくておかつぱ頭の子だった。」

軽快な響きでカットされたアキラは全く感じが変わっていました。

塔矢君は申し分ない棋界のスターになる、救世主。こんなことでスキャンダルに巻き込まれたら元も子もない。

前から一っだけ気になっていた。塔矢君の髪型。あれだけはいただけない。世にいう腐女子好きな髪型だ。悪くすると、棋界にマイナスイメージを持たれる可能性もある。

だから私は、塔矢君の顔に合わせて、いろいろ髪型を研究していたが。それがこんな形で生かされるとは、世の中とはうまくしたものだ。

髪型研究を重ねていたという坂巻のセンスに疑いを抱いてはいけません。

坂巻が深い感慨に浸っている間に、新しいヘアスタイルが完成しました。

「ワイルドでしよう？」

美容師が言うまでもなく、そこにはあのワイルド塔矢がいました。

(キャラクターズガイド134ページ参照のこと)

そのまま、タクシーで家に戻されたアキラを見て、明子は一瞬、絶句しました。

「まあ、アキラさん。どうしたの？でも、とても素敵よ。」

そう言いながら明子は頭を巡らしていました。

良い子のアキラさんが、不良になったのかしら。ってわけじゃないわね。

そうね。ついに親離れを始めたのかもしれないわね。アキラさんの親離れ？

でもね。アキラさん。ヘアスタイルだけじゃあ、だめなのよ。

親離れには、百年早いことよ。まずは、服装をこのヘアスタイルに合わせて変えなくちゃだめ。

アキラさんを連れて、早速買い物よ！

ふふふ。やるべきことが増えて嬉しいわね。

53. 僕だけが判る

服装に続いてヘアスタイルまで。坂巻と明子のセンスが一致することを証明したとは言いい切れないでしょう。

恐らく坂巻本人がそうなように、彼は短髪が好きなのでしょう。それでも明子がアキラの新しいヘアスタイルを、驚きつつも気に入っていた時、ヒカルの側は大変でした。

プロ試験も最終盤、いよいよ大詰めに入ったという時に。

ヒカルが駅で事故にあったという悪いニュースが、速攻、美津子に伝えられました。

駅の階段から落ちたですって?!

救急車が呼ばれる時に、筒井がヒカルの家に連絡したのです。ヒカルの落下を途中で支えた二人というのが、奇しくも加賀と筒井だったのです。

病院に、美津子とあかりと白川が駆けつけました。

ヒカルって階段が鬼門なのね。あかりは思いました。

「命には別条がなくてよかったです。こちらの二人が支えになったおかげでしょう。」

お医者様は加賀と筒井を指して言いました。

「鎖骨を骨折してますが、若いからひと月もあればよくなるでしょう。頭を打っているので、二、三日は安静にして様子を見ましょう。検査では何も異常はありませんが、念のためです。」

医者が説明を終えて去っていった後、一人の女性が、美津子に頭を下げました。

「私の祖母が足を滑らせて、それを進藤さんが支えてくれて、でもちよつと人ごみでしたから、それで祖母の方が人にぶつかって、支えて下さった進藤さんがバランスを崩されたのです。祖母は打ち身だけで大丈夫でした。ありがとうございました。でも本当に何と申し上げていいのか、何事もないことを祈っております。」

一度は目を開けて、三人に大丈夫と言ったヒカルは、今は深い眠りに落ちていました。鎮静剤が効いているのでしょうか。

「ヒカルは大丈夫かしら。」

「大丈夫ですよ。進藤君に何かあるなんてことはありませんよ。」

そう言う白川は、なぜか少し険しい表情をしていました。白川は目覚めた時にヒカルが呟いた言葉を聞いていたのです。

和谷と伊角が見舞いに訪れた時、白川は言いました。

「大丈夫だけれど、頭を打ったので大事を取っているらしい。見舞いは、しばらく控えた方がいいようだよ。」

ヒカルの事故の次の日、あかりが思いつめたように白川に言ってきました。

「ヒカルが事故にあった時から、幽霊さんが消えてしまったの。話しかけても声が聞こえないし、気配も感じないんです。先生、ヒカルは、やっぱり幽霊さんと打ったのがいけなかったんじゃないでしょうか。」

白川はそういうこともあるだろうという表情で、安心させるように言いました。

「藤崎君。大丈夫だよ。試験の結果は分からないけれど、進藤君は、いずれプロになる。それ以外に進藤君がやることがあるだろうか。これほどの才能を神様がほっておくと思うの？」

それより藤崎君。君の方が心配だ。君のせいじゃないよ。だけれども今しばらくは辛抱して、進藤君が回復するまで、頑張つてほしいんだ。

君は何か特別の役割を持っているんだよ。進藤君にとっても、消えたという幽霊にとつてもだ。」

その夜、白川は何事か決心していたようで、塔矢家に電話を入れました。

翌日、白川は塔矢家の前に立っていました。

「ここが塔矢先生のうちか。来るのは初めてだけれど。」

白川が家にあがると、緒方も来ていました。

「進藤君はいかがですか？お見舞いに伺ってもいいのかどうか、分かんなくて。」

明子の言葉に白川は言いました。

「進藤君は鎖骨骨折しただけで、若いですから、大したことにはならないそうです。事故直後は脳震盪を起こしたらしいのですが、後遺症の心配はなさそうです。それよりもむしろ心の問題が大きいのです。」
そこにいた三人は、少し首を傾げながら白川の次の言葉を待ちました。

心の問題とはなんだろう。

白川は一息入れてから、続けました。

「進藤君の心を助けるためには、塔矢先生がお聞きになりたいと仰つた、幽霊についての見解をお話しなくてはなりません。」

緒方が訝しそうに聞きました。

「幽霊は進藤と関わりがあるのか？」

白川は頷きました。

「あの幽霊ですが、実は進藤君が事故にあつた時に、消えてしまいました。藤崎君は幽霊が声だけになってとりついた時に、その理由を知りたいと言っていました。」

声が聞こえるわけですから彼女は、幽霊にいろいろ尋ねてみたそうです。私はそれを藤崎君からいろいろ聞いています。そして進藤君には、当分言わないように頼みました。」

「白川君は幽霊についてどう考えているのかね。」

「幽霊についてただ一つ言えることはそれは進藤君と関わりがあるということですよ。ただこれから申し上げることは藤崎君の聞いた断片から私が導き出した、あくまでも推論ですよ。」

白川は一息入れて続けました。

「まずは事実を一つ申し上げましょう。幽霊が憑いていた碁盤のことです。それは進藤君のおじいさんのお兄さんが所有していたものでした。もし亡くなられたら、その碁盤は平八さんが受け取り蔵にしまっておくと約束していたそうです。でも亡くなった時、碁盤は古道具屋に戻されたそうです。」

幽霊の存在はみなさん、信じておられるでしょうが、次に私が話すことを信じていただけるかは、分かりませんが。進藤君は昔、囲碁の

イロハを幽霊から伝授されたのです。そして進藤君はプロになったのです。」

緒方が口を開きかけるのを白川は制止しました。

「疑問がおありでしょうが、とにかく黙って最後まで聞いていただけませんか。」

幽霊は、昔ある少年と出会って、彼の才能に喜び、碁を教え、それからその才能の輝かしき、彼の未来に嫉妬したのだそうです。そしてその少年がいなくなればいいとすら思ったようです。彼が居なくなれば自分にもまだ碁を打ち続けるチャンスが来ると思ったと、そういうようなことを言ったそうです。

そして幽霊は魔が差したのです。幽霊は少年を階段から突き落としたりと言っているそうです。少年は階段を転げ落ちた。それを神が救った。神かどうかは分かりません。とにかく少年も幽霊も時をさかのぼり、少年は生まれた頃にまでに戻って、もう一度はじめから人生をやり直したらしいのです。」

今度は誰も口を挟みませんでした。白川は続けました。

「いろいろなことを考え、私はその少年とは進藤君のことだと思おうのです。進藤君に、幽霊との記憶はなかった、あるいは埋もれていた。それでも結局持つて生まれた碁の才能が幽霊との日々の記憶を少しづつ戻していったと思うのです。」

幽霊は忘れようと努めたと言っていました。

前の人生で、進藤君は幽霊をいつも連れ歩いている、奥さまが見たような姿を見て、藤崎君のように声も聴いていたらしいのです。

プロになった時に時の最高の打ち手と打ちたいと言ったので、進藤君は苦勞して塔矢先生と打つ約束を取り付けたのだそうです。そして打った。それ以来、幽霊は存在が薄くなっていたらしいですが。

実は幽霊は千年も碁盤にとりついていていたとか、ですから進藤君の前にもとりついて素晴らしい碁を打ってきたと言っています。とりついていたものが寿命で死ねば、また碁盤にとりつき次の機会を待つ。そういうことでしょうか。

薄れゆく自分、輝かしい未来を持つ進藤君。幽霊は我を忘れたので

しよう。

階段から落下して。たぶん、その時が続いていたら、そのままであれば進藤君は死んでしまっていたに違いありません。」

明子は悲しそうな顔をしました。

優しい幽霊さんだったのに。

「進藤君と幽霊の仲ですが、進藤君の性格を考えれば恐らく、幽霊は進藤君にとってはかけがえのない存在、絶対的な信頼と彼らしい率直な友人のような付き合い、そして仲の良い兄弟のような存在ではなかったかと思うのです。二年以上も自分に憑りつき、何もかも一緒に、すべて分かりあって来たと思っただけははずです。」

藤崎君も、確信はないものの、少年とは進藤君のことだと感じているようです。

親しい友人のような仲でも魔がさすことはありません。進藤君は恐らく今、過去の自分、幽霊との日々を思い出しているのです。あの事故がそれを誘引した。あるいはあれは当然起こるべくして起こったことなのです。

病室で進藤君が目覚めた時言ったのですよ。本当に嘔くような眩きでしたが、私には聞こえませんでした。自分が死ねばよかった。あいつの才能の方がすごいから。そう言っていましたよ。」

誰も何も言いませんでした。

「私は今何ができるのか分かりませんが、今の話を信じていただけたら、少しだけ手を貸していただけませんか。」

幽霊はもういません。今話したことを藤崎君は断片ながら感じて、苦しんでいます。

進藤君は幽霊の身代わりになれなかったことを悔やんでいます。

私は、私たちは、幽霊と関わりを持ったのです。二人の気持を救わなければなりません。

私は今こう考えています。

もしかしたら、先生も奥さまも幽霊に出会ったのは、あるいは緒方さんも私も含めてですが、幽霊と出会ったのは、二人の気持を救うた

め、神が配慮したからだと思うのです。」

54. なつかしい笑顔

事故にあってから一週間ほどが経ち、ヒカルの退院が決まりました。

ヒカルの病室に、幽霊を知る人たちが集まりました。

その時、たまたまヒカルは大部屋を一人で使っていました。

「進藤君、今日は話があつて来たのだけれど、落ち着いて聞いてほしい。藤崎君は幽霊の声を聴くことが出来なくなったのだよ。」

ヒカルは覚悟をしていたように、白川の言葉に頷きました。

あかりが、ヒカルの傍へ行こうとして、つまづいたのを、明子が手を取って支えました。

その時でした。

二人の手が合わさった時、それは起きました。

佐為の姿が少しづつ浮かんできたのです。

「幽霊さんだわ。」明子が言いました。

佐為は嬉しげな、そして悲しげな微笑を浮かべ、そこにいた人々に頭を下げました。

「佐為。やっと会えた。会いたかった。思い出してからずっと、お前のことばかり思っていた。」

ヒカルは手を差し伸べました。

佐為は愛（いと）おしげに、その手に触れるようなしぐさをしました。

「ヒカル。やっとあなたを見ることが出来ました。元のままのあなた。あの時と同じ愛（いと）しいあなたに。私は、あなたにとてつもない重荷を背負わせてしまったのでしょうか。赦して下さい。」

それからあかりに向かつて言いました。

「あかりちゃん。あなたも昔、私を知るあかりちゃんと変わりがいい。今まで、ヒカルと私のためにしてくれたことに、感謝しています。」

私がおここに姿を現すことが出来て、話すことができるのは、私に説明を果たさせるためだと思っています。

私の業のすべて、罪の全てをヒカルが背負うのは間違っています。

だから今一度、ヒカルと私を知る皆さんの前で、この時を持てたのでしよう。」

佐為は覚悟を決めたように静かに話を続けました。

「私はヒカルと一度は別の人生を歩んできたのです。別の時間を過ごしてきたのです。そこで、私は、全く碁を知らないヒカルと出会いました。あれは、そう6年生の時でした。ヒカルと一緒に楽しい時を過ごせた。本当に幸せだった。あれほど楽しく幸せな時は生きていた時も含め、なかったと今は思っています。」

ヒカルに潜む可能性と才能に気づいてからは、私は夢中でヒカルを鍛えてきました。

私はヒカルに憑りついていたから、寝る間も惜しんで、二人で頑張ってきた。ヒカルは、頑張り屋で、負けず嫌いで、恐ろしいほどの速さで、すべてを吸収し、夢中で碁に向かっていました。

でも、ゼロだったヒカルに初めて碁を手引きしたのは今と同じく白川先生、あなたでしたよ。

あの囲碁教室で、石取りゲームを教え、碁の楽しさを教えて、ヒカルを碁に目覚めさせ、そして森下研究会でもヒカルの面倒を本当によく見てくださいました。

私はヒカルの元に降りて間もなく、塔矢先生を知りました。その時から、いつか打ち合いたい、そのために私はこの時代にいるのだと思っていました。

ヒカルが院生の頃、若獅子戦で、プロと打つヒカルの才能に気づいてくださったのは緒方先生。あなたでした。あなたは何かとヒカルを気にかけて下さって、いろいろ便宜を図ってくださいったこともあったのです。私はあなたともできれば打ち合いたいと何度思ったことでしょうか。

ヒカルは院生として良き仲間と巡り会い、中二の年にプロになりました。

ヒカルが私のために知恵を絞って、塔矢先生とネットで対局させてくれた頃、ちょうど幽霊としての千年の寿命が尽きようとしていました。私はヒカルと共に輝かしい時代へ向かう筈なのに、なぜ私は消え

なくてはならないのかと、恨みました。その宿命をです。なぜこの時なのだろうと。

私は、自分が憑いた存在が死ぬと、また碁盤に戻り、新しい存在を待つ、そうして過ごしてきたのです。そういう宿命の幽霊の筈でした。

まだ間に合うのか、もう間に合わないのか分かりませんが、私は誘惑に負けてしまいました。

私は念じて、ヒカルをおじい様のお蔵の階段から突き落としてしまったのです。おそらく怨念のこもった念力ででしょう。ヒカルの叫び声を聞きながら、私は碁盤に戻りました。」

一時（いつとき）沈黙が支配しました。ヒカルが辛そうに言いました。

「佐為、やめろ。お前が悪いんじゃないよ。俺が悪いんだ。自分が打つことに夢中になって、お前に打たせようとしなかった。だからなんだ。お前を追い詰めた俺が悪いんだ。」

「いいえ。違います。私はそれを話すために、ヒカルを解放するために、姿をもらったのですから。私はその時、確かに思っていた。ヒカルが死ねば、私はまた碁盤にとりつき、新たな世界で素晴らしい対局が出来る、その日をもたらえると。」

幽霊ではあっても、私は神がいるのかは分かりません。でも、もし神がいるなら、その時、神は救おうとなさったのです。私をではありません。ヒカルをです。

あのままならヒカルは生きてはいなかった。だからヒカルを生かすために、それは起こったのです。

時を遡ったのです。それしか、ヒカルの命を救う方法はなかった。時間を戻すこと。

ヒカルは記憶をすべて失う筈でした。人生をはじめからやり直すために。

でもヒカルはあの時念じていたのです。あんなことをした私なのに。私を私のことを忘れたくないと、必死に願ったのです。だから中途半端な時代に留まってしまったのです。

そこから新しくやり直すために、私の記憶はヒカルの中で封印されたまま。そして今、ヒカルは、微かな記憶の名残を手掛かりに、私の記憶を取り戻したのですね。」

あかりが言いました。

「あの時ね。歩道橋の事故の時ね。ヒカル、言っていたよね。あの事故の時、消えたって。それからずっと消えた何かを探してたんだ。ヒカルは。今まで。あなたのことだったのね。」

佐為は辛そうに頷きました。

「私もまた共に、時を遡りました。私は、ずっとうまくいかなかったと思っていました。考えてみれば違っていました。私は、この時間の中で、ずっと打ちたいと願った塔矢先生とずいぶんたくさん対局をさせていただいたのですから。そして緒方先生ともです。手ごたえのある対局にいつもわくわくさせて頂きました。」

奥方には本当に失礼な態度をとったことお許しください。奥方は私のために随分いろいろ骨を折ってくださいだったのに。本当に感謝しておりますとも。

あの最後の時に私と打ちたいと仰って下さった、その優しさにも。そのことで私はやっと奥方に許していただけたとそして理解して頂けたととても嬉しかった。あのような温かい対局が出来て。

あかりちゃん、あの時は手伝ってくれてありがとう。

ヒカル。人は百年も生きられません。そして幽霊にも寿命はあるのですよ。私は千年幽霊なのです。なのにその寿命をもっと伸ばしたいと足掻き、ヒカルを傷つけた。いえ、あなたを突き落したことでなく、あなたの優しい心を傷つけたこと。

あかりちゃんにいろいろ聞かれてヒカルと打ち合ううちに、私は記憶を戻したのです。私が打ちあっているのがヒカルだと気付いたのです。

私は、その時からずっと恐れていました。もしヒカルが記憶を取り戻したらどうなるかと。私を軽蔑するだろうと。でも一方ではヒカルに思い出してほしかった。あの時を、私を。」

「俺は、あの時、逆行する時間の流れの中で、祈っていた。自分が死ん

で俺の人生を佐為が生きることが出来るなら、喜んで命を差し出すつて。お前の才能は碁打ちの夢だから、碁を打つのは、俺よりもお前がふさわしいって分かってるからだよ。」

佐為は厳しい声でヒカルの言葉を遮りました。

「いいえ。ヒカル。碁を打つのは何のためですか。私はあなたに、私の存在のすべてをかけて、そんなことを教えたのでしょうか。情けない。碁を打つのに、ふさわしいとか、誰が打つのが正しいとかあるわけがない。そうでしょう？その考え方は、碁を冒瀆するものです。」

強い者だけが碁を打つわけじゃない。楽しみに碁を打つ。自分の力を伸ばしてより優れた碁を打てるようにと頑張る、全ての者がそれぞれに打っている。

もし正しいということがあれば、それぞれがそれぞれのために一生懸命打っている、そのことを認め合うことしかありません。勘違いをしないでください。私と同じ間違いは、たくさんです。

自分が特別だなどと思っってはなりません。もちろん特別の才はあります。それはでも何か別の命を犠牲にして成り立つものではありませんよ。」

その場にいた者の心に響く言葉でした。

「それよりヒカル、約束してくれませんか。私はあかりちゃんの助けを借りて、この九ヶ月の間、ただひたすら私が逆行してから得た力の全てをあなたに託してきました。あなたもまた逆行してから相当の力を蓄えていましたから、それが出来たのです。ですからこの奇跡をお願いですから繋げてください。」

私はあなたの時間を無理に変えた。私とあなたは二人だけ別の時間を生きることになった。あの時のあの先の時間は、今はもうどこにもないのです。元には戻せないのです。昔のあなたに戻ることはない。今が正しい時なのです。

ヒカル。あなたはあかりちゃんと約束したのですよね。プロになると。

私は、もうこのような姿で現れることも話しかけることもできませんが、きつとどこかで、あなたを見守っていられる筈です。

白川先生、緒方先生、塔矢先生、どうかヒカルを手助けしてやってください。碁のことではありません。ヒカルの人生の軌道を、このいまの時間の中でうまく進ませるための手助けをです。

奥方、本当に自分を見失っていたため失礼な態度をとったことをお許しください。九子局、本当に楽しい思い出です。」

「佐為。行かないで。」

佐為は首を横に振りました。

「ヒカル。人はみんなどこかで必ず別れを経験するものです。ここにいる方々ともです。どちらが先か、年の順とは限りません。だからヒカルは、その当たり前の宿命をどうぞ、耐えて生きてください。」

「ごめんなさい。あなたは優しいから、いつも私がどうすれば満足するか考え、私の過ちは何でも許してくれて。あなたとの時間は楽しかった。わがままできかん気でやんちゃだったあなたが懐かしい。」

今はあまりに大人になってしまって、そういうあなたが頼もしくて、眩しい。

あなたをここまで導いてくださった白川先生には本当に頭が下がります。

私がいつも口を酸っぱくしても、ヒカルは少なくとも礼儀は全くなっていないませんでしたからね。

どうか、私の碁を愛する気持ちを継いでください。あなたなら間違えることはない、誤らないと信じてます。」

佐為はそれだけ言うと、少しづつ薄れていきました。

佐為が消えてしまうと、病室には静寂だけが残りました。

「佐為の馬鹿野郎。」

ヒカルは、ぼそつと言いました。

その時でした。佐為が空気を裂くように顔を覗かせ、現れました。「ヒカル。私のことを馬鹿野郎ですって。許せませんよ。その暴言。」

あつ、失礼。言い忘れたことがあつたと言ったら、ちよつとだけ時間がプラスされました。ほんの一分ですが。そうしたらヒカルが、失

礼な言葉を。全く。人がいないとすぐこれですからね。

あつ、時間が無くなります。そうそう、これが言いたかったんです。

見えなくても話せなくても、私はあなたの傍にいます。ヒカル。みつともない碁を打つたら承知しませんよ。今やあなたは私の碁のすべてなのですから。つまらない碁を打つたら、あなたにとりついて、呪うかもしれませんよ。」

「佐為。お前に呪われたって平気だぜ。だって、おまえにとりつかれるのには慣れてるもん。むしろとりついてくれたら嬉しい。」

「ヒカルったら本当に減らず口を。でも信じてますよ。あなたを。」
それだけ言うと佐為は、優雅に頭を下げて消えました。いえ、かつこよく消えたように見えました。

しかしよくよく見ると足先だけが残っていて、必死でもがいていました。足袋がバタバタ暴れているのです。

しかたないというように、また時空に少し裂け目ができて、佐為が必死の形相で足を引っ張っている姿が見えました。やつと足を引っ張りこんだ佐為は、ほっとしたように言いました。

「ゴホン。足がない幽霊なんて全く品がありません。良かったです。足袋が汚れてなくて。」

時空が閉じました。今度こそ佐為は、行ってしまったようです。

55. 行洋、新初段戦に名乗り出る

思わぬハプニングに、そこにいた者は思わず、笑ってしまいました。

それから涙ぐんだものです。

「笑って生きて行け」という佐為の心遣いに対してです。

明子は床に落ちているものに気づきました。

「佐為さんの扇子だわ。」

明子は拾おうとしましたがつかめません。ヒカルも手に取ろうとしましたが駄目でした。

幽霊の扇子なのです。

その時、何者かがそれを拾い上げたらしくそれはふわっと持ち上がり、そっと開かれました。

かぐわしい香りがしました。

扇子は、何者かの手で一仰ぎされました。そして、生み出された風のでよぎの先に優雅に時の流れが幻のように描かれたのです。

そこには佐為と子どものヒカルが笑いながら、じゃれあつて歩いている姿がありました。

扇子がさらに一振りされると、白川相手に石取りゲームに熱中しているヒカルの姿、それを楽しげに見つめる佐為の姿が現れました。

場面は次々と変化していきます。

「理科室だわ。」あかりがそつと言いました。

三谷と筒井と加賀相手に、三面打ちしているヒカルの姿でした。後ろで佐為がじつとその盤面を見つめていました。

「俺が院生試験を受けるため、大会をすっぽかすことになって、三谷が怒って、加賀が力を見せつけて出て行けって、俺の背中を押してくれただ。」

棋院をうろついているヒカルと、そのそばで緒方が事務職員に何か頼んでいる姿でした。

「いきなり院生試験を受けたいって言ったら、推薦する人がいるって、その時緒方先生が通りかかって、推薦してくれたんだ。」

碁会所で、伊角と和谷とヒカルが並んで打っている姿でした。いつもヒカルの傍では佐為がそつと見つめていました。

「プロ試験を受ける修行。三人で団体戦で言つて、碁会所で三子置きで打つたりしたんだ。」

懐かしげにヒカルはそれを見つめました。

いくつもの佐為とヒカルのほほえましくもある場面が突然に切り替わりました。

病室でした。明子がヒカルを部屋に招き入れました。

行洋とヒカルは二人きりで何か話していて、佐為は笑っていませんでした。厳しい表情です。

それからヒカルの部屋で、あかりが佐為と九子置で打っていました。その時の佐為は微笑んでいました。

すぐに場面はネット碁を打つヒカルの姿に切り替わりました。

佐為が打つ手を告げるとヒカルはそれを置いていきます。息詰まる時が流れました。

Black has resigned.
White won.

そのネットの場面とともに幻は失せました。扇子はキラキラと輝きながら細かいちりとなり、時空に吸い込まれていきました。

「付き合つて下さつて、ありがとうございます。皆様に分かち合つて頂きたかった。忘れなくなかった。遠い日の思い出です。」微かに声が聞こえました。

「なんて素敵なおプレゼントかしら。」明子が潤んだ目で眩きました。

「忘れないよ。佐為。見えなくても、佐為は傍にいるんだ。見ているんだよな。俺には分かるよ。」

佐為との別れのショックが過ぎ、ヒカルの気持が落ち着き、佐為と
いう存在を皆がそれぞれに消化した時、次にみんなの気持が行つたのは、ヒカルのプロ試験の結果でした。

プレーオフになったと知らせてくれたのは、和谷と伊角でした。

合格したのは、一敗の門脇、二敗の越智で、四敗が本田とヒカルの

二人ということでした。

「白川先生が椅子対局にしてもらえるように、手配してくれたんだぜ。足もちよつと怪我してるんだろ。ま、頭に異常がなくて本当に良かったな。」

プレーオフはすぐ行われ、十月初めには、合格が決まりました。

その日、ヒカルはあかりの家に行き、報告しました。

「あかり。今までありがとう。お前にはいくら礼を言っても言い足りねえよ。」

「私も佐為さんとあなつたのには、訳があつたんだね。明子おばさんと二人で毎年一回、佐為会をやるうって言っているの。碁も頑張るよ。私。プロになるとかはないけどね。おばさんとは、ネットで時々打ってるんだよ。」

「そうか。俺も打ってみようかな？おばさんは何て名前にしてるんだ？。」

「おばさん、喜ぶよ、きつと。でも名前はねえ。聞いたら笑っちゃうよ。」

「そんな変な名前なのか？」

「変かは分からないよ。おばさんらしいかも。あのね。」

あかりはヒカルにそつと耳打ちしました。

「えつ？k a p p o u g i？つて、それどういう意味？英語？」

「ヒカルったら、割烹着を知らないの？信じられないよ。」

さて、坂巻は事故のことがずっと気にかかっていました。

アキラを美容院からタクシーに乗せて、帰らせた後、改めて駅に戻ってみましたが、その時には事故の痕跡は何も残っていませんでした。

それでも自分以外に見たものがあるのですから。噂はくすぶっているかもしれません。

彼は本当に何もしていないのか、ただそう見えたというだけなのだろうか。

坂巻が気にしてるアキラは何もやましいことはしていませんでし

たし、なぜかその時の記憶が完全に消えていたのです。なぜ自分が髪型を変えたのかすら、分かっていないありさまでした。

このヘアスタイルが碁の振興に役立つんなら、それでいいじゃないか。そう思っていました。

アキラの新手のヘアスタイルは、棋士たちの間で、一時は驚かれましたが、きつと若獅子戦で負けたこともあり、心機一転をはかっただんじやないかということで、収まっていました。

なにしろ、ワイルドな髪型でアキラに眼光鋭く迫られると、その迫力に低段の対局者にはビビるものが続出でした。もつともおかつぱ頭で睨まれたほうが迫力はまさっているかもしれないが。

あの事故にあったのは、誰だったのか、もしかしたら塔矢家ではすでに手を回し、見舞いに行っているのではないか、そう考えた坂巻は、思い余って行洋に尋ねたものでした。

行洋が、名人位も天元と十段の防衛にも成功し、緒方が座間から王座位をもぎ取って二冠になった頃でした。もう12月になろうという時でした。

今なら先生にも迷惑はかかるまい。

かくかく云々、私と二、三人しかそれを見た者はいませんが、先生の家ではそういう話は何も出ていないのですかと坂巻は聞きました。

行洋は驚きました。

そんな話があるのか？アキラは何も言っていなかった。それよりも進藤君自身が何も言っていないではないか。

「アキラのことは今初めて聞いたが。」行洋はそう言っただけでした。そのことがあってすぐに、行洋はヒカルに、じかに、こういう話を聞いたのだかと、尋ねました。

「進藤君。アキラは君に何もしていないのかね？」

「塔矢ですか？俺、あの時のことはあまり記憶にないんですけど、塔矢が俺の近くにいたってという記憶は全くないんです。あれはあのおばあさんと俺の間に起こったことで、誰かが悪いということではなくて。大体俺を支えてくれた加賀と筒井さんも、そんな話、してません

でしたよ。あの二人はその時の様子をよく知っているんですから。それに塔矢の顔も知ってるんですよ。」

行洋はほっとした表情でした。

「それに、俺、そんなに塔矢のことは知らないけれど。あいつは少なくとも嘘をつくような奴じゃないですよ。それだけは言えるから。あいつが関係はないっていえば、それは本当です。もし噂があるのなら、すぐには消えないかもしれないけど、塔矢はそういうのを跳ね返してまっすぐ進める奴だと思う。きっと塔矢は試練を乗り越えると思う。その坂巻さんっていう人は、気にし過ぎだと思うんですけど。」

「ありがとう。進藤君。」

行洋はそれから言いました。

「それはそれとしてね。私は君に対局の申し込みをしたいのだが、受けてもらえるかね。」

「塔矢先生と？いつものとは違う対局ですか？」

「幽玄の間で、公式戦だよ。棋譜も残る。」

「それって新初段戦ですか？」

「そうだ。だが、私は一柳さんじゃないが、その対局を互先で戦いたいのだよ。どうだろうか。」

君は四月からプロとして活動する。その前に、佐為さんとの過去を見つめ直す一局にしてほしいのだが。そして今を生きてほしいのだよ。もう後戻りはできない、この時を前に進むしかない。私が君にしてあげられることは、これ以外には何も無い気がするのだよ。

新初段戦は逆コミとして数えられる。だから公式の勝敗はそのように数えられるだろうが。だが、対局者は私たち二人だ。だから、私は、たとえ中押負けでも最後まで投了せずに打ちたいと考えているのだよ。」

佐為へ捧げる一局。俺と塔矢先生が出来る最大のプレゼントかな。

ヒカルは瞑目しました。

ヒカルは思い出していました。逆行前に新初段戦で佐為が打つことになった時のことを。

佐為は、あんなに渴望してたんだから。

また佐為の最後の言葉も聞こえる気がしました。

姿は見えなくなっても傍にはいられる筈だと言ってたよな。無様な碁を打つたら承知しないって。

佐為。打つよ。俺。幽玄の間で打つにふさわしい碁を。

「お受けします。先生、お手合わせよろしくお願いします。」

深く頭を下げて、ヒカルは行洋の申し出を受けました。

行洋がヒカルに互先の新初段戦を申し出たことは、白川と緒方にすぐ伝えられました。

棋院にはもちろん、ただ単に三冠が新初段戦に出ることを了承したと伝えられただけでしたが。

そうか。そういう形で、進藤君を進ませるとするのは、さすがに塔矢先生だけのことはある。

私は、彼に何かすることはないけれど。今まで通り、やっていくだけだ。

いつか、進藤君がタイトルを取りに来るまで、タイトルホルダーでありたいけれど。でもあんまり早く、取りに来られるのも困るけど。いやいや、強敵は他にもいる。白川は、ぶんぶんと頭を振りました。

緒方は、畑中がいる研究会に、ヒカルを連れて行きたいと思っていました。

ずっと前に、ヒカルには話していたのですが、いろいろなことが起きたため、延び延びになっていたのです。

「畑中は、小学生の時院生になってそれで俺と知り合いになったんだが、親が関西の方へ転勤になってな。」

あれ、なんだか清春みたいだな。でもあいつは院生じゃなかったし、大阪で囲碁に出会ったんだっけ。あいつ、どうしてるかなあ。

ヒカルは思いました。

「畑中は、今、関西総本部の所属だけれど、俺との付き合いはずっと続いていて、東京に来た時には若手の研究会でよく顔合わせをするんだ。まあ、進藤にとっては、若手とは見えんだろうがな。」

畑中は、勝利をもぎ取ろうとする力がすごいんだよ。今までに見た

ことがないタイプかも知れん。まあ、そういう奴もいるというのを体験するのもいいものだよ。予選の為にこつちに出張ると言つてたら、ちようど良い機会だ。」

それから緒方は言いました。

「進藤。聞いてもいいか？俺はお前が昔、佐為とどう碁を打つてきたのか、やつてきたのか、その話を聞きたい。話したくなければ、無理には聞かないがな。」

ヒカルはちよつと考えました。

塔矢先生はああやつて俺を進ませようとしてくれる。

白川先生は変わらないペースで、淡々と俺と接してくれている。そうやって俺が今までここでやつて来たものを受けさせようとしてくれている。

緒方先生は、ただ知りたいのかもしれない。好奇心で。でも誰か一人ぐらいには話してもいいのかな。俺がまだ忘れていない佐為と俺の物語を。

本当は塔矢と話すのじゃないかと思つてたけれど、なぜだか塔矢と俺は接点がない。なぜなんだろう。明子おばさんとも塔矢先生とも親しいのに。不思議だ。

でもそれが今の時を作っているのなら、俺はただそれに従いたいんだ。無理に俺から何かするのは避けたいんだ。

「うん。俺が覚えてることならね。」

ヒカルは、緒方に、佐為との出会いから、プロになるまでの話を思いつくままに話しました。それから棋譜をいくつか並べて見せました。

緒方は聞きながら思いました。

今の方が、誰もが進み方が早いんじゃないか？

白川などは、一番影響を受けている気がするが。もし、佐為が運命を甘んじて受け入れてたら、その時がただ続いていたら、俺もまだ本因坊になっていないのか。しかも先生は五冠になっていたというのか。

その時の二年間が、今に拡散したのか。進藤と直接関わった人間と

幽霊と関わった俺と先生が影響を受けたっていうわけだな。不思議なものだ。

とにもかくにも、あの佐為という幽霊が日本の棋界を思いつきり変えたのは、確かだ。ただし、悪い変わり方ではないな。

56. 棋譜・I F・疑問符

緒方に塔矢行洋と佐為のネット碁を並べて見せた後、ヒカルは思わず言ったものでした。

「塔矢はなぜあの場にいなかったのだろう。」

緒方は、盤面にやっていた顔をあげました。

「あの時は佐為が出てくるなんて、会えるなんて思ってもいなかった。だから、塔矢がいなかったのも仕方ないと思うけど。でも、塔矢だつて佐為を知っているひとりだろ。三か月もの間、毎日佐為と打ち続けていたんだろ。」

逆行前、塔矢は佐為が蘇つて、初めてまともに打った相手だつたんだ。結局、その後、あいつは、ネットで打ったきりだつたけど、ずっと佐為を追い続けていた。

今の時間の中では、塔矢は佐為とたくさん打っている。それなのに、俺と佐為の関わりは知らない。恐らく、俺がその関わりを話しても、あいつは信じないだろう。

ただ、あかりが声だけの佐為を連れて帰って、しばらく俺が打つたという話をしたら、それはそれで信じるだろうが。でも、なぜそうなつたのかを、そのわけを話せないのに、信じさせられないのに、それだけを話す気には、絶対になれないよ。

緒方はヒカルの言葉を聞いて、しばらく考えていました。

「俺にも分かんないが。だが、もしあの場にアキラ君がいたら、佐為があのようになつたとは思えない。」

進藤はアキラ君を追いかけて、プロの世界にやってきた。アキラ君も心のどこかで、進藤を待っていたかもしれない。その待っていたのは進藤の姿を借りた佐為だったかもしれない。しかし、もしそのまま進藤がプロとしてやっていったら。いずれ進藤の力自体は今と変わらんものになつたと思うぞ。アキラ君は、結局そういう進藤を待っていたのかもしれない。」

それから緒方は煙草を灰皿に押し付けながら言いました。

「だがなあ、それは別の世界の話なのだ。アキラ君にとっては今が

すべてだ。その前の世界はあくまで、進藤だけのものなのだ。

なぜあの時佐為が現れたのか。それは佐為と進藤のことを知っても、構わない人間ばかりだったからだと思うのだが。お前の気持を何とかすることは、あそこにいた誰にもできない。だが、それを知っても進藤との関係はそれまでとは何も変わらないでいられる。

だが、アキラ君は別だ。アキラ君は恐らく、以前の世界と同じように、今の時間の中でも進藤にとって特別の人間になるかもしれない相手なんじゃないか。それは佐為と進藤の過ぎこし方を知っているかどうかじゃなくて、この先、この世界で、進藤と打ち合う相手になるということのなかにあるんじゃないかな。

だから進藤は、今のアキラ君を、対局者としての彼を気にするべきだな。

アキラ君は佐為の存在を知っている。信じきれないにしても三か月も毎日のように、対局してきたんだ。それなりに強くなったぞ。プロに入った頃の、そうだな。伊角に若獅子戦で負けた頃のようなひ弱さはない。進藤にもそのうち迫ってくるだろう。もともと優れた力を持っていたからな。

進藤が今考えている謎やためらいは、逆行してやり直した時間のずれが修復されて一つの道になった時に解決する気がするがな。時間はかかるだろうが。」

ヒカルは緒方のその言葉に、その時は、素直に頷いたものでした。

塔矢がどの程度の力を持っているのかはわかりませんが、一年早くプロの世界に足を踏み入れて、佐為に三か月も毎日特訓を受け続けてきたのですから。

塔矢だったら相当の力を蓄えているんだろうな。ヒカルは、ただそう考えたのです。

それでも、塔矢のこと以外にももうひとつすつきりしないことがある。

佐為のことを思い出し、逆行前の記憶を取り戻しても、それで解決できるものではないもの。佐為との離別の悲しみだけでなく、逆行前

の記憶を戻してしまったことが、あきらかに今の生活に影を落としていました。

それだけじゃなくて。佐為と二人で過ごした二年半の記憶以外の何か、別の何かが見つけれられていない気がする。

それは思い出すということとは別のことの気がするけれど。何か足りない気がする。何だろう。

ヒカルは深いため息をつきました。

これじゃあ、性格も変わるよな。なんか、俺じゃないみたいだよ。逆行前の単純な自分に戻れたらどんなにいいだろう。ただ強くなりたいと思っていた、思っていたらあの頃の自分に。

さて二日後でした。

ここで、待ち合わせしてたけど。

ヒカルは校門の前で、きよろきよろしました。その時、筒井が小走りにやってくるのが見えました。

「進藤君。ごめん。待たせた?」

「ううん。今来たとこだよ。でもきれいな学校だね。」

「築3年っていうのかな。僕が入学した時には、建て替えが完成しててね。でも囲碁部はそんなに人数多くないから、部室は将棋部と一緒になんだよ。私立と違って、都立はそういう枠はなくて。」

「でも部室あるんだ。理科室じゃなくて。」

ヒカルは筒井の高校の囲碁部の指導碁に招かれたのでした。

ヒカルが入っていくと、そこには、加賀もいました。

「あれ?加賀もいるの?」

「居て悪いか。ここは将棋部の部室だ。囲碁部が間借りしてるだけだ。」

「将棋部が七人?囲碁部は六人?たいして違わくない?」

筒井が苦笑して言いました。

「今日はね。進藤君が指導碁に来てくれるっていうんで、三年生がいてくれるから。囲碁部は、フルメンバーなんだよ。これで。」

その時、落ち着いた感じの高校生が声をかけました。

「君が今度プロになるっていう?」

「あ、はい。筒井さんの中学の後輩の進藤って言います。今日はよろしくお願ひします。」

すぐ横にいた少し皮肉な目をした少年が言いました。

「確かプレーオフでぎりぎりプロに受かったんだってね。四敗で。運がいいんだ。その運をもらって受験がんばろうと思ってね。もしかして、院生一位ですかいうのかな。」

ヒカルはその少年をじっくり見ました。

元院生?プロをあきらめた、いや諦めきれてないのかな?岸本さんとは全然感じが違うな。

筒井は困ったような顔をしました。

ヒカルは心の中で苦笑しながら、落ち着いて答えました。

「俺、学校の成績は悪いから。大学の受験には俺の運は、全然役立たないから。でも碁の手伝いなら少しはできるかと思ってます。ですから今日はどうぞよろしく。」

「で、院生何位だったの?」その少年はしつこく聞きました。

「院生にはなったことがないっていうのかな。」ヒカルは胸の痛みを感じながら答えました。

筒井が、ますます困ったようにフオローしました。

「進藤君は碁を始めてから三年半ぐらいなんで、たぶん院生になる暇がなかったというか。そんな感じだよね。」

最後の部分はヒカルに向かって言いました。

「三年半?!嘘つけ。」筒井の言葉はフオローではなくて刺激だったようです。

ヒカルはその声に反論はしませんでした。できませんでした。こういう時、何となく引け目を感じちゃうんだよな。

「筒井さん。時間が無くなっちゃわない?」ヒカルは、ただそう言いました。

その言葉に初めに声をかけてきた三年生が言いました。

「そうだね。せっかくプロになる人が来てくれたんだから。時間を無駄にしたらもったいないよね。」

そういうと、部員を紹介してくれました。

その人が一学期で引退した前部長の山口。隣で拗ねているのが同じく三年生の原田。三年生はその二人でした。後は二年生が一人、一年生が三人。

「役職は実力順じゃないんだ。原田は、個人で、高校生本因坊になったこともある我が部きつての実力者なんだ。」

テーブルには、碁盤が六つ置かれていました。原田はそれを見ながら言いました。

「まだプロには、なっていない奴に六人はきついんじゃないか。」

それを横で聞くともなく聞いていた加賀が言いました。

「お前。自分が特別だなどと、こんな高校の部室で威張っても仕方ないぜ。だつたら力を見せつけてやりやあ、いいじゃないか。進藤に思い知らせてやれば。」

「俺は五人でも六人でも構いませんけれど。皆さんの棋力を知らないから、置き石は自分で好きに置いて下さい。」

加賀の言葉に刺激されたのか、原田も席についていました。置き石なしで。

ふーん。みんな結構気張ってるかな。

ここで分かっているのは筒井さんの棋力ぐらいだけれど。高校選手権の棋譜は前に見せてもらったことあるからな。原田のも見てるかな。俺が院生か、わからないというのは、恐らく岸本さんみたいに中学の頃やめたんだろうな。

六人相手の指導碁は、実にスムーズに進みました。

どいつも腕前は大体予想通りだな。でもこの原田は思ったほどじゃないなあ。

「ありません。」原田は歯ぎしりするように言いました。

ヒカルはにつこりしました。

「原田さんはこのメンバーの中では断トツですね。さすがですよ。」

そう言いながら一人一人に、丁寧にアドバイスをしました。

「進藤、また腕をあげてるな。」

ヒカルが帰る支度をしていると、対局を眺めていた加賀が言いまし

た。

「そりゃあ、すぐにプロの手合いは始まるしき、その前に新初段戦もあるしね。毎日それなりに頑張ってるさ。」

「ふん。それもこれも俺のおかげだぞ。」加賀が偉そうに口を挟みました。

「分かってるよ。家に挨拶に行っただじやないか。お菓子持ってき。それに加賀だけじゃないもん。筒井さんのおかげでもあるからね。」

「あのお菓子、美味しかったよ。妹なんか喜んでやって。でも本当によかったね。ケガが大したことなくて、それにプロ試験も。」筒井が言いました。

「うん。運が良かったよ。ま、来年また受けてもいいけどさ。でもまた何があるかわかんないものね。」

その時、原田が来て、ぼそつと言いました。先ほどのような元気はありませんでした。

「プロになっても厳しいぜ。塔矢アキラがいる。あいつには絶対に勝てないよ。あいつはとてつもなく強いんだから。塔矢アキラには運なんて効かないからな。」

ヒカルは、その原田の言葉に、にこつとしました。

「原田さんは塔矢と打ったことはあるのですか？」

原田はうろたえたように言いました。

「ないよ。でも俺の院生仲間がそう言っていたから。」

「そうですか。俺、塔矢とは今まで一度も打つことがないんだけど。でも今の話を聞いて、あいつと打つのが楽しみになった。勝ち負けはともかく強い相手と打ち合うのは、わくわくするもの。」

そう言うってから、プロなんだからと神妙にあいさつしました。

「今日は高校の雰囲気を少し味わわせてもらって、ありがとうございました。また機会があったら、呼んで下さい。」

ヒカルはそれ以上は余計な口を利かずに、高校を後にしました。

ヒカルが帰った後、山口は苦り切った顔をしました。

「原田。せつかく来てくれたのにあんなに当たることはないだろ。僕

は楽しかったよ。進藤君の指導碁は。あのアドバイスもすごく胸にすんときたし、やっぱりプロなんだと思ったな。筒井君はいい後輩を持ってるとよね。」

筒井は、嬉しそうに言いました。

「はい。進藤君には、これからも指導碁に来てもらえるように頼んでみるつもりです。」

電車のドアにもたれるように、外を眺めながらヒカルは考えていました。

あの原田っていうやつ。昔の俺ならぶち切れて、徹底的に打ちのめしていたよな。

今はプロとしての自覚があるから？

いいや。そうじゃない。言い返せなかったのは。逆行の記憶と今の生活に折り合いがつけられていないからだ。

塔矢先生は言ったけど。今を生きてほしいのだよ。もう後戻りはできない、この時を前に進むしかない、つて。

でも俺、できるのだろうか。そんな風に。

いや、とりあえず、もろもろのことは忘れて、新初段戦に向けて全力を尽くそう。

佐為との過去を見つめ直す一局になるかは分かんないけど。やるっきゃないものな。

碁を打つ時だけはいろんなことを忘れていられるから。

57. 逆コミ、突っ込み、引っ込みません

白川が棋聖の防衛戦を関西棋院の古参の石橋九段相手に始めたのは、一月の初旬でした。

二月の初めに、門脇・桑原の新初段戦、続いて越智・緒方の新初段戦がありました。ヒカルの新初段戦は三月一日（何気に佐為の日？）に決まりました。

二月下旬の第六戦で白川は無事棋聖の防衛を果たしました。

同僚の棋士は、石橋九段に言ったものです。

「本当に。「柳さんだったら良かったのに。あんな若造が棋聖などとは。目新しさとおざとさで碁を打つんですからな。」

それから全く正反対のことも言いました。

「今度、有望な新人が入ってくるから、関西棋院は大暴れや。ここががんばりどころ。そいつが若手の有望株とかいう塔矢アキラを伸してくれますわ。石橋さんも、もう一度タイトル挑戦や。本当に惜しいところだった。東京の若僧なんかに負けていられませんわ。」

それを漏れ聞いて、白川は少しため息をつきました。

関西がどうか、東京がどうか、年齢がどうか……。そんな内向きなことばかり言っている場合ではないのに。進藤君はこういう意識をどうやってさばいて、新しい時代を切り開いていくだろうか。

進藤君が、がんばる前に、緒方さんとか私たちの世代が少し風よけになるということかな。こんなことを考えると、私も若くないということかも。

白川は30手前ではありましたが、棋士としては若造どころか古株になりつつあるのかもしれない。

一方の石橋九段の方は、息巻く相手に、少し苦笑しながら言いました。

「見苦しい言い訳ですよ。それは。結果は結果でしょうが。残念ながら私は完敗を喫したと思ってますわ。素直にうなずける結果でしょうな。今回の戦いは。実力の差です。白川さんというのは、素晴らしい棋士ですよ。この年になって、私は勉強をさせてもらったと思って

ますよ。」

さて塔矢行洋がヒカルに新初段戦を互先でと申し入れた話は、一柳と桑原には、なぜか伝わっていました。

記録係と読み上げは、伊角と和谷が担当になり、見届け人には、一柳が名乗りをあげました。

当日、モニタールームには、早々と緒方と桑原が居ました。

緒方にとって幸いなことに、二人の舌戦が繰り広げられる前に、越智と門脇と白川が入ってきました。門脇は早速、桑原に挨拶しました。

「新初段戦ではお手合わせありがとうございました。次は、ハンデなしの手合いで、先生の胸をお借りします。」

門脇は新初段戦で桑原に勝ったのでした。

緒方はほくそ笑みしました。

今年も新初段戦からつまづくとは、じじいも幸先が悪そうだな。

「桑原先生もそろそろ後進に道を譲ることを考えておられるのですか。囲碁界の未来は明るくなりますよ。」

桑原はじろつと、緒方を見ましたがスルーしました。

「白川君。今日は小僧は張り切つとるんだらうな。」

「はい。新初段戦とはいえ、塔矢名人と幽玄の間で対局できるというのは、良い経験ですから。」

白川は、おっとりと言いました。

さて、何も知らないのは事務方だけでした。

今まで塔矢行洋は、新初段戦を避けてきたのは確かだが。それでもたかが新初段戦じゃないか。なぜ、一柳さんのようなトップ棋士が出る必要があるんだ？

出版部の古瀬村が、みんなの疑問を代弁しました。

「それほど塔矢行洋は偉大なのですかねえ。でも最近三冠になっちゃったじゃないですか。」

「そりや偉大だよ。相手の子にはまたとない名誉だろう。三冠の相手など早々はできないだろうからね。」

これだから、若いのは。と、そういう顔で、坂巻は言いました。

「どういう子でしたっけ。新初段の子って。」

「四敗でプレーオフで、合格にひっかかった子だそうですね。中二だそうだから。そうすると塔矢アキラと同じ年か。越智君に去年の和谷君。このところ中学生の入段が増えてきましたね。」

「へえー。でも名人だったらそんな子より、一位の門脇君とかの組み合わせで打ってほしかったですねえ。」

ヒカルは幽玄の間で、ゆっくり深呼吸をしました。それから行洋に頭を下げました。

「よろしくお願ひします。」

「私も名人の名に恥じぬ対局をするよ。」

「はい。覚悟はできています。」

事情を知らないものが聞けば、何やら不思議な挨拶でしょう。

ヒカルは第一手を置きました。さして時間をかけるでなく、名人はすぐに手を返してきました。

幽玄の間の空気は厳しい研ぎ澄まされた雰囲気を満たされました。

序盤からやけに激しい碁だな。進藤、気合入れ過ぎだ。伊角と和谷は盤面に目をやりながらそう思っていました。

「ちよつと幽玄の間に行ってみますよ。」

古瀬村は、そう言って腰をあげました。それから何気なく聞いたのです。

「そういえば、進藤君って、誰に負けたのか、知ってます？ 四敗つていうと、門脇君と越智君、それに本田君あたりかな？」

それに答えるように、プロ試験の結果をチェックしていた者が言いました。

「えつつと、ちよつと調べてみたんですけど、この子、最後の四戦を不戦敗してますよ。門脇君の一敗は、この子とのもの、あと越智君にも勝ってますね。何なんでしょうね。この子。ふざけてるのと違いますか？」

「不戦敗をするようなふざけた子がプロですか？」

その話を聞きながら、坂巻は苦い顔をしていました。

プロ試験をさぼるって、一体どんな子なんだ。対局が終わったら、一言きちんと注意をしないと、囲碁界の未来が暗くなる。礼儀を教えんと。全く同じ年でも塔矢アキラとは大違いだ。名人もとんだ子どもと対局することになったものだ。

その時、古瀬村の横にいた男が言いました。

「そういや、思い出したけど、前に駅で事故があつたでしょう。階段からおばあさんが突き飛ばされたっていう事故ですよ。あの時、確か巻き込まれたのがこの子じゃなかったですか。それで、入院したとかで。白川先生が、届け出をされてたのを思い出しましたが、それがこの子だったんですね。」

「白川先生が？」

「ええ、白川先生が弟子だつて言つてました。そうか。それで最後の四局、打てなかつたんですね。門脇君にも越智君にも、勝つてますからね。それまで全勝、全部中押し勝ちですよ。」

「へえ。案外強いんだ。どんな碁打つてるのか見てきますよ。」古瀬村は、事務室を出て行きました。

坂巻は、それ以上話を聞いていませんでした。

ということとは、この進藤つていう子が例の事故で入院したつてことか。

塔矢先生が、新初段戦の相手にこの子を指名したという。それは息子のことと関係あるのか。事故にあうまで全勝つてことは、まさか塔矢アキラは進藤ヒカルを知ってるのだろうか。とすると…。いや。

坂巻はその時、決心しました。もうあのことは忘れよう。私には関わりが無いことだ。なんて言つても名実ともに、棋界のスターは塔矢アキラなんだから。

「今、モニタールームには、門脇君と越智君以外に誰がいるのかな？」天野が誰にともなく聞きました。

「確か白川二冠がいる筈ですよ。愛弟子のデビューでしょうから。」

その声を聞いて、天野はモニタールームへ向かいました。何となく

胸騒ぎのする坂巻が後をついて行きました。

モニタールームのドアを開けて、天野は驚きました。

緒方さんはともかく、何で桑原先生がいるのだ？

「やあ、天野さん。坂巻さん。まあ、そこに座りたまえ。立っていられると、気が散るでの。」

桑原に言われて、天野は、「はあ」と言い、座りました。坂巻もその隣に座りました。

「桑原先生は進藤君を知っていらっしやるのですか？」天野は聞きませんでした。

「まあな。シックスセンスとでも言ってもらおうかね。」

「桑原先生のシックスセンスは当てにはなりませんよ。」緒方です。

「本因坊位、すぐに取り返して進ぜよう。」

「はあ？ 私は進藤たち新しい波の方が手ごわいから、桑原先生の存在をすっかり忘れてましたが。」

「緒方君。どうだ。賭けをせんかね。」

「進藤の勝は決まってるでしょう。逆コミなんですから。」

「いや、そうではなく、あの二人が考えている勝負の勝ち負けをじやよ。」

「そうですね。普段、進藤は先生に勝つことは、ありますけどね。でも真剣勝負は、公式戦は初めてですよ。彼は。」

天野が驚いて言いました。

「二人が考えている勝負っていうのは何なのですか？ それより、進藤君は白川先生のお弟子さんと伺ってますが、塔矢先生ともそんなに打ってるのですか？ っていうより、塔矢先生に勝ったことがあるって？本当ですか。」

白川は苦笑しました。

「天野さん。門下がどうのという言葉は塔矢先生のような方には、何の意味も持たないんですよ。それに私たちの世代以降は、門下だけでなく、棋士同士の横のつながりの意味も大きいんですよ。さらに、進藤君たちの世代は、ちんまりと仲間内で閉じこもったりしないのです。碁を打てるならどこでも誰とでも打つのですよ。」

桑原が言いました。

「進藤という小僧は特に特別じゃな。」

「そうですね。私が個人指導をしたからと言って、門下とか思っでは
いけませんし。緒方さんも彼をいろいろな棋士に引き合わせてくれて
ますから。感謝してますよ。」

聞いていた門脇が言いました。

「進藤君は中国の棋士とも親しいんですね。プロ試験に四敗したって
分かった時、随分問い合わせが来たんですよ。事故で不戦敗になった
ことを伝えたんです。そういや、ホンスヨン君も心配してたな。彼も
プロになれたらしいから。」

天野は頭がグルグルしてきました。しかし、それ以上にぐるぐるし
ていたのは、坂巻かもしれません。

二人同時の疑問形でした。

「どういうことですか?」

白川が答えました。

「進藤君は、中国棋院で武者修行体験をしてきたことがあるんです。
二週間ほどのことですが。去年プロになった伊角君たちと。それに
あちらの棋士たちとは、ネット碁でもよく打ち合っていますから。」

「スヨン君は、韓国の研究生なんですが、夏にちよつと碁会所で手合せ
したんですよ。もちろん、進藤君の勝ですが。」門脇が付け加えまし
た。

「門脇さんて、進藤と親しいんだ。」越智が言いました。

「いや、彼の噂を聞いて、プロ試験の前にはいぶん手合わせしてもらっ
たんだよ。」

「噂?」天野が飛びつきました。

その時です。

「どうやら、勝敗が見えてきたのう。」桑原が言いました。

天野は、モニターに映し出されている、まだ半分も埋まらない碁盤
を眺めました。

「細かい碁ですね。でも進藤君にも、もう見えてますね。」白川が答え
ました。

「それにしても、塔矢行洋、渾身の碁。小僧はよくもまあ、そこまで受け止めたものだ。普段勝つことがあるというのも頷ける話だ。」

「進藤はこれで、また強くなったな。あいつはそうやって強くなっていくタイプなんだ。」

緒方が誰にともなく言いました。

さて幽玄の間です。盤面はかなり埋め尽くされてきました。

ヒカルはふつと息をつきました。

ここまでか。

ヒカルは、そう思いながらも、もう一度盤面を見つめました。

佐為、俺の力ではここまでだけどさ。でも無様な碁じゃあ、ないだろ。俺の精いっぱい碁だよ。

お前、見てくれてるんだよな。これを。

「ありません。ありがとうございます。」

ヒカルはそう言うと、一手、黒石を置きました。

和谷と伊角は顔を見合わせて、頷きあいました。

だって逆コミだからな。それで中押し勝つことになるんだな。

一柳がそれを見て言いました。

「五目半だね。それにしても、進藤君。強くなったね。あの時の進藤君とは大違いだよ。まあ、あれから一年は経っているからねえ。若い子の一年は本当に違うものだね。」

「そうですね。進藤君は本当に進境著しい。おかげで、実に興味深い一局を打てたよ。ありがとうございます。」

「興味深いというより、薄氷を踏んだんじゃないかね。名人は。」

いつの間にか来ていた桑原が言いました。

行洋は満足気に言いました。

「実に打ち応えのある碁だったよ。」

「検討をお願いしたいんですが。」天野は手帳を取り出しながら言いました。

検討も終わり、みんなが帰り支度をはじめ、ヒカルも帰ろうとしたとき、天野が聞きました。

「進藤君は塔矢先生や緒方先生と親しいのだったら、塔矢アキラ君とも親しいのかい？」

割り込むように緒方が言いました。

「天野さん。進藤と塔矢アキラを比較するようなことはしないで下さいよ。アキラ君はアキラ君ですから。進藤がプロとしてやっていけば、いずれアキラ君とは対局することになるでしょうしね。その時を待って下さいませんかね。」

それから一息置いて、さらに付け加えました。

「そうそう、進藤に進藤のことを聞くのは構わないけれど。進藤がらみでアキラ君に、いろいろな話をふるのは、くれぐれも控えて下さいませんかね。彼の碁を邪魔しないように。そうでなくてもアキラ君は雑音が多い中にいますからね。」

天野は分かったような分からないような顔をしました。

それを横で聞いていた坂巻は、事務室に帰り着いた時、天野を捕まえて、念を押すように言いました。

「塔矢アキラには何かいろいろ聞くのはやめて下さいよ。天野さん。緒方先生の言う通りですよ。いいですか。絶対にやめて下さいね。」

天野は、成り行きで、坂巻に約束してしまいましたが、訝しく思いました。

どうということなのだろう。塔矢アキラにライバルができたなら、話題になるだろうに。いや、進藤君の実力は実際どれほどなんだろうか。

緒方先生は弟弟子を気遣ったのだろうか。坂巻さんは、塔矢アキラがらみで何かあったのかな。

こうなると、ますます知りたいじゃないか。

そうだ。進藤君には、聞いてもいいらしいから、彼に聞いてみるか。いや、絶対聞けど。

今日の対局のことも塔矢アキラのことも。知りたいことはすべて。天野は、久々に記者魂がうずくのを感じました。